

富田漆田遺跡 富田下大日遺跡

一般国道17号(上武国道)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

《本文編》

2006

国 土 交 通 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

とみ た うるし だ い せき
富田漆田遺跡
とみ た しも だい にち い せき
富田下大日遺跡

一般国道17号(上武国道)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

《本文編》

2006

国 土 交 通 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
(助群馬県埋蔵文化財調査事業団)



第3号窯跡全景（東から）



第4号窯跡（南から）



第169号土坑全景（南东5）



第170号土坑全景（北西5-6）

序

上武道路は国道17号線のバイパスとして、昭和46年11月に路線の発表から今日に至る間には、平成4年2月に熊谷から国道50号線までの供用が開始となりました。長きに亘る県民待望の道路が開通しました。この国道50号線以南の発掘調査を実施した22遺跡につきましては、既に当事業団より発掘調査報告書として公刊しました。

この度は、国道50号線以北の工事区域13.1kmの内、第7—I工区4.9km区間の発掘調査が当事業団に委託されました。

当事業団では平成11年4月から平成17年3月にかけて、今回の工事区域に当たります、前橋市今井町・富田町・江木町・亀泉町・荻窪町に所在する18遺跡の発掘調査を実施しました。

本報告書は、富田町に所在します富田漆田遺跡・富田下大日遺跡の両遺跡の整理作業が終了し編みました。

富田漆田遺跡では縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の住居跡、浅間山のB軽石で埋没した水田跡、室町時代の館跡などが出土しました。また、県下では初めての土坑状の須恵器窯5基発見されています。

富田下大日遺跡では、縄文時代・古墳時代・平安時代の集落跡、横穴式石室を備えた古墳、浅間山のB軽石で埋没した水田跡などが発見されています。

これらの貴重な出土資料が、前橋市東部地区の歴史解明に大いに役立つことと思います。

発掘調査から報告書刊行までには国土交通省、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等の皆様には大変お世話になりました。ここに、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い、記録保存のために発掘調査が実施された富田漆田遺跡・富田下大日遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の所在地は以下のとおりである。

前橋市富田町1130-4・1131-1～4・1134-1・1134-2・1135-1・1135-2・1140-1～3・1402-5・1403・1406・1407・1408・1409・1410・1412・1413・1416-1・1456・1490-1・1490-2・1491-1・1491-2・1489-1・1499-1・1504-7・1713-1・1714-1・1714-2・1715-2・1719-1・1719-2・1776-2

同 江木町1009・1010・1028・1029-1・1029-2・1030-1・1030-3・1030-4・1030-5・1033-3・1034-3

3. 遺跡名称は、当団の設定方法に従い、大字・小字名称を用いて遺跡名称とした。

4. 事業主体 国土交通省

5. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

6. 調査期間 富田漆田遺跡 平成11年12月8日～平成13年3月31日
平成13年4月1日～平成13年11月14日
富田下大日遺跡 平成12年6月19日～平成14年3月31日
平成13年13月4日1～平成14年3月31日

7. 調査組織 事務担当

平成12年度	理事長 小野宇三郎	常務理事兼事務局長 赤山容造
	管理部長 住谷 進	調査研究第1部長 水田 穂
	調査研究第2課長 小山友孝	総務課長 坂本敏夫
	総務係長 笠原秀樹	経理係長 小山建夫
	主幹兼係長代理 須田朋子	係長代理 吉田有光
	主任 森下弘美 柳岡良宏	主 事 片岡徳雄
	非常勤嘱託 大沢友治 土橋まり子 原田恒弘 奈良部清満	
	事務補助員 吉田恵子 吉田笑子 並木綾子 今井もと子 内山佳子 若田 誠	
	佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 田村恭子 狩野真子 廣津真希子	
	松下次男 吉田 茂 蘇原正義	

発掘調査担当 富田漆田遺跡 主幹兼専門員 飯塚卓二 女屋和志雄 木津博明
専門員 田村公夫 児島良昌 調査研究員 安藤剛志
富田下大日遺跡 主幹兼専門員 木津博明 専門員 田村公夫 児島良昌

平成13年度	理事長 小野宇三郎	常務理事 赤山容造
	常務理事 吉田 豊	
	管理部長 住谷 進	調査研究部長 能登 健
	調査研究第2課長 小山友孝	総務課長 大島信夫
	総務係長 笠原秀樹	経理係長 小山建夫
	主幹兼係長代理 須田朋子	係長代理 吉田有光 森下弘美

主幹兼専門員 中沢 悟 主 事 片岡徳雄
非常勤嘱託 土橋まり子 原田恒弘 奈良部清満
事務補助員 吉田恵子 吉田笑子 並木綾子 今井もと子 内山佳子 若田 誠
佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 田村恭子 狩野真子 廣津真希子
松下次男 吉田 茂 蘇原正義

発掘調査担当 富田漆田遺跡 主幹兼専門員 飯塚卓二 女屋和志雄 木津博明
主任調査研究員 吉田和夫 調査研究員 青木さおり
富田下大日遺跡 主幹兼専門員 木津博明 主任調査研究員 吉田和夫
発掘調査作業員（平成12・13年度）

前橋市 羽鳥イソコ 中村賢一 女屋みどり 下山きぬ子 市場芳夫 三川清子
山口きく 松永シマ子 矢端敏子 矢島ミチ 三川昭一 吉田えい
岸二美乃 女屋勝吉 峰岡和子 小屋志づ江 女屋真美子 安田智恵
奈良親江 齋藤 稔 田島喜代美 湯沢房太郎 堀越晴子 北爪啓子
柿田晃一 有坂郁子 小野沢キヨ子 星野覚男 中村兵三 門池 豊
荻野とり 井野国雄 中村久子 下山清保 石田高義 山口美智子
羽鳥千鶴子 佐藤幸一 桑原留美子 穂刈定男 千原喜子 下田則子
佐々木康夫 真下美昭 内山真人 女屋カツ子 中島快修

勢多郡富士見村 大沢浩美

高崎市 角田令子 矢口豊子 後藤友英 飯野文子 松本町子 牧口ケサノ
桜井裕子 梅山節子 佐々木雅子 竹内八重子 井部タカ 栗原静江
静 幸代 瀧澤洋子 大村三枝子 村井田実 阿部喜充 清水正男
長谷川ツネ子 林 実 富沢成子 木村昌子 青木けい子 田島美枝子
高橋千秋 三水邦得 金井昌子 江泉悦郎 富沢 晨 原澤益太郎
浜名新平

伊勢崎市 小林正治 山田友子 田島 守 田島秀光 丸橋律子 境野完次
新井敏夫

太田市 長谷井英五郎 楠 晴美 糸井三代治 大竹 節 森田光美

桐生市 小林孝夫 阿久沢利夫 金子佳夫

山田郡大間々町 加納康利

4. 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 整理期間 平成15年4月1日～平成18年3月31日

6. 整理組織 事務担当

平成15年度 理 事 長 小野宇三郎 事務局長 神保衛史
常務理事 住谷永市
管理部長 萩原利通 調査研究部長 右島和夫
資料整理課長 相京建史 総務課長 植原恒夫
総務係長 竹内 宏 経理係長 高橋房雄
主幹兼係長代理 須田朋子 係長代理 吉田有光

主任 阿久澤玄洋 主事 田中賢一
 非常勤嘱託 原田恒弘 市村良治 土橋まり子
 事務補助員 吉田笑子 今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 六本木弘子
 本間久美子 北原かおり 田村恭子 狩野真子 松下次男 吉田 茂
 整理担当 木津博明 遺物写真撮影 佐藤元彦
 整理補助員 阿部由美子 長岡和恵 小久保ヒロミ 串測すみ江 中橋民子 田中富子
 富沢スミ江 伊東博子 岸 弘子 廣津真希子 安藤三枝子 狩野君江
 八峠美津子 新井加寿恵 小島佐恵子 田所順子 小池 緑 大野容子
 小材浩一

平成16年度 理事長 小野宇三郎 事務局長 神保佑史
 常務理事 住谷永市
 管理部長 矢崎俊夫 調査研究部長 右島和夫
 資料整理課長 相京建史 総務課長 丸岡道雄
 総務係長 竹内 宏 経理係長 高橋房雄
 主幹兼係長代理 須田朋子 係長代理 吉田有光

主任 佐藤聖行 阿久澤玄洋 栗原幸代
 非常勤嘱託 土橋まり子 市村良治 黒澤隆一
 事務補助員 吉田笑子 今井もと子 内山佳子 松下次男 若田 誠 佐藤美佐子
 本間久美子 北原かおり 田村恭子 狩野真子 吉田 茂 六本木弘子
 整理担当 木津博明 遺物写真撮影 佐藤元彦
 整理補助員 高橋順子 平林照美 馬場信子 本多琴恵 池田和子

平成17年度 理事長 小野宇三郎（4～7月） 高橋勇夫（7月～） 事務局長 津金澤古茂
 常務理事 木村裕紀 総務部長 矢崎俊夫
 資料整理部長兼第1課長 中東耕志 調査研究部長 西田健彦
 資料整理課長 相京建史 総務課長 宮前結城雄
 総務係長 竹内 宏 経理係長 石井 清

主幹 須田朋子 吉田有光 今泉大作 専門員 齋藤俊昭

主任 清水秀紀 佐藤聖行 栗原幸代
 非常勤嘱託 土橋まり子 市村良治 黒澤隆一
 事務補助員 今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり
 田村恭子 狩野真子 六本木弘子 武藤秀典
 整理担当 木津博明 写真撮影 佐藤元彦
 整理補助員 本多琴恵 池田和子 金子加代 鈴木恵子 安田智恵 高山由紀子

11. 記録保存図発掘調査に伴う遺構等の記録図は1/20の縮尺を基本として作図したが、遺構種により一部1/10・1/40・1/60・1/100の縮尺で作図した。

記録保存原因図の作図の一部は株式会社横田調査設計・技研設計測量株式会社に委託した。

12. 記録写真発掘調査中に伴う写真撮影は発掘調査担当者が撮影したが、航空写真撮影は技研設計測量株式会社に委託し、航空写真・遺構写真の4×5・ブローニーポジフィルムに就いては株式会社アカギ商会にアジ

タル保存処置を委託した。

13. 分析・委託

富田下大日遺跡出土遺物整理業務 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

石材同定 飯島静男 (群馬地質研究会)

鉄器分析 赤沼英男

胎土分析 株式会社 パレオ・ラボ

遺構・遺物トレース 技研設計測量株式会社

14. 発掘調査及び本書を作成するにあたり、及び以下の方々に御指導・御鞭撻を戴いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

大川 清 (故人)・吉阿康暢・須田 勉・池上 悟・酒井清治・本澤慎輔・似内啓介・大金宜亮 (故人)

橋本澄朗・中山 晋・上野修一・田熊清彦・芹澤清八・大橋泰夫・田代 隆・津野 仁・市橋一郎

大澤伸啓・足立加代・河野一也・新保昌弘・上野川 勝・高橋一夫・村田健二・井上尚明・伴野和信

昼間 孝・赤熊浩一・木戸春夫・渡辺 一・佐々木幹雄・荒川正夫・阿久津 久・瀬谷昌良・服部敬史

有吉重蔵・雪田 孝・上敷領 久・荒井健治・塚原二郎・石田広美・糸原 清・山路直充・駒田利治

服部久美子・田崎通雅・遠藤政孝・松尾宜方・斎木秀雄・小林康幸・増田 修・中島直樹・前原 豊

宮田 毅・大塚昌彦・鹿野 巧

15. 本書の執筆は以下のとおりである。他を木津博明があたった。

第4章第3節第1項 女屋和志雄・第6章第2節 竹原弘展・藤根 久・第6章第3節 赤沼英男

諸元富田下大日遺跡出土遺物観察表 赤熊浩一・上野真由美 (財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

16. 本遺跡の記録図・記録写真・出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、群馬県埋蔵調査センターに保管してある。

凡例 1

1. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行1:25,000「前橋」。前橋市発行白図1:2,500を編集した。
2. 遺物観察表中「度目」「度目・量目」は、度が長さを示し、量は重量を示している。又、() は推定値・復元値を示す。
3. 遺物観察表中の「色調」は、「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色表監修 1976を使用して記載した。須臾器等は慣用的に用いている名称をも用いている。
4. 古代の土器種に就いて、原則として輸轉使用の製品を須臾器、非輸轉使用の製品を土器等とした。
5. 古代土器の器種で、高台の付く物を壙。高台の付かないものを坏、口径に比較して器高の低いものを甗とした。この他、通有慣用的に使用している名称を用いた。
6. 各図版中に用いた表現方法等については、第2分冊の巻頭に「凡例2」として載せた。
7. 本遺跡の出土遺物の注記は、「ゴム印」に依り行い、ゴム印が押捺出来ない遺物に就いては、アクリル系塗料等を用いて行った。注記は「」以下に各遺構名称等、必要記載事項を簡略して捺印した。
富田漆田遺跡は「JK44富田漆田」を捺印。JKはJIOUBUKOKUDOUを略称し、44は当該事業に伴う発掘調査地点の44番目を表している。
富田下大日遺跡は「JK45富田下大日」を捺印。要件は富田漆田遺跡と同様である。

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	とみたうるしだいせき・とみたしもだいにちいせき
書名	富田漆田遺跡・富田下大日遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第372集
編著者名	女屋和志雄・木津博明
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2006. 3. 24
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	とみたうるしだい・とみたしもだいにち
遺跡名	富田漆田・富田下大日
遺跡所在地	群馬県前橋市富田町
市町村コード	
遺跡番号	富田漆田遺跡：00713 富田下大日遺跡：00717
北緯(日本測地系)	
東経(日本測地系)	
北緯(世界測地系)	
東経(世界測地系)	
調査期間	2000. 4. 1～2002. 12. 14/2000. 6. 19～2002. 3. 31
調査面積	
調査原因	道路建設
種別	集落・生産
主な時代	縄文時代/古墳時代/平安時代/鎌倉時代/室町時代
遺跡概要 (富田漆田遺跡)	縄文時代中期一堅穴住居跡1軒、埋設土器2基、土坑3基/古墳時代中期・後期一堅穴住居7軒、溝状遺構1条/平安時代一堅穴住居跡63軒、掘立柱建物跡1棟、竈跡6基、土坑基、溝状遺構3条、道跡1条、水田跡1面/鎌倉時代五輪塔、多層塔/室町時代館跡1基、掘立柱建物跡7基、柵列跡1条、井戸跡9基、土坑基、
遺跡概要 (富田下大日遺跡)	縄文時代前期一堅穴住居跡4軒、中期一堅穴住居跡9軒、土坑基/古墳時代後期一堅穴住居跡6軒、古墳1基(横穴式石室)/平安時代一堅穴住居跡30軒、道跡2条、土坑基、溝状遺構1条/中世一溝状遺構1条/近世～現代一遺跡1条。
特記事項	富田漆田遺跡では、9世紀末から10世紀初頭頃の須恵器を焼成した竈跡(焼成土坑)5基、8世紀以前の甕1基が発見されている。 富田下大日遺跡では、平安時代一堅穴住居跡からの鉄器類の出土がやや充実しており、特に鎖尺(水深用か)と考えられる製品が17号住居跡から出土している。

富田漆田遺跡・富田下大日遺跡発掘調査報告書総目次

章 節	項 目	頁 数
1	経 過	
1	調査に至る経緯	1
1	1 調査に至る経緯	3
2	発掘調査事業と整理事業	
1	1 試掘調査	3
2	2 整理事業	6
2	遺跡位置	
1	1 自然環境	
1	1 遺跡立地	7
2	2 歴史的環境	
1	1 歴史的環境	8
2	2 周辺遺跡	11
3	調査方法及び整理方法	
1	1 発掘調査	
1	1 発掘調査	16
2	2 調査枕とグリッド	16
3	3 基本土層	18
4	4 遺構図化	20
5	5 遺構写真記録	20
2	2 整理方法	
1	1 遺物の取り扱い方	21
2	2 遺物台帳	21
3	3 図化掲載遺物の選定	21
4	4 遺物実例図	21

章 節	項 目	頁 数
4	富田漆田遺跡の発掘調査	
1	1 発掘調査の概要	
1	1 南側調査区	25
2	2 北側調査区	25
2	2 発見された遺構の概要	
1	1 南側調査区	26
2	2 北側調査区	26
3	3 旧石器時代の遺構	27
3	3 南側調査区で発見された遺構・遺物に就いて	
1	1 溝状遺構	27
2	2 住居跡	29
3	3 中世船跡	30

章 節	項 目	頁 数
5	富田下大日遺跡の発掘調査	
1	1 発掘調査の概要	
1	1 発掘調査概要	51
2	2 発見された遺構の概要	
1	1 旧石器時代の遺構・遺物	52
2	2 縄文時代以降の遺構	52
3	3 古墳時代の遺構・遺物	53
4	4 平安時代以降の以降・遺物	54
3	3 発見された遺構・遺物に就いて	
1	1 遺跡	55
2	2 溝状遺構	55
3	3 住居跡	55
4	4 古墳	59
5	5 土坑	60

章 節	項 目	頁 数
6	6 理科学分析	
1	1 理科学分析にあたって	
1	1 理科学分析の目的	63
2	2 分析の結果	63
2	2 須恵器・土師器の胎土分析 竹原弘暉・藤根 久バネオ・ラボ	71
3	3 富田漆田・富田下大日遺跡出土鉄器・鉄滓の金属考古学的 調査結果 岩手県立博物館 赤沼英男	78

註 元	内 容
	(遺構一覧・遺構計測値・遺物縮刷表・所見)
	富田漆田遺跡南側調査区
	富田漆田遺跡北側調査区
	富田下大日遺跡

附図目次

附図1	富田漆田・富田下大日遺跡全体図 (1:2,500)
附図2	富田漆田遺跡南側調査区全体図 (1:400)
附図3	富田漆田遺跡南側調査区B区2面全体図 (1:400)
附図4	富田漆田遺跡南側調査区水田跡全体図 (1:200)
附図5	富田漆田遺跡南側調査区掘立柱建物跡全体図 (1:60)
附図6	富田漆田遺跡南側調査区船跡全体図 (1:200)
附図7	富田漆田遺跡北側調査区全体図 (1:400)
附図8	富田下大日遺跡全体図 (1:400)
附図9	富田下大日遺跡低地部全体図 (1:200)
附図10	富田漆田・富田下大日遺跡住居跡段階別全体図 (1:800)

富田漆田遺跡南側調査区対照目次

項 目	本 文			図 版		写 真 図 版	
	関連記載	注 元	遺物観察表	遺構図版番号	遺構写真図版番号	遺構写真図版	遺物写真図版
第1号溝状遺構	27~29	121・132	140	1	6	20	
第2号溝状遺構	27~29	121・132	140	1	6・7	20	50
第3号溝状遺構	27~29	121・132	141	1	7	21	
第4号溝状遺構	27~32	121・132	141	1・2	7~15	21	50~52
第5号溝状遺構	27~29	122・132	142	2	15	21	52
第6号溝状遺構	27~29	122・132	142	3	16	22	
第7号溝状遺構	27~29	122・132	142	3	16	22	
第8号溝状遺構	27~29	122・132	142	3	16	22	
第9号溝状遺構	27~29	122・132	142	3	16	22	
第10号溝状遺構	27~29	122・132		3			
第11号溝状遺構	27~29	122・132	142	3	16	22	
第12号溝状遺構	27~29	123・132	142	3	17		
第13号溝状遺構	27~29	122・123・133	142	3	17	23	
第14号溝状遺構	27~29	123・132	143	3	17		
第15号溝状遺構	27~29	123・132	143	3	17	23	
第16号溝状遺構	27~29	123・132	145	3	17・19・23	23	52
第17号溝状遺構	27~29	124・132	144	3	19		
第18号溝状遺構	27~29	124・132	144	3	19		
第19号溝状遺構	27~29	124・132	144・145	3	19・23	23	
第20号溝状遺構	27~29	132	145	4	24		
第21号溝状遺構	27~29	132		4			
第22号溝状遺構	27~29	124・132	145	4	24		
第23号溝状遺構	27~29	124・132	146	4	24・25		
第24号溝状遺構	27~29	124・132	146	4・25	24・26	24	
第25号溝状遺構	27~29	124・132		4			
第26号溝状遺構	27~28	125・132	146	4	24・27		
第27号溝状遺構	27~29	132	146		27		
第28号溝状遺構	27~29	125・132	146・147	4	27・28	24	
第29号溝状遺構	27~29	125・132	147	4	28・29	24	52
第30号溝状遺構	27~29	125・132	147	4	30		
第31号溝状遺構	27~29	125・132		4			
第32号溝状遺構	27~29	125・133		4			
第33号溝状遺構	27~29	125・133				24	
第34号溝状遺構	27~29	125・133	147	4	30	24	
第35号溝状遺構	27~29	133		4		24	
第36号溝状遺構	27~29	133		4		24	
第37号溝状遺構	27~29	133		4			
第38号溝状遺構	27~29	133	147	4	30		
第39号溝状遺構	27~29	126		4		24	
第1号住居跡	29・30	126	148	33	32	25	52
第2号住居跡	29・30	126	148	34	35~38	25・26	52~53
第1号掘立柱建物跡	30~32	126・127		39		15・16・26	
第2号掘立柱建物跡	30~32	127		40		15・16・26	
第3号掘立柱建物跡	30~32	127		41		15・16	
第4号掘立柱建物跡	30~32	127		42		15・16	
第5号掘立柱建物跡	30~32	127		43		15・16	
第6号掘立柱建物跡	30~32	128		44		15・16	
第1号井戸跡		128・139	148	45	45	27	
第2号井戸跡		128・139	148	45	45・46	27	53・54
第3号井戸跡	30~32	128・139	149	47		27	
第4号井戸跡	30~32	128・139	149	47	48	27	
第5号井戸跡		128・129・139	149	47	48	27	54
第6号井戸跡		129・139	149	47	49	27	
第7号井戸跡		129・139	149	47	49	27	
第8号井戸跡		129・139	149	47	49	28	
第9号井戸跡		129・139		47		28	
第1号土坑		129・134	149	50	50	28	55
第2号土坑		129・134	149	50	50	28	
第5号土坑		130・134		51	51		
第6号土坑		130・134	149	51	51	28	55
第7号土坑		130・134	149	51	51	28	
第8号土坑		134		51	51		
第9号土坑		134		51	51		

項目	本文編			図版編		写真図版編	
	関連記載	語元	遺物観察表	遺構図版番号	遺物図版番号	遺構写真図版	遺物写真図版
第10号土坑		134	150	51	51		
第12号土坑		134		51	51		
第14号土坑		134	150	51	51		
第15号土坑		134	150	51	51		
第21号土坑		134	150	51	51		
第26号土坑		134	150	51	51		
第31号土坑		134	150	51	51		
第34号土坑		134	150	51	51		
第35号土坑		134	150	51	51		
第36号土坑		134	150	51	51		
第61号土坑		130・134	150	53	53		
第63号土坑		130・134	151	53	53		
第64号土坑		134	151	53	53		
第67号土坑		130・135		53			
第68号土坑		130・135	151	53	53		
第70号土坑		130・135	151	53	53		
第71号土坑		130・135	151	53	53		
第72号土坑		131・135	151	53	53		
第74号土坑		131・135	151	53	53		
水田跡			151			29	

富田漆田遺跡北側調査区対照目次

項目	本文編			図版編		写真図版編	
	関連記載	語元	遺物観察表	遺構図版番号	遺物図版番号	遺構写真図版	遺物写真図版
第4号溝状遺構						32	
第5号溝状遺構			206		86	32	
第6号溝状遺構					86	32	
第7号溝状遺構			206		86	32	
第8号溝状遺構			206		86	32	
第9号溝状遺構						32	
第10号溝状遺構			206		86	32	
第11号溝状遺構			206		86	32	
第12号溝状遺構	32	164	206	83	86	32	57
第13号溝状遺構	32	164	206	83	87	32	
第14号溝状遺構			206		87	32	
第15号溝状遺構							
第16号溝状遺構							
第17号溝状遺構							
第18号溝状遺構		164		84		32	
第19号溝状遺構	32	164・165				32	
第20号溝状遺構	32	165				32	
第21号溝状遺構	32	165				32	
第1号住居跡	33~41	165	206	88	88	33	
第2号住居跡	33~41	165・166	207	90	91~93	33	57
第3号住居跡	33~41	166・167	207・208	96	97・98	33・34	57・58
第4号住居跡	33~41	167	208・209	99・100	99~105	34	58
第5号住居跡	33~41	167	209	106	107	34	
第6号住居跡	33~41	167・168	209	108	108	34	58
第7号住居跡	33~41	168	209	109	109	34	
第8号住居跡	33~41	168	209	110	110~112	34	58・59
第9号住居跡	33~41	168・169	209・210	113	113・114	35	59
第10号住居跡	33~41	169	210	115	115	35	
第11号住居跡	33~41	169・170	210	116	116~118	35	59
第12号住居跡	33~41	170	210	119	119・120	36	
第13号住居跡	33~41	170・171	210	121	121	36	
第14号住居跡	33~41	171	211	122	122	36	
第15号住居跡	33~41	171	211	123	123・124	36	
第16号住居跡	33~41	172	211	125	125・126	36	59
第17号住居跡	33~41	172	211	128・129	126~131	36	59
第18号住居跡	33~41	172・173	211	132	132	37	60
第19号住居跡	33~41	173	212	134	133~135	37	
第20号住居跡	33~41	173・174	212	136	136・137	37	60
第21号住居跡	33~41	174	212	138	138	37	

項目	本文編			図版編		写真図版編	
	関連記載	諸元	遺物観察表	遺構図版番号	遺物図版番号	遺構写真図版	遺物写真図版
第22号住居跡	33~41	174	212・213	140	139~143	37	60
第23号住居跡	33~41	174・175	213	140	144	37	
第24号住居跡	33~41	175	213	145	145	38	60
第25号住居跡	33~41	175・176	213	146	147~149	38	60
第26号住居跡	33~41	176	213	150	150・151	38	60・61
第27号住居跡	33~41	176	214	153・154	152~154	38	61
第28号住居跡	33~41	177	214	153・154	155	38	61
第29号住居跡	33~41	177	215	157	157	39	
第30号住居跡	33~41	177・178	215	158	158	39	61
第31号住居跡	33~41	178	215・216	159	160~162	39	
第32号住居跡	33~41	178	216	159	163	39	
第33号住居跡	33~41	178・179	216	164	164	39	
第34号住居跡	33~41	179	216	166	165~167	39	61
第35号住居跡	33~41	179	217	168	168	39	61
第36号住居跡	33~41	180	217	169	169~172	39	62
第37号住居跡	33~41	180・181	217・218	174	173・174	40	62
第38号住居跡	33~41	181	218・219	175・177	175・177~183	40	62~64
第39号住居跡	33~41	181・182	219	185	184~186	41	64
第40号住居跡	33~41	182	219	187	187・188	41	
第41号住居跡	33~41	182	214・215	153・154	156	38	61
第42号住居跡	33~41	182・183	220	191・192	190・193~196	41	64~66
第43号住居跡	33~41	183	220	197	197		
第44号住居跡	33~41	184	220	198	198・199	41	65
第45号住居跡	33~41	184	221	201	202~204	41	66
第46号住居跡	33~41	184・185	221・222	205	205・206	42	66
第47号住居跡	33~41	185	222	207	208~210	41	66
第48号住居跡	33~41	185・186	222・223	211・212	212・213	42	67
第49号住居跡	33~41	186	223	214・215	214~216	42・43	67
第50号住居跡	33~41	188・187	223・224	217・218	219~222	43	67・68
第51号住居跡	33~41	187	220・221	198	200	43	
第52号住居跡	33~41	187	224	223	223・224	43	69
第53号住居跡	33~41	187・188	207	225	225~228		57
第54号住居跡	33~41	188	207	88	89	33	57
第55号住居跡	33~41	188		88		33	
第56号住居跡	33~41	188・189	224・225	225	225~228	44	69
第57号住居跡	33~41	189	225	229	229・230	44	
第58号住居跡	33~41	189		198			
第59号住居跡	33~41	189・190	219		189	41	64
第60号住居跡	33~41	190	225	231	231・232	44	69
第61号住居跡	33~41	190	225	231・233	233	44	69
第62号住居跡	33~41	190	226	234	234	45	
第63号住居跡	33~41	190・191	226	235	235	45	69
第64号住居跡	33~41	191	226	236	236	45	69
第65号住居跡	33~41	191・192	226・227	237	237~241	45	69・70
第66号住居跡	33~41	192	227	242	242・243	45	70
第67号住居跡	33~41	192	227	245	245~246	45	
第68号住居跡	33~41	192・193	227・228	247・248	247~253	46	70
第69号住居跡	33~41	193	228	254	254	46	
第1号竪溝	41~47・63~68	193・194	228	255	256	46	72
第2号竪溝	41~47・63~68	194・195	228・229	255	257~260	46	72
第3号竪溝	41~47・63~68	195	229	261	260	46・47	72
第4号竪溝	41~47・63~68	195・196	229	262		47	
第5号竪溝	41~47・63~68	196	229	263	263	46・47	

富田下大日遺跡対照目次

項目	本文編			図版編		写真図版編	
	関連記載	諸元	遺物観察表	遺構図版番号	遺物図版番号	遺構写真図版	遺物写真図版
第1号溝状遺構	55	237		282			
第2号溝状遺構	32	237		283		74	
第3号溝状遺構	54	237	270	附図10	285		
第4号溝状遺構	54			附図10			
第5号溝状遺構	54			附図10			
第6号溝状遺構	54	237・238		284		74	

項目	本文編		図版編		写真図版編		
	関連記載	語元	遺物観察表	遺構図版番号	遺物図版番号	遺構写真図版	遺物写真図版
第7号調査遺構		237・238					74
第8号調査遺構							74
第1号住居跡	55	238		287			
第2号住居跡	55	238		287			
第3号住居跡	55	238	270	288	288	76	
第4号住居跡	55	238		287			
第5号住居跡	56~59	238・239	270・271	289	289・290	76	101
第6号住居跡	56~59	239	271	291	292	76	101・102
第7号住居跡	56~59	239		291		76・77	
第8号住居跡	56~59	239・240	271	293	293	77	102
第9号住居跡	56~59	240	271・272	294・295	294~298	78	102・103
第10号住居跡	56~59	240・241	272	300	300	78	103
第11号住居跡	56~59	241	272・273	301	301	78	103
第12号住居跡	56~59	241	273	302	302~306	78・79	103~105
第13号住居跡	56~59	241・242	273・274	307	308・309	79	105・106
第14号住居跡	56~59	242	274	310	310	79	106
第15号住居跡	56	242・243	274・275	312~313	311・313~316	79・80	106~108
第16号住居跡	56~59	243	275	317	318	80	108
第17号住居跡	56~59	244	275・276	319	320~322	81	109・110
第18号住居跡	56~59	244	276	323	323	81	110
第19号住居跡	56	244・245	277	324	325	81	110
第20号住居跡	56	245	277	327	326	81	110
第21号住居跡	56~59	245	277	328	329	82	111
第22号住居跡	56	246	278	330・331	331~333	82	111
第23号住居跡	56~59	246	272	294	299	77	112
第24号住居跡	56~59	246・247	278	334	335	82・83	112・113
第25号住居跡	56~59	247	278	336・337	337	81	113
第27号住居跡	56~59	247	277	324	325	83	113
第29号住居跡	56~59	247・248	279	338	338・339	83	113
第30号住居跡	56~59	248	279	340	340~343	83・84	114・115
第31号住居跡	56~59	248・249	279・280	344	344・345	84	115
第32号住居跡	56~59	249	280・281	346	347・349	84	115・116
第33号住居跡	56~59	249	281	350・351	351・352	84	116
第34号住居跡	56~59	250	281	353	353	85	117
第35号住居跡	55	250	281	354	354~356	85	117・118
第36号住居跡	55	250	281・282	357	358・359	85	118
第37号住居跡	55	250・251	282	361	361~363	85・86	119・120
第38号住居跡	55	251	282・283	364	364~366	86	120・121
第39号住居跡	55	251	283・284	367	367~370	86・87	121~123
第40号住居跡	56~59	252	284	371	371	87	123
第41号住居跡	55	252	284・285	372	372~376	87	123・124
第42号住居跡	56~59	252	285	376	376	87	125
第43号住居跡	56~59	253		377	378	88	125
第44号住居跡	56~59	253	285	377	378	88	125
第45号住居跡	56	253・254	285	379・380	379~383	88	125~127
第46号住居跡	56	254	286	384	384	88・89	127
第47号住居跡	55	254	286	385	385・386	89	127・128
第48号住居跡	55	254・255	287	387	387~389	89	128・129
第49号住居跡	56~59	255	287・288	390	390~392	90	129
第50号住居跡	56~59	255	288	393	393・394	90	129
第51号住居跡	55	255	288~290	396	395・397~400	90・91	130・131
第52号住居跡	55	255・256	290	401	401	92	131
第1号掘立柱建物跡		256	290	402	402	92	
第1号古墳	59・60		290・291	403・404	405・406	93	132

第1章 経過 第2章 遺跡位置
第3章 記録保存方法と整理方法



第1章 経 過

第1節 調査に至る経緯

第1項 調査に至る経緯

この群馬県に於ける陸上交通網の整備、取り分け高速自動車道路は関越自動車道路（新湯線・上信越線）が既に共用が開始され、上武道路もこれまでに国道50号以南までが共用開始になっている。また、北関東自動車道路は、埋蔵文化財の発掘調査も最終局面を迎えている。

この上武道路の全面開通は群馬県民の長きに亘る悲願であり、社会要請の一つにこの国道50号以北の開通が課題となっていた。

国土交通省は群馬県教育委員との協議の結果、平成11年度からを発掘調査開始する方針を決定し、国土交通省と県教育委員会と当団とで「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査（その1）の実施に関する協定書」が平成11年4月1日付で締結された。これにより国道50号以北の埋蔵文化財の発掘調査事業が開始された。今次の調査事業は上武道路地域全体の第7工区に該当している。

富田漆田遺跡・富田下大日遺跡は平成12年3月に次年度の本格調査に向け準備が開始し、富田漆田遺跡の表土層の掘削を開始し、併せて富田下大日遺跡の調査区に事務所用地の確保・事務所設置を実施し、次年度の本格調査の準備を終了させ、平成12年4月1日から富田漆田遺跡も本調査を実施する体制が組まれた。

富田漆田遺跡の調査対象面積は31,731㎡である。遺跡は県道今井・前橋線を挟み低地部分（南側調査区）と台地部分（北側調査区）に分別される。調査はこの県道今井・前橋線を界に南北2班の調査体制が生まれ、南北の調査区は平成12・13年度の2カ年に亘り発掘調査を実施している。

調査対象区的面積は南側調査区22,001.5㎡、北側台地部分は9,729㎡の調査面積で、富田下大日遺跡の調査対象面積は20,036.6㎡であった。

第2節 発掘調査事業と整理事業

第1項 発掘調査

富田漆田遺跡・富田下大日遺跡の調査実施は用地取得関係等の都合もあり、平成12・13年度に2班体制で実施した。富田下大日遺跡も用地の取得関係で平成12・13年度に主体的な部分を終わらせたが、一部平成14年度に実施している。また、南側調査区の富田漆田遺跡も富田高石遺跡との併行調査であった。富田下大日遺跡の発掘調査は、富田漆田遺跡の未調査部分で、用地解決になった部分を含めた併行調査であった。このため、その間の調査経過は複雑で、そして更に、富田下大日遺跡に南接する江木下大日遺跡（調査面積180,31㎡）の発掘調査も調査期に組み込まれたため調査経過は非常に複雑な状態である（表-1参照）。

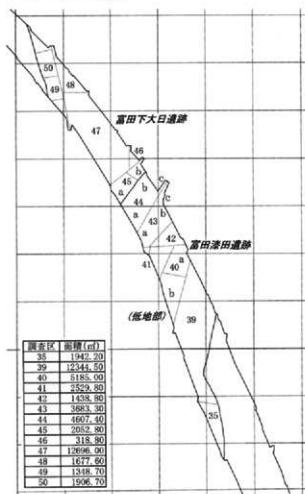


図-1 調査区内の名称と面積

表-1 調査経過概要一覧表

	地点	表土層掘削		地点	遺構調査		地点	旧石器時代試掘調査		地点	旧石器時代本調査	
		自	至		自	至		自	至		自	至
富田漆田遺跡 南側調査区	40a	H12, 10, 10	H12, 10, 26	40a	H12, 10, 26	H12, 12, 10						
	40b	H13, 3, 21	H13, 3, 26	40b	H13, 4, 11	H13, 7, 19						
	41a	H12, 7, 11	H12, 7, 24	41a	H12, 7, 31	H12, 11, 16						
	41b	H13, 3, 16	H13, 3, 19	41b	H13, 4, 11	H13, 7, 24						
富田漆田遺跡 北側調査区	43a 44a	H12, . 3										
	43b 44b	H12, 4, 11	H12, 6, 19	43b 44b	H12, 4, 25	H12, 12, 24	44a	H12, 4, 12	H12, 6, 1			
	43c 44c	H12, 10, 2	H12, 10, 4	43c 44c	H12, 10, 3	H12, 10, 12	43	H13, 2, 5	H13, 2, 23			
	42	H13, 6, 1	H13, 6, 4	42	H13, 6, 5	H13, 6, 29	44b	H13, 11, 12	H13, 11, 14	44b	H13, 11, 15	H13, 12, 14
	47	H12, 6, 19	H12, 7, 12	47a 47b	H13, 1, 11 H13, 6, 29	H13, 3, 20 H14, 3, 26	47	H13, 8, 9	H13, 9, 28			
	45a	H13, 7, 2	H13, 7, 11	45a	H13, 7, 13	H13, 8, 3	47	H13, 12, 13	H14, 3, 5			
富田下大日遺跡	48	H12, 8, 1	H12, 8, 4	48	H13, 3, 5	H13, 3, 19						
	46	H13, 9, 18	H13, 9, 19	46	H13, 9, 27	H13, 10, 25	48	H13, 3, 19	H13, 3, 23			
	49	H13, 10, 28	H13, 10, 30	49	H13, 11, 1	H13, 11, 8	48	H13, 4, 10	H13, 14, 24	48	H13, 4, 16	H13, 7, 17
	50	H13, 12, 15	H12, 12, 18	50	H12, 12, 18	H13, 2, 7						
	45b	H13, 1, 8	H13, 1, 16	45b	H13, 1, 29	H13, 3, 6						

調査区内の名称 (図-1)

調査区内の各道路により区切られた部分に、調整等の便宜を計るため名称与え、諸事に通称させていた (図-1 参照)。これは、当該上武道路地域の第7工区全体で行った。

富田漆田遺跡南側調査区(低地部)はNo.35・39～41。

富田漆田遺跡北側調査区(台地部分)はNo.42～44。

富田下大日遺跡はNo.45～50である。

富田漆田遺跡南側調査区

富田漆田遺跡南側調査区は大泉坊川右岸側に当たる低地帯の部分である。

発掘調査は、工事工程の都合上急遽着手した。このため、調査は富田高石遺跡と並行する状態が暫くの間続いた。更に、低地帯のため雨水・湧水の影響を直接受けたため、時期によっては調査進行も断続状態であった。

平成12年7月11日No.41(発掘調査上の呼称名称はC区)を重機により表土層の除去を開始した。このNo.41の部分は、重機等の搬入路等作業道の確保のために、東側農道に接する側の部分を幅約5m(500m程)で残し後日調査とした。

当該部分の地形は、台地の斜面直下部分で、土地改良により切り土されたため、鋭角な状態で台地斜面と低地とが形成されていた。

調査着手当初はこの土地改良に因る攪乱範囲を確認する目的でトレンチを数箇所を設定・調査した。

そして、このトレンチ調査の所見を元に掘削深度を決定した。表土層の除去は7月24日に終了している。

遺構の発掘調査は表土層掘削後の7月31日から開始した。溝状遺構・住居跡・土坑・井戸跡等が発見され、特に溝状遺構が多かった。遺構の調査は平成12年11月16日で終了した。面積は2,029.80㎡であった。

また、5m程で残した部分は、平成13年3月16日から表土層掘削を開始し19日に終了しているが、遺構の調査は平成13年度に継続させ、4月11日から7月24日まで実施し終了させた。

このNo.41の公道を介して東側にNo.40(発掘調査上の呼称はA区・B区)が位置する。このNo.40の中央部分の東西方向にはやはり公道が過ぎているた



写真-1 富田漆田遺跡南側調査区調査状況

め、調査の便宜を図り、公道の北側をA区、南側をB区とし、先ずA区から着手し、平成12年10月10日から表土層の掘削を開始し、10月26日に終了した。そして同日から遺構の調査を開始し、12月10日に終了させた。B区は、平成13年3月21日から表土層掘削を開始し、3月26日に終了したが、遺構の調査は平成13年度に継続とした。

平成13年4月11日からNo41の残部と併行して開始し7月19日に終了している。

このNo41では、中近世の溝状遺構が多く発見されている。また、下位層にはAs-B埋没水田跡も発見されている。

旧石器時代の試掘調査は、地形上の特徴から未実施とした。

富田漆田遺跡北側調査区

富田漆田遺跡の発掘調査は、前年度から実施された表土層除去の継続と平面精査から開始した。しかし、当該地区は嘗ての土地改良事業、耕作に伴う削平が著しい部分もあり、遺構分布の濃淡が顕著に露呈した。全体図中で遺構の空白部分は、上記理由により遺構が失われている部分である。

この表土層掘削と並行して、前年度表土層掘削が終了している部分(図-1の43a・44a)の平面精査を実施した。この部分は部分的にはハードローム層中の暗色帯直上まで削平されていたため、平面精査を実施したものの遺構は確認できなかった。このため、同部分の旧石器時代の試掘調査を実施した。この結



写真-2 富田漆田遺跡平面精査状況

果、旧石器時代の遺構・遺物は発見されなかった。

この旧石器時代の調査終了後、残り部分の表土層掘削終了部分の平面精査を実施し遺構の発掘調査を開始した。

遺構の調査は台地の西斜面側から着手し、暫時東側斜面に進行させ、平成12年12月8日、No42の未取地以外の第1面の調査をほぼ終了させた。

旧石器時代の調査は平成13年2月5日より再開させた。東斜面を先行させた。この結果、27-O-14で黒曜石礫片が一点出土したが、他のグリッドでは石器等の出土は認められなかった。

平成13年度には未取地(No42)であった部分の調査が可能な状況になったため、6月の1ヶ月間富田下大日遺跡の調査と併行する状態で同部分の調査に当たった。当該部の調査終了により第1面の調査が完了した。

平成13年11月12日から台地較部に当たるNo44b部分の旧石器時代の試掘調査を実施した。この結果、3箇所の試掘坑の暗色帯から遺物が発見され、範囲確定のための試掘坑設定・調査を行い本調査に移行、同年12月14日に終了した。出土遺物は総数175点程であった。

富田下大日遺跡

富田漆田遺跡の北側に接続する富田下大日遺跡の調査は、富田漆田遺跡の調査経過と大きくかかわっている。富田漆田遺跡と当該富田下大日遺跡を併行して調査したためである。表土掘削は平成12年6月



写真-3 富田漆田遺跡旧石器出土状況

19日より調査区No47から開始した。また、表-1に示した様に、富田漆田遺跡の進捗状態も保われることから、掘削時期は区毎に異なっている。

遺構の発掘調査は平成13年1月11日より開始した。この時期は季節風「からっ風」が強く吹く季節でもあり、計画路線が風上に向かって直線で延びていたことも災いし、調査区内の土砂が強風に舞上げられ、調査区内は砂塵渦巻く状態であった。

この状況下、南斜面部分は砂塵やや弱まるため、調査効率の向上を計り冬季の調査対象としNo47の南斜面の調査を実施し、同部の終了次第No48を着手した。そして、第一面遺構の調査終了後旧石器時代の試掘調査を実施したが、年度内には終了せず、次年度に継続とした。

平成13年度は、前年度の継続としてNo48部分の旧石器時代の試掘調査を再開した。そして、再開まもなく、59-N-11グリッドに於いて板鼻褐色軽石層（As-BP）上面でブロックの一部を確認した。これにより旧石器時代の調査が必要であることが判明したため、調査必要範囲の確定を目的とする調査に切り替えた。だが、58-O-13グリッドからは、板鼻褐色軽石層（As-BP）上面では出土遺物が発見出来なかったが、蛤良丹沢火山灰（AT）を含む暗色帯中から数点の遺物が発見され、旧石器は2面の調査が必要であることが判断され、周辺部を含め本調査の体制に切り替えて調査を実施した。この旧石器時代の調査は7月17日に終了した。

No47区の南斜面は冬季に第一面の調査が終了したが、部分的及び台地平坦部分の縄文時代の遺構確認・調査を6月29日より開始した。調査は5mグリッドの南・東辺に幅1mのトレンチを設定しハードルーム層まで掘り下げ平面の精査を実施し、確認された遺構の調査を実施して平成14年3月17日に遺構の発掘調査を終了した。この間、No45・49・50区の調査も実施し、No47区を2回に分けて旧石器時代の試掘調査を実施したが遺構・遺物の発見は出来なかった。



写真-4 富田下大日遺跡旧石器調査状況

第3節 整理事業

第1項 整理事業

富田漆田・下大日遺跡の整理事業は平成14～17年度の4ヵ年事業として開始した。

発掘調査現場では、土器洗滌・注記を行った。注記に際しては、特に個別収納遺物に就いては、誤った注記・漏れを防止するために、カラーネガ写真で撮影した遺物出土状態と、個別収納遺物を比較・検討して確認照合出来た遺物にのみ注記を施し、本格整理事業に備えた。

整理事業開始の初年度にあたる平成14年度は、事業遂行の迅速化を期す為、富田下大日遺跡の遺物整理（接合・復元・実測・トレース・遺物観察表作成・写真撮影）を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「埼玉埋文」と略記）に委託した。



写真-5 調査現場事務所での注記作業

この富田下大日遺跡は、主に縄文時代前期・中期、古墳時代後期、平安時代の集落、古墳1基、平安時代As-B下水田跡が発見されている。このため多岐の時代に亘る遺物が豊富であった。

平成15年度は富田漆田遺跡北側調査区の遺物整理を主体的に行った。接合・復元・実測を行った。富田漆田遺跡北側は縄文時代中期の住居跡・土坑、古墳時代中期の住居跡、平安時代の集落・竈跡、中世の溝状遺構等が発見されている。

平成16年度は富田漆田遺跡南側調査区部分の整理を行った。この南側調査区は、低地の遺跡であったが、古墳時代後期の住居跡、古代・中世～近世の溝状遺構、As-B下水田跡、室町時代の館跡等は発見されている。出土遺物は、縄文時代～近代に至るまで豊富な種類と量があった。特に、台地部分の集落では希少な灰釉陶器が多数出土し、中には初期灰釉陶器の出土もやや多く認められた。また、古墳は未発見であるが埴輪片もやや多く出土している。この様に、遺構が未発見の場合や、集落では出土していない種類の遺物が多いのも特徴である。このため、遺構実態の不明な遺物や、集落では出土していない遺物を中心に遺構外遺物として実測掲載した。

作業は、実測・トレース・遺構図編集・写真図版作成・遺物観察表作成・本文執筆等であった。

平成17年度は、平成14年度の埼玉埋文の成果品の編集・修正・遺構図編集等と、富田漆田遺跡との編集に当て、トレース・レイアウト等の作業、本文執筆が主体であった。



写真-5 富田下大日遺跡の旧石器試掘調査状況

第2章 遺跡位置

第1節 自然環境

第1項 遺跡立地

富田漆田遺跡・富田下大日遺跡は前橋市富田町に所在する。富田町は市域の東部に当たり、市庁舎のほぼ東方に7kmの位置に当たる。

富田町は赤城山南麓で、町域は南北に長く標高88～125m。低地部と台地部分部の比高差は4～5mである。富田漆田遺跡では、低地部分の標高が104.3m、台地部分で110.0mであり比高差は5～6m程である。

当該遺跡地の東側台地直下には赤城山中腹から発する大泉坊川（桃ノ木川支流）が流下している。西側の台地部分直下には谷が形成されている。現在は悪水路が流下しているが、元は小河川が蛇行流路をとっていたと考えられる。この両支谷に挟まれた台地は非常に細長く、富田漆田遺跡では幅約100m。富田下大日遺跡は幅員が一定していないが、調査対象部分での幅は約150m程である（図-2参照）。

遺跡の立地するこの細長い台地部分は、巨視的に見れば赤城山の扇状地形を形成した荒砥川（桃ノ木川支流）と流速の早い寺沢川（桃ノ木川支流）に挟まれた台地部分で、遺跡地は小河川の浸食により形成された一つの台地である。富田漆田遺跡・富田下大日遺跡は並走する状態の細長い台地に位置している（図-3参照）。

遺跡の立地する赤城山南麓の低地・台地部分は、赤城山の火山活動と活動後の侵食の繰り返しにより形成されている。

赤城山は、約40～50万年前に活動が始まったと考えられている。形成過程は、古期成層火山形成期（40～50万年前から13万年前）、新期成層火山形成期（13万年前から4～5万年前）、中央火口丘形成期の三つの時期に区分されている。

これらの活動期の時間は途轍もなく長い、しかし、この期間中絶え間なく活動を起こしていたのではな

く、古期成層火山形成時期以降暫くの間は活動の休止期を向かえている。そして、新規成層火山形成期の間に、山体の侵食が進み山麓の扇状地を形成したと推定されている。

新期成層火山形成期の活動に伴う噴出物や火砕流の堆積を経て、中央火口丘形成時期以降、山頂付近では浸食が更に進み現在の地形の祖形が形成され、そして現在に至るまで侵食は進み、山麓には再堆積した土砂により白川・荒砥・粕川扇状地を形成している。当遺跡の立地する低地・台地部分は、この赤城山の活動により形成されている。

富田漆田遺跡では、旧石器時代の試掘坑から埋没谷が確認されている。この埋没谷は、基底面付近で榛名箱田テフラ（Hr-Ha、約3万年前）の堆積が確認され、8m離れた部分では1.4m程上位の部分で同テフラが確認され、更に1.8m下位で大胡火砕流が確認されている。

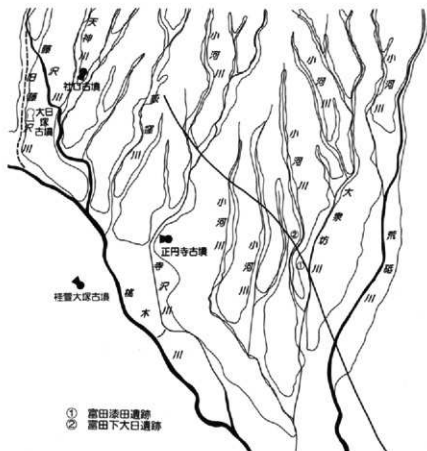


図-2 周辺地形概略図（1：2.5万）

第2節 歴史環境

第1項 歴史的環境

赤城山は利根川と渡良瀬川に挟まれる広大な面積を有している。現在では、市町村合併が更に進み勢多郡・佐波郡・山田郡を冠する町村が殆ど無くなって来ている。

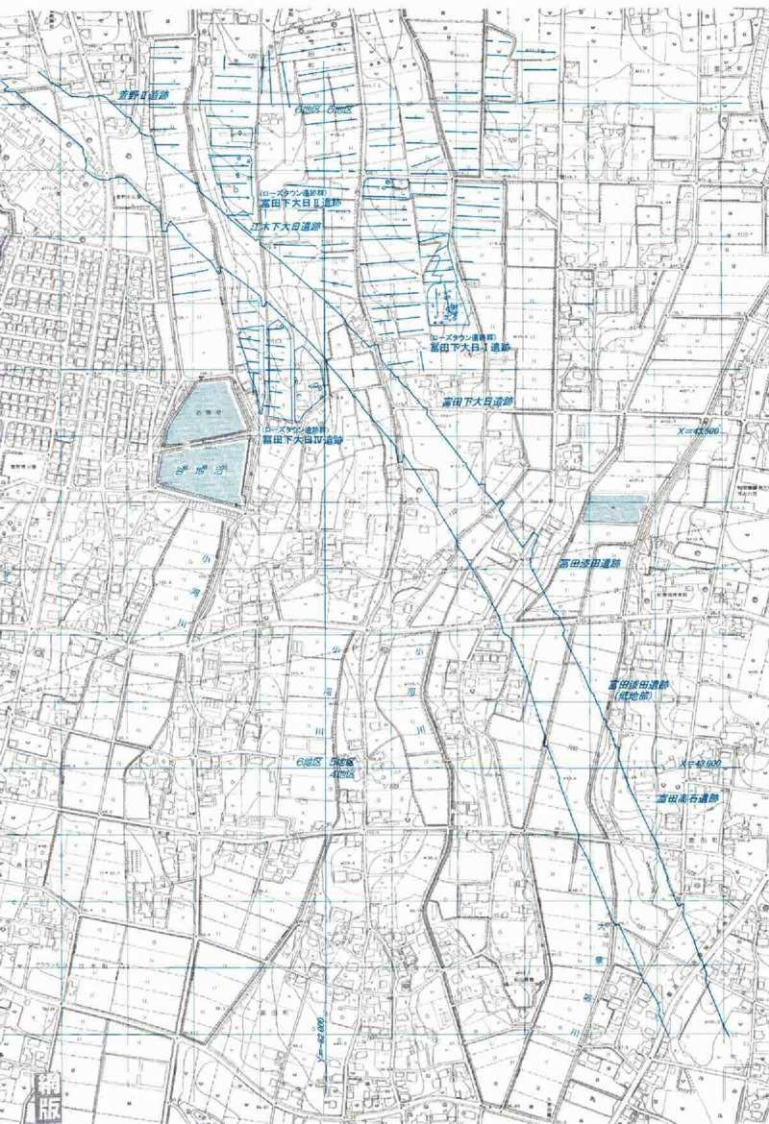
明治21年（1889）国内の町村合併が実施され、群馬県でも前年に発布された市町村制に基づき「群馬県令第十九号郡町村区域名称改定」として実施されている。これにより、富田村は荒砥村に合併されている。この富田村は現在の富田町とほぼ同域と判断される（土地改良等による耕地区画の変更が想定されるため）。荒砥村は荒子・下大屋・西大室・東大室・飯土井・新井・二之宮・荒口・富田・泉沢村の10村の合併である。

富田村は明治11年に県令宛に提出した「上野國郡

村誌」の「上野國勢多郡富田村」の調査によれば、「管轄沿革」天正十六年（1588）牧野氏の知行、元和三年（1617）牧野氏転封、酒井氏の知行。寛延二年（1749）酒井氏の転封、松平氏の知行を記している。この富田村の「管轄沿革」は、江戸時代の幕藩体制に依る前橋藩「大胡領」の知行沿革でもある。そして、この三氏の「知行目録」にも富田村が確認出来、近世初頭の村名が明治11年頃と変化が無いことが確認できる。

また、「元禄郷村絵図」でも位置関係が確認できる。

室町時代の史料では、弘治2年（1556）頃に推定されている「上州之内持分



道野川通廊

高田下大目II通廊

高田下大目II通廊

江木下大目通廊

高田下大目I通廊

高田下大目通廊

高田下大目IV通廊

X=43500

高田原通廊

高田原通廊
(北地蔵)

X=47000

高田原通廊

5000
4000

5000
4000

事」(高部文書)「(前略)一 大胡庄之内 宇坪井村 長安村 小屋原村 今井村 片貝村 小嶋田村 (後略)」の7ヶ村が見られ、長安村以外は現在の地名と確認出来る(長安村は長嶺村か)。

建武二年(1335)六月十九日新田義貞が長楽寺了愚上人禪庵に地頭職を寄進した史料に「上野国大胡郷内野中村(後略)」(長楽寺文書)に「野中村」が確認出来る。応安六年六月二十日(1363)大胡治部少輔秀重・応安六年六月二十日沙弥道喜・康暦三年四月五日(1381)藤原政宗により、それぞれ神塚(幸塚)村・堰口村、三俣村、神塚(幸塚)村・上泉村の在家・田畠を長楽寺大通庵に売却した請文にこの4ヶ村の村名が認められる。この中で「堰口村」以外の3ヶ村は現在の町名・地名と一致している。

「新陰流」の祖、上泉伊勢守秀綱(上泉武蔵守信綱)は、大胡氏の庶流で上泉村が出自である。永禄二十年(1569)頃には京で名声をはせている。この上泉村も現在に引き継がれている。

これらの史料から、明治22年の町村合併以前の村名が中世後半には成立していたことが類推できる。また、太田市新田町・尾島町内の地名も嘉応二年(1170)新田荘田畠在家注文、仁安三年六月二十日(1169)源義重讓状・置文、でも平安時代末期の地名の多くが現代まで踏襲されている。だが、それらの村域までは不確実であるが、大きくは異ならないと考えられる。

大胡氏は勢多郡の南側から南西側にかけて勢力を伸ばしていた。その範囲の詳細は現在具体的な史料に欠けるが、中世初期頃に成立したと考えられている青柳御厨・細井御厨・大室荘に挟まれた地域であったことは類推出来、従前に於いても推定されているところでもある。

遺跡地の富田村は、上述の様に大胡荘に含まれていたことは確実視出来る。この大胡荘を立荘した大胡氏は、藤原秀郷を祖にする一族で、邑楽郡(佐貫氏)・山田郡(園田氏)・勢多郡(大胡氏・大屋氏・山上氏)・佐位郡(瀧名氏・長沼氏)の各郡内に分派し、下野国では、足利郡(足利氏)・都賀郡(佐野氏)

などが知られている。

大胡氏は平安末期の平治の乱(1159)の源義朝に従っている。大胡氏の誰かは分からないが、少なくとも大胡氏を称した重俊以降であろう。

鎌倉時代の大胡氏は、鎌倉幕府の御家人として立場である。御家人とし最初に史料上に記載が認められるのが大胡太郎で、以後、史料上で「大胡太郎跡」と記載されるのが「大胡荘」である。また、「法然上人行状絵図」第二十五に登場する大胡小四郎隆義・実秀が著名である。二人が浄土宗に帰依する経過の様子を記している。法然は承安5年(1175)に比叡山を下り浄土宗立教開宗している。建永2年(1207)には讃岐国に流罪となり、建暦元年(1211)赦免になり帰京、翌年死亡している。この頃、小四郎隆義が在京であったことを確認する史料はないし、系図自体正統なものがない。内容の真偽は不明である。

この大胡氏も時代が下ると前述した文書内容のとおり、所領経営権が寄進や売却といった状態に陥っている。そして、永禄3年(1560)「関東幕注文」では「殿橋衆」として長野氏の采配を受けている。享徳・天文年間頃には実質的な支配権を失いはじめたのか(長岡寺「寺創造朱印演法由来」・益田新助 修亮文書)、弘治元年(1555)には牛込姓に改姓した一族もあり、武蔵国牛込に拠点を移している(「寛政重修諸家譜」)。中世後半には一族を結束する者の姿は見出せず、弱体化した大胡氏の心象を受ける。所以に史料上での大胡氏が見出せない事になるのであろう。

この大胡氏が現大胡町に拠点を築いた理由とは定かではないが、赤城南麓の掌握・荒砥川扇状地の掌握・三夜沢赤城神社への管掌が要因とも推測させる。一方では、足利成行の末子(「尊卑分脈」)という立場があったのかもしれない。

古代の郡郷制下の勢多郡には、深田・邑田・芳賀・桂置・真壁・深塚・深澤・時澤(以上、高山寺本)の8郷と藤澤郷(刊本)を合わせた9郷が知られている。

これら9郷の所在地に就いては、これまでに多くの先学により考察され、現在地名地に比定がされて来ているものの、未だに確定をみてはいない。古代

の行政単位を把握可能な資料は、発掘調査による出土物を頼みにするしか希望が持てないのが現状である。この中、「芳郷」・「大郷長」を墨書した土師器杯が荒砥二之宮遺跡から出土している。土器は8世紀前半の土器である。この「芳郷」が墨書土器の文字の性格から「芳賀郷」を表すと判読されている。

当該富田町がどの郷に所属していたのかは現段階では資料が得られていない。

第2項 周辺遺跡

富田町地区の発掘調査は、荒砥川対岸の荒砥地区に比較すると非常に少ない。荒砥地区は泉宮園場整備事業に伴う発掘調査・上武道路地域の発掘調査により県内でも発掘調査が進んだ地域でもある。

富田町では、昭和54～56年にかけて、園場整備事業に伴って発掘調査が実施された富田遺跡群。当該上武道路地域の発掘調査により、平成11～14年にかけて富田細田遺跡・富田宮下遺跡・富田西原遺跡・富田高石遺跡が調査されている。この4遺跡は上述の富田遺跡群の範囲に含まれる。

平成12・13年には、ローズタウン住宅団地造成に伴うローズタウン遺跡群富田下大日Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ遺跡が調査されているが、この内富田下大日Ⅰ・Ⅱ遺跡は今報告の富田下大日遺跡と同一の遺跡である。しかし、富田下大日Ⅳ遺跡は江木町に該当しており、至近の位置で当該上武道路地域の江木下大日遺跡が発掘調査を実施している。この双方は同一遺跡で正式には江木下大日遺跡の遺跡名称が正しい。

図-4 周辺遺跡位置図は、上記遺跡の他は周知の遺跡で『群馬県遺跡台帳』登載の遺跡をはじめ、公開されている各発掘調査報告書の「周辺遺跡」を掲げ所とした。章末に参考文献として掲載した。

富田町の遺跡では、ローズタウン遺跡群富田下大日遺跡Ⅰ・Ⅱは当該の報告遺跡と同一遺跡であるため内容的には重複はない。台地上に西側に縄文時代前期の文化層、東側に平安時代の集落は変わりがない。ただ、ローズタウン遺跡群が平安時代の集落の北限になるのであろうか、調査区内北側では裁

構は未発見である。

富田遺跡群を擁する台地は、町域内で最も面積の広い台地である。昭和54～56年の調査では、弥生時代～平安時代の集落跡・古墳・中世古墓群・寺院跡(近世)が発見されている。

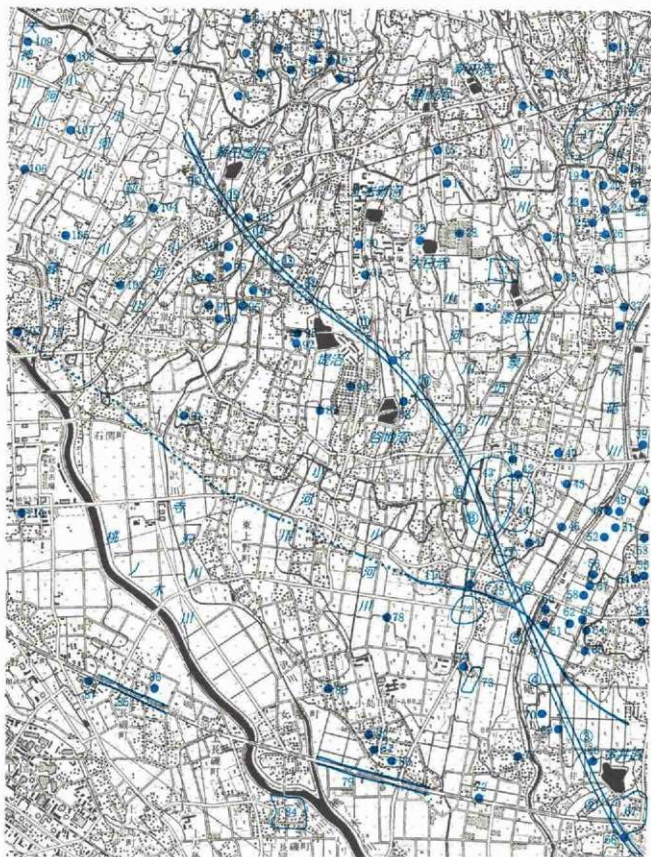
発見された集落跡は、調査当時の調査区が今回の富田宮下遺跡の南側調査区内に重複し、集落跡は更に北側調査区に延びていることが確認されている。

集落は、弥生時代後期構式を伴う住居跡が

古墳は遺存の良好な45おとうか山(円墳)1基、封土を失われ石室も殆ど破壊された状態の円墳5基・帆立貝形前方後円墳1である、この7基の古墳の内3基は「上毛古墳総覧」に登載された荒砥村341・342・344号墳である。古墳の時期は5世紀～7世紀である。これらの古墳の中で、比較的遺存状態がいいとおとうか山古墳(荒砥村344号墳)は、周溝のトレンチ調査を実施しただけで保存されている。

富田町地区の古墳の分布は、「上毛古墳総覧」(以下『総覧』と略記)に依ると21基が登載されている。記録されている内容では、前方子円墳4基・円墳13基・方墳1基・不詳3基である。富田下大日遺跡で調査した第1号古墳は、「荒砥村第351号」乃至は「荒砥村第352号」と考えられる。これは、同一地帯に2基の登載があるため、確認調査が出来たのは1基だけであったことによる。『総覧』によれば、荒砥川沿いにやや分布が濃く、富田漆田遺跡・富田下大日遺跡を擁する台地部分では4基が登載されているに過ぎない。孰れも円墳と記録されている。この中で「荒砥村第354号」御殿山古墳は既出の遺物として鏡1・刀2・釦1・金環1を記している。「荒砥村353号」大塚山古墳は、所在地番「今城下1714」で富田漆田遺跡の北側300m程の位置に当たるが現在では消滅している。しかし、富田漆田遺跡南側調査区内の北側では、埴輪片が集中する部分がある。この部分の台地上では以前まで、「こんもりしていた」という地主さんの記憶がある。ここに古墳の存在が示唆される。

一方、上武道路地域の発掘で、豊野Ⅱ遺跡では裁



截石切組構造を備えた古墳が発見されている（土地改良時に平夷されている）。亀泉坂上遺跡でも古墳が発見されている。この遺跡の場合も、『総覧』に依れば、周辺部には古墳群の存在が確認されている。

『総覧』では、荒砥村全体で365基の古墳を記載しているが、富田村では上述した如くの数量である。富田地区は旧荒砥村に属するものの荒砥川を界に古墳の数量は激減し、荒砥3古墳と呼ばれる前二子・中二子・後二子古墳の如くの大規模前方後円墳は皆無である。荒砥川以西では、図-1に示した3基乃至4基の前方後円墳の存在が知られる程度である。この傾向は荒砥川を挟んでの現象と理解され、赤城山南麓の台地では、荒砥川と寺沢川に挟まれた地帯が地勢的な一つの単位と考えられる。

中世古墓群は、台地の東斜側で、東原5・6号墳の墳丘の南側で、L字状の墓域を設けている。この墓域からは、59基の墓跡が発見されている。墓跡は結界の内側を石敷きにしたと考えられ、大胡町茂木古墓に類似すると推定される。墓坑は、25～50cm程の方形乃至円形を呈する墓坑に、焼骨を入れた蔵骨器を収めるか、直接焼骨を埋納し五輪塔または板碑を墓標とする形態であった。出土遺物は、凝灰岩製五輪塔・板碑・軟質陶器壺・同整形火鉢・同鉢・土師質土器皿等が出土している。出土した板碑の記年銘からは14世紀前半（鎌倉末期～南北朝）の年代確認される。だが、凝灰岩製五輪塔を転用した板碑の台座が出土していることから、板碑の年代より遡ることは明らかで、13世紀台から連綿として造営されたと考えられる。

また、この古墓群がL字状の配列を取ることから、その内陣側に何らかの施設を伴っていた可能性が類推される。

この古墓群が発見された場所の至近には、地持山延命寺正法院（天台宗）が在る。この正法院は天保年間焼亡していることが記録に残るが、開基等の詳細は不明である。元来この地には、西雲山円蔵院阿弥陀寺が建っていたが、明治10年、無住であった阿弥陀寺に、再建されない正法院をこの阿弥陀寺に

合併し、称号だけを変更して現在に至っている。

昭和55年の富田遺跡群の調査で、この正法院の旧地が調査対象になっている。調査ではこの正法院の本堂の礎石・根石が出土している。この旧正法院の遺構は隣地で発見されている中世の二重の堀（館の堀）の方向とは一致していない。この部分を地籍図でみると、台地部分が細くなる基部の部分には、カンボリと女堀に挟まれ、北側をカンボリで南側を女堀で区画しに東西に折れを備える館跡の地割が明瞭に残っている。詳細にみると、全体は南側が狭く、北側が広い逆梯形の形状を呈している。この形状の館跡は少なくとも14世紀を遡る構造である。

このことから、当該館跡は、14世紀以前から16世紀頃まで拠点的な館跡であったことが類推される。この館跡の地割の存在から、少なくとも近世以降の遺構と考えられる。このことから、現状では正法院の上限は近世初期と考えられる。

また、阿弥陀寺も開基不詳の寺院であるが、近世段階では長楽寺の末寺になっている。また、現正法院の境内には凝灰岩製の五輪塔等が多数残されている。数量の点では勢多郡内でも比類の無い数量である。恐らくは富田古墓群で以前から出土していたものを集積したものと考えられる。鎌倉時代の有力層の存在が無ければならぬ、前述した大胡氏の拠点にも至近の位置関係にあるこの富田町であることから、この有力層とは、まさに大胡氏であったことが推定される。

この阿弥陀寺の旧地の北側に「東曲輪」、西側に「西曲輪」の小字名がある。双方とも城館跡に因む遺名と考えられる。この小字の範囲は、軸を北に採る一辺130～150mに達する方形を呈している。地割上では、東側に折れを想起させる部分も認められ、北西部分には堀状の地割も認められる。この部分が城館跡の可能性を想起させている。

富田漆田遺跡南側調査区で出土している中世前半の五輪塔・多層塔は同時期の所産であることから、大胡氏と有縁者によるものと類推される。

第2章 遺跡位置

表-2 周辺遺跡一覧表(1)

No.	遺跡名称	時代	概要	遺跡台帳	文献
①	喜田跡・喜田大日遺跡				
②	今井遺上遺跡	縄文、古墳	住居跡		
③	高橋北三木宮遺跡	古墳、平安、中世・近世	As-C下島・平安島		2
④	高橋北原日遺跡				
⑤	高橋前田遺跡	古墳前期・中期、平安、中世・近世	住居跡、平安島		2
⑥	喜田田遺跡	平安、中世	818赤木下木田		2
⑦	宮下遺跡	古墳～中世	住居跡、墓坑、寺院		2
⑧	喜田西原遺跡	古墳前期・中期、中世・近世	旧石器、住居跡、平安島		2
⑨	喜田高石遺跡	古墳、中世・近世	住居跡、方形周溝墓		2
⑩	江木下大日遺跡	縄文、奈良、平安			
⑪	喜野日遺跡	縄文、古墳、奈良、平安			
⑫	堤前上遺跡	古墳			
⑬	丸屋上遺跡	古墳			
⑭	丸屋西久保遺跡				
⑮	萩窪南遺跡				
⑯	上泉跡の船遺跡	旧石器、縄文、古墳			
1	増事古墳	古墳	墳墓(円墳径30m・7C)		4
2	念之山極塚遺跡	縄文、古墳	包蔵地	101	1
3	庚申塚遺跡	縄文、古墳	包蔵地	102	1
4	新田塚	古墳	墳墓(円墳径30m・7C)	88	1, 4
5	柱堂57号墳	古墳	墳墓	98	1
6	西伏塚城遺跡	室町、戦国	城跡跡	94	1
7	高見遺跡	縄文	包蔵地	96	1
8	坂上遺跡	古墳	包蔵地	97	1
9	ほっこし塚	古墳	墳墓	99	1
10	根部遺跡	縄文、古墳	包蔵地	100	1
11	北塚遺跡	室町、戦国	城跡跡	95	1
12	名称無し	縄文、古墳	集落、住居跡	2212	1
13	堀越古墳	古墳	横穴式石室	2216	1
14	茂木大道下遺跡	平安、中世・近世	住居跡		2
15	名称無し	古墳	集落、住居跡	2210	1
16	足軽遺跡	縄文	集落、住居跡	2205	1
17	天神風呂遺跡群	古墳中期～奈良、平安	住居跡		2
18	名称無し	古墳	墳墓	2210	1
19	名称無し	奈良	集落、住居跡	2213	1
20	西小路遺跡	縄文、古墳、近世	住居跡、古後墓		2
21	名称無し	縄文	包蔵地	2206	1
22	上ノ山遺跡	古墳、中世・近世	住居跡、古墳7		2
23	藤野東遺跡	縄文、平安	住居跡		2
24	名称無し	古墳	包蔵地	2207	1
25	茂木山神日遺跡	縄文、古墳前期・後期、奈良、平安	住居跡		2
26	小林遺跡	古墳後期～中世・近世	住居跡		2
27	船荷置B地点遺跡	縄文、古墳後期、平安	住居跡		2
28	今城遺跡	奈良	住居跡		4
29	大日遺跡	古墳	包蔵地	80	1, 2
30	農業試験場遺跡	縄文	包蔵地	76	1
31	農業試験場遺跡	縄文	包蔵地	77	1
32	富田下大日遺跡 I、II	縄文、奈良、平安	住居跡		4
33	御殿山古墳	古墳	墳墓(円墳、S9 調へ)	302	1, 4
34	大塚古墳	古墳	墳墓	309	1
35	稲荷宮A地点遺跡	縄文、古墳後期、奈良	住居跡、墓坑		2
36	山神遺跡	古墳後期、古墳後期～奈良、中世・近世	住居跡		2
37	原塚335号墳	古墳	墳墓	307	1
38	稲荷宮遺跡	縄文、古墳後期	住居、古墳		4
39	第328号御殿山古墳	古墳	墳墓	293	1
40	第348号墳	古墳	墳墓	305	1
41	大塚古墳	古墳	墳墓	297	1
42	中富田高石遺跡	古墳	包蔵地	285	1
43	高石遺跡	弥生	包蔵地	286	1
44	西原遺跡	古墳	包蔵地	300	1
45	おとうか古墳	古墳	墳墓(円墳径20m・S54調へ)	304	1, 2, 4
46	富田東原遺跡	古墳、中世	住居跡、古墳、墓坑		4
47	富田古墳群	古墳			5
48	藤野西遺跡	古墳	住居跡、古墳2		2, 5
49	大塚古墳	古墳	墳墓	282	1
50	藤野遺跡	古墳前期	墓、As-B以前の溝		2
51	第330号小塚古墳	古墳	墳墓	283	1
52	京都諏訪西遺跡	古墳前後期～中世・近世	住居跡、溝、土坑		2, 5
53	京都諏訪遺跡	古墳	墓、As-B以前の溝		2
54	第332号古墳	古墳	墳墓		
55	大塚古墳B	古墳	墳墓		
56	第329号古墳	古墳	墳墓	284	1
57	高橋宮田遺跡	縄文前期、古墳～中世・近世	住居跡、墓		2
58	名称無し	古墳	集落、住居跡		
59	諏訪遺跡	古墳			

表-3 周辺遺跡一覧表(2)

No	遺跡名称	時代	跡	要	泉涌跡台帳	文献
60	第334号藤原山古墳	古墳	墳墓		290	1
61	南田遺跡	古墳	墳墓跡		289	1
62	石原前田遺跡	平安、中世・近世	石原水層下の水田			2
63	第333号古墳	古墳	墳墓		291	1
64	京口前庭遺跡	弥生、平安	住居跡			2
65	南原遺跡	弥生	集落、住居跡		280	1
66	荒砥北三木堂遺跡	縄文前期・後期、奈良、平安	集落、中世墓			4
67	道上遺跡	縄文	住居跡、円形溝溝墓、中世墓坑			2
68	今井道上通下遺跡	縄文後期～中世・近世	包蔵地		287	1
69	三木木堂遺跡	縄文	住居跡、小竈跡、中世・近世遺跡			2
70	荒砥北東遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	包蔵地		288	
71	今井城遺跡	室町、戦国	惣絞土器、築込			4
72	今井白山遺跡	縄文中期、古墳、奈良、平安	中・後部住居跡、方形溝溝墓		289	2
73	東原遺跡	縄文	城郭跡		289	1, 2
74	京田遺跡	弥生	集落跡		288	1
75	友里				303	1
76	少宮塚古墳	古墳	墳墓		308	1
77	大塚坊遺跡	古墳	集落、住居跡		301	1
78	名敷無し	古墳	墳墓		170	1
79	名敷無し	室町	城郭跡		171	1
79	荒井八日市遺跡	古墳中期、中世、平安	住居跡、墓跡、平As-B水田			2
80	小島田八日市遺跡	縄文早期、中世・近世	包蔵地、中世・近世堀、溝、井戸、土坑			3
81	木瀬7号墳	古墳	墳墓		168	1
82	木瀬6号墳	古墳	墳墓		167	1
83	万福寺遺跡	奈良	包蔵地		169	1
84	下長城	中世	堀跡			3
85	野中大持遺跡	古墳～平安	住居、水田、掘立、井戸、墓坑			3
86	茶遺跡	古墳後期	塚穴住居跡			3
87	伊勢遺跡	奈良、平安	塚穴住居			3
88	富田下大目遺跡Ⅳ	縄文、奈良、平安	住居跡			5
89	岩沼下遺跡	奈良	住居跡、土坑、溝			4
90	寶野遺跡	古墳、古墳	住居跡、方形溝溝墓			4, 5
91	正門寺遺跡	古墳	墳墓(前方内溝・全長70m)		75	1, 4
92	照西1・1遺跡	奈良、平安	住居跡			4
93	榎杵小西遺跡	古墳、奈良	包蔵地		86	1
94	寺沢川遺跡	古墳	包蔵地		85	1
95	榎杵76・78・79古墳	古墳	墳墓		84	1
96	亀泉聖園地内遺跡A	古墳	包蔵地		82	1
97	本郷遺跡	縄文	包蔵地		87	1
98	亀泉聖園地内遺跡B	古墳	包蔵地		83	1
99	西久保遺跡	古墳	包蔵地(上島町)		89	1
100	西久保遺跡	縄文、古墳	包蔵地(上島町)		78	1
101	中山遺跡	縄文、古墳	包蔵地		79	1
102	木瀬3号遺跡	縄文、古墳、平安	包蔵地		91	1
103	上長城遺跡	室町、戦国	城郭跡		92	1, 4
104	榎塚	縄文	包蔵地		90	1
105	杉山遺跡	古墳	包蔵地		93	1
106	江戸原敷遺跡	縄文、古墳	包蔵地		30	1
107	木瀬遺跡	縄文、古墳	包蔵地		29	1
108	中原芝久保街道遺跡	縄文	包蔵地		33	1
109	中原遺跡	古墳	包蔵地		28	1

参考文献

1. 『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第五輯 昭和13年(1948) 群馬縣
2. 『群馬縣遺跡台帳』昭和48年(1973) 群馬県教育委員会
3. 『群馬県史』通史編1 原始古代1 平成2年(1990) 群馬県
4. 『群馬県史』通史編3 中世 平成元年(1988) 群馬県
5. 『群馬県史』資料編5 中世1 昭和53年(1978) 群馬県
6. 『群馬県史』資料編6 中世2 昭和59年(1994) 群馬県
7. 『群馬県史』資料編7 中世3 昭和61年(1996) 群馬県
8. 『群馬県史』資料編13 近世5 昭和62年(1997) 群馬県
9. 『群馬県史』資料編14 近世6 昭和61年(1996) 群馬県
10. 『勢多郡誌』昭和33年(1958) 勢多郡誌編纂委員会
11. 『前橋市史』第1巻 昭和46年(1971) 前橋市
12. 『前橋市史』第2巻 昭和48年(1973) 前橋市
13. 『大胡町誌』昭和51年(1976) 大胡町役場
14. 『桐生市史』上巻 昭和33年(1958) 桐生市史刊行委員会
15. 『荒砥村誌』昭和49年(1974) 荒砥村誌刊行委員会
16. 『芳賀村誌』昭和31年(1956) 芳賀村誌編纂委員会
17. 『木瀬村誌』平成7年(1995) 木瀬村誌編纂委員会
18. 『上野郡村誌』勢多郡2 昭和53年(1978) 群馬県文化事業振興会
19. 『地名類聚抄部名考證』増訂版 昭和47年 池邊 彌
20. 『富田遺跡群』『富田遺跡群 西大室遺跡群 清原南部遺跡群』土地改良実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 前橋市教育委員会 昭和55年(1980)
21. 『富田遺跡群』土地改良事業実施地区内ならびに新農業構造改善事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 昭和56年(1981) 前橋市教育委員会
22. 『富田遺跡群』『富田遺跡群 西大室遺跡群』土地改良実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 昭和57年(1982) 前橋市教育委員会
23. 小島敦子『第2章 遺跡の立地と環境』『荒砥宮田遺跡Ⅱ 荒砥前田遺跡』平成16年(2004)

第3章 記録保存方法と整理方法

第1節 発掘調査

第1項 発掘調査

発掘調査地点は台地上と低地部分からなる遺跡である。調査着手段階では主に縄文時代・平安時代の集落遺跡であることが察知できた。

調査は、表土層の除去から開始したが、表土層はバックフォアを用い、現在では一般的になったバケット部分に排土板を装着させ遺構の損傷と、表土層除去後の平面精査の効率を考慮させた。バケット先端側に排土板を装着させる表土層掘削は、昭和50年10月頃から新田町での発掘調査から初められ、現在の様に一般的な姿になっている。

平面精査で確認された遺構の発掘調査は、取り分け住居跡は、従前の四分割法を用いず、二分割法を用いて掘り下げ調査を行った。

二分割法は、遺構の主軸方向での分割線を用いるのではなく、主軸の直行軸での分割線を用いた所謂「マイナス法」である。主軸方向の場合は電が有る事により、分割面(土層断面)の扱いが厄介になってしまうためである。

分割線を設定後、幅30cm程のトレンチを分割線に従って地山層まで掘り下げ、床面と掘方底面の確認を先行確認し、1:20で土層断面を作図し、住居跡を一気に掘り上げる方法である。

目的の主眼は、調査効率の向上である。この方法により、大幅な調査時間の短縮が出来ている。電も同様に平面精査の結果、天井部等の施設が残っていない限り、同様に主軸の直行方向にトレンチを設定して掘方面までの土層断面図を先行作図し、住居跡全体と同時に使用面での露呈を行い、写真撮影終了後、主軸方向の断面図を作図し、掘方面の露呈を一気に行う方法で調査を行った。

恐らく、上記方法の調査により、30~40%の期間短縮に達していると考えられる。

第2項 調査杭とグリッド グリッド

今回の調査で使用したグリッドは、下記の法則に従い用いた。

平成2年、北陸新幹線建設工事が具体化し、当団による発掘調査が本格的に開始されるに至った。この北陸新幹線の走行路線域には2市2町にまたがり、埋蔵文化財の発掘調査が実施された。しかし北陸新幹線は、高崎駅を起点に北走後西走する経路を採っている。また、台地稜線を縦走する行政界等の存在により、統一した仕様によるグリッドの設定が急務となった。さらに、長距離間・2市2町にまたがるという状況から、これらの悪条件を踏破するグリッド仕様が要求された。そして、仕様の完成により具体的な形として、一事業を団として初めて、統一されたグリッドにより調査が実施された。

10kmグリッド・特大グリッド・「地域」(図-5-1)

国土座標第IX系の原点を起点にして、10km単位の方眼により県下を網羅し、(県内は91の「地域」の設定が出来る)特大なグリッドを設定されている。

この10kmグリッドの構想は、北陸新幹線の大区画(1kmグリッド)の設定の背景として作成されたが、これ自体今迄公表されていない。10kmグリッドの設定に当っては国土地理院発行1:20万・1:2.5万群馬県該当部を編集し、地上距離と地図上の距離を補正して図上で設定してある。

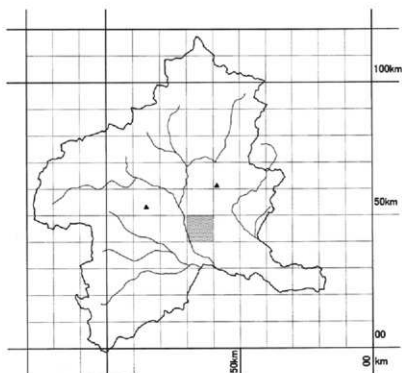
1kmグリッド・「地区」・大グリッド・大区画(図-5-2)

上述した10km方眼の「地域」中を、1km単位の方眼で1~100の「地区」を設定し、大区画=大グリッドの設定を行った。この大グリッドの原点は、10kmグリッドを更に十等分してあるので、座標値はkm単位の整数同士の交点が当たる。

100mグリッド・「区」・中グリッド・中区画(図-5-3)

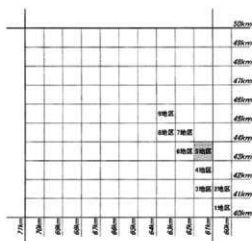
上述1kmグリッドを更に十等分したグリッドが当該である。則ち、100m単位の方眼で1~100の「区」を設定し、中区画=中グリッドの設定を行った。

この中グリッドの原点は、大グリッド同様に座標値では○00m・△00mの交点が当たる。



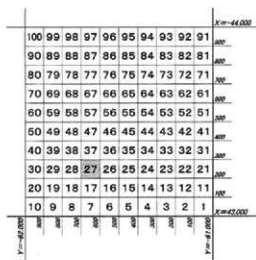
(1) 10km方眼(特大グリッド)「地域」

1km方眼グリッド(大グリッド)割付の基本となる割付
旧国土地標系IX系原点から10km単位に割り付けてある
群馬県内は95区画の10km割付で表示される



(2) 1kmグリッド(大グリッド)「地区」

100m方眼グリッド(中グリッド)割付の基本となる割付
10kmグリッド原点から1km単位に割り付けてある
1kmグリッド内には100mグリッドが100区画で表示される



(3) 100mグリッド(中グリッド)「区」

5m方眼グリッド(小グリッド)割付の基本となる割付
1kmグリッド原点から100m単位に割り付けてある
100mグリッド内には5mグリッドが400区画で表示される

図-5 グリッド要図(1)

5mグリッド・小区画(図-6-4)

100mグリッドを更に20等分したのが最小単位のグリッドである。則ち、5mグリッドで1から200のグリッドの設定を行った。名称は交点からY軸に20単位、X軸に20単位とし、原点から西に向かいA～T、北側に1～20の名称を付し、「某区-A-1から

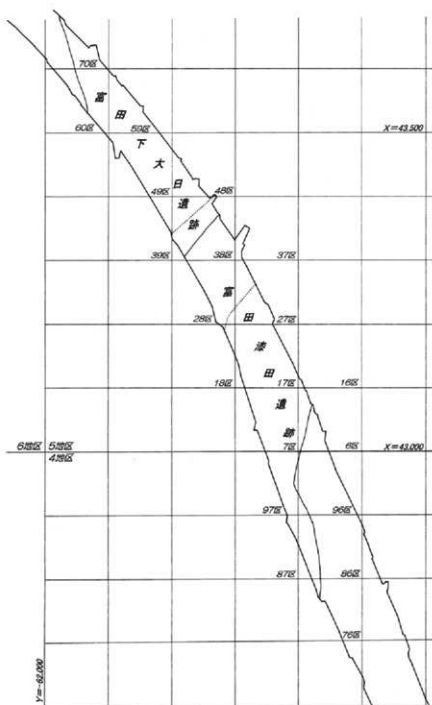


図-6 グリッド概念図(1:6,000)

某区-T-20」で表した。

富田漆田遺跡・富田下大日遺跡のグリッド

上武道路地域の発掘調査はこの方法を運用してグリッドの設定を行った。(図-5・6参照)

今次の上武道路地域の発掘は第7工区部分於発掘調査であったことから、この第7工区に該当する部分

にのみ大グリッド(1kmグリッド)の設定を行った。この大グリッドにより1～9地区の設定を行い調査に供した。この1kmグリッドはIX系の原点から西に60km、北へ40kmの地点を基点として、「1地区」から「9地区」の名称を与えた。(図-6-2を参照)

調査区内での杭の打設は、各調査区内での遺構の状況等に応じて打設したが、この場合、20・10・5mと遺構密度に応じて適宜打設した。

富田漆田遺跡・富田下大日遺跡の調査区に該当する大グリッドは4・5地区である。(図-7参照)

第3項 基本土層

富田漆田遺跡(北側台地部分)及び富田下大日遺跡の基本層序は図-8に示した。

I層 表土層。場所により様々な様相が認められる。台地部分の平坦な部分ではローム土の粒子が混ざり、南側斜面側でやや砂質味を増し低地部分では砂質味が強かった。また、発色も異なり台地部分平坦部ではやや明るく濁

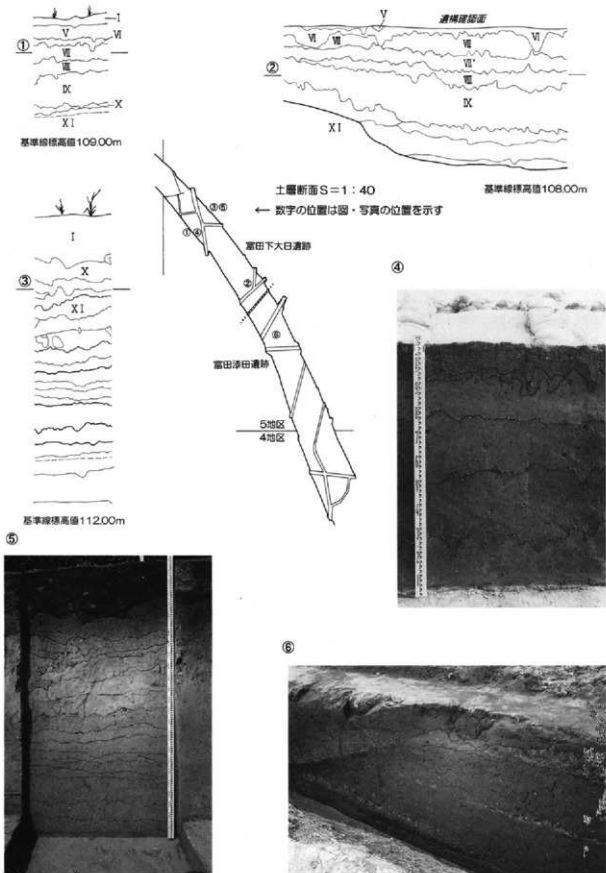


図-7 基本土層図

- り、斜面部では黒味を増し濁っている。低地部では、灰色味がかり濁っていた。
- II層 中世遺構の文化層。色調は最も黒い。As-Bを多量に混入する、このため砂質味が強い。「Bクロ」で通称している。
- III層 As-B。浅間山給源のB軽石層。
- IV層 黒褐色土。As-Cを混じえる。遺構覆土に多く認められる。下位層のIV層土より明るい発色をする。当時の表土層に相当するものと考えられる。
- V層 黒色土。As-C(粒状は粗～細)。古墳時代の住居跡の覆土がほぼこのIV層土が主体で埋まっている。
- VI層 暗褐色土。層厚は非常に薄い。認められたのは富田下大日遺跡の西側斜面寄りの部分である。
- VII層 褐色土。純粋に褐色を呈するのではなく、地点によって発色が異なり、くすんだ褐色を呈する地点もある。層厚も地点により異なる。
- VIII層 暗褐色。V層土と同質である。上位のVI層土が間層となる状態である。微細な白色粒子(軽石か)を極僅かに含む。
- IX層 黒～暗褐色。地点により発色も異なる。富田下大日遺跡西側斜面寄りで黒色で、南斜面では黒褐～暗褐色の色調であった。VII層土同様に微細な白色粒子(軽石か)を含む。
- X層 ローム漸位層。本層も地点により発色等が異なる。
- XI層 ローム土。地山土。本層中はテフラ等により細分される。本層も地点により様相が異なっている。
- 後刊される旧石器時代編の報文中で地山層に就いて詳述される。

上記を基本としている。台地部・低地部分夫々の部分で異なる様相を見せる地点もあるが、基本的な土層の成り立ちには変化は無かったと考えられるが、堆積後の自然侵食等により現在の地形を形成していると考えられる。

第4項 遺構図化

発見された遺構図化は、1:40・1:20を基本として、1:10・1:50・1:60・1:100の縮尺により、状況・使用目的に応じて遺構の図化を行った。

1:40・1:20の平面作図は当該調査での基幹である。

個別の遺構は1:20で作図し、住居跡は個別の用紙で作図し、土坑・溝状遺構等は割付図により作図した。

1:40の作図は、当団仕様書のB3版作図用紙の有効図化範囲に、200mm=8ヶグリッド分を1単位として割り付けた。

又、1:20の作図も、当団仕様書のB3版作図用紙の有効図化範囲に、50mm=2ヶグリッド分を1単位として割り付けた。

但し、これら割付平面図には大形の個別遺構(住居跡・掘立柱建物跡等)は輪郭のみを記録し、それぞれの遺構平面図により記録を計った。

なお、図素の割付は図8に示したとおりである。

第5項 遺構写真記録

遺構写真記録は、調査班の編成により使用機材が異なった。

富田漆田遺跡南側調査区は、ブローニー判6×7サイズでiso400白黒ネガを撮影し、35ミリ判フィルムで白黒ネガ・カラーポジを撮影した。

富田漆田遺跡北側調査区及び富田下大日遺跡は、ブローニー判6×9のフィルムで、白黒ネガ・カラーポジの2種、35ミリ判フィルムで白黒ネガ・カラーポジ・カラーネガの3種を用いたが、専らにブローニー判の2種を用い、35ミリ判はサブとして撮影した。又、必要に応じてブローニー判6×9のフィルムのカラーネガでの撮影も実施した。このほか、委託業務にした、航空写真撮影は、4×5・ブローニー判6×6フィルムにより、白黒ネガ・カラーポジを使用している。フィルムの粒子はiso100以下の粒子状態のフィルムを使用した。

これらのフィルムは、フィルム種毎にフィルム番

号とコマ番号（プロニー6×9は1～8・同6×7は1～10・35mmは1～36）を付した。

これらのフィルム管理は、コンタクトプリントを遺構毎に整理し、フィルム種ごとの登録番号を記入した。

第2節 整理方法

第1項 遺物の取り扱い

出土遺物は発掘調査段階で洗済し註記を行った。整理事業では、これら遺物の接合・復元・台帳記入・実測・写真撮影の工程の後収納した。

接合

接合は直接接合する破片と同一個体でも直接接合出来なかった個体がある。前者は接合素材にエポキシ樹脂で行い、後者は、石膏・エポキシ樹脂系パテ材を用いて接合した。同一個体である限りは出来るだけ上記方法で接合させてある。

復元

復元は、「遺物の修復」を前提として実施した。復元に用いた素材は石膏である。また、上記のとおり部分的な場合・補充はエポキシ樹脂パテを用いている。

石膏による欠損部分の充填・復元後は、石膏の経年変化による劣化を防止するためにハイドロサーム乃至バインダー72とSS101（珪酸素材）を有機溶剤による70%溶液等で補強させてある。

着色は、アクリル系塗料で行い、補強後の石膏面に更にアクリル塗膜に拠る保護を行ってある。

但し、整理事業の時間的制約もあるため、接合後の実測等の諸作業に耐えうる状態が必要な個体、形状保持のために必要な個体に限って行った。このため、写真撮影に必要な等の条件は加味していない。

第2項 遺物台帳

発掘調査現場に於ける遺物の収納に際する標高値は各図中に記録した。この際に土器類・瓦類・石器類・礫類等は、種別毎での番号付けは行わず、通し番号を夫々に付した。これらの遺物の註記は、番号収納した遺物とメモ写真と図面との照合を行い、こ

の三者で確認が得られた遺物のみに註記を行った。

この番号収納した遺物は、収納時の番号・標高値・遺存状態・接合関係等を記録した「遺物元台帳」を作成した。また、この台帳には、実測対象になった遺物（1個体扱い）に限り「整理通番」を付した。

そして、遺物整理事業用に「遺物通番台帳」を作成し、整理事業に供じた。また、この「遺物通番」は青色のエナメル塗料で各個体に註記した。

掲載になった遺物に対しては、整理事業終了後の管理・保管に向け、当団の「資料管理システム」に応じた台帳を作成した。この「遺物管理台帳」の登録番号を今回の当該報告では資料番号として各遺物に付した（凡例2参照）。

第3項 図化掲載遺物の選定

この実測対象の選定基準は、遺構の場合は第1に出土状況が遺構に伴うと判断された状況（床面直上・床面直上層等）又は遺物の残存状態に主眼を置き、覆土中でも報告例の少ない類別・特徴的な個体を選定した。一方、遺物が殆ど得られなかった遺構の場合には、細片等であっても実測扱いとした。

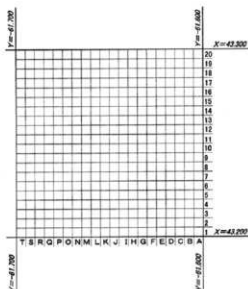
また、遺構と時期が異なる場合や、成整形技法に特徴的な技法が認められる場合、胎土観察の結果、搬入品と考えられる遺物でも、遺跡内容に資する遺物に就いては実測扱いとした。

第4項 遺物実測

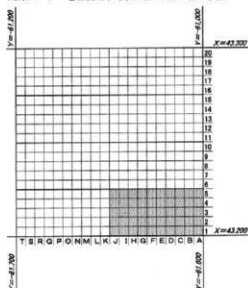
当該報告に掲載した遺物はそれぞれ実測図を作成した。実測に当っては、細部に亘る観察と、表現仕様により実施し、図化の統一を図った。

図化当っては凡例にも掲げたが、中心線には三者を使い分けた（土器類）。直接実測可能な個体は「実線」を用い、回転させて器形を復元させた個体には「一点鎖線」を用い、破片を合成させ図上で復元し図化した場合には「破線」を用いた。

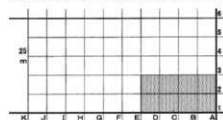
実測用紙はA系列の用紙を用い、中小個体に就いてはA3・4判を用い、大型個体はA2判。それ以上の個体は、ポリエステル素材のロール用紙を用いた。



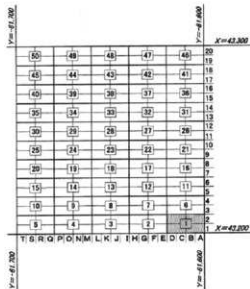
(4) 5mグリッド
小グリッド通有表示の「グリッド」
南東コーナを標準とする。区名-Y軸-X軸で表記



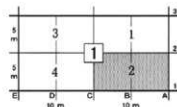
(5) 1/100平面図の図案割付
調査区内の平面概念図作成用の図案割付
中グリッド内に8枚が割付ける
1/100で南北方向25m・東西方向50mの範囲を作成



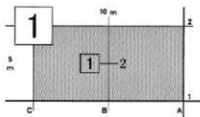
(6) 1/100平面図の範囲
1/100は概念図専用
5mグリッド(小グリッド)50区画の図化が可能
網点は1/40図案割付範囲



(7) 1/40平面図の図案割付
調査区内の平面図作成用の図案割付
1/40で南北方向10m・東西方向20mの範囲を作成



(8) 1/40平面図の範囲
1/40遺構平面図専用
5mグリッド8区画の図化が可能
大規模遺構・水田跡等の図化に用いる
網点は1/20の図案範囲



(9) 1/20平面図の図案割付
1/20遺構平面図専用
5mグリッド2区画の図化が可能
住居跡以外の図化に用いる

図-8 記録保存図図案割付仕様図

第4章 富田漆田遺跡の発掘調査



第4章 富田漆田遺跡の 発掘調査

第1節 発掘調査の概要

第1項 南側調査区

南側調査区は県道今井・前橋線以南の低地部分の調査区である。この低地部は大泉坊川右岸に広がる低地で、大泉坊川の蛇行流路に堆積した土壌により形成されている。

この低地部分は、昭和末年に行われた土地改良により旧地形・旧地割等は失われている。特に台地縁辺部に整備された道水路は、法面の切土により整地され構築されている。この土地改良事業の造成により、台地縁辺では失われた遺構も推測されるが、大泉坊川側では比較的旧状を留めていたが、部分的には大規模な溝状の攪乱を受けている部分が認められた。幸いながら周辺での遺構も認められなかったことから、遺構の消滅は免れている。

この低地部の発掘調査は、着手時期が秋の降雨時期の直後であったことから、地下水の湧水位も高く、台風等の降雨量が多い場合などは調査区内が冠水ことも多々あった。また、経年調査でもあったことから、降雨時期の排水等を行いながらの調査は、調査の遂行には悪影響が多かった。

発掘調査は、調査の道水路に挟まれた部分ごとに調査単位としたため、便宜上それぞれの部分にA～C区を振り分けて実施した。A・B区は大泉坊川寄りの調査区で、C区が台地縁辺に当たる部分である。A・B区は遺構面が2面、C区は1面であった。

低地部、南側調査区の発掘調査で発見された遺構は、台地部とは異なり、相対的に溝状遺構が多く住居跡は少なかった。発見された遺構は、溝状遺構55条・住居跡2基・掘立柱建物跡7棟・井戸跡9基・土坑基・水田跡1面等が発見されている。時期は古代から近代で、特に室町時代の遺構群は、船跡を形成している。

第2項 北側調査区

北側調査区は県道今井・前橋線の北側部分の台地部分と一部低地部分を含んだ調査区である。この調査区で発見されている遺構は、住居跡69基・掘立柱建物跡1棟・溝状遺構21条・土坑173基・窯跡5乃至6基であった。

台地部分は表土層の層厚がやや薄く、概ね地表面下30cm程で確認面であったが、浅い部分では15cm程度であった。このため、確認面全体に攪乱が斑状に覆っている状態であった。この状態は重複する遺構の場合、その新旧の検証は困難な場合が多々あった。また、顕著な攪乱の場合、67号住居跡の如く攪乱の中から残存部分を見出さなければならなかった場合もあった。

調査区内で最も顕著だった攪乱は切土された部分である。この切土部分は、調査区内を過ぎる公道の北側では幅15m長さ50m深さ3mに達する750m²分が採土されていた。採土を見ていた地元の人の話では、完形の壺等が出土していたことを目撃したようである。また、公道の南側では、幅50m長さ35m深さ2mに達する1,750m²が採土されていた。この双方の面積は2,500m²になり台地部分の約30%に当たっている。概算ではこの部分で消滅した遺構、取り分け住居跡は30軒相当に達することが試算される。このことから、本来なら、当遺跡で発見されたであろう住居跡は推定で100軒前後と推定される。限られた範囲ではあるが、比較的密度の濃い遺跡である。

低地部分は、調査区に該当する部分は、殆ど土地改良等により採土されることが所見として得られた。このことから、当該部分は低地という地形概念ではなく、台地部分の裾部に相当していたことが判明している。この低地部分では住居跡2軒・掘立柱建物跡1棟・溝状遺構4条・埋設土器2基・土坑173基が発見されている。

なお、今回の報告では、地図上での地形と所見との混用を避けるため、当該部分を低地部分として諸事に当たらせておく。

第2節 発見された遺構の概要

第1項 南側調査区

溝状遺構

溝状遺構は55条が発見されている。

発見されている溝状遺構には大きく三者の在り方がある。2・4号溝に代表される中世館跡の構造を構成する溝状遺構。5(28)号溝・16(29)号溝の平行走行する道の側溝と考えられる溝状遺構。10・11・19号溝に代表される耕作に伴う施設の一部と思われる溝状遺構である。

前者の中世館跡の構えに当たる2・4号溝は内郭の諸遺構を備えている。

中者の道の側溝と考えられる溝状遺構は、大泉坊川の下流域から右岸沿いに上り、地形的に大泉坊川側に突出部分で立ち上がっている。時期は古代で、埋没時期は10世紀前半頃と考えられる。

後者は地形上水田跡耕作に伴う水路等が主体と考えられる。19号溝では、水路の堰と推定される遺構も出土している。

住居跡

住居跡は2基が発見されている。発掘調査段階では3基であったが、同一住居跡を2基と看做している誤認を整理所見として得た。時期は古墳時代後期5世紀末と考えられる。

掘立柱建物跡

中世館跡の内郭に当たる南東部分で7棟が発見されている。調査上の都合により、東西に分別しての調査を余儀なくされたため、調査時の確認と整理の所見が若干異なっている。遺構写真は発掘調査時の設計計画線が引いてある。

また、掘立間での切りあい関係が認められることから、内郭の変遷を知る上では重要な状況である。

井戸跡

井戸跡はやはり中世館跡の内郭で9基が発見されている。地形上、湧水層が比較的浅かったことから、井戸跡の深度も1.5m以内である。C3・4号井戸はC3・5号掘立と重複する位置関係にある。館跡の

内郭の変遷を知るためには重要な状況である。

土坑

土坑は158基が発見されている。大半が中世館跡に伴う柱穴状の小規模方形ピットである。

遺構の分布状態は、館跡・住居跡・井戸跡・土坑は、台地縁辺りで、住居跡は台地の裾部分に当たると考えられる。館跡は台地の裾部分あたりから堀を構え、台地に向かって「コ」の字状の構えになり、諸施設は台地の裾の末端から、低地に移行する部分あたりに相当していたことが推定される。

第2項 北側調査区

溝状遺構

溝状遺構は21条が発見されている。

低地部分では南側調査区で発見されている、第4号溝状遺構と同一と判断した18号溝が発見されている。この双方の遺構が「コ」の字状に台地部分の縁辺に区画部分を構成している(前項参照)。この第18号溝状遺構の東西走する部分は露呈出来たが、南北走する部分は泉道に至近であり安全確保のためと、連接する水田耕作地には既に田植えが済んでいたため、可能な範囲を部分的に調査したが、壁の部分的な立ち上がりしか露呈出来なかった。

その他、19～21溝が発見されている。土地改良以前の地形に沿う状態である。遺存は不良であった。

台地部分では、西側斜面で地形に沿い第9号溝状遺構が発見されているが、孰れも覆土は近・現代のものであった。こと14号溝は、土地改良直前まで機能を果たしていた様子で、埋土内には土地改良直前に廃棄されたビニール製飼料袋が大量に発見されている。東側斜面では12号溝が地形に直行する状態が発見されている13号溝は地形に平行する状態である。前者は平安時代、後者は古墳時代であった。

住居跡

住居跡は縄文時代1基・古墳時代4基・平安時代63基の計69基が発見されている。この中で、縄文時代の63号住は、炉跡のみの発見であった。炉跡は後代の倒木に伴い巻き込まれ、倒木跡内部で倒立に近

い状態で発見されている。古墳時代の42号住居跡は一辺8.4mを計る大規模な構造である。平安時代の住居跡が多く重複して発見されたが、貴重な資料になると考えられる。平安時代の第11号住居跡からは轆轤を据えたピットが発見されている。この住居跡は須恵器工人の工房を兼ねた住居跡であった。

総体的には平安時代の住居跡が主体で、特に9世紀前半～10世紀中頃の時期に集中している。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は低地部分で発見されているが、確実な形状ではなく2間×2間の対辺が未発見であったため蓋然的に認定した。このほかでは掘立柱建物跡を構成する柱穴と判断できる土坑も発見されているが、周辺部精査を周到に実施したがそれ以上には発見出来なかった。

竈跡

竈跡は台地較部で須恵器工房の11号住居跡の至近の位置で第1～3・5号竈跡（2号竈跡はA・Bの2基）と、東側斜面部で第48号住居跡に切られて状態で計第4号竈跡6基の竈跡が発見されている。この竈跡は、登窯とは異なる構造の土坑状に掘り窪めた「焼成遺構」とも呼ばれている遺構と同様の構造で、県内でも初例で貴重な発見であった。

そして、この内の第5号竈跡は、遺存状態が比較的良好であったので保存工事を試みた。しかし、現地での保存には可能性が見出せなかったため、樹脂により型取りして模型として保存を講じた。現在は当園で保存・管理している。

土坑

土坑は173基が発見されている。時期の内訳では、縄文時代2基・古代基・中世18基（柱穴状）である。これらの中で、低地部で発見された169・170号土坑は、他の土坑と異なり焼土を伴う土坑で、169号土坑は、壁・底の全体に被熱した粘質土を厚さ2～3cm程で貼り付けている。一方、170号土坑は焼土・灰が多量に混入していた。この2基以外は通常の「土坑」で性格付けに寄与する状況等はなかった。

埋設土器

埋設土器は2基が発見されている。出土地点は低地部と台地部分の界辺りで出土している。

また、埋設土器の発見された部分から南東方向に向かい、縄文時代の文化層が認められ、周辺部に同時期の住居跡が存在していた事を示唆している。

第3項 旧石器時代の試掘調査

旧石器時代の遺跡試掘調査は、図-8に示したトレンチを設定して調査した。トレンチの設定方法は、1グリッドに対して4m×2mの試掘坑を設定したが、これはすべてのグリッドが対象ではなく、7ヶグリッドに対して1ヶグリッドの割合とした。計算上では、 $8\text{m}^2 \div (25\text{m}^2 \times 7) = 0.0457\%$ の比率で設けた（岩崎方式）。しかし、設定位置の諸条件によっては安全確保を優先、付加条件により未実施にした箇所もあり、全てが上記策ではなかった。

この方式により富田漆田遺跡では51グリッド、富田下大日遺跡では92グリッド。合計143グリッドを調査した。（図-9参照）

第3節 南側調査区で発見された遺構・遺物に就いて

第1項 溝状遺構

溝状遺構は55条が発見された。その半数以上は、灌漑と田畑の区画が目的の水路と考えられる。

時期は、古墳時代までさかのぼるもの、As-Bを年代の下限とする古代のもの、江戸時代天明頃を年代の上限とし、土地改良時まで使われていたものに区別することができる。

この変遷からは、大泉坊川の流路沿いがまず開田され、空白をはさんで台地上まで耕地に変えていく様子が読み取れよう。

古墳時代までさかのぼれるものは、A区にある54号と55号である。水田を縁取るように作られ、分岐と集水を繰り返して南下するものであろう。覆土には、時期判定の決め手としたFAが混入していた。

第4章 富田漆田遺跡の発掘調査

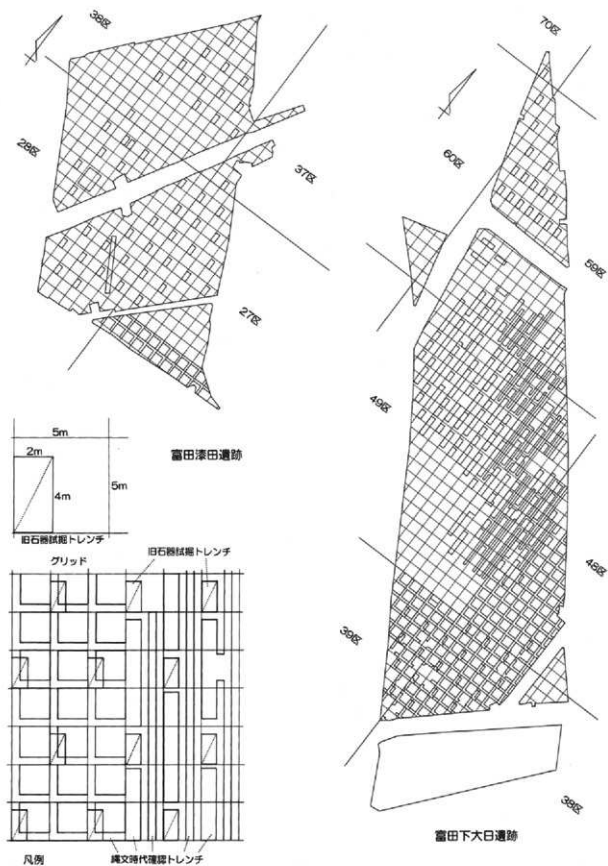


図-9 旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ設定図 (1:1,600)

水田は、台地上の集落に対応させれば、前期までさかのぼれそうであるが、植物珪酸体分析の結果は否定的である。前期は、想像するよりも狭い範囲での谷地田であったろうか。むしろ、水田よりは、畑を主体にした経営がなじみのある姿だろう。

古代は、弘仁九年の地震に関係したものとAs-B水田の水路とに分けられる。弘仁九年相当とは、洪水砂らしい粗砂で主に埋まったものをさし、斜面であるB区とC区にある。その中で注目されるのは、B区の34号から39号である。As-B下水田耕作土を斜いで発見したもので、適度な幅と深さに共通点と特徴がある。等高線に沿って並んだ様子から、水路と見るよりは、むしろ畑のサク跡と考えられる。類例は、C区の12号、13号で、これらも粗砂で埋まっていた。ただし、As-B下水田とは前後関係がはっきりとせず、むしろ可能性にとどまる。低地は水田、台地とそこから延びる斜面は畑という構図である。低地は抜け出せたものの、斜面は畑地優位という時期である。

これら畑らしい上面にあるのがAs-B下水田である。水田の範囲は、古墳時代の河道沿い細々としたものから、大きく谷の幅にまで拡大する。画期をもって出現した感がある。漆田遺跡の基盤の一つが水田にあることはいうまでもない。これに伴うのが30号と31号、そしてA区の一連である。31号は、溜井にはほど遠いが区画内の溜まりから、やがて筋となって流れて行くのがわかる。特に造作はなく、地形勾配を利用しただけのものである。ちなみに、As-B下水田は近世の19号あたりを境にして、上位面が段差で区画され、下位が通例のAゼ区画である。このAゼと段は、荒砥川の西、狭い谷筋ではよく見られ、例えばAゼが水稲で、段が陸稲というような作付けを意味するのだろうか。今後の課題である。

As-Bが降下した後、明瞭な耕作の跡は発見されていない。A区の低地では、As-Bだけでなく粕川テプラも堆積したままで、畑へと転換したか、しばらくの間耕作を断念した状態が続いたと思われる。

その後、低地へと進出するのが中世の館である。

台地の斜面上段、館にしてはやや奇異な占地である。館の手に発見された4号は、外周をめぐる大溝で、一方は泉道をはさんで北に延び、残るもう一方は台地上まで延びているらしい。

覆土からは、当初は水も流れる程度にあったものが、ノロが溜まり、いつか浅くなっていく様子が見える。検出面の近くでは、As-Aが混入している。この頃には、大溝も当初の姿を失い、周囲に再度拡がる水田用の水路と化している。覆土中位には、笠懸町馬見丘産の多層塔や五輪塔などの中世の石造物がひとまとめに放り込まれていた。近くでは、堰や護岸に利用されている。時代一新、おらが先祖とは無縁な人たちによる、新田開発的な勢いがそうさせたのであろう。しかし、見方をかえると、石造物は遺構が稀薄な中世前半を埋める貴重な資料である。近くに有力者の墓地、館はそれを遺産として継承もしているのかもしれない。

土地改良前、現代にまでつながる溝は、南調査区の全体で発見された。

溝は縦横に走り、道の跡までである。曲がりくねったと表現されることが多いのに、直線的なのが印象的である。若干のズレはあるものの、土地改良前の地割は江戸時代天明年間の頃までさかのぼることができそうである。谷の幅いっぱい、一面田んぼという景色である。

19号は、幹線水路である。谷筋の中心、斜面から低地への移り際を見事南北に貫いている。いかにも幹線らしく合流する溝が多く、分岐・合流のための堰だけでなく、暗渠の水路や枦までがある。

第2項 住居跡

住居跡は古墳時代5世紀末頃と考えられる2基のみの発見であった。また、北側調査区で発見された5基を含め、富田漆田遺跡では都合7基が発見されている。

北側調査区では台地の東斜面に分布し、低地部に移行する部分でも発見されていることから、南側調査区の当該期での占地要件は同様であったと判断

される。

住居跡の構造は古墳時代の通有例にならっている。挿図には図住居跡の設計形を示したが、北壁側の主柱穴 P_1 ・ P_2 は対角線上に乗っていない。一方、南側 P_3 ・ P_4 は対角線上にある。このことは、主柱穴の配置が長方形になることから、上屋構造が通有例とはやや異なるのかもしれない。具体的な上屋構造は不明であるが、異なることには異なる状態であったであろうことを推測したい。

後述の富田下大日遺跡での傾向では、主柱穴4本は対角線上に配置されている。

第3項 中世館跡

中世ビット群は南側調査区で多く発見され、北側調査区でも一部で発見されている。発見されたビットの総数は288本である。このビットの特徴は正方形基調とすることであり、発見されても多くのものが掘立柱建物跡等の具体的な遺構の解明に至れないのが実態である。掘立柱建物跡はこれらのビットを現地・図上で操作して建物の認定を行ったものである。

南側調査区では、C区内に集中しているが、詳細を見ると低地の縁辺部に縦列をなす西群と間隙で隔てた状態の東群に分かれ、この東群では掘立柱建物跡が6棟発見されている。

北側調査区では、東斜面部の耕地整理と土採りされた部分で少量発見されているが、旧状を推定しても濃密な分布とは思わず、局部的に集中した程度であったと思われる。

掘立柱建物跡群

掘立柱建物跡は南側調査区で6棟が発見され、調査現場と机上で配置・分布状況等を勘案して推定した。だが、中世ビットの分布域の東端側は、現市道部分が発掘調査実施が出来なかった部分と、調査工程の都合上、調査が後行した部分があったため、掘立柱建物跡群の全貌を一度に露呈出来なかった。

当該調査区での中世遺構、取分けC区を中心とする掘立柱建物跡等は、出土遺物から概ね15世紀後半の約50年間の限定された時間内に構築されたことが

推定されるものの、生活遺物の出土が極度に少ないことが特徴的な遺跡である。また、掘立柱建物跡と重複する3・4井戸は、生活空間と重複するにしても殆ど遺物の出土が無いことが特徴的である。

発見された6棟の掘立柱建物跡は、全て30cmを単位とする「尺度」により建てられていることが判明し、柱間は7尺を基本とする二者の在り方が認められる。この二者は桁行を7尺4間で共通するが、梁側(妻)が7尺2間と6尺2間乃至12尺1間の二者であり、前者をA群、後者をB群と便宜上呼称しておく。しかし、この双方の構造差異は、時間的経過の中での変遷か、双方の性格差異による意図的な造り分けかと推定される。また、これらの掘立柱建物跡の中で、1掘立柱の構造が特殊で、東側には規模の異なる施設を付属させており、通有推定される住居施設とは異なる特殊な要素が想定される。具体的な性格は及ばないが、後述する掘立柱建物跡と井戸跡との関係が示唆的である。

一方、切り合い関係は、A群がA群同士で切り合い、この切り合いにBの二者(4掘立柱)が加わる。逆説すれば、A群は井戸跡2基も含め一箇所で切り合い関係が顕著で、B群はB群同士での切り合い関係は認められない。即ち、A群での併存はありえず、A・B群2棟での併存が推定される。

主軸方位では、1・2・5・6掘立柱が同一方位が認められ、4掘立柱は前者よりやや東偏し、3掘立柱は逆に西偏しほぼ東西方向に構築されている。この中で2・6掘立柱は、妻を南北方向に揃え4.4mを隔てて平行配置を探っている。又、5掘立柱は1・2掘立柱直行する方向である。

この状況から、2・4掘立柱の両者には計画性をもって構築された事が窺われ、双方の構築意図から、1・5号掘立柱の併存が推定される。また、5・6掘立柱は井戸跡配置位置に従うかの如くに認められることと、周辺遺構の状況から、井戸跡は当該掘立柱建物跡群に伴う考える点に妥当性が考えられ、3井戸が5掘立柱に、4井戸が6掘立柱にそれぞれ帰納すると考えられる。そして、このことから3・4掘立柱と6井

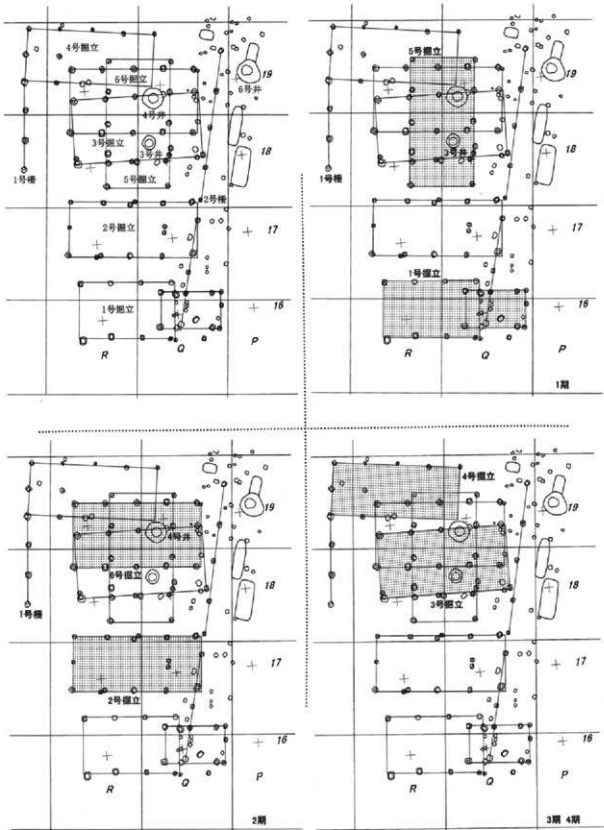


図-10 掘立柱建物跡時期別変遷想定図 (1:250)

戸という相関関係が推測される。

ここで改めて新旧関係を考えれば、1掘立に代表される特殊な状況が建物自身に附加されてのこれら掘立柱建物跡が構築されているならば、当初は1・5掘立と3井戸の構成で構築され、次いで2・4掘立と4井戸、最終段階は3・4掘立のどちらかが先行したであろうが、指向方向の点で4掘立6井戸その後には3掘立と続いたと推定しておきたい。この結果、第1～3(3・4期)期ごとに示したのが図-10である。

当該掘立柱建物跡群は1掘立と掘立柱建物跡内に井戸を伴うことから通常の掘立柱建物跡と在り方が非常に異なっている。このことは、出土遺物の様相にも認められ、生活遺物が少ないにもかかわらず(大半の中世遺物は図化掲載した)、同安窯系・竜泉窯系青磁の出土が目立っている。これらのことから類推されようことは不確定要素が多すぎることから、今後の周辺遺跡の遺構実態が明瞭になってから再考したい。

柵列跡は4条が図上で認められた。しかし、指向方向からは、掘立柱建物跡に伴うと考えられるのは4柵のみである。だが、この4柵も3本のピット等間隔で直線配列ということでは認定したが、不分明な点が多い。同様に、1柵は東側で離れて発見されている。だが、周辺遺構が未発見なことからすれば、何らかの意図の元に構築されたことが推定されるものの、具体的な性格には言及し得ない。2・3柵は、掘立柱建物跡群の東側で重複する状態で発見されている。2柵は8尺3間分でやや長く、3柵に連続するかの状態であるが、3柵とは柱間が異なるため別扱いにした。しかし、この2・3柵は、掘立柱建物跡群とは指向方向が異なり、且つ重複することから、掘立柱建物跡群との関係は希薄と考えられる。

館跡の時期は、出土遺物から15世紀後半頃と考えられるが、13・14世紀の石造品の出土もある。前身遺構の存在も窺える。

第4節 北側調査区で発見された遺構・遺物に就いて

第1項 溝状遺構

溝状遺構で特筆出来るのが前述した18号溝である。館跡の外堀の機能を備えている。前節を参照していただきたい。

12号溝は溝底面が非常に堅緻であったことから、道の機能を有していたものと思われる。一方、南側調査区では地形沿いに道跡が発見されている。この状況と12号溝の状況を合わせて考えれば、当時、当該地域では、道は谷沿いから集落に上がる里程が推定される。

13号溝は覆土の色調と状態から古墳時代に構築された遺構であることが判断できる。この溝状遺構の下位には、2基の同時期の住居跡が発見されている。方向も住居跡の辺と平行する状況であることから、双方は同時に機能していたことが推定される。その必然性は、斜面に住居を構築することにより台地上位側からの雨水処理の必要性が想起され、恐らく、住居に雨水などの侵入を防止する目的で構築されたものであることが推定される。

19～21号溝は部分的な残存なため明確な状況が分からないが、走行状況から地形に沿っていたことが考えられる。そして、覆土の状況から水田等への給排水溝とも考えられないことから、やはり、当該溝状遺構も谷地に沿って造られた道に關わらんことが推測される。

第2項 住居跡

住居跡の存続時期と廃棄時期

住居跡は9世紀～10世紀頃の時期が主体を成している。これらの住居跡が時期毎にどの様な構造があったのか考えてみたい。方法として、住居跡の主要構成を成す竈・傍電坑の在り方と出土遺物の傾向により特徴を見出してみたい。

住居跡の出土遺物は住居跡の廃棄段階での日常用

具の一部や、住居跡が埋没過程の諸段階で投棄されたか、何らかの理由により廃棄されたか、置かれたかであるが、この出土状況に就いては従前に置いて結論があったもの、住居跡本体の自然埋没・人為埋没かの判断や、その過程・経過が分明的に成らない元での分析には疑義が生じていると考えている。しかし、具体的な状況分析が出来得ない資料内容であることが究極の限界を示している。

ここでは、出土遺物に就いては、ある程度の住居跡の廃棄時期を得るための資料として扱い、遺物としての個々の検証は実測図及び観察表等により判断願いたい。

富田漆田遺跡で発見された住居跡の出土遺物、特に土師器壺・羽釜には図-14に示した傾向が認められ、一方、住居跡の形状・竈の特徴（住居形態）を出土遺物の傾向から序列化させたのが図-11～13である。また、住居跡の要件を一覧化させたのが表-4である。

竈

竈は東側の壁に備えるのが通有である。この東壁に備えるとしても、どの位置に備えるかが時期推定の大きな指標でもある。^{注1}

竈の設置は広義の東壁側で、壁長の中心より南東隅との間に設置するのが殆どである。この限られた部分でも、9世紀初頭頃は壁の中央に設置されているが、時期が下がると南乃至南東隅部に寄り付いていく、そして、11世紀前後の頃に至り、隅部部分に^{注2}対角線方向に突出させる状態で竈を構築している。

この富田漆田遺跡で発見された住居跡の竈で特徴的な実態がある。この特徴的な実態を示しているのが4・17・38号住である。

第4号住居跡の竈

4号住の竈は、比較的長い燃焼空間の中央より焚口側に、燃焼空間を遮る様に裸を据えている。この据えた裸より焚口側は、壁面補強等が周到に行われ、出土遺物は、裸により遮断した部分から煙道までの部分では、殆ど出土遺物は認められず、この焚口部分に集中していた。

このことは、裸で燃焼空間を遮断し燃焼効率高め意図があったことを物語っている。

第17号住居跡の竈

17号住の竈は、箱状に掘方を持つ燃焼部を裸で補強し、中央部より若干奥壁より左右一対の支脚を備えている。この支脚は並架式の器設であることが判断できる。燃焼空間の状況は、上記に4号住の閉鎖した燃焼部のより具体的な構造として当該住居跡の構築時掘方に現れていると言い得る。

第38号住居跡の竈

38号住の竈は、廃棄段階直前の竈の使用状況が具体的な形として現れている。竈には羽釜が使用時のまま並架されており、羽釜を除去するとやはり、17号住で認められた支脚が並架を目とした状態で出土している。やはり、燃焼空間は羽釜を据えた直ぐ後ろで立ち上がっており、4・17号住の燃焼空間の特徴が顕現している。また、この38号住の場合は、構築当初の位置から据え換え南東隅部にやや寄った部分に再築している。これは、中央より南東隅部側への変遷が辿れる。

竈の設置部位と傍竈坑

竈の設置部位は東壁中央から南東隅部までの間である。この設置部位の選定は住居の構造上大きな問題を内包している。通有、南東隅部には「貯蔵穴」と呼び習わしている土坑状の掘り込みがある。嘗て筆者が「傍竈坑」と定義した施設である。^{注3}この傍竈坑は竈が南東隅部に近づき消滅し、消滅後新たに南西隅部にやや小ぶりでも深目の土坑状の施設が出現する。この様に竈の位置は住居内空間の利用に大きな影響を与えているものと推測させる。

傍竈坑の形状は円形・隅丸長方形・不整形の概ね三者であるが、孰れも浅い土坑状であることが特徴である。まれにやや深目に掘り込んだものがある程度である。当該の土坑状の掘り込みを「貯蔵穴」とするには深度不足であろう。貯蔵穴とする積極的な根拠は示されたことが無いと思われる。

17号住では、南東隅部の傍竈坑は失われ、南西隅部のみに小規模な土坑状の掘り込みが認められる。

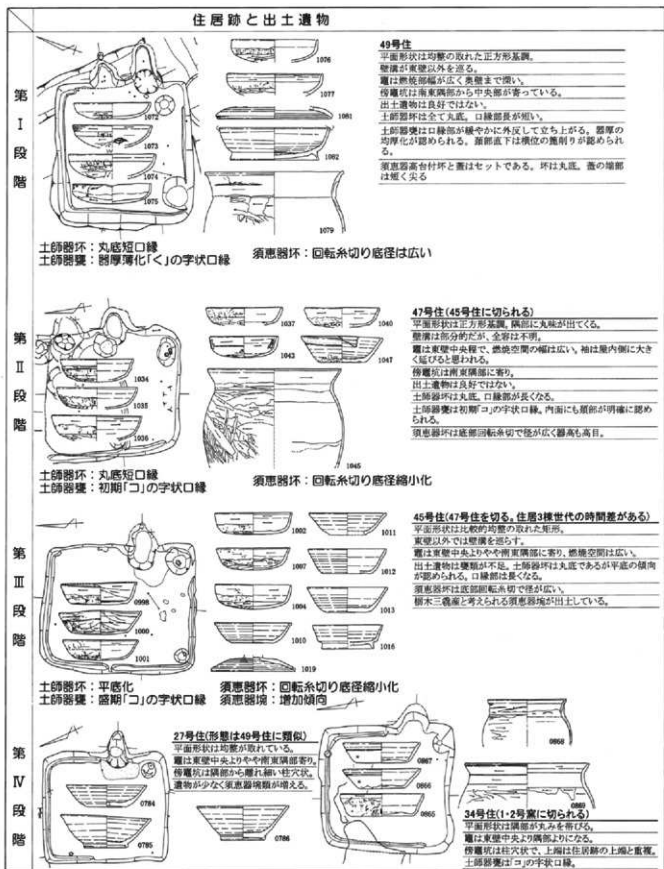




図-12 富田漆田遺跡住居跡段階別分類図(住居跡1/120・遺物1/6)(2)

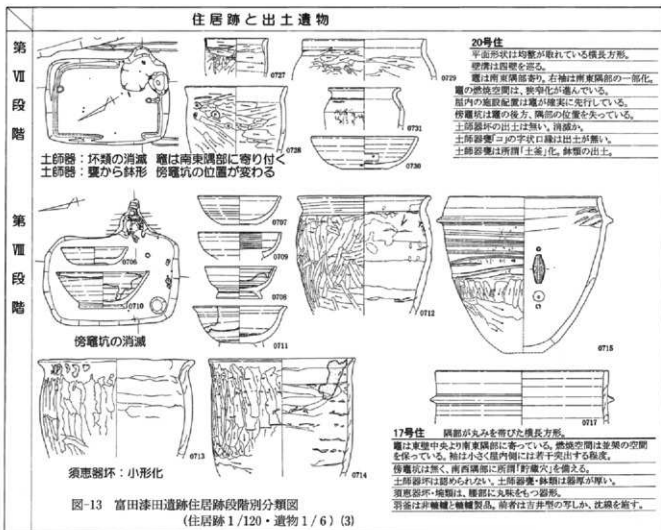


図-13 富田漆田遺跡住居跡階別分類図
(住居跡1/120・遺物1/6) (3)

住No	伊	呂	時期	住No	伊	呂	時期	住No	伊	呂	時期	住No	伊	呂	時期	
跡11住	IV	-	9世紀	跡31住	IV	4	9世紀	跡51住	●	●	5世紀	跡25住	IV	~ V	10世紀	
跡12住	-	3	9世紀	跡32住	V	4	9世紀10世紀	跡52住	●	●	9世紀?	跡27住	-	-	9世紀?	
跡13住	V?	2	9世紀10世紀	跡33住	-	4?	9世紀?	跡53住	●	●	加賀朝臣3	跡29住	VII	7	10世紀	
跡14住	V	4?	9世紀10世紀	跡34住	IV	3	9世紀	跡54住	V	5?	9世紀	跡30住	IV	5	9世紀10世紀	
跡15住	V	3?	9世紀	跡35住	-	5	9世紀10世紀	跡55住	III	3	9世紀	跡31住	V	6	9世紀~10世紀	
跡16住	III	-	9世紀	跡36住	IV	3	9世紀	跡56住	III	5	9世紀10世紀	跡32住	V	6	10世紀	
跡17住	-	-	9世紀~10世紀	跡37住	V	3	9世紀10世紀	跡57住	-	3	9世紀	跡33住	V	5?	9世紀	
跡18住	VI	5~6	9世紀~10世紀	跡38住	VI	6	10世紀	跡58住	●	●	5世紀	跡34住	IV	3	9世紀	
跡19住	IV	4	9世紀	跡39住	-	2	9世紀	跡59住	V?	3?	9世紀?	跡40住	V?	5	9世紀10世紀	
跡20住	-	-	9世紀	跡40住	IV	3	9世紀	住No	伊	呂	時期	跡42住	V~VI	6	10世紀	
跡21住	IV?	4?	9世紀10世紀	跡41住	4以前	2?	9世紀?	跡43住	-	-	9世紀?	跡43住	-	-	10世紀	
跡22住	6	5?	9世紀~10世紀	跡42住	●	●	5世紀	跡44住	IV	3	9世紀	跡44住	IV?	-	9世紀?	
跡23住	IV	3	9世紀	跡43住	-	-	10世紀?	跡45住	-	-	9世紀?	跡45住	●	●	6世紀	
跡24住	-	-	9世紀?	跡44住	-	-	9世紀?	跡46住	VI	5?	10世紀	跡46住	●	●	6世紀	
跡25住	V	4	9世紀	跡45住	III	-	9世紀	跡47住	VI	6	9世紀10世紀	跡49住	VI	3	9世紀10世紀	
跡26住	-	-	9世紀~10世紀	跡46住	III	-	9世紀	跡48住	V	5	9世紀10世紀	跡50住	VII	7?	10世紀	
跡27住	V	5	9世紀10世紀	跡47住	II	2	9世紀	跡49住	I	1	9世紀					
跡28住	-	-	9世紀~10世紀	跡48住	III	3	9世紀	跡50住	●	●	5世紀					
跡29住	V	5	9世紀10世紀	跡49住	I	1	9世紀	跡51住	●	●	5世紀					
跡30住	VII	8	10世紀~10世紀	跡50住	●	●	5世紀	跡52住	-	-	3	9世紀				
跡31住	-	-	5世紀	跡51住	●	●	5世紀	跡53住	-	-	9世紀10世紀?					
跡32住	-	-	5世紀	跡52住	-	-	3	9世紀	跡54住	-	-	9世紀10世紀?				
跡33住	-	-	2世紀	跡53住	-	-	9世紀10世紀?	跡55住	-	-	4	9世紀				
跡34住	-	-	9世紀~10世紀	跡54住	-	-	4? 9世紀~10世紀	跡56住	-	-	4? 9世紀					
跡35住	VI	6	10世紀	跡55住	-	-	10世紀?	跡57住	V	4	9世紀~10世紀					
跡36住	IV	4	9世紀10世紀	跡56住	V	4	9世紀~10世紀	跡58住	-	-	4? 9世紀					
跡37住	IV	3?	9世紀	跡57住	IV	3	9世紀~10世紀	跡59住	-	-	9世紀?					
跡38住	IV以前	2?	9世紀?	跡58住	-	-	4? 9世紀	跡60住	V	5	10世紀					
跡39住	VI	-	10世紀	跡59住	-	-	9世紀?									
跡40住	-	-	4	9世紀	跡60住	V	5	10世紀								

表-4 富田漆田・富田下大日遺跡出土住居跡階階・時期一覧表

最も新様な形態である。^{註4}

この竈の設置部位は時期が下がるに連れて南東隅部側に寄る傾向が指摘できる。

住居跡の各段階の時期

住居跡の時期を計る考突手段は出土遺物に拠るところが大いだが、出土遺物とは、住居跡が廃棄される直前から廃棄後に残された物、或いは、埋没段階で混入（廃棄・投棄）である。厳密には、住居跡の時期とは異なり、住居跡が廃棄された時期である。住居跡は或る程度の期間存続していたにしても、その期間を割り出すことは不可能に近い。

通有、廃棄時の出土遺物だけでその住居跡の時期を推定しているが、出土遺物も各住居跡毎に条件は異なり、竈・傍電坑・床面上・覆土内等様々な出土状態の遺物から推定している。条件に因っては危険な状況や、出土遺物が得られない場合等付帯条件がある。出土遺物は「出た」という事実の内面には、「住居跡廃棄時の残り物」「埋没段階で廃棄・放棄」された「物」である。方法論として、出土遺物自体も系統観を以て分類し再度遺跡内全体で分析を試みなければ、答えは「当たっている」のであろうが「合っている」とは評価し難い。

一方、住居跡の構造や竈等（形態）から出土遺物を見ることなくとも、住居跡の時期の推定は可能である。また、住居跡の形態は構築当初の姿を留めていると仮定するなら、住居跡の形態分類とその変遷から、住居跡の形態による住居跡の時期設定は可能であり、形態毎の出土遺物（廃棄時）の内容から、住居跡の構築段階と住居跡の廃棄段階を推定することにより、その住居跡の理論上の存続期間を推定することが可能となる。

集落内の動態を知る大きな手掛かりと成り得ると考えられ、これにより、集落内の変遷、特に当遺跡の場合は、須恵器生産の時期・意義付けがより明確になると考えられる。

この住居跡形態を分明にすることと、廃棄段階で遺物の様相により、住居が構築された段階から廃棄される段階の期間がおぼろげながらも明らかに出来

る。この住居跡形態と遺物により得られた時間幅を「看做しの存続期間」としておきたい。表現的には「頃の住居跡」となる。

嘗て、上野国分僧寺・尼寺中間地域・中里見原遺跡の報告で、住居跡の形態による遺跡内の変遷を考察している。^{註5}

図-11～13は、この方法により住居跡の形態分類と変遷を第Ⅰ段階～第Ⅷ段階に分別して示したものである。特徴等に就いては図中に記した。

図-11～13の分別は時間の推移を想定しているが、第Ⅲ段階と第Ⅳ段階は同時乃至逆転も考えられる。この第Ⅲ段階の指標とした45号住は、前段階の指標とした47号住と直接の重複関係にあることと、出土遺物の様相が第Ⅳ段階の出土遺物間に隔たりを感じたことにより先行段階とした。しかし、第Ⅳ段階の傍電坑は第Ⅰ段階の傍電坑の形態に類似する要素を含んでいる事と、第Ⅳ段階の竈の設置位置が壁中央～隅部寄りで、設置位置の幅が有り過ぎる事が、形態としては、第Ⅳ段階は第Ⅰ段階の直接的な系列種の可能性がある。

第Ⅰ段階→第Ⅱ段階→第Ⅲ段階→第Ⅴ段階→

第Ⅰ段階→第Ⅳ段階→第Ⅴ段階→

の並行関係であったことも推定され、単純ではない状況も推測される。

出土遺物

出土遺物では、通有例同様に土師器・須恵器類がある。特に、当遺跡と富田下大日遺跡では、土師器類が比較的良好な出土を得ている。また、須恵器では、当遺跡で生産された「漆田産」の製品が一時期配分されている。この漆田産が配分された住居跡が同時期の住居跡と看做される。

今回の報告では、上述の土師器類を基準に出土遺物の時期傾向を探った。この理由は、土師器類・漆田産以外の遺物の生産地が多岐に及ぶため、傾向把握が困難と予見しての事で、このためある程度推定可能な土師器類を主眼に据えた。

当該期の基準にした「コ」の字状口縁の土師器類は図に系統観と器形・成整形の変化を示し、併せて

富田漆田・富田下大日遺跡出土土器器変・羽釜類

土器器変類は本図に示した8段階の区分の姿態特徴が認められる。

各段階の特徴的模様は図中に註書きした。

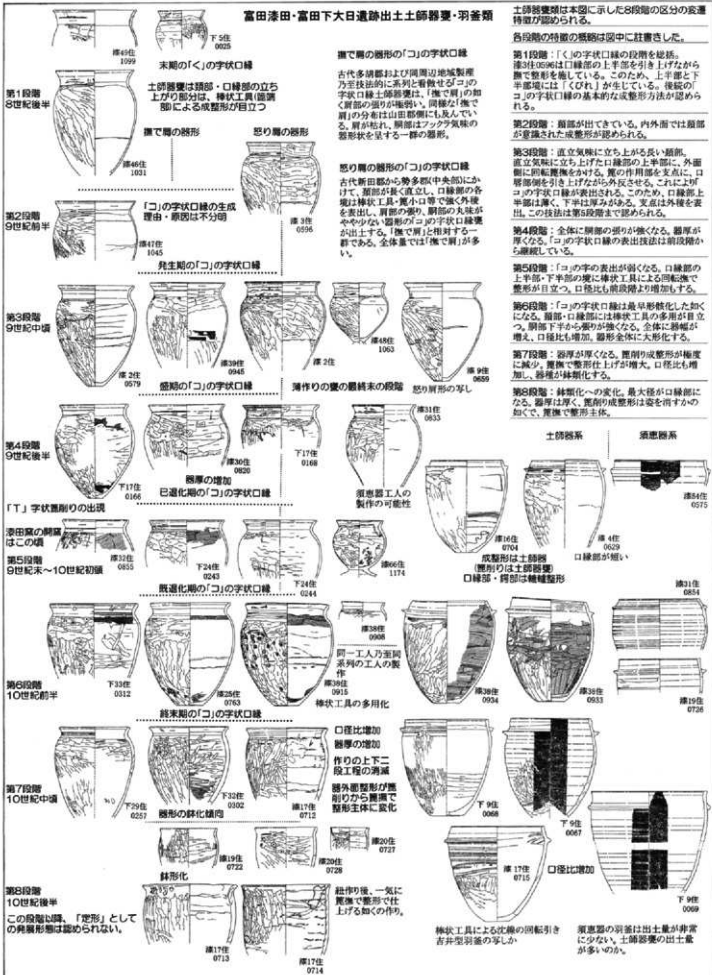


図-14 富田漆田・富田下大日遺跡出土土器器変・羽釜系統別段階図 (1/10)

特徴の概略を示した。図-14は富田下大日遺跡出土遺物を含めて当遺跡の補充とした。

出土している土師器壺・羽釜類で、当遺跡での生産が判断できるのは、第V段階の住居跡に伴う羽釜である。これらの羽釜は、口縁部と胴部には横縞

使用の整形痕跡を留め、土師器壺の胴部に似た形状と、器外面の整形状態である。器厚を薄くする意図の下で器外面の寛削りが行われ、寛削りの特徴も土師器壺の特徴を備えている。そして、もっとも顕著な特徴として、土師器壺の如くに、胴部中央に上下

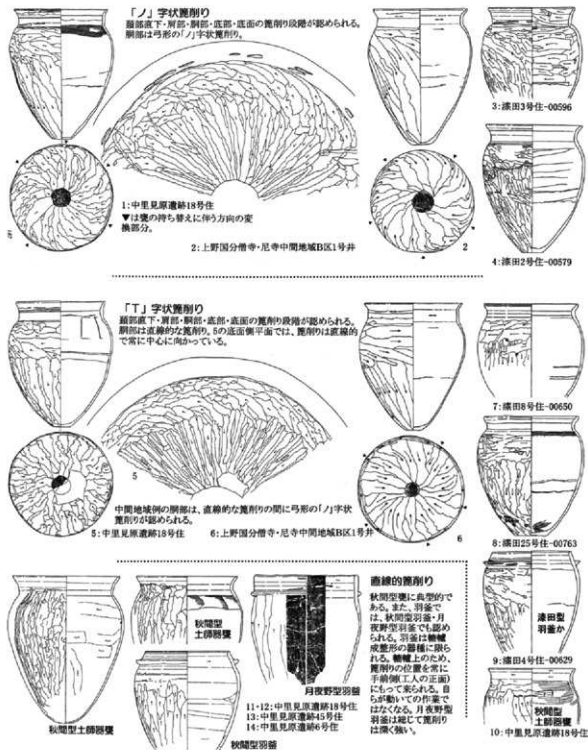


図-15 土師器壺に於ける寛削り成整形の三者 (1/8)

2段階の成形が行われていた事である。つまり、成整形には土師器の技法が主体的に用いられていることである。「漆田型羽釜」の固有名詞の設定も可能とも思えるが、現在は当遺跡でしか確認できないので別時に改めたい。

また共存関係から傾向を窺えば、第VI段階（38号住）では、退化の始まった「コ」の字状口縁土師器甕と非轆轤羽釜が共存している。土師器甕の器幅が広がると、羽釜はやはり土師器甕の胴部に似た形状になり、器幅の広がりや羽釜の器幅の広がりは軌を一にしており、何より、内面成整形の筥使いは双方ともほぼ同様である。このことは、土師器甕を製作した工人と、非轆轤羽釜を製作した工人は、同一か技法上の系譜が同一であったことが窺知される。

図-14中に「T」字状の寛削りの出現」を記したが、文中では説明を省いたので補足しておく。

従前から注意していたが、土師器甕の寛削りには、大きく三者の在り方が有る（「ノ」字状寛削り・「T」字状寛削り・直線の寛削り）ことを観察してきた。この三者要件は以下のとおりである（図-15参照）。

1：「ノ」字状寛削り

器面上で一定条件以外常に曲線状の筥使いの軌跡を示す寛削りで、甕を手持ち状態で行ったと推定できる。この寛削り中に甕削り易い状態に持ち直した直後の筥使いの方向は、甕の中軸に対して平行直線方向で、削りを繰り返していくと徐々に曲線方向の筥使いに成っている。平均4～6回持ち直して全周させ削る方法であるが、吉井・藤岡産の土師器甕の場合は5回の持ち直しが多い。当遺跡の土師器甕寛削りは、残存が良好な個体が少なかったが、概ね4回が多い。

胴部上半から頸部直下にかけては、甕の左下方に向かい削り下ろす筥使いで、甕の正面から見ると（図上）「ノ」字を90度左に回した方向で、器面上では右から左の方向になる。

2：「T」字状寛削り

寛削りを手持ちで寛削りを行った場合は、

常に寛削りを持ち直し、削りと同時位に小刻みに甕を左回転に回すか、回転台（轆轤を含む）上で甕を回しながら削るかであるが、胴部上半と頸部直下の削りは、回転に平行する状態、口縁部に平行する、直線的な筥使いの方向の寛削り（方向は器面上では左から右で、1の状態の逆位である）であることから、1の状態での同部分の寛削りの軌跡とは異なっている。「T」字状の寛削りは、口縁部と平行する胴部上半と中軸に従う状態の直線的な筥使いの動きからなる状態であり、多くの場合は回転台（轆轤を含む）上での作業である。

3：直線の寛削り

秋間型甕に特徴付けられる。轆轤上で削るため、常に中軸に沿う直線的で同一方向（回転軸方向）の筥使いによる寛削り。

以上の三者である。

この「T」字状寛削りの出現以前にも、時折「T」字状の寛削りが施された土師器甕を散見しているが、概ね「コ」の字状口縁以降の土師器甕である。

各段階への年代付与、年代観であるが、土師器の各段階の時期を特定できる資料・状況等に就いては何ら出土していない。年代観に就いては、従前に於ける年代観を勘案して推定した。

集落の構成

発見された遺構で特徴的なものは、窯跡が先ず挙げられ、この工房跡（11号住）も発見されている。時期は9世紀末から10世紀前半に推定される。このほかでは、異常なほどの熱処理を行っている10号住は、甕の構造も大きく異なっている。しかし、一体何に対してあれ程までに被熱処理を行ったのかまでは明らかに出来なかった。この様に、個別遺構での問題自体未解決な事の方が多い。

一方、当遺跡を擁する台地は、帯状で細く裾部分は河川の蛇行により波状に削られている。また、調査区の南側は一段低い状態で比高差は1.5m程あり、南側調査区で発見されている2号遺跡が止まり、台

地上に上がる部分がこの段差の境辺りになっている。北側は調査区の背後で、台地が瘦せた状態で細くなっている。この間の距離は約300mで幅約100mであり、恐らく集落の範囲はこの間に収まると推定される。調査はこのほぼ中央部の25%程度が該当している。この遺跡の推定域の25%という数値から、遺跡総体の住居跡数を復元推定（第4章第1節第2項参照）すると400基程の数量が推定される。

当遺跡での住居跡の在り方は、第I段階の8世紀台の住居跡が数軒程度しかなかったが、第II段階以降には住居跡数が増大する事が窺われ(表-4参照)、第VII段階以降は再び極度の減少傾向が窺われる。この傾向は県内の当該期の通有例にほぼ等しい。時折10世紀後半から11世紀前半頃の住居跡が集中する遺跡(遺跡のなかの一部に集中する場合も有る)が、この場合は、寺院跡の周辺または官衛周辺と思われる特殊遺跡としての傾向である。

上述した9世紀前半以降の集落の膨張化は、内的人口増加が要因とは思わず、寧ろ、外的要因による作爲によって引き起こされたことが推定される。具体的には官衛主導による人の入植か、有力層による私的な人の入植に類する事であったことが類推され、浮浪逃亡民の集合と異なると考えられる。

南側調査区ではAs-B下水田跡が発見されており、低地部にはかなりの面積で水田耕作が行われていたことが推定される。だが、発見されている水田跡は廃絶された段階であって、耕作開始時期については現段階では不明である。

9世紀段階での集落の膨張化は、この水田跡の耕作(開田も含まれる)に関する事も推定の範囲の中であるもの、具体的物証に欠けている。

上述の遺跡の膨張化現象は、その要因に推定した公・私の判断を推定する具体的な根拠は無く、現段階では憶測を惹起させる程度である。だが、県内では通有例であることから、その背景には共通する要因が内在していることは確かであろう。今後の周辺遺跡での成果を鑑みて稿を改めたい。

第1項 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は1棟発見されたが、前述のとおり確定し得る状態ではなかった。全体的に残りが悪いのか、誤認である。

推定される5本のピットは、既に耕作等の原因により失っていることを考慮して遺構認定を行った。だが、軸の方位を住居跡と比較すると、31住居跡しか近似値を得る住居跡がない。

出土遺物は少量ながら認められているが、下位の20号住の遺物が混入しているものと思われ、確実に本跡に伴うと判断される遺物は無かった。

第2項 窯跡

窯跡は6基調査実施になった。この6基の内4号窯は48号住に切られていることから、時期は9世紀前半以前と推定される。一方、他の5基は、9世紀末から10世紀前半の年代観から、双方には1世紀以上の年代差が生じている。また、後者は焼成製品が須恵器・埴輪を主体生産物と判断しているが、4号窯は製品が何であるのか現段階では不明であるが、土師器であろう事は推定の内である。

焼造器種

ここでは1～3・5号窯の製品に就いて記しておく。

発見された1・2 a・2 b・3・5号窯出土遺物の中で良好な個体を一覧化させ、製作工房に当たる11号住の出土遺物を併せて一覧化させたのが図-16である。

焼造器種には、坏・埴・耳皿・皿・坏蓋・甕が確認できる。また、羽釜が直接には出土していないが、住居跡出土例に当該窯跡産と推定出来るものが多い。図-16には〔 〕で括った住居跡が羽釜の出土住居跡である。

この各窯跡で生産されたであろう須恵器が(2)・4・11・(12)・16・(21)・22・26・30・31・54・56・64号住から出土している。

製品の特徴

当該窯跡群から出土した製品を観察すると、以下

瓦 皿 皿 杯 埴 壺 埴 瓦 瓦 瓦 瓦	1号窯	2号窯	3号窯	5号窯	11号住	住居跡出土例
 01312 01213 01214	 01240 01222 01224 01225 01229 01227 01228 01231 01232 01230 01233 01243 01244	 01246 01247 01245 01246 01249	 01252 01251 01250 01253 01254 01255 01256	 00678 00679 00670 00671 00672 00673 00674 00680 00681 00682	漆36号住 其皿 漆64号住 漆11号住 杯 漆2号住 下11号住 漆8号住 下12号住 漆11号住 下13号住 漆15号住 下30号住 漆16号住 下49号住 漆22号住 漆25号住 漆30号住 漆31号住 漆54号住 漆55号住 漆66号住 埴 漆1号住 下10号住 漆11号住 下11号住 漆12号住 下13号住 漆54号住 下15号住 漆55号住 下25号住 漆66号住 下30号住 下49号住 瓦 漆4号住 下30号住 漆12号住 下49号住 漆16号住 漆22号住	

図-16 漆田窯出土植物器種分類図 (1/6)

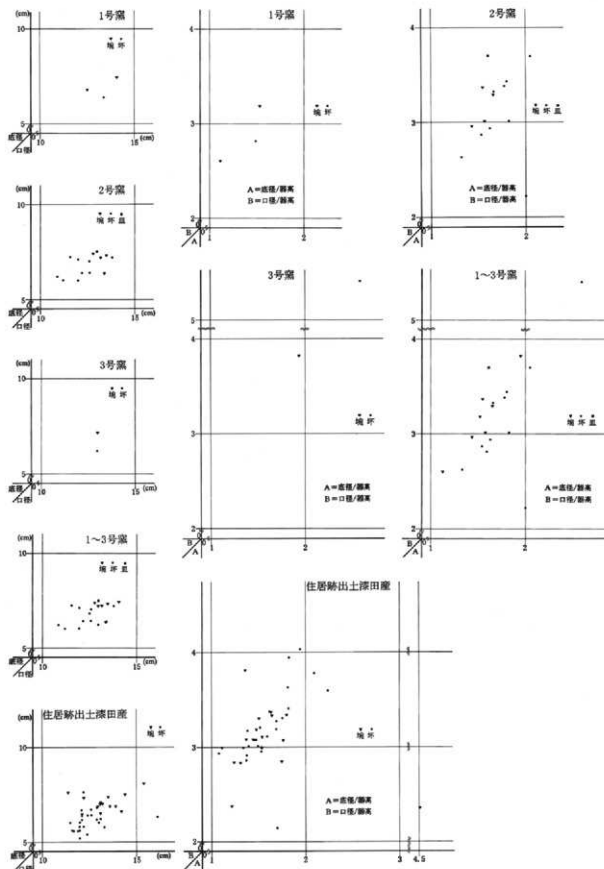


図-17 漆田産須恵器杯・埴壇日値・口径値/底径値図

の特徴が認められる。

坏類：体部はやや丸味を帯びる。外面轆轤目が強く、体部まで轆轤回転で挽き上げ、口縁部は指先やや力を加え回転で挽き上げ、口唇部は短く外反させている。このため、体部と口縁部の境辺りには強い轆轤目が生じている。内面は殆ど全てが布乃至革で挽かれている。だが、器面には砂粒が浮き上がり荒れた状態に仕上がっている事から、二次的に乾燥がやや進んだ段階での整形の可能性も考えられる（各図の拓景図を参考にして頂きたい）。轆轤目は痕跡程度にしか認められない。また底部は厚目である。

埴類：坏部の作りは上記の通りである。高台は坏部の底部と腰部立ち上がる角に乗せ成形している。

皿：器厚全体が厚い作りである。高台はの作りと同じである。

耳皿：底部は厚目であるが口縁部にまで厚さは達していない。

蓋：1点のみの出土である。外面には轆轤右回転整形時に篋状工具の小口側を使い、回転箆で整形を行っている。これにより器面には、細かな条平行叩き痕を留めている

甕：比較的作りは薄い。轆轤条痕を顕著に残す事から、何らかの工具を宛てて成形した可能性がある。「トンボ」等に類似するような工具の使用も考慮の範囲か。

胎土

胎土は陶土質の生地土（1種生地土）と粘土質の生地土（2種生地土）の2種類が認められる。双方共にシャモット等の混入物は認められない。生地土を直接用いている。

この内1種生地土は、工房（11号住）の床面に張り付くように薄く残存していた白色粘土と考えられる。この生地土を使用した製品には「A生地土」として観察表中に示した。この1種は、当該地域では賦存が見込めない生地土である。恐らく、他地域から搬入された生地土と判断される。

2種生地土は主体的な量に用いられている。欠点として、耐火度が低いことが見込まれ、2号窯出土10-01232など数例に亀裂が生じている個体が認められる。

この2種生地土は、ローム土の粘土化したものと考えられ、焼き上がり後の比重は軽目である。夾雑する鉱物には、火山ガラスの細片・微細な長石・角閃石・輝石などが認められる。可塑性の弱い生地土であると見られる。生地土の採取地は遺跡地の東側低地部分の地表下約1~1.5m程で、粘土化の進んだ灰色に還元変色したローム土層を用いていると考えられる。低地部の調査の折に地山土を掘削して確認した。試料を採取して土器成形を試行したが、坏程度は容易に成形出来ている。

焼成

焼成は土坑状に掘り込まれた焼成部で行われている。焼成部の底面は橙~赤橙に酸化変色した部分が多いが、部分的に灰色に還元変色している部分が認められる。色調は中央・中央寄りが還元色調で、還元色調の周縁に酸化変色した部分がドーナツ状に広がっている。

この色調変化の様子から以下のことを推測させている。

- 1：製品には酸化焰・中性焰・還元焰焼成による三者以上の色調を呈すること。
- 2：還元焰の被熱部分は空気を遮断された状況下での所産であり、何らかの方法により空気の遮断を行ったのであろう。

逆に製品からは、内外面に黒斑等の黒斑が多く認められる。この黒斑は、焼成燃料と遺物が密接に重なり合うか、焼成時に動いたかにより、土器側に燃焼中の燃焼材が寄り付いたと考えられる。これにより、土器側が吸炭しその後焼成温度が上がらなかったことにより器面上に黒斑として残ったと考えられる。出土遺物実測図中、当窯跡群以外の製品の須恵器坏・埴に平面図を付し燻りの範囲を示した遺物は、同様な焼成方法により焼成された可能性がある。

3・5号窯の底面奥壁寄りの部分には、主軸方位

に直行する方向で炭化材が出土している。太さは径3～4cm程である。この炭化材はかなり太い幹を小割にしたものが用いられている。燃料材が割合細く感じられるが、実際には小割り材を用いている。炭化に伴う焼き締まりを考慮しても、燃料材の幹での直径は30～40cmであろうか。樹種は年輪及び年輪周辺の導管の散在状態からクヌギ乃至コナラと考えられる。恐らく、周辺からの切り出しか廃棄される住居等の部材をも燃料材にしたものと考えられる。

しかし、焼成は燃料材と焼成物をどの様に取って焼成したかが重要であるものの、実態は分明に出来ない。ただ、内外面の黒斑や燻りの具合等からは、正位での重ね焼とも考えられる。

また、焼成はある程度の時間は温度の維持も重要である。当該窯跡群の燃焼部構造からは、地上面より下位の部分で熱を留める様な方法を用いなければ焼締られず、ここに何らかの方法が存在した可能性が中央部の還元焰域が示唆している。

上述した空気遮断の方法は、何等かの被覆物を用いることにより可能と推定され、久保田氏の説く所の「覆い焼き」を用いる「灰」等は現実性が高いと思われる。だが、調査段階では「覆い焼き」も念頭に置き調査を実施したが、窯底面直上層は塊状焼土と炭化物等が混在する土層が認められただけで、灰が特に多いという所見は得られなかった。

推測の域は出ぬものの、燃焼効率と熱効率を上げる方法の存在は何等かの形で存在したであろうが、調査では見出せなかった。今後の調査に委ねなければならぬ事としておきたい。

時期

当該窯跡群の時期は、皿を含む焼造器種揃えから開窯の下限は9世紀後半と推定される。そして、当該漆田産を共伴する住居跡の出土遺物からは9世紀後半でも末葉に近いと考えられる。また、窯跡群の工房である11号住の形態からも同時期の推定がなされ、発見された窯跡の数量からも世代を多岐に渡ると思われない。この点を考慮して時間的な幅として9世紀末～10世紀初頭頃を当該窯跡群の時期とし

ておきたい。

系譜

通有例では、須恵器窯跡は登窯・密等である。今次の調査では、県内では初例となった「焼成土坑」に類する形態である。しかし、構造を見ると前底部と呼称できる施設を伴っている。そして、確実に須恵器を焼造していることから、当該遺構に対して「窯」を付与した。

当該窯跡群での製品には2種類の生地土が用いられていることを前述した。この生地土の1種生地土は、工人が何れかの地から搬入した生地土であることは推定した。この何れかの地が何処かは分明ではないが、2号窯の製品を観察する限り、工人自体の熟練度は底径の不安定・厚い器厚から「未熟」に分類されて可き習熟度である。このことは、11号住の工人は1種の生地土を持ち込んだ工人に伝習されたか、工人が1種生地土で生産をしている「窯元」で伝習し、その伝習先から持ち込んだかの二者択一的に考えて取れる。2種生地土は1種生地土を使い果たしたからの生地土と推定されよう。

県内の古窯跡群は古代の郡制での分布は、多胡郡＝吉井古窯跡群、緑野郡＝藤岡古窯跡群、片岡郡＝乗附古窯跡群、碓井郡＝秋間古窯跡群、吾妻郡＝中之条古窯跡群、利根郡＝月夜野古窯跡群、勢多郡＝雷電山古窯跡群、新田郡＝笠懸古窯跡群・太田古窯跡群、佐位郡＝笠懸古窯跡群、山田郡＝太田古窯跡群・桐生古窯跡群が知られているが、近年の発掘で伊勢崎市三和町舞台遺跡(佐位郡)(以下、舞台窯跡群)では9世紀の窯跡群の発見もあり、未見の小規模窯跡群も山田郡・群馬郡域内に見込まれ、他地域でも未見の窯跡・小規模窯跡群の存在は粘土の賦存地域なら容易く想定される。

舞台窯跡群で生産された須恵器環・埴壇には、笠懸古窯跡群・桐生古窯跡群・太田古窯跡群の製品のように類似した「作り込み」が認められる(広義には栃木県を巻き込む渡良瀬川流域の共通するのかもしれない)。特に笠懸古窯跡群では、佐位郡との大きな関わりが存在することから、技術面での系譜は笠

懸古窯跡群の範疇に含めて考えなければならない。

当遺跡の所在する勢多郡は、雷電山古窯跡群を擁するが、実態が未だに知られていない。開窯は隣接する新宮庵寺遺跡^{註9}（旧称＝新宮古瓦散布地）の創建に伴うか、上植木庵寺への供給が開窯の契機である。

当遺跡と同郡内で代表される雷電山古窯跡群は、第三紀層の凝灰岩の風化粘土を生地土とする陶土を主体的に用いている。これに対してハッ峰窯跡^{註10}・上西原遺跡窯は、当窯跡群の生地土と同様2種生地土（粘土化したローム土）を生地土としている。これは勢多郡内の陶土が極限定された地区のみ賦存することにより、雷電山古窯跡群だけでは広域な郡内に十分な供給を成し得なかった背景が要因と推測される。しかしこれは、単に生地土だけの問題ではなく、燃料の熱資源の問題も含まれていると推定され、同地区周辺の9世紀前半頃の製炭窯による、雑木林の伐採は相当量に上っていたことも推定される点にある。

雷電山古窯跡群に至近の外掘山遺跡7号炭窯は、発見された炭窯の中でも開窯段階の窯で、奥壁中に連孔式の煙道を伴う構造で、地域の中でも最も古色の様相を呈し、開窯段階には須恵器工人の介入が推定されている^{註12}。同様に、ハッ峰窯跡は、製炭主体の製陶客体で、炭窯の間隙に須恵器窯を構築する状況で、炭窯開窯には須恵器工人が大きく関わったことが容易に知れるものの、逆に須恵器工人に課せられていた職能に、製炭技術が含まれていたのかもしれない。則ち、被熱処理加工職能としての位置付けがあったのかもしれない。この場合は製鉄生産にも関わって可能性も含まれよう。古窯跡群と製炭遺跡・製鉄遺跡は三位一体での立地が確認されている。

雷電山古窯跡群の製品は、吉井・秋間・栗附古窯跡群で生産された製品が広域に達する流通範囲とは異なり、勢多郡及び勢多郡域隣接地域程度が供給範囲である。また、上野国分僧寺創建瓦窯の笠懸古窯跡群では、創建瓦窯開窯を契機に成立した古窯跡群である。この古窯跡群では山田・佐位・勢多郡の複数郡の郡名瓦を焼造している。この中で佐位・勢多郡は窯業生産が劣勢の郡である。

この様に、雷電山古窯跡群は勢多郡全域に供給成し遂げられるだけの生産量がなかったのが実態であろう。そして、大町町ハッ峰窯跡・上西原遺跡窯と短時期製産での窯業活動が知られているが、勢多郡内小規模窯跡群を開窯させる背景になったと推定される。

須恵器窯としての形態上の系譜は現段階では明らかに出来る手掛かりは県内には求められない。県外での類例は多少知られるものの、地域毎での系譜が明らかになっていない以上比較をすることは困難である。

現段階では、「焼成土坑」としては東長岡戸井口遺跡で出土した土師器の焼成窯と考えられる9世紀前半の第1号窯がある。この窯は遺構の重複により全容は明らかに成っていないが、不正円形で土坑状の掘り込みの中央に、焼成空間を設け、裏込めには粗粒の焼土を埋設している。この土師器窯と考えられる窯は、燃焼効率を上げる上部構造が分からないが、何らか形で熱を電る状態にされていたと考えられる。密構造も想定範囲であろう。当遺跡の4号窯は密構造の土師器の焼成も推定している。更に、時期が異なるが、安中市原町町清水II遺跡の15世紀後半～16世紀初頭の窯跡の構造も基本的な構造は変わりがないと考える^{註14}。

また、黒熊中西遺跡東側斜面部に於いて、当遺跡4号窯の下半部構造に類似した遺構が確認されている。主体物と周囲は酸化焰により鈍褐色に変色し、周辺には、酸化焰被熱の須恵器種類が多く散布していた。しかし、この遺構は発見されたが、報文中には図化・記述が無い。この遺構も密構造の遺構であったと記憶する。

上記のほか、時期が遡るものの、大量の土器を出土した下芝天神遺跡^{註15}では、平底の土師器碗の底部から底部底面にかけて、極度の高温が長時間に亘り被熱を受け、器面が被熱物した個体が7個体認められる。恐らく、逆位にして土器焼成台に用いたと思われる土器が出土している。山土（焼き上がり色調は赤褐色）を生地土（粘土化したローム土で榛山中

では暗色帯が粘土化している)にした土器が、近賢に焼き上がっている状態を観察すれば、やはり、何らかの焼成構造を有する遺構が推定される。次項で記す169・170号土坑の焼成遺構の可能性もある。

小結

上述してきたこれらの遺構の如くから、実態不明ながらも、少なくとも小規模な土器生産に伴う土器の焼成遺構が出現していた事は確実視出来る。そして、これらの土器の焼成には、燃料材の炭・熱を直接的に伝え焼成する方法と、燃料材が発する熱を間接的に伝えて焼成する方法に二者に分けられ、前者が「野焼き」・「伏せ焼き」に代表され、後者が竈・登り窯・平窯等に代表される。この双方の被熱方法での焼成物の特徴として、前者には吸炭による「黒斑」等の「焼成ムラ」が随所に残る。後者は、均質な色調を以て焼き上がり、焼成時間・酸素の供給方法により「焼締」を与えることが出来る。漆田窯の場合は、遺構・遺物は確実に前者に含まれる。

今後の報告中の掲載した遺物実測図で、当該窯跡群以外の須恵器環・埴類の器面に認められる、焼成に伴う焼りと判断した遺物の状態の平面図を合わせて図化掲載した。実態不明な当該期を中心とする土器の焼成方法を遺物から知らんがための拠所の方法とした。器面の状態も重要な観察視点の一つとして、焼成方法を知るための一つの方法と考える。

当該富田漆田遺跡では、住居跡出土で当遺跡での生産が推定される羽釜は、土師器の技法を色濃く残している。この羽釜の特徴は、鈿部より上位の口縁部長が短い事から、初現期の特徴を備えている。そして、胴部の成整形技法が土師器製の技法の篋削りを多用し、土師器製の寛使いを踏襲している。このことから、羽釜は土師器工人乃至土師器を作る技術を有していた技能者が製作したことが推定され、土師器工人乃至土師器を作る技術を有していた技能者が、須恵器生産地で技術を伝習し当遺跡で開窯したことが推測させる。

また、埴・埴類の特徴には、轆轤成形の3段目前後の位置に強い轆轤挽きが認められることも特徴で

あるが、これは、工人固有の「癖」として考えられ、特徴的な技法では有るが、系譜上で捉えられない技法の一つなのか、可塑性の少ない生地土による必然的な技法なのかかもしれない。

孰れにしても、漆田窯を開窯した工人が伝統的な須恵器の専業工人の場合なら、斜面に窯を構築した筈であったろうが、台地上での「伏せ焼き」に類する焼成方法を用いていることは、伝統的な須恵器工人とは異なる工人により開窯されたことが重要であろう。

ここ富田漆田遺跡での開窯は、時期的にも上野国内での窯業生産形態が新たな改変を迎える頃にも当たっている。

界内の古窯跡群での「山作り」から「里作り」変遷も明確な概念が出されていないが、1次堆積粘土と1次堆積粘土の二次的・三次的等の再堆積粘土への生地土採取の変化に伴い、焼成場所の必然的な変化の結果をもって、「山作り」から「里作り」変遷を概念の一つにするなら、所謂構造窯とは異なる焼成方法が多用されるに至り、窯業生産体系の変化がもたらせた結果の反映の一端が当該富田漆田遺跡での須恵器生産にあったと考えられる。

今後は、遺物を偏重する流れの中にありながら、技法を詳細に把握でき出来ない図が世に流布されている。ここ群馬県では、窯跡の発掘調査が僅少なため良好な資料には恵まれていない。まずは土師器・須恵器の一つ一つの遺物を、事実に基づく図にして公にし、実態を明らかにすることが肝要で、その後に傾向を把握することにより、古代社会での土器文化解明の第一歩になることを祈りたい。

第4項 土坑

土坑は173基が発見されているが、性格が確定出来る土坑は皆無であった。土坑の計測値は別表に一覧化させた。

第169号土坑

169号坑は、低地部で発見された土坑で、円形に掘り込んだ底面に、軽い被熱によりやや酸化した淡黄

橙色の均質な色調の粘質土を薄く貼っている。調査着手当初、全体が直接被熱により酸化したものと思っていたが、調査の進行過程に於いてそれとは異なる状況であることが判断できた。それは、この土坑の底面からは炭化物・灰等が認められなかった事から、火を燃した痕跡が確認できなかった。それと、この被熱土は掘り込まれた地山黒色土（IX層土）とは異なる土質であったためである。粘質土は、恐らく粘土化の進んだ地山ローム土と考えられる。何らかの理由により一度酸化させたか、酸化により淡黄橙色に色調変化した粘質土を底面に貼ることにより、何らかの機能を果たそうとしたことだけが窺いし得るのみである。

第170号土坑

また170号坑は、低地部で発見されている。隅丸長方形に掘り込んだ土坑で、焼土・灰を多量に混入する覆土により埋没していたが、底面には被熱面等が認められず、覆土の状況と底面（遺構内の状況）には一致を見ることが出来なかった。覆土の状況は、別図にも示したが、東側部側からの堆積が主体的であり人為堆積と思われる、機能停止後埋設されたものと思われる。出土遺物には少量の土師器破片が認められた程度であるが、それら破片にも特別な要素は見出せなかった。何らかの被熱処理を行ったものと推定される。

土坑は一覧表に計測値等を載せてある。

註

- 1 拙著「C・D区検出の住居跡とその出土遺物」第5章 まとめ「上野国分僧寺・尼寺中間地城3」1988（昭和63年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
拙著「B・C区検出の住居跡とその出土遺物」第4章 まとめ「上野国分僧寺・尼寺中間地城4」1990（平成2年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
拙著「B・A区検出の住居跡とその出土遺物」第6章 まとめ「上野国分僧寺・尼寺中間地城5」1991（平成3年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
拙著「第3節 住居跡」第4章「東長岡戸井口遺跡」1999（平成11年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
拙著「第2節 発見された遺跡・遺物」第6章 中里見原遺跡「中里見遺跡群」2000（平成12年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 2 註1前掲書
- 3 傍塚坑（ほうそうこう）遺跡は「甕の傍らの穴」。
拙著「C・D区検出の住居跡とその出土遺物」第5章 まとめ「上野国分僧寺・尼寺中間地城3」1988（昭和63年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 傍塚坑の消滅に合い呼応して、住居跡の対称軸に平行な位置に新たに出現する施設。拙著「C・D区検出の住居跡とその出土遺物」第5章 まとめ「上野国分僧寺・尼寺中間地城3」1988（昭和63年）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で述べた。
- 5 註1前掲書
- 6 羽釜の分類と固有名詞の設定は中沢 悟氏により「月夜野型羽釜」が提唱されていたが、1形式だけの形式名が存在しても比較対象とするのが出来ないため、拙者が時期形式として「吉井形羽釜」「栗附型羽釜（手取）」を設定したが、その中で「東上野で焼成されたと考えられ（後略）今後、検討を必要とする」注書に記した。現段階では東毛地区での固有名は未だ設定出来るだけの実態が知られていない。厳しんば「鎌田型羽釜」を設定しても煩雑さと誤混を招く恐れもある。今暫く周辺遺跡での実態を踏まえ再考の余地を残しておくたい。
- 7 中沢 悟「月夜野型羽釜について」『埋文月報』No.40 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
中沢 悟「月夜野型羽釜の標本と月夜野古窯跡群」『大原II遺跡・村主遺跡』一般国道17号線（月夜野バイパス）改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1986（昭和61年）
- 8 久保田正寿「土師の焼成I」1989（平成元年）
- 9 相原雄史「群馬県古窯跡群の概観—群馬県における天台瓦窯の特質—」『天台瓦窯遺跡中之条古窯跡群における天台C地区瓦窯の調査』1982（昭和57年）群馬県古窯跡中之条町教育委員会
大江正行「群馬県における古代窯跡の青景」『群馬文化』第199号 1984（昭和59年）群馬県地域文化研究協議会
- 10 従前、雷電山の北側を通る上毛電気鉄道軌道敷設工事に伴って多くの瓦が出土し、上榎木庵寺の供給瓦窯の認定がされていた。また、雷電山の縁辺には瓦の散布が認められた。この雷電山の谷地を隔て東側80m位に南北に伸びる台地上に新宮原寺遺跡（旧称—新宮古瓦敷布地）が存在する。この新宮原寺遺跡で採集される瓦には、山際窯跡群の瓦類も含まれている。採集される瓦を見る限りでは、単純な窯跡周辺の散布地とは異なる様相である。このことから、当該遺跡の性格を庵寺とした。上榎木庵寺に次ぐ初期寺院の位置付けである。拙著「上野国初期寺院」シンポジウム 関東の初期寺院資料編（1997（平成9年） 関東古瓦研究会）
- 11 「ハッ峰生産地遺跡」『大原・桐城地区遺跡群 主要地方道、前橋・大岡々・桐生線（大原バイパス）建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書』1986（昭和61年）群馬県勢多郡大町町教育委員会
- 12 「上野原遺跡」1999（平成11年）群馬県教育委員会
- 13 「外瀬山遺跡」『群馬県史』資料編
- 14 拙著「第1号窯跡に於いて」『東長岡戸井口遺跡東長岡住宅団地建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』1999（平成11年）群馬県住宅供給公社・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 15 千田茂雄「安中市雷水II遺跡」『群馬文化』244 1955（平成6年）群馬県地域文化連絡協議会
千田茂雄「群馬県安中市における瓦質陶器の調査」『中世土器研究』79 1995（平成6年）中世土器研究会
- 16 器物集積構2群出土遺物の中に底部を高台状に残す（1569—1565）部分で、復次焼成を受けた土器がある。高台状の部分は、製作段階で意図して作られていると考えられる。それは、管え乾燥してしまったとしても、同部分を水に浸せば再び傾り成整形が出来るのに放えて行っていない事である。作爲の元に残された高台状の部分に何らかの機能を具備せしめた事の現れと判断している。『下天神遺跡・下芝上田屋遺跡 北勢新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』1998（平成19年）群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団

第5章 富田下大日遺跡の発掘調査



第5章 富田下大日遺跡の 発掘調査

第1節 発掘調査の概要

第1項 発掘調査概要

経過概略

当遺跡の発掘調査は2年次に亘り実施した（経過については第1章を参照していただきたい）。この2年次に亘る調査は漆田遺跡と平行しての調査であったため、調査の経過は複雑である。

調査区対象部分は、発掘調査以前での表面採集等により、縄文時代前期・中期、古墳時代・平安時代の集落が発見されることが予見されていた。

そして調査は、着手以前の予見どおりに上記の遺構・遺物が確認・発見された。これらの遺構・遺物の発掘調査は、大きく3段階に分かれる。この3段階が、古代遺構の調査・縄文時代の調査・旧石器時代の調査である。しかし、3段階の調査とは順次この段階を実施しての調査ではなかった。実態は、地点毎と時期により効率を求めた調査を実施したことにより、調査区内を東奔西走するのが実態であった。

遺構の発掘調査

遺構が発見されている部分は、台地の斜面部分での平面精査・遺構確認には困難な場面もあった。この状況を予め察知していたので、表土層掘削は梅雨の降雨時期を狙い実施した。これは、遺構確認には最良な探光状態であるからである。

平成12年度の発掘調査では古墳時代の住居跡基・平安時代の住居跡基を調査した。厳冬期での発掘調査であったため、日々の調査開始段階では火を起こし、この熱で凍った土を溶かし遺構の掘り下げを行った。

平成13年度は縄文時代の遺構を性格に確認するために、各グリッドに「L」字形にトレンチを設定して確認を行ったがこの作業の過程で8基の平安時代の住居跡を確認し調査を行った。

縄文時代の遺構の発掘調査

縄文時代の調査は、59区のNo48三角形調査区では、切土により表土層直下でハードルームに達していたため縄文時代の遺構確認が容易に行えたが、No47では、暗褐色土層（IX層土）～ソフトローム（X層土）が確認面であったため縄文時代の遺構の確認は容易ではなかった。このため、No47全域に縄文遺構確認のトレンチを設定して調査を実施した。

縄文時代の遺構確認トレンチは、斜面部では各グリッドに対して幅1mで「L」字形に設定した（各グリッドに対しては36%）。この斜面部では、多くのトレンチで遺構が確認されたため、必要範囲の拡張を実施して遺構の調査に当たった。

また台地鞍部ではグリッドの南北配列に対して2m幅設定した。また、この2mトレンチは旧石器時代のトレンチと重複させ、旧石器調査の省力化を進めた。またこのトレンチ内で遺構が発見された場合は、トレンチ間に1mのトレンチを更に設定して追証を行い、周辺遺構の確認を行った。更に、この追加トレンチで更に遺構が確認された場合には周辺部を必要範囲を拡張して遺構の発見に当たった。（図-9参照）

各トレンチで確認されて住居跡等は、遺構により覆土の状況が異なり、住居跡の多くが褐色土の色調で、遺構確認面の色調と変わりがなく、到底、平面での確認は不可能な状態であった。

このトレンチによる遺構確認により、住居跡13基、土坑485基を確認調査している。

旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は、平成12・13年の2ヵ年次に亘り断続的に行った。この試掘調査方法は富田漆田遺跡と同一の方法（岩崎方式）で行った。試掘調査の到達面としてHr-HP（八崎軽石層）を掘り抜くまでとした。

試掘調査では、平成12年度末に59区のNo48一部で遺物が確認され、平成13年度当初から調査を行った。また、平成13年度はNo46・47の広範囲部分に亘り試掘調査を実施したが未発見であった。

第2節 発見された遺構の概要

第1項 旧石器時代の遺構・遺物

試掘調査と本調査

旧石器時代の遺構・遺物は59区No48で2層の文化層が発見されただけであった。

試掘調査では、59-P-13グリッドの遺構確認面直下の始良丹沢火山灰(AT)を含む暗色帯中で最初に出土した。このNo48の部分には、調査着手以前から1m程削平されていた部分と、辛うじて住宅地であった部分が削平を免れていた部分の二者が在った。このため、前者の部分は、縄文時代の遺構も既に多くの遺構が失われたと考えられたが、痕跡が残る部分も後に確認された。この59-P-13で確認されてより周辺部の範囲確認を行った。確認は当初設定していた試掘調査トレンチの間に、更にトレンチを設定して間隙を潰す方法を採用範囲を確定させた。

また更に、この確認調査中に59-M-11グリッドで襟裾の一部と思われる箇所と、隣に当たる50-N-11グリッドでは、遺構確認面下0.2~0.3m程から黒曜石のポイントが出土した。これらは暗色帯中からの出土ではなく、上位層に当たるHr-BP(浅間-板鼻層褐色軽石層)上面からの出土であった。この新たな発見により更に上位層中での範囲確定が性急な要件に惹起してしまった。だが、この文化層が残存する範囲は、元住宅地の一部分で、周囲より高い範囲に限定されることから、Hr-P上面の文化層の範囲確定は直接調査を併行する方法を探った。そして、周辺部をHr-BP上面まで均一に掘り下げた。この過程で炭化物粒子が集中する部分が認められ、詳細に観察し調査を行った。また、ポイント出土した周辺からは、微細な黒曜石の薄片が多量に出土している。そして、遺物除去後遺物の出土した面を精査した結果、遺物の分布範囲は浅く皿状に窪む状態であった。

Hr-BP(浅間-板鼻層褐色軽石層)上面で843点、始良丹沢火山灰(AT)を含む暗色帯中からは177点の石器類等が出土した。

当該の旧石器時代の報告は後年刊行される。

第2項 縄文時代の遺構・遺物

北側・南側

縄文時代の遺構・遺物は調査区内を南北に二分する状況がある。

調査区の北側では、前期黒浜式期の遺構・遺物が主体になり発見されているが、南側では中期加曾利E3式期の遺構・遺物が主体的に発見されている。

調査区の北側No48部分では、表土層掘削・遺構確認を平成12年8月に実施した。この段階では比較的多くの土坑・ピット類と共に住居跡の壁溝と考えられる落ち込み等を確認できた。しかし、この部分の遺構調査が平成13年3月になってしまったため、越冬期間中に遺構確認面が霜・凍結・強風による侵食の繰り返しにより10cm近く失われてしまい、これによりハードロー面で確認されていた多くの遺構が、遺構調査実施までに失われてしまっていた。第287・288図に掲載した第1~4号住居跡は、表土層掘削直後に確認されていた形状を掲載した。また、土坑・ピットに就いては、同様に表土層掘削直後の確認段階での分布状態を全体図に載せた。全てが失われた訳ではなかったが、調査実施になった遺構は、「土坑一覧表」中に計測値を掲載してある。逆に計測値が未掲載の土坑は失われた遺構である。

この北側で確認された住居跡は、1・2号住が失われた。3号住は炉跡が残り、屋内のピット配列の半分が失われている。4号住は硬化した床面が残存していた。孰れも、前期に属する住居跡と考えられる。

土坑の出土遺物を見る限りは、多くは前期に属し、中期の土坑は少ないと考えられる。遺物が出土を見なかった場合に於いては覆土の状態ではしか推定する方法が無かったが、前期が主体と考えている。

台地中央部では、遺構確認面での遺物散布状況から遺構の散布量がそれ程多くないと判断されたため、トレンチ調査として実施した(トレンチの設定に就いては既述)発見された遺構は住居跡1基・土坑基であった。

遺構の散布状態はトレンチを細かく設定した割に

非常に散漫だった。遺構自体も小規模なピットが多く、明瞭な土坑は少なかった。また、特筆し得る状況は土坑には無かった。

南側ではトレンチで確認された周辺を拡張したが、結果的には広範囲に拡張をせざるを得なく、斜面部分は大半を拡張して調査を行った。

南側で発見された遺構は、住居跡9基・土坑基であった。遺物包含層は確認面下のV～Ⅷ層土で認められた。V層土はAs-Cを混入することから、構成の攪乱により混入しているが、VI層土より下位層は主たる包含層に当たる。包含層中の遺物は大半が中期加曾利E3式で、少量の前期黒浜式・諸磯式が出土している。この中で、遺構外出土遺物で掲載した10-00933諸磯C式小形深鉢はトレンチ内で正位の状態で単独出土(38-S-19グリッド)している。周囲のトレンチからは同時期の遺物は破片すら出土していない。調査段階では、土坑状の掘り込み等を確認する以前に土器を露呈させてしまっている。そのため、遺構に伴うかは不明である。

発見された9基の住居跡は、35～39・41・47・51・52号住が該当する。これらの中で、38・51号住は敷石を伴っていたと思われる。平面形状では隅丸同張り正方形(丸味を強く帯びた正方形)乃至四角味を帯びた円形状を呈する36～38(51)号住と、楕円形基調の39・41・47・52号住の二者と、35号住の隅丸長方形形状を呈する三者が認められる。

この三者の中で敷石住居と思われる38・51号住加曾利E4式の土器も若干出土していることから、他の7基とは時期が異なると考えたい。他の7基はやはり加曾利E3式期の住居跡であるが、住居跡の平面形状から推定すれば、隅丸同張り正方形の時期と楕円形の時期に分別されるとも思われる。

この住居跡の在り方からは2乃至3基の住居が3時期に亘り存続していた可能性も推測させる。

特筆されることとして、北側の48号住の発見が挙げられる。この住居跡は前期初頭の10-00446・00447・00449などの尖底土器を伴っている。

また、前期の遺構分布域に重複するように旧石器

時代の分布が認められることも注意される。

第3項 古墳時代の遺構・遺物

住居跡

住居跡は15・19・20・22・45・46号住の6基が発見されている。発見された住居跡は台地中央部で45・47号住が、他は暖斜面の裾部で発見されている。

これらの住居跡の中で19号住を除く他の5基では、模倣環と長胴甕が共存する。恐らく、19号住も同様な時期と思われる。また、47号住は、炉跡と竈を併用する住居跡である。しかし、住居跡形態が他の住居跡と異なり、縦長方形を呈し小形の住居である。構造上特殊な条件が備えられていた可能性も考慮しなければならない住居跡である。炉も元来の炉跡とは異なる性格が備えられていた事も想定範囲だが、通常の炉跡と異なる状況は発見されなかった。

だが、竈が馬蹄形状を呈する形状であることが他の住居跡とは異なる点である。当該期の当遺跡での何らかの状況を示唆してはいると思われるが、具体的な検証は発見出来なかった。

これらの住居跡は、住居跡覆土・被覆土からはテフラは発見されていないことから、Fr-FA以降Fr-FP以前の時期での廃棄されたものと思われる。

古墳

古墳は1基が発見されている。発見された位置は、暖斜面が立ち上がった部分で、上記住居跡の間に当たる場所に相当している。

また、発見された地番から、「総覧」に記載されている古墳の地番と対比させただけ結果、「荒砥村第251・252号」が該当している。同一地番内には2基の古墳の搭載が認められるが周囲には古墳の痕跡も認められない。このことから、本墳は「総覧」に記載されている孰れかの古墳と判断されるが、双方のどちらに当たるかは判断が出来かねる。

発見された古墳は、石室と周溝だけで、封土は既に失われていた。石室は後世の攪乱を酷く受けていたため、石室は横穴式石室と判断される程度まで破壊が進んでいた。また、石室内部からの出土遺物は皆無であったが、周溝・南側暖斜面のV層土中からは少

数ながらも須恵器片が出土している(第405・406図)。

第3項 平安時代の以降・遺物

住居跡と住居跡出土遺物

当該期の住居跡は南側暖斜面部で29基が集中して発見されている。この部分は富田漆田遺跡の背面側に当たる。

住居跡は9世紀前半～10世紀後半頃に比定され、富田漆田遺跡と同時期の住居跡である。しかし、同時期の住居跡でありながら、富田漆田遺跡では東北東～東南東の方向に竈を向けるが、当遺跡では、東南東～南東方向に竈を向ける住居跡が殆どであり、この要因として、地形との関わりが推定される。

発見された住居跡は暖斜面部に集中し、この暖斜面部が南東に面することから、住居跡もこの暖斜面に沿って占地・構築している。これに起因して自ずと東南方向指向に構築が向いている。また、住居跡は暖斜面部の南側に集中しているが、東側には5号住居を界に発見されていない。この暖斜面部は、南側に凹地状になった状態で、谷地に向かい平坦面が形成されている。住居跡はこの部分に集中している。

この凹地状の地形が自然なのか人為なのかは明確にし得ないが、調査区内の土層を観察する限りにおいては、客土は認められず、層序にも矛盾が無いことから、自然形成された地形と思われる。

また、当該地域は北東方からの季節風が強烈な地域であることから、住居跡の占地がこの凹地状の段差や面部にあったことは、季節風から逃れる目的があったものと推定される。

出土遺物では、土器類より寧ろ鉄器で目立つ遺物が多い。13号住では鉄槌頭、17号住では有袋鉄斧、鎖付き分銅、21号住では鋤先と鋤先専用の砥石、32号住では刀子6・塊・鉄・刀状製品、34号住では紡錘車出土し、31号住で希少な置砥2丁が出土している。このほか、破損した鋤先の耳部分2点が出土している。特に分銅付き鎖は特筆される遺物である。恐らく、水深か流速を測るための鎖尺と思われる。

また12号住では鍛冶炉と台石が発見されている。鉄鎧は同時期の隣接13住居跡からの出土である。

低地の遺構

低地部は富田漆田遺跡の台地と当遺跡が立地する台地部に挟まれた谷部で形成されている。

他に地形は幅30m程で、緩やかに蛇行しながら台地部分を侵食している。勾配率は約1.2%程である(図-3参照)。

低地部での調査は、調査工程を立案するため、先ず、遺構面までの深度を確認した。確認はトレンチにより重機で遺構面まで掘削した。設定したトレンチは9本(図-18)を設定・調査実施した。

工程立案後、調査着手したが、掘削土の置き場を確保するためと、季節的に湧水対策もあり、夏季に南半分を行い、冬季に北半分を実施した。

発見された遺構はAs-B被覆水田跡と旧河道跡・溝状遺構が発見されている。旧河道は、土地改良前の状態で、かなり蛇行した状態であったことが判明した。また、3号溝は古代の流路と考えられ、調査区北側では大きく蛇行している状態が認められた。この部分で谷幅も狭まっていたと考えられる。当溝は、As-B降下後As-Bが水流により二次堆積した状態で厚く被覆していた。底面では、硬化した砂礫層が5cm程堆積していた。

As-B被覆水田跡は16面が発見されている。しかし、水田面として1面を全面露呈出来たのは、皆無であった。また北側では未発見であった。構造的には、3号溝側が高くっており、恐らく、3号溝を水路として掛け流していたと考えられる。

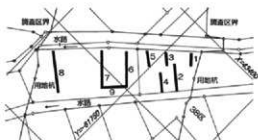


図-18 富田下大日遺跡低地部トレンチ設定図
(1 : 4,000)

第3節 発見された遺構・遺物に就いて

第1項 道跡

第1号道跡

1号道跡は台地上を南北に縦走する形で発見されている。東西幅0.8m程の溝状遺構に挟まれた形である。この道跡は、土地改良前までは使用されていた道で、土地改良により消滅していた。この道跡の調査区外部での痕跡は、北側に並ぶ住宅の筆界として残っている。調査段階では、上限時期の判断可能な状況等は未発見であった。

第2号道跡

2号道跡はやはり北側調査区で発見されている。調査段階では第2号溝状遺構として呼称した。

確認面ではAs-Bが舌状に認められた。この舌状の範囲が遺構の遺存する範囲であった。走行方向は台地に直行する方向で、江木下大日道跡側の谷に下りる道と考えられる。

なお、この道跡は富田漆田遺跡で発見されている12号溝と同様な構造である。

第2項 溝状遺構

中世以降の溝状遺構

中世以降の溝状遺構は南側暖斜面部沿いで発見されている1号溝である。II層土が主体の覆土であることから、時期は中世としか判断できない。時期は漠然としているが、南側暖斜面部の表土層からは、細片の青磁片が出土しているが、決定的な証左にはなりきれない。

古代の溝状遺構

古代の溝状遺構は低地部で発見されている3号溝のみである。蛇行する自然の沢程度の流路であるが、低地の水田の用水路として利用が図られていると考えられる。

低地部北側部分では、大きく蛇行する部分があり、この部分で谷幅は狭くなっていったことが推定され、この部分に富田漆田遺跡との往来部分があったこと

が推測させる。

第3項 住居跡

縄文時代前期

当該期の住居跡は1～4・48号住が該当する。1・2号住は確認段階での所見である。時期等の詳細は不明であるが、形状・周辺状況から当該期に属すると考えられる。4号住も同様である。

3号住は炉・柱穴の痕跡が発見されているが詳細はやはり不明である。

48号住は唯一形状が捉えられた住居跡である。構造は、炉・柱穴が未発見であったので詳細はやはり不明である。出土遺物では土器類は僅かであったが、石器類の組成はやや充実している。時期は、出土している土器類が含識維尖底土器群（裏面条痕は認められない）で、前期前葉花積下層式に伴う土器群である。

縄文時代中期

縄文時代の住居跡は前述した35～39・41・47・51・52号住である。そして、これらの住居跡は形態により三者に分類され、以下のとおりである。

胴張り隅丸正方形（類円形）：36・37・38・（51）住
楕円形基調：39・41・47・52住

隅丸長方形：35住

この中で38・51号住は敷石住居と考えられる。

また、炉跡が石囲みを伴う住居跡は全てである。

柱穴では、37・39・51号住で浅いながらも平面は位置が整っているが、他の住居跡では支柱構造の痕跡が認められなかった。

各住居跡時期は、38・51号住が加曾利E3～4式期、他の35・36・37・39・41・47・52号住の7基は加曾利E3式期と考えられる。

石器類では、通有加曾利E式期を代表する石器の一つに打製石斧がある。出土量の多さでも知られている遺物であるが、当道跡では、量的に少なく図化掲載した打製石斧が出土量の約90%以上である。

古墳時代

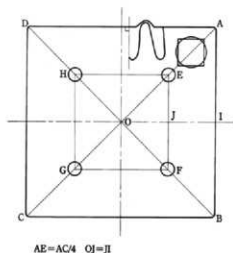
当該期の住居跡は前述した15・19・20・22・45・

46号住の6基である。これらの住居跡の内46号住以外は、貯蔵穴・支柱穴・竈を備える正方形を呈する住居跡である。更に、支柱穴は対角線上で、屋内で正方形配置する特徴が認められ、通有例に同じである。

これらの住居構造の特徴は、住居跡の規模に応じた柱穴の配置方式が推測される。この配置方式を1として比例させて重ねてみた。この結果、上記5基の住居跡は、概ね相似形であることが読み取れた。そしてこのことから、支柱穴は対角線長の概ね1/4の位置に配置している。図-19は対角線の1/4配置の状態を模式図にしたものである。また、表-5は各住居跡の規模の公約数=尺÷36cmで除した値を載せた。

表-5 古墳時代住居跡尺規模換算表

	15住	19住	20住	22住	45住
軸長	7.23	2.62+ α	4.6	5.7	5.65
軸長直行長	7.21	4.3	4.7	5.9	5.84
尺換算	20	12	13	16	16



■ 留意

屋内空間の利用方法に規制があるのか。
A隅部からある程度の距離が保たれている。
左右どちらかの軸を壁から直角に延ばし構築基準とし、必要幅を基準線の袖から採り規模を決定している。

図-19 古墳時代後期住居跡規格図

嘗てこの事に係わる報告を行ったが、少数例での結果であることから、各時期を通して、系統的に再考の余地がある。しかし、傾向としては、時期が下がるに支柱穴の位置が隅部側に寄り、柱の内側の占有面積広くなる。6世紀後半～末頃には、壁から公約数4単位内側に支柱穴4本を据えている(中規模住居跡)。8世紀前後の頃には、同様に公約数3単位で壁から内側に4本支柱を据えている。だが、この段階では、公約数にも変化が生じている。則、公約数約36cmから約30cmへの変化である。この公約数の変化が捉えられる8世紀前後には、公約数としての背景に当たる、尺度(度量衡)に変革があったことが窺知される。また、時代的背景に寺院建立という白鳳寺院の成立期頃から、国衙・官衙の成立の時期にも当たり、新技術の導入、普及という側面も内在している。

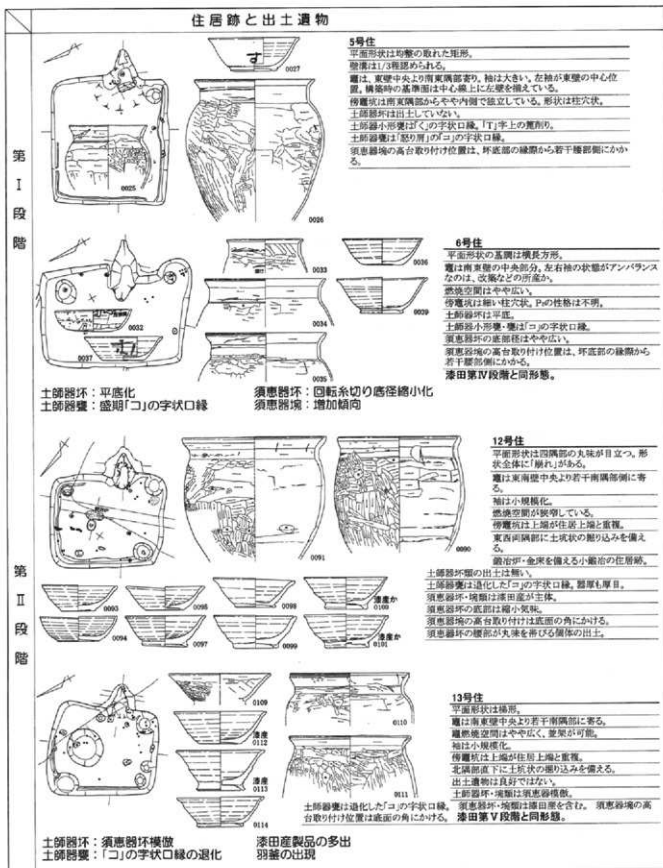
一方、律令制の根幹の一つである税制は、この度量衡の整備により税制体系の確立があったことから、通有集落等に於ける「ものさし」も逸早く導入された可能性も示唆的であろう。しかし、尺度の在り方の検証作業は、一部の遺構に止まり発見遺構全体には至っていない。一つ一つの検証から成否を結論付ける作業が取り残されている。

■ 平安時代

平安時代の住居跡は29基が発見されている。これらの住居跡は、表-4に富田漆田遺跡で検証した方法と同様に纏めてある。また、図18・19は、住居跡形態を段階区分したもので、段階区分設定の基準・要件は富田漆田遺跡に準じてある。

この第I～V段階区分の結果、富田下大日遺跡での第I段階は、富田漆田遺跡の第IV段階に対比され、以下順次第Ⅷ段階まで対比される。

富田下大日遺跡は、発見された住居跡数が少ない結果に起因する可能性があるが、時期別に住居跡の分布域が限られた範囲に集中する如くの傾向が看取される。富田漆田遺跡では、全体的には散在する様な傾向であることから、対照的な状況が窺える。この状況は遺跡の性格の違いに因ることは明らかであ



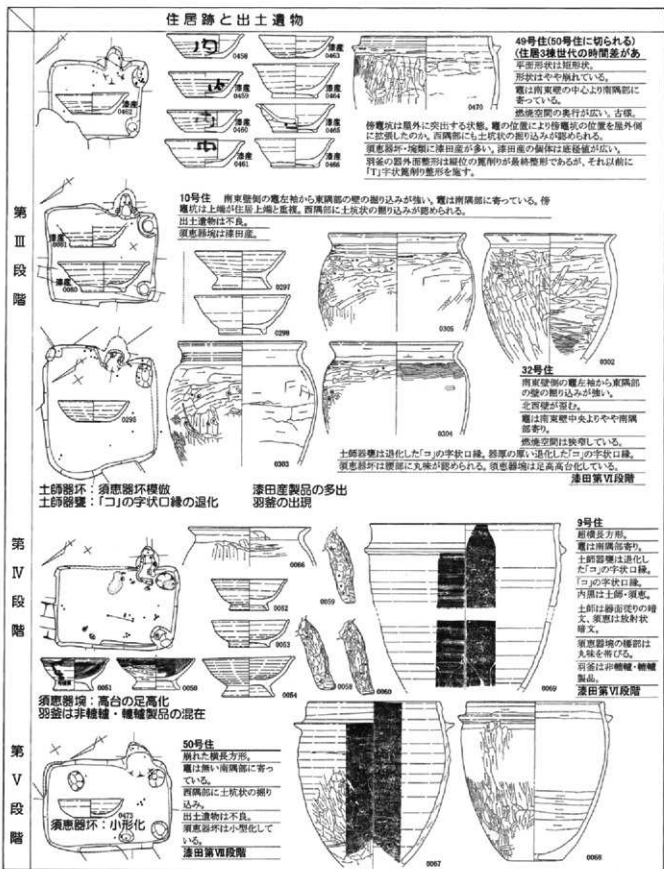


図-21 富田下大日遺跡住居跡段階別分類図(住居跡1/120・遺物1/6)(2)

表-6 漆田・下大日出土鉄器種一覧表

	鎌	刀子	大刀	筋鎌	?	斧	鏃	鏃	釘等	鎖尺	不明	計	鉄棒	合計
漆田	2	8	銅1	1	1(?)	0	3	0	5	0	1	21	8	30
下大日	2	7	1(?)	3	1	1	1	3	7	1	2	29	15	44
計	4	15	2	4	1	1	4	3	12	1	3	50	23	73
漆田	3.0%	12.1%	1.5%	1.5%	1.5%	0.0%	4.5%	0.0%	7.5%	0.0%	1.5%	31.8%	12.1%	45.4%
下大日	6.0%	24.1%	3.0%	10.3%	3.0%	3.0%	3.0%	10.3%	24.1%	3.0%	6.0%	100.0%	51.7%	151.7%

る。その要因の一つとして、大泉坊川の低地帯と無名小河川の低地部分の違い、則、耕地面積の相違に顕現されていると考えられる。大泉坊川低地帯と無名小河川低地部(図-3に示した地形図を参照)では数倍の以上の開きの加耕地が窺える。

また、出土遺物では、富田漆田・富田下大日遺跡の土器器種の序列観から、第1段階が第3・4段階、以下第V段階が第8段階に至るまで富田漆田遺跡と同様である。

出土遺物中でも、鉄器の様相が富田漆田遺跡と比較すると異なっている。

表-5には双方の出土鉄器種を一覧表にした。双方の平安時代の住居跡は、富田漆田遺跡は66基、富田下大日遺跡は29基である。この66:29の比率でそれぞれの所有率を比較したのが表-5の下段である。

この所有率の数値だけでは、鎌以外の何れも倍から10倍の開きを持って富田下大日遺跡の優勢が判読される。また、種別で見ても斧・鏃・鎖尺は富田下大日遺跡だけで出土しており、特に特殊な鎖尺が目される。

鉄棒では、両遺跡で小鍛冶が1基ずつ発見されているが、富田下大日遺跡が富田漆田遺跡の4倍以上の比率になっている。

このことは、富田下大日遺跡側には何らかの分担(課役・職能等)が担われていた可能性が示唆される。

一方、富田漆田遺跡15号住出土の40-00075変形鐔は、茎孔の部分が切り刃造りに備える様に、被鋸造りの構造になっている。この変形鐔は、元来黒造太刀級の鐔であったと考えられ、どの様な経由を経て当遺跡に賣せられたのか、若しくは、黒造太刀を佩く身分の人物が存在していたのか、解釈は富田漆田遺跡の性格付けに大きく寄与すると考えられる。

鉄器類に就いては主要鉄器・鉄棒を理科学分析を

実施した。第6章で詳細な分析結果を掲載してある。

小結

当遺跡は、発見遺構・遺物の様相は、隣接富田漆田遺跡と比較すると、小規模ながら、時期ごとに集約傾向で住居を構築している。また、遺物の中でも鉄器の様相に利器が多いことが特徴である。

集約規模の大小は上述した様に、控える加耕地の違いを要因の一つと考えたが、こと、鉄器の様相も集約内に内在していた性格の相違により顕現された可能性も含まれよう。

今後は、より多くの隣接遺跡での様相を比較検討することに、当該の富田下大日遺跡と富田漆田遺跡の相違点の要因が明らかになると考えられる。

第4項 古墳

発見された古墳は「上毛古墳総覧」記載の251号墳乃至252号墳とは判断されるが、双方の判断は尽きかねる。

外部構造

古墳は台地の肩に当たる部分に占地している。効果的には山寄式古墳の効果は得られている。墳丘は削平され消滅していたが、周溝の遺存により円墳と判断される。

周溝は南西に開く馬蹄形状を呈する。幅は3~4mで一様ではない。深さは最深度で0.8m程であるが、幅と同様深度も一様ではない。周溝内堆積土には、火山噴出物の堆積層は認められなかった。

この周溝の確認段階での平面精査作業時、49-D-3グリッド部分でAs-Bの堆積が確認されている。このことから、墳丘外域は当時の生活面に近い状態が部分的に残存していたことが判断される。

内部構造

主体部は、著しい擾乱を受けているが横穴式石室

と判断される。玄室部では敷石は概ね残存していたが、腰石は数箇所に残存する程度で、鏡石は失われていた。このため詳細は不明である。

石室の平面形状は、調査段階の残存状況による所見では、無袖・片袖・両袖形襖六式石室の三者が推定され、作図した平面図では片袖形にも見て取れる。孰れにしても単室構造程度と考えられる。

石室は地山ローム土を掘り込む掘方内に腰石辺りまでを据え、これより上段は旧地表面上に積層させたと考えられる。掘方は全長6.82m、幅2.60mの長方形形状を呈している。掘方の主軸は、東側の著しい攪乱のため不明瞭である。

石室規模は、石室石材の残存する部分で約5m、玄室部と想定される部分は、長さ1.80m、幅1.20mである。敷石は玄室相当部分のみ残存し、羨道と思われる部分は攪乱により失われていた。玄室部での敷石は2層構造で、掘方面に地山礫の割り石を敷き、上面に円礫を化粧していた。

羨道と推定される部分は1.60mが認められる。この部分では、既に腰石は無く、盲目地の礫・据方の根石が残存する程度であった。この据方から4列程度の初段腰石の設置が推定される。主軸方位は北-35度一東である。

出土遺物

出土遺物は周溝内と古墳の南側暖斜面部で出土した遺物を扱った(第405・406図)。

これらの遺物は、直接的な周溝出土の個体とグリッドの個体がある。このグリッド出土個体を扱った理由は、10-00539様に主体になる大形破片(周溝内出土)と、破片が更に細片化して、グリッド4箇所に互り接合乃至同一個体として四散している実態があることから、接合関係が明らかになった、同一グリッド乃至同一グリッドに挟まれたグリッド出土遺物も、最低限の本墳に伴う可能性の濃厚な資料として掲載した。幸い、出土位置の周辺には同時期の住居跡の発見が無かったことも掲載の拠り所になっている。

出土した遺物は土師器・須恵器であるが、土師器

は坏類が主体で7点、高坏2点がある。須恵器は高坏が多い点が注意される。内訳は坏蓋1点、高坏6点(短脚1段透10-00541・長脚1段透1000540を含む)、甕3点(大形2個体10-00547・00548~00550を含む)、短頸壺1点、甕1点、瓶1点(時期が下る可能性がある)。

やはり高坏の多さに驚嘆する。期的にも未だ高坏偏重の特徴が顕現しているとは推測される。また、短脚高坏(10-00541)・大形甕(10-00547~00550・00552)は焼締の及んでいない軟質な製品で、断面が灰色を呈しているもの、外面は暗灰~黒灰色を呈する。焼成特徴がある。この製品と同様な特徴がある器台形須恵器が後二子山古墳などで出土している。胎土の類似性が指摘出来き、赤城山南麓から伊勢崎北部を中心に分布も認められる。

時期

当該古墳の時期は、上記土師器・須恵器等の年代観から6世紀中頃~後半にかけての時期と考えられ、南側暖斜面部で発見されている古墳時代の住居跡とほぼ同時期と判断される。しかし、残存する石室の状態から7世紀とも思われ、明快な時期決定が出来かねる。消滅している1基の古墳の遺物が混在している可能性もあろう。孰れにしても6世紀後半頃にこれだけの須恵器を搬入出来得た状況があったことは看過しない。

本墳は消滅している1基以上の古墳と共に、当該集落の頂点の位置にあった首長墓である事が推定される。

第5項 土坑

土坑は縄文時代と古墳時代以降の分別を行うのは可能であるが、古墳時代以降の古代の中での分別は不可能であった。古代以降の所産は、As-Bの混入の有無で分別可能である。

当遺跡の古代土坑所産の土坑で特徴的な土坑は255号土坑が挙げられるが、出土遺物が極少量であったことから、性格等には言及出来ない。

他の土坑で特殊な状況は認められなかった。

第6章 理科学分析



第6章 理科学分析

第1節 理科学分析にあたって

第1項 理科学分析の目的

発掘調査事業

当該2遺跡の発掘調査事業から整理事業の中、埋蔵文化財調査を通じて、理科学分析を以って確認を果たさなければ成らないことは多かった。

発掘調査段階では、遺構の調査、特に水田跡の発掘調査に伴いプラント・オパール分析、テフラ分析を行った。前者は水田跡と判断した遺構が果たして稲作を行った遺構か否かを確認する目的で行った。後者は各層位中で確認されたテフラは、層位学的に矛盾が生じていないか、新発見のテフラか、この2点の確認のため分析を実施した。

整理事業

本章では、これらの出土遺構・遺物の中から、土器類と鉄器類に就いて供試料遺物を抽出して理科学分析に供じた。

土器類の胎土分析

土器類の分析は、富田漆田遺跡で発見された窯跡で生産された須恵器の科学的成分を明らかにすることで、肉眼観察所見を分析所見から確認する目的と、今後の調査により出土も見込まれる須恵器類の産地同定に資する目的で実施した。供試料に就いては試料用の遺物を本報告とは別に抽出した。この試料に就いては、本章中に実測図を載せてある。

また、土器類の胎土分析は、当団では従前において群馬県工業試験場で1,000点以上の分析実績もあり、このほかの分析機関への委託を含めて相当量が土器の成分が明らかになっている。今後これら試料の分析結果と今回の分析結果を照合確認する目的をして分析に供じた。

鉄器類の分析

鉄器類の分析は富田漆田・富田下大日遺跡で発見されている小鍛冶で生産されたであろう鉄器が、双方の遺構内から出土した鉄器であるのか否か。また、

各意向内出土鉄器は、両遺跡の小鍛冶どどの様な関係が有るのか、原料になった鉄の素性、鎖尺（下大日17号住・40-00021）の鎖の接合方法と鉏と分銅部の接合方法（銀ロウ・熱圧着）を確認する目的で実施した。

第2項 分析の結果

非掲載の分析結果

プラント・オパール分析では富田漆田遺跡の水田跡で実施した。結果は密度が5,300個/gの値が検量でき鏡下でもプラント・オパールが観察されている。テフラ分析は後年実施される旧石器時代の整理の折に掲載を予定している。

掲載した結果分析

今次の報告に掲載した分析結果は、胎土分析、鉄器類の分析に掲載した。

胎土分析結果

胎土分析では、肉眼観察と同等の結果が得られている。肉眼・鏡下の観察では、含有される鉱物・断面で観察された土味から、可塑性が乏しいことが推定され、ローム土の粘土化したものを使用していることが所見として得られていた。

分析供試料の肉眼観察に就いては後段に掲載してある。また、漆田窯で生産された須恵器の胎土に就いては第4章第4項中で記述したので併せて参照して頂きたい。

鉄器分析結果

鉄器類では、出土段階では全ての鉄器類は錆化が顕著なため、器種の判別困難な場合もあるのが恒である。鎖尺の接合方法も錆化が顕著なため、肉眼では判別困難である。このため、鉄器類に就いては、肉眼観察結果では適わない分析方法を採っているため、分析所見を掲載するに術はなかった。

一方、鉄器類は錆化身の状態でも、製品としての優劣は判断可能である。然るに、一般的な理解には至っていないため肉眼観察所見からは除外してある。鉄器は姿だけでは判断出来ない奥深い遺物である。

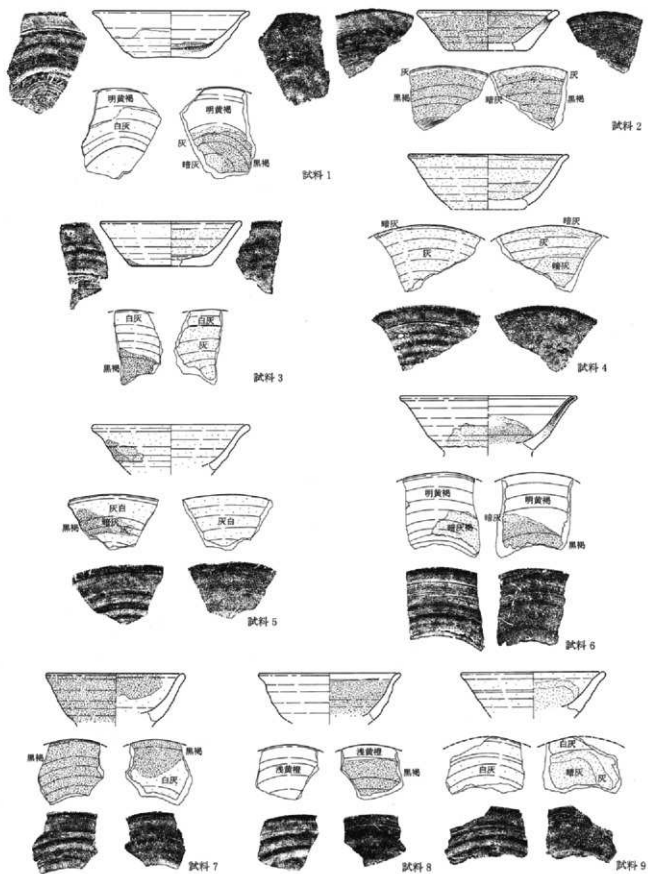


图-22 胎土分析供試料遺物実測圖 1 / 3 (1)

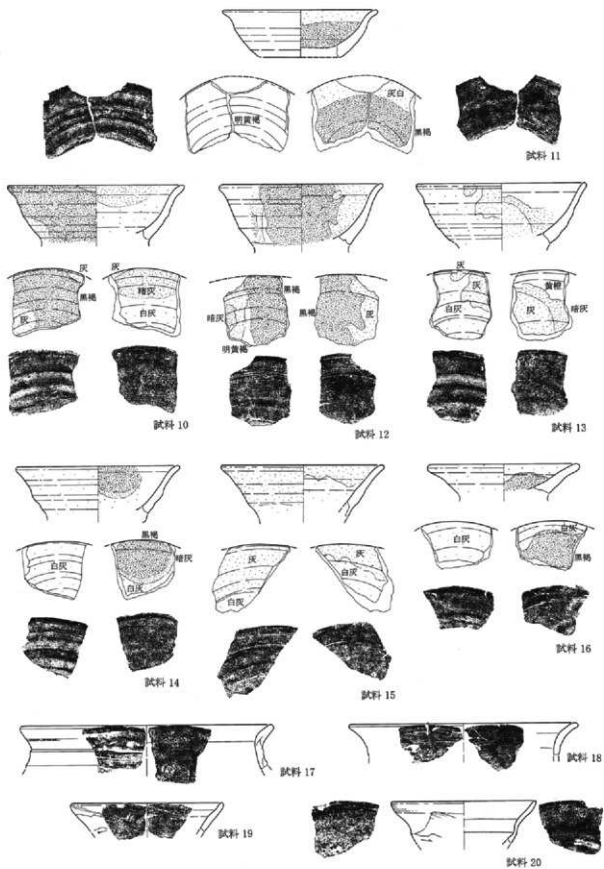


図-23 胎土分析供試料遺物実測図 1 / 3 (2)

第6章 理科学分析

胎土分析供試料一覧表

供試料No.	出土地	遺物種・土器種	備 考
1	3号窯	須恵器 坏	色調：灰白～灰黄褐色。 焼成：中性から還元焰焼成にやや傾く。軟質。
口径：(12.4)・底径：(6.0)・器高：3.5 度目値3.542：1.714 胴部はやや丸みを帯びる。口縁部は短く外反する。外面輪軸目は非常に強いが、内面は痕跡程度までに再整形されている。しか認められない。内外面の色調は口縁部が酸化焰に因る明黄褐色を呈し、底部では、顕著な黒異なりが認められ、内面側は炭素吸着に因り、黒褐～暗灰色が認められるが、外面側は白灰色を呈している。			夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、鱗片状・角粒状・融食形の三者。白色微粒子は隠微品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は隠微品質。鱗片状には微粒と粗粒状があり、粗粒状のものは火山ガラスと思われる。 生地上：可塑性が低く粗い。 素地土：目立った量ではないが上記夾雑物を含んでいる。焼結されていないため、粗い。
2	2号窯	須恵器 坏	色調：灰～黒褐色。 焼成：還元焰焼成（器内外面復焼。割れ口にも認められる。）。並質。やや焼結されている。
口径：(11.2)・底径：(6.4)・器高：3.2 度目値3.5：2 胴部は直線的で口縁部は短く外反する。外面の輪軸目はやや強いが、内面は痕跡程度まで再整形されている。器厚は厚く、全体がポツリした状態。色調は全体に黒褐色を呈するが口唇部が灰色を呈する。			夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状・柱状）の二者。透明鉱物粒子には、角粒状・融食形の二者。白色微粒子は隠微品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は隠微品質。 生地上：可塑性が低く粗い。 素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや多孔質である。
3	2号窯	須恵器 坏	色調：外・白灰、内上半・灰黄褐色、内面下半部は灰色。 焼成：中性から還元焰焼成。並質。やや焼結されている。
口径：(11.2)・底径：(6.4)・器高：3.5 度目値3.2：1.828 胴部は直線的に立ち上がる。口縁部はやや外反する。器厚は厚めで口縁部は全体に厚く、ポツリした作りになっている。外面底部は黒褐色を呈し、胴部より上位は白灰色を呈する。内面は口縁部より下位が灰色を呈し、口縁部は白灰色を呈する。			夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状・柱状）の二者。透明鉱物粒子には、鱗片状・角粒状・融食形の三者。白色微粒子は隠微品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は隠微品質。 生地上：可塑性が低く粗い。 素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや多孔質である。
4	2号窯	須恵器 坏	色調：灰～暗灰。 焼成：還元焰焼成。硬質（比較的良く焼き締まっている）。
口径：(12.7)・底径：(5.8)・器高：(4.3) 度目値は推定で2.953：1.348 胴部は丸みを帯びてくち上がり、体部も丸みを帯びる。口縁部は短く外反する。外面の輪軸目は薄有程度であるが、内面は痕跡程度まで整形されている。器厚はやや厚めである。色調は外面口唇部が暗灰色を呈し、口縁部より下位は灰色を呈している。両面は口唇部が暗灰色、体部上半から口縁部が灰色を呈し、胴部周辺が暗灰色を呈している。			夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、鱗片状・角粒状・融食形の三者。白色微粒子は隠微品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子には鱗片状透明鉱物粒子は認められなかった。 生地上：可塑性が低く粗い。 素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや多孔質である。
5	2号窯	須恵器 坏か埴	色調：白灰（やや褐色味を帯びる）。 焼成：還元焰。軟質。
口径：(12.5) やや丸みを帯びた体部口縁部は外反して立ち上がり、口唇部は肥厚する。器厚は厚めで口唇部の肥厚もポツリしている。外面輪軸目が強いが、内面は再整形により痕跡程度しか認められない。色調は外面が灰色に灰色～黒褐色の斑が認められる。内面は灰白色一色である。			夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、鱗片状・角粒状・融食形の三者。白色微粒子は隠微品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は隠微品質。 生地上：可塑性が低く粗い。 素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。焼結されていないため、粗い。
6	2号窯	須恵器 埴	色調：黄褐色。 焼成：酸化。下半部が吸灰により黒褐色。並質。やや焼結されている。
口径(14.0) 直線的に立ち上がった胴部から、体部は屈曲するように種線を描き立ち上がり、口縁部は短く外反する。器厚はやや厚く、腰部に作りになっている。外面輪軸目は部分的に強いが、内面は再整形により痕跡程度しか認められない。色調は外面側が暗灰色が斑紋に残り、体部口縁部および内面体部より上位は明黄褐色を呈し、腰部は暗灰・黒褐色を呈する。断面では、内外面側部分は明黄褐色が認められるが、芯側は壊れた黒褐色を呈している。			夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、角粒状・融食形の二者。白色微粒子は隠微品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は隠微品質。 生地上：可塑性が低く粗い。 素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。焼結されていないため、粗い。

供試料No.	出土地	遺物種・土器種	備	要
7	2号室	須恵器 坏か埴	色調：灰～黒褐色。	
□ (11.0)				
腹部・体部共に丸みを帯び、口縁部は短く外反する。器厚は厚くボツリしたつくりである。轆轤目は外面は明瞭であるが、内面は再整形により痕跡程度にしか認められない。色調は外面が黒褐色。内面は腹部・体部は白灰色を呈し、口縁部は黒褐色を呈している。			焼成：還元焰焼成（器内面外表面、割れ口にも認められる。）。並質。やや焼締られている。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、鱗片状・角粒状・融食形の三者。白色微粒子は陶磁品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は陶磁品質。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。焼締られていないため、やや粗い。
8	2号室	須恵器 坏か埴	色調：白灰（やや褐色味を帯びる）。	
□ (11.2)				
腹部・体部共に丸みを帯び、口縁部は短く外反する。器厚は厚くボツリしたつくりである。轆轤目は外面は明瞭であるが、内面は再整形により痕跡程度にしか認められない。色調は外面が淡黄褐色。内面は腹部・体部は黒褐色を呈し、口縁部は淡黄褐色を呈している。			焼成：還元焰。並質。やや焼締られている。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、鱗片状・角粒状・融食形の三者。白色微粒子は陶磁品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は陶磁品質。融出した多角状のガラス（クリストパライト？）が器内面に認められる。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや焼締られている。やや粗い。器面に夾雑物部分から小ヒビが顕著に入る。
9	2号室	須恵器 坏か埴	色調：灰～暗灰。	
□ (11.4)				
腹部・体部共に丸みを帯び、口縁部は短く外反する。器厚は厚くボツリしたつくりである。轆轤目は外面は明瞭であるが、内面は再整形により痕跡程度にしか認められない。色調は外面が白灰色。内面は腹部・体部は暗灰・灰色を呈し、口縁部は白灰色を呈している。			焼成：還元焰焼成。硬質（比較的良く焼き締まっている）。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、角粒状・融食形の二者。白色微粒子は陶磁品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は陶磁品質は内面に顕著。器内面に融出した多角状のガラス（クリストパライト？）が器内面に認められる。透明鉱物粒子には鱗片状透明鉱物粒子は認められなかった。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや多孔質である。
			その他：器外面は夾雑物部分から小ヒビが顕著に入る。	
10	2号室	須恵器 埴	色調：器内面下半は白灰。同上位から器外面は黒褐色。	
□ (14.0)				
腹部・体部は丸みを帯び、口縁部は短く外反する。器厚は厚くボツリした感じである。轆轤目は外面は強めであるが、内面は再整形により痕跡程度にしか認められない。色調は外面腹部に灰色の斑紋が残り、口縁部に一部灰色が認められるものの全体的には黒褐色を呈する。内面は器下半部やや褐色味を帯びた白灰色を呈し、上半部から口縁部は暗灰色を呈している。			焼成：還元焰焼成。硬質（比較的良く焼き締まっている）。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、角粒状・融食形の二者。白色微粒子は陶磁品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は陶磁品質は内面に顕著。器内面に融出した多角状のガラス（クリストパライト？）が器内面に認められる。透明鉱物粒子には鱗片状透明鉱物粒子は認められない。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや多孔質である。
			その他：器内面下半は夾雑物部分から小ヒビが顕著に入る。	
11	3号室	須恵器 坏か埴	色調：器外面・器内面上は淡黄褐色。器内面下半は黒褐色。	
□ (12.4)				
腹部・体部はやや丸みを帯びるが、口縁部は強く外反する。器厚は厚くボツリした感じである。轆轤目は外面は明瞭であるが、内面は再整形と認められない。色調は、外面は明黄褐色を呈するが、内面は腹部・体部が黒褐色を呈しているが、口縁部が白灰色を呈している。			焼成：酸化。並質。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状）（最多）・黒色鉱物粒子（柱状）の二者。透明鉱物粒子には、角粒状・融食形の二者。白色微粒子は陶磁品質・角粒状の二者の鉱物。白色鉱物粒子は陶磁品質。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや多孔質である。
12	2号室	須恵器 埴	色調：縦半分で灰色・黒褐色に分かれる。	
□ (13.0)				
腹部・体部は直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。器厚はやや薄くボツリしている感じである。轆轤目はやや粗いが強く引き上げている。色調は横位に変化顕著で、黒褐色と灰色・暗灰色が明黄褐色を間に挟み変化している。内面は黒褐色と灰色が横位に変化している。			焼成：還元焰。軟質。焼締は殆ど認められない。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状・柱状）角粒状は融食形が認められる。・黒色粒子（円粒）・透明鉱物粒子（角粒状）。白色粒子（陶磁品質の風化が進んだものか、白雲母化か）。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや粗い。
			その他：器外面から器内面口縁部は灰白。器内面下半暗灰。	
13	2号室	須恵器 坏か埴	色調：還元焰。並質。焼締は殆ど認められない。	
□ (13.6)				
腹部・体部は丸みを帯び、口縁部は緩やかに外反する。轆轤目は外面は強いが内面は再整形により痕跡を留める程度である。器厚は体部下半より下位で厚いが、口縁部ではやや薄めに作られている。色調は、外面で口縁部に灰色が斑紋状に残り、内面は灰色に斜位に暗灰色が斑紋状に入る。			焼成：還元焰。並質。焼締は殆ど認められない。	夾雑物：黒色鉱物粒子（角粒状・柱状）角粒状は融食形が認められる。・黒色粒子（円粒）・透明鉱物粒子（角粒状）。白色粒子（陶磁品質の風化が進んだものか、白雲母化か）。
			生地土：可塑性が低く粗い。	素地土：目立った量ではないが、上記夾雑物を含んでいる。やや粗い。

第6章 理科学分析

供試料No.	出土地	遺物種・土器種	摘 要
14	2号窯	須志器 坏か境	色調：器外面白灰、器内面黒褐色 焼成：還元焰。軟質。焼締は認められない。
口(13.0)			全体に直線的な作りに見えるが、腹部・体部下半は輪軸目も強いが、体部上半は輪軸目が弱く口縁部に緩き、口縁部は短く外反する。器厚は体部・体部下半でやや厚いが、体部上半・口縁部はやや薄めである。色調は、外面が白灰色が均質に認められるが、内面は腹部から口縁部に楕円形状に黒褐色・暗灰色の斑紋が大きく見られ、腹部下半に白灰色が認められる。
15	3号窯	須志器 坏か境	色調：口縁部まばらに灰色。体部は灰白色。 焼成：還元焰。やや硬質。僅かに焼締が認められる。
口(13.0)			全体に直線的であるが、口縁部は緩やかに外反する。器厚はやや厚い。輪軸目は立ち上がり部で強く、内面は再整形により痕跡程度に認められる。色調は外面が腹部が白灰色を呈し、体部から口縁部が灰色を呈する。内面は体部下半・腹部が白灰色を呈し、体部上半から口縁部が灰色を呈している。
16	2号窯	須志器 皿	色調：器外面・器内面口縁部は灰白。器内面体部は黒褐色。 焼成：還元焰。やや硬質。僅かに焼締が認められる。
口(12.0)			全体的に緩やかに外反している。器厚は特に厚くポツリしている。内面には補修の痕跡が認められ、欠損は同部分から生じている。輪軸目は内面は再整形により痕跡程度である。色調は、外面が白灰色を呈し、内面は口縁部が白灰色を呈するが、口縁部より下位は黒褐色を呈している。
17	2号窯	土師器 壺	色調：鈍褐・鈍橙。部分的に黒斑が認められる。 焼成：還元焰。土師器としては比較的良く締まっている。
口(20.0)			頸部がやや斜位に立ち上がり、口縁部は強く外傾する。頸部・口縁部には強い稜線が起きている。この稜線は腹側でより施されている。内面は横撫でを施している。器厚は厚めである。
18	2号窯	土師器 壺	色調：明赤褐。単色。 焼成：還元焰。単色の状態から、熟は概ね伝わったと思われる。並質。
口(18.0)			口縁部は外反する。器厚は薄い作りである。夾雑物：黒色鉱物粒子(角粒状・柱状)の二者。透明鉱物粒子(角粒状・微細鱗片状・鱗片状・融食形)の四者。超微粒状黒色粒子。白色鉱物粒子(陶器品質の風化した状態か)。赤褐色粒子が認められる。 生地上：可塑性は並質程度か。 素地土：上記の夾雑物は須志器より粒状が細かく、粗さは感じられない。
19	2号窯	土師器 坏	色調：黄青褐色。単色。 焼成：還元焰。器内面口唇部直下に発密状態の透明鉱物粒子。並質で斑がない。
口(12.0)			体部・口縁部が直線的に立ち上がる。体部には頸部が斜り横位の発密りを施す。口縁部は横撫でを施している。内面は無で整形による整形痕(輪軸目)が顕著。 夾雑物：黒色鉱物粒子(角粒状・棒状)の二者。透明鉱物粒子(角粒状・微細鱗片状・融食形)の三者。超微粒状黒色粒子。白色鉱物粒子(陶器品質の風化した状態か)。赤褐色粒子が認められる。 生地上：可塑性は並質程度か。 素地土：上記の夾雑物は須志器より粒状が細かく、粗さは感じられない。
20	2号窯	土師器 坏	色調：黄青褐色がくすんだ状態。器外面は黒褐色〜鈍褐。 焼成：還元焰。並質。器厚が薄いためやや焼締まりが認められる。
口(11.4)			体部は直線的に立ち上がり屈曲する状態で口縁部が立ち上がる。体部は横位の発密りを施し、口縁部上半は横撫で、下半は広い面撫で立ち廻りが部分的に認められ、軽い発密でが施されている。内面は横撫でを施す。 夾雑物：黒色鉱物粒子(角粒状・柱状)の二者。角粒状は融食形が認められる。透明鉱物粒子(融食形)。白色鉱物粒子(陶器品質の風化した状態)。内側では白色粒子としてしか認識できないが認められる。 生地上：可塑性は並質程度か。 素地土：夾雑物がやや多く粗く感じさせる。

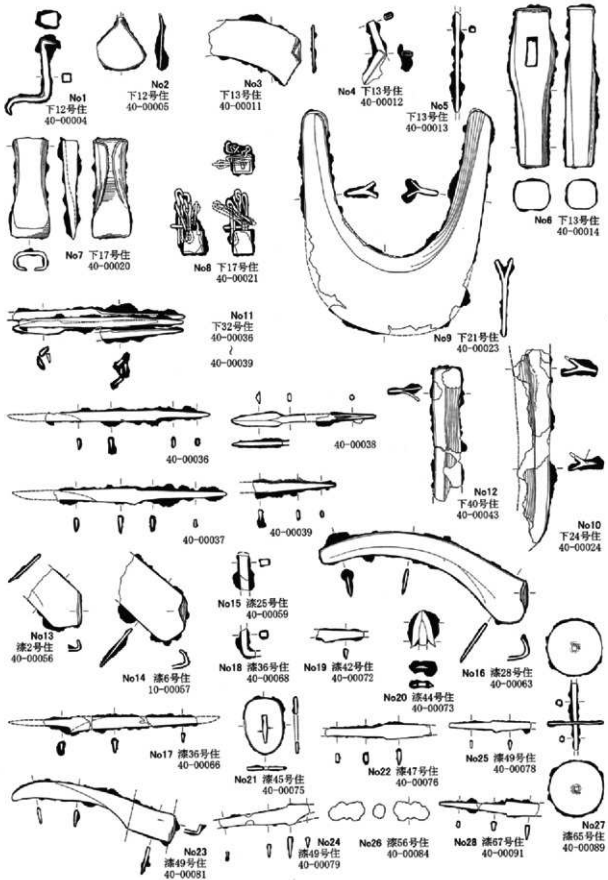


図-24 鉄器分析供試料遺物実測図1/4(1)

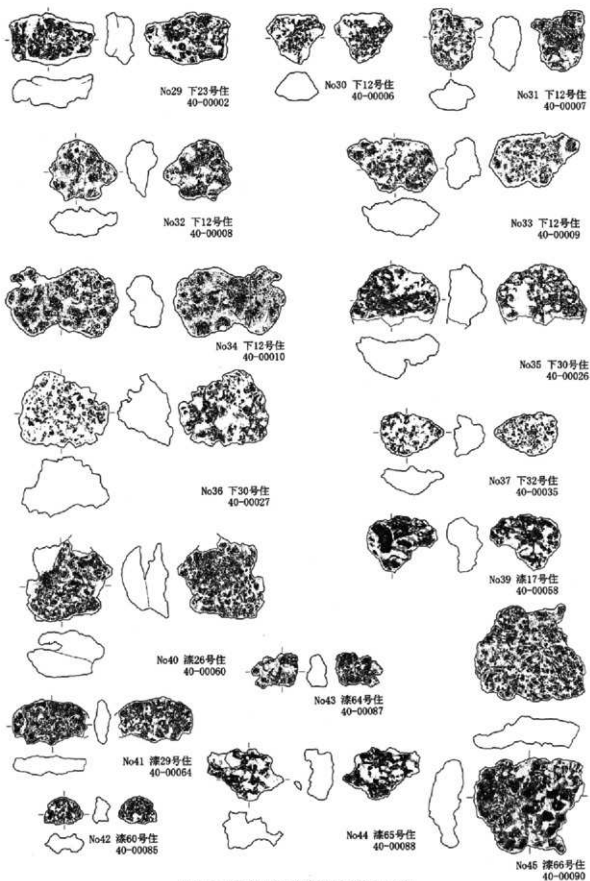


図-25 鉄器分析供試料遺物実測図1/4(2)

第2節 須恵器・土師器の胎土分析

竹原弘展・藤根 久 (パレオ・ラボ)

第1項 はじめに

富田漆田遺跡は、上武国道建設に伴い発掘調査が実施され、10世紀中頃の須恵器窯跡が5基検出されている。また、隣接する住居跡ではログロピットも検出された。

これらのうち、2号窯、3号窯より出土した須恵器および土師器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析とX線回折による鉱物分析を行った。なお、別個体の須恵器1試料については剥片を作成し顕微鏡観察を予察的に行い、須恵器胎土材料の粘土および混和物の特徴など材料的に検討した。

第2項 試料と方法

分析試料は、2号窯から出土した須恵器13試料、3号窯から出土した須恵器3試料、土師器4試料の計20試料である(附表-1)。なお、これら須恵器や土師器は窯の覆土中から出土した遺物である。

附表-1 試料一覧表

試料No.	出土遺物	分類・産地	試料No.	出土遺物	分類・産地
1	3号窯	須恵器環	11	3号窯	須恵器環 or 塊
2	2号窯	須恵器環	12	2号窯	須恵器環
3	2号窯	須恵器環	13	2号窯	須恵器環 or 塊
4	2号窯	須恵器環	14	2号窯	須恵器環 or 塊
5	2号窯	須恵器環 or 塊	15	3号窯	須恵器環 or 塊
6	2号窯	須恵器環	16	2号窯	須恵器皿
7	2号窯	須恵器環 or 塊	17	2号窯	土師器環
8	2号窯	須恵器環 or 塊	18	2号窯	土師器環
9	2号窯	須恵器環 or 塊	19	2号窯	土師器環
10	2号窯	須恵器環	20	2号窯	土師器環

方法は、ガラスビードを作成して測定するビード法による蛍光X線分析である。

最初に、必要量を各遺物より割り取り、胎土以外の影響を排除するため、附表-面を小型グラインダーで削った後、精製水にて超音波洗浄を行った。試料はセラミック乳鉢で粉末にして、ろつばに入れ、電気炉で750°C、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、恒温乾燥機で120°C、3時間乾燥させ、その後デシケータ内で放冷した無水四ホウ酸リチウム $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ と、リチウムメタボレイド LiBO_2 を 8 : 2 の割合で調製した融剤

3,600g と、十分に混合し白金製するつばに入れ、ビードサンブラー (NT-2000型; 柳東京科製) にて約750°Cで250秒間予備加熱、約1100°Cで150秒間溶融させ、約1100°Cで350秒間揺動加熱してガラスビードを作成した。

分析はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置 MagiX (PW2424型) にて、標準岩石試料を用いた検査線法による定量分析を行った。定量元素は、酸化ナトリウム Na_2O 、酸化マグネシウム MgO 、酸化アルミニウム Al_2O_3 、酸化ケイ素 SiO_2 、酸化リン P_2O_5 、酸化カリウム K_2O 、酸化カルシウム CaO 、酸化チタン TiO_2 、酸化マンガン MnO 、酸化鉄 Fe_2O_3 、ルビジウム Rb、ストロンチウム Sr である。

また、すべての試料についてX線回折分析を行った。試料は、標準的な部分をアルミナ乳鉢で粉碎し精製水を加えてスライドガラス上に展開・乾固した。

測定は、佛リガク製デスクトップX線回折装置 MiniFlex を用いた。測定条件は、電圧30kV、電流15mA、Cu-X線管、走査範囲 $5^\circ \sim 90^\circ$ 、ステップ幅 0.02° 、計数時間1.0sec の FT 測定を行った。

ピークおよび強度の解析は、平滑化処理、バックグラウンド処理、 $K\alpha$ 2 除去処理、ピークサーチ処理を行った。測定結果は、同定した鉱物の最大強度 (cps) を示した。なお、最大強度は、石英が26.64°、斜長石 (Anorthite) が27.88°、クリストバライトが21.90°、ムライトが26.27°、イライトが8.58°である。

さらに、2号窯から出土した須恵器1試料(蛍光X線分析を行った試料は別試料)について顕微鏡観察用の剥片を作成した。(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コー

ティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。

第3項 結果

蛍光X線分析の結果は附表-2に示す。

測定の結果、酸化ケイ素 SiO_2 が最も多く含まれ 60.01~64.52%、次いで酸化アルミニウム Al_2O_3 が 20.38~25.40% となっている。酸化鉄 Fe_2O_3 が 3.38~8.59% 含まれ、その他の元素はいずれも 3% 未満であった。附図-1 に Al_2O_3 - SiO_2 分布附図、附図-2 に Fe_2O_3 - SiO_2 分布附図、また、参考として附図-3 に K_2O - CaO 分布附図、附図-4 に Rb-Sr 分布附図、附図-5~8 に各元素の分布附図を示す。

X線回折は、各試料の測定生データのスペクトルを附図-9~12に示す。すべての試料では、石英と斜長石（Anorthite）が同定され、試料No.4では、その他鉱物としてクリストバル石とムライトが検出された。試料No.18では粘土鉱物のイライトも検出された。なお、同定された鉱物の各強度を附表-3に示し、斜長石-石英の強度附図を附図-13に示す。

2号窯出土須恵器1試料の顕微鏡観察では、以下の微化石類および岩石・鉱物の特徴が観察された。

ガラス質）斜方輝石）角閃石類、単斜輝石、複合石英類（微細）、珉晶質、珪藻化石（沼沢湿地付着生 *Cymbella aspera*、*Eunotia praeurpta var. bidens*、*Navicula elginensis*、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、淡水種 *Surirella tenera*、*Rhopalodia gibberula*、*Diploneis ovalis*、*Stauroneis acuta*、*Cymbella cuspidata*、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Amphora* 属、*Diploneis* 属、不明種など多い）、植物珪酸体化石多い（ヨシ属含む）。

第4項 考察

附図-1を見ると、全体的にほぼ一箇所にまとまっており、特に須恵器については非常に狭い範囲に密集している。須恵器中に3本の点線が示してあるが、これらは原点を通る直線であり、この直線の傾きの変化が Al_2O_3 と SiO_2 の組成比の変化を附表-1で、 Al_2O_3 と SiO_2 の組成比のばらつきが非常に少ない事がわかる。小村・藤根（2002）は、粘土の化学組成は Al_2O_3 が比較的多く砂粒は SiO_2 が多いため、 Al_2O_3 と SiO_2 の組成比の変化は粘土と砂粒の混合比の変化を附表-1しているとしているが、分析した須恵器は、胎土に使われている粘土と砂粒の混合比が良くまとまっていることがこの附図-1からは想定することができる。これらの傾向は、附図-2の Fe_2O_3 と

附表-2 定量分析結果一覧表

試料 No.	分類	Na ₂ O (%)	MgO (%)	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	P ₂ O ₅ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)
1	須恵器	1.65	1.33	23.98	64.52	0.055	0.83	2.41	1.03	0.056	3.85	99.71	43.6	213.4
2	須恵器	1.49	1.64	23.79	63.00	0.056	0.81	2.42	1.03	0.065	5.16	99.45	45.0	196.3
3	須恵器	1.44	1.62	24.62	62.30	0.056	0.84	2.48	1.04	0.069	5.11	99.58	45.8	228.0
4	須恵器	1.47	1.25	24.71	64.47	0.061	0.98	2.32	1.00	0.047	3.38	99.70	59.8	237.1
5	須恵器	1.70	1.29	23.32	62.78	0.054	0.78	2.25	1.03	0.058	4.58	97.84	35.2	186.4
6	須恵器	1.26	1.39	24.88	62.81	0.037	0.94	1.79	1.09	0.045	4.42	98.66	79.2	166.2
7	須恵器	1.52	1.25	23.38	62.94	0.055	0.78	2.24	1.06	0.057	4.49	97.76	39.9	185.4
8	須恵器	1.35	1.17	25.49	63.79	0.051	0.96	2.00	1.02	0.046	3.84	99.64	56.4	213.3
9	須恵器	1.52	1.83	24.30	63.58	0.054	0.82	2.78	1.09	0.072	4.36	100.41	45.2	251.9
10	須恵器	1.43	1.52	24.64	62.68	0.051	0.98	2.26	1.06	0.075	5.05	99.74	57.6	227.8
11	須恵器	1.60	1.32	23.79	63.76	0.110	0.88	2.19	1.05	0.055	4.40	98.14	47.7	187.1
12	須恵器	1.44	1.42	25.31	62.24	0.058	1.19	1.99	1.10	0.050	4.51	99.30	52.5	200.8
13	須恵器	1.50	1.42	24.17	63.60	0.057	0.81	2.45	1.04	0.063	4.41	99.52	42.3	215.8
14	須恵器	1.55	1.48	24.56	63.16	0.053	0.87	2.55	1.05	0.057	3.95	99.26	48.3	230.4
15	須恵器	1.72	1.61	23.58	63.58	0.053	1.11	2.82	1.05	0.073	4.57	100.16	61.3	259.5
16	須恵器	1.50	1.47	23.41	62.21	0.054	0.84	2.30	1.02	0.077	5.14	98.01	44.0	196.9
17	土師器	0.86	1.49	24.41	61.88	0.070	0.82	1.26	1.24	0.061	6.18	98.27	48.4	94.9
18	土師器	1.73	1.88	20.34	62.98	0.063	2.11	1.34	1.34	0.049	7.79	99.60	106.1	108.3
19	土師器	0.95	2.57	21.72	61.27	0.100	0.58	1.69	1.36	0.101	8.58	98.91	32.7	112.3
20	土師器	0.83	1.76	24.06	61.65	0.138	0.55	1.34	1.38	0.087	7.41	99.21	28.9	98.7
最大値		1.73	2.57	25.46	64.52	0.138	2.11	2.82	1.38	0.101	8.58	100.41	106.1	259.5
最小値		0.83	1.17	20.34	61.27	0.037	0.55	1.26	1.00	0.045	3.38	97.76	28.9	94.9

SiO₂の分布においても同様である。ただし、土師器胎土は須恵器の一群から離れて分布する。

さらに、Al₂O₃やSiO₂、Fe₂O₃以外の元素でも試料間に大きな差異がないか見てみると(附図-5~8)、須恵器の場合、若干の例外はあるものの、どの元素においてもよくまとまった値を示していると言える。

例外的な組成を示すのは、P₂O₅が他の須恵器の約2倍と多く含まれているNa11と、複数元素において少しずつではあるものの、全体的に他の須恵器とはややずれた組成を示すNa6である。Na11についてはP₂O₅以外の元素ではよく一致しているし、Na6も他と大きく逸脱するような化学組成は示していないことから、大きな差異と考える。

3号窯出土須恵器は2号窯出土須恵器との化学組成の差異はあまり見られなかった。このことから、2号窯出土須恵器と3号窯出土須恵器の胎土に大きな違いはないと思われる。

一方、土師器については、化学組成に大きなギャップが見られる。各土師器の胎土を肉眼観察してみると、黒色輝石類または角閃石類が多く観察される。特にNa19の土師器胎土中には多く見られることから、輝石類または角閃石類の量が影響していると考えられる。特に、MgOやMnOあるいはFe₂O₃などにおいて分布幅が大きい。

蛍光X線分析の結果では、2号窯出土の須恵器と3号窯出土の須恵器のほとんどの化学組成が良く類似した。このことから、両者の胎土材料がよく似ていたことが推察され、窯の違いにかかわらず、かなり共通した材料を使用し、かつ粘土と砂粒物の割合も同じであることが理解される。薄片の顕微鏡観察では、淡水種珪藻化石が多く含まれ、特に沼沢湿地付着生の珪藻化石が特徴的に含まれていた。また、ヨシ属の葉身に形成される珪酸体の化石が特徴的に含まれるなど沼沢地で堆積した粘土を利用していることが理解された。なお、こうした粘土材料は、波志江中宿遺跡の粘土探掘坑の探掘対象粘土の特徴と一致している(藤根・古橋, 2001)。波志江中宿遺跡の粘土探掘坑の探掘対象粘土は、AT火山灰層準以

下の黒色帯などが水成堆積した粘土であるが、富田漆田遺跡周辺においても同様の粘土が採取できたものと推定される。

X線回折分析では、量的に多く含まれる石英あるいは斜長石(Anorthite)のピークが卓越し、その他の輝石類あるいは角閃石類のピークは明瞭でない。斜長石-石英の強度附図(附図-13)を見ると、2号窯須恵器Na6を含んだ、土師器のNa18-Na17-Na20-Na19の直線性が顕著であり、その他Na3の須恵器を除いては一群を形成しているように見える。これは、須恵器と土師器の焼成に係る現象と思われるが明らかではない。この点については、今後検討してみる必要がある。

第5項 終わりに

富田漆田遺跡の窯跡から出土した遺物20試料の胎土を元素分析した結果、以下のことが指摘できる。

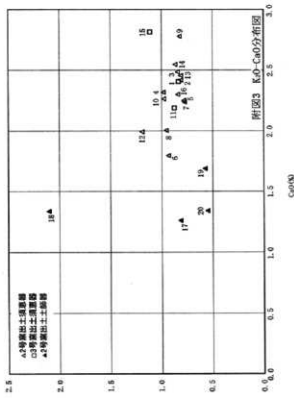
(1) ここで分析を行った須恵器のうち、試料Na6やNa11などにおいて若干のパラツキがあるものの、その化学組成がほぼ一致していた。このことから、窯の違いに化学組成の違いがなく、ある程度統一された材料を使用して作られたことが理解された。これは、この地域において使用された材料が限られていることが大きな背景にある。なお、薄片の顕微鏡観察では、珪藻化石の多産により粘土材料が沼沢地の有機質粘土を利用していることが理解された。

(2) 土師器4試料については、須恵器に比べてその化学組成に違いが見られた。

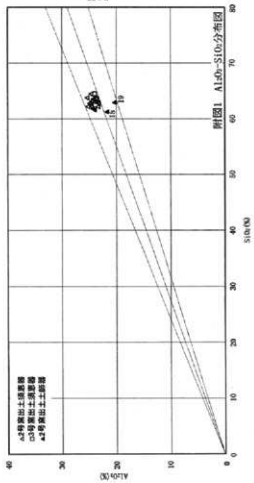
(3) X線回折分析では、量的に多く含まれる石英あるいは斜長石(Anorthite)のピークが卓越し、その他の輝石類あるいは角閃石類のピークは明瞭でない。斜長石-石英の強度附図(附図-13)では、須恵器と土師器の焼成に係る現象を示していることが予想され、今後の検討課題である。

引用文献

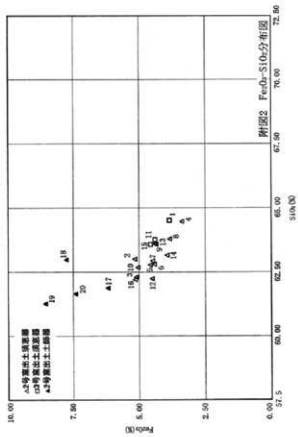
- 藤根 久・今村美智子 (2001) 土師の胎土材料と粘土探掘坑対象遺物の特徴。波志江中宿遺跡, 262-277, 群馬県埋蔵文化財調査事業報告
小村美代子・藤根 久 (2002) 山茶碗胎土の化学的評価。日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 90-91, 日本文化財科学会



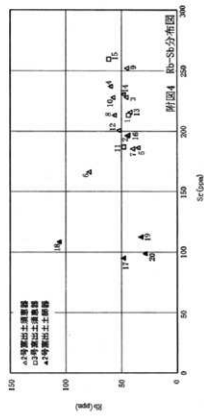
附図3 K₂O-CaO分布図



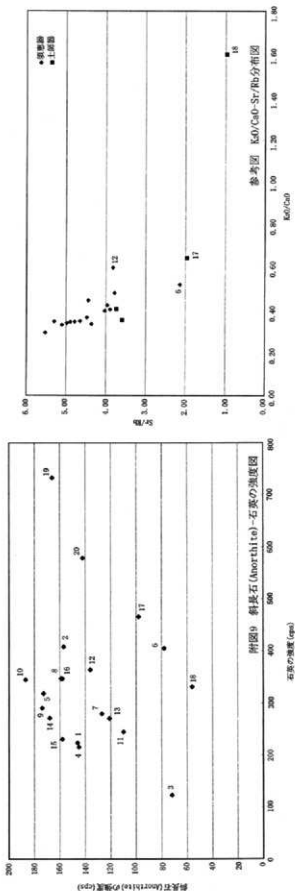
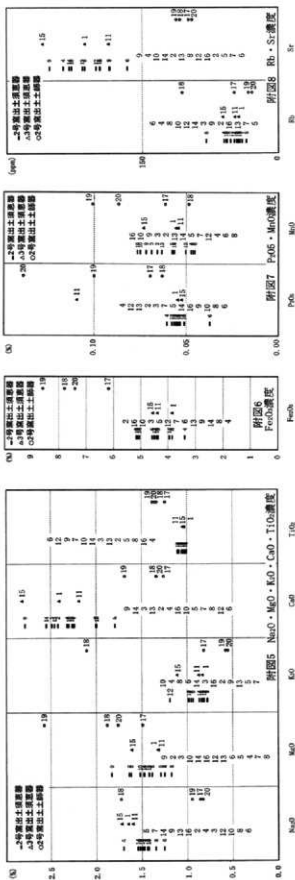
附図1 Al₂O₃-SiO₂分布図

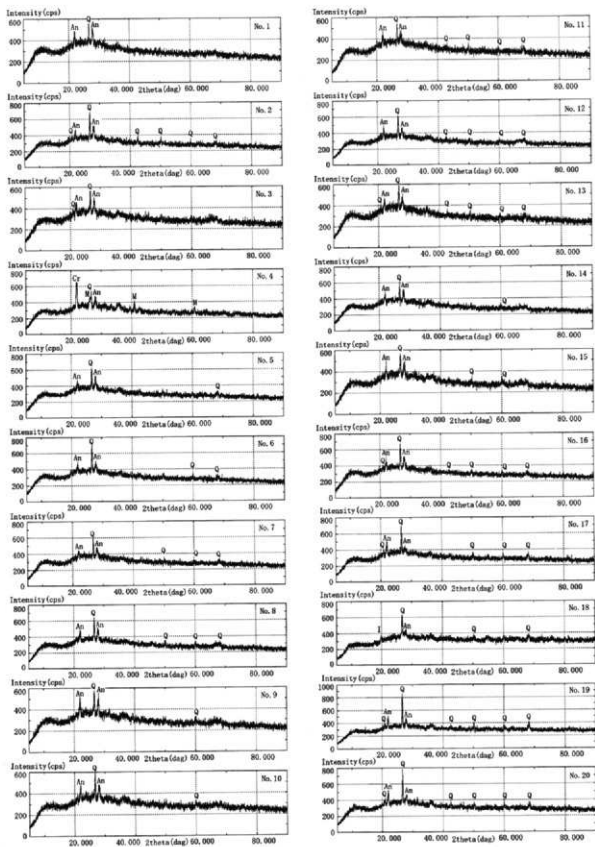


附図2 FeO-SiO₂分布図



附図4 Rb-Sr分布図





附図10 土器胎土試料のX線回折スペクトル図

【鉱物記号】Q:石英, An: 灰長石, Cr: クラシベロ石, M: ムスカイト, I: イライト

第3節 富田漆田・下大日遺跡出土鉄器・鉄滓の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

第1項 はじめに

群馬県前橋市に所在する富田漆田・下大日遺跡は、上武道路自動車道建設に伴い、平成12年～平成14年に緊急発掘調査された遺跡である。調査の結果、降下火山灰の堆積状況および出土土器によって、10世紀代に比定される竅穴住居跡群が確認され、住居跡内およびその周辺から鉄器ならびに鉄滓、鉄塊系資料が検出された¹⁾。

鉄器は、斧、釘、鎖尺などの工具、鎌、鋤先などの農具が大半を占める。鉄塊系資料および鉄滓の出土を加味すると、遺跡内で鉄に関する生産活動、とりわけ鉄器製作活動が実施されており、製作された鉄器を使って住居の建設や農業生産活動が営まれていたものと推定される。

これまでに行われた出土鉄関連資料の金属考古学的調査によって、平安期の群馬県下では、ある地域で生産された原料鉄を処理し、遺跡内の生活に必要な鉄器が製作されていた可能性の高いことが指摘されている^{2)～5)}。鉄器製作の素材として使用された原料鉄には鉄銹と鋼の2つを想定することができる。平安時代において、鋼を溶融するほどの炉内温度を確保することは難しかったと考えられるので、鋼を出発物質とした場合の鉄器の製作は、加熱・鍛打によって行われたことは間違いない。鉄銹の場合には、鉄銹中の炭素を低減（脱炭）して鋼を製造する。その鋼を使って鋼製鉄器が製作されたものと推定される。

富田漆田・富田下大日遺跡から出土した鉄器を金属考古学的調査した結果、そのほとんどがほぼ同じ組成の鋼を用いて製作されていた可能性が高いこと、遺跡内またはその周辺で、鋼の製造と鉄器製作が行われていた可能性の高いことが明らかとなった。ある特定の場所で製造された原料鉄が遺跡内に

運び込まれ、それを使って日常生活に必要な道具が製作されていた可能性の高いことが分かったわけである。以下に調査結果を報告する。

第2項 調査資料

金属考古学的調査を実施した資料は附表1および附表2に示す、富田下大日・富田下漆田両遺跡出土鉄器28点、鉄塊系資料、および鉄滓17点の合計48資料である。鉄器は武器、農具、および工具に分類される。武器は刀子であり、調査鉄器のほとんどは生産用具である。

鉄滓は外観形状から碗形滓と塊状滓に分類される。他に資料表面が赤錆で覆われた鉄塊系資料(No43)が確認されている。

発掘調査区域内において鉄関連遺構は未確認である。調査した鉄塊系資料および鉄滓は、住居跡内から出土した資料で、人為的に住居跡内に持ち込まれ

附表-1 調査鉄器の概要

No	遺跡名	資料名	検出遺構		資料整理番号	資料整理番号
			遺構名	層位		
1	下大日	釘	覆土	40-00004	下3	
2		不明鉄器	12号住	床直層	40-00005	下4
3		鎌	13号住	床直	40-00011	下11
4		不明鉄器		覆土	40-00012	下10
5		棒状鉄器	覆土	40-00013	下9	
6		鏃	床直層	40-00014	下12	
7		有袋鉄斧	17号住	床直層	40-00020	下13
8		鎖尺	覆土	40-00021	下19A	
9		鋤先	21号住	覆土	40-00023	下20
10		大形鋤先	24号住	床直	40-00024	下22
11		刀子	32号住	覆土	40-00036	下40A
12		鋤先	40号住	覆土	40-00043	下28A
13	漆田	鎌	2号住	覆土	40-00056	う34
14		床直	6号住	床直	40-00057	う1
15		釘	25号住	籠右袖	40-00059	う36
16		鎌	28号住	覆土	40-00063	う5
17		刀子	36号住	覆土	40-00066	う8
18		不明鉄器	覆土	40-00068	う9	
19		刀子	42号住	覆土	40-00072	う13
20		鏃	44号住	覆土	40-00073	う14
21		鏃	45号住	覆土	40-00075	う16
22		刀子	47号住	床直	40-00076	う17
23		鎌	49号住	床直	40-00081	う19
24		刀子	49号住	覆土	40-00079	う20
25		刀子	49号住	床直	40-00078	う22
26		鉄片	56号住	覆土	40-00084	う24
27		紡錘車	65号住	床直層	40-00089	う29
28		刀子	67号住	覆土	40-00091	う32

注) Noは分析・検出・資料番号・資料名は本津博氏による。

たか、自然流入したもののいずれかである。

第3項 調査試料の抽出

鉄器については、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル(以下、ハンドドリルという)を使って、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、0.05g～0.2gの試料を抽出した。鉄器からの試料抽出位置は、附図-2～附図-13に示すとおりである。

鋼製鉄器を製作する場合、炭素量の異なる鋼を配して造形が施されることがある。そこで、ほぼ完形の状態で出土したNo3、No6～No10、No16、およびNo23については、同一資料の2ヶ所から分析試料を抽出し、炭素量が異なる鋼の使用有無について検討した。No11は4本の刀が固着している。錆化が著しく脆弱なため、ハンドドリルによる衝撃を加えても、資料形状の維持が可能と判断された部位から微量試料を抽出した。抽出した4試料(Sa₁～Sa₄)のうち、Sa₁、Sa₂、およびSa₄は試料量の関係から、組織観察のみを実施した。

後述するように、錆化した試料の化学組成を検討する場合、埋蔵環境下からの富化が問題となる。この点について吟味するため、No1、No2、No3、No5、No9～No12、No17、No22、No23、およびNo28の12資料については、資料表面に固着する土砂(厳密には土砂に錆が混在した試料)を別途抽出し、化学分析を行い、資料内部から抽出した試料の化学組成との比較を通して、埋蔵環境からの富化を検討した。なお、鉄器における試料抽出部位は、エポキシ樹脂を充填して、修復した。

鉄塊系資料および鉄滓については、ハンドドリルで深さ1～2cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1gの試料を切り取った。それぞれの資料から抽出した試料をさらに2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学分析に供した。調査資料の中で、No29、No33、No35、およびNo40については、2ヶ所から試料を抽出し、それぞれを分析した。

第4項 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、マクロ組織の約5割を超える領域がメタルによって構成されている試料については、ナイタール(硝酸2.5ml、エチルアルコール97.5mlの混合液)で腐食し、組織観察した。腐食した試料については再びダイヤモンドペーストで研磨した後、錆化した試料については金属顕微鏡による組織観察終了後カーボン蒸着し、鉄器、鉄塊系資料については地金の成因を推定するうえで重要と判断された組織および非金属介在物中の化合物相を、鉄塊系資料および鉄滓については残存する化合物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA)で分析した。

化学成分分析用試料はエチルアルコール、アセトンで超音波洗浄し、資料表面に付着する土砂を除去した後、130°Cで2時間以上乾燥した。乾燥した試料をテフロン分解容器に直接秤量し、塩酸、硝酸、フッ化水素酸、および蒸留水を加え密栓し、マイクロウェーブ分解装置を使って溶解した。溶液中のフッ化物イオンをホウ酸でマスクし、蒸留水で定溶とした後、鉄器についてはT.Fe(全鉄)、Cu(銅)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、マンガン(Mn)、リン(P)、チタン(Ti)、ケイ素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)、砒素(As)の13元素を、鉄塊系資料および鉄滓については上記13成分のうちAsを除く12成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)で分析した。0.05g以上のメタルが残っている試料(No16Rg、No23Rg、No24、No25)については、メタル部分を分別し、燃焼-赤外線吸収法で炭素(C)、イオウ(S)を分析した。

第5項 調査結果

1) 鉄器の調査結果

(1) 化学組成

28資料から抽出した試料の化学組成を附表2左欄

附表2 鉄塊系資料および鉄滓の外観上の特徴

No.	道跡名	資料名	検出遺構		整理番号	整理番号	外 観 形 状
			遺構名	層位			
29	下大日	塊状滓	23号住	掘方	40-00002	下21	2つの板形滓が重なった資料である。表面は一樣に錆で覆われている。
30		塊状滓	12号住	覆土	40-00005	下8	黒褐色の鉄滓と赤錆が混在した資料で、いたるところに亀裂がみられる。
31		塊状滓	12号住	堀内	40-00007	下7B	凹部、凸部とも赤褐色を呈する錆で覆われていて、いたるところに空隙がみられる。
32		塊状滓	12号住	覆土	40-00008	下6	凹部、凸部とも赤褐色を呈する錆で覆われている。凸部、凹部ともに空隙を含む鉄滓状物質が固着している。
33		塊状滓	12号住	覆土	40-00009	下7A	凹部、凸部とも赤褐色を呈する錆で覆われている。凸部には溶融または部分溶融した粘土状物質が固着している。
34		鉄塊系資料	12号住	覆土	40-00010	下5	表面は一樣に土砂で覆われている。黒褐色の鉄滓と赤錆が混在した資料で、いたるところに亀裂がみられる。
35		塊状滓	30号住	堀右袖	40-00026	下33	凸部は赤褐色の錆で覆われている。凹部は黒褐色の鉄滓と赤錆からなり、局所的に粘土状物質が固着している。
36		塊状滓	30号住	覆土	40-00027	下35	黒褐色の鉄滓からなり、いたるところに空隙がみられる。
37		粘土状資料	32号住	床直	40-00035	下41	板形を呈する。溶融または部分溶融した粘土状物質からなる。ところどころに赤錆が混在する。
38		塊状滓	調査区内	-	未掘発	下44	凸部は青灰色をした粘土状物質からなり、凹部には錆が固着している。
39		塊状滓	17号住	床直	40-00058	う2	黒褐色を呈する鉄滓からなり、局所的に赤錆が固着している。
40		塊状滓	26号住	覆土	40-00060	う3	2つの板形滓が重なった資料である。上部資料は黒褐色を呈し、ところどころに赤錆が固着している。下部資料は赤褐色を呈し、一樣に錆で覆われている。
41		塊状滓	29号住	覆土	40-00064	う6	黒褐色の鉄滓によって構成されている。表面は赤錆で覆われている。
42		塊状滓	60号住	覆土	40-00085	う26	黒褐色を呈する鉄滓からなり、いたるところに空隙がみられ、表面はその全域が赤錆で覆われている。
43		鉄塊系資料	64号住	覆土	40-00087	う28	表面は一樣に赤錆で覆われていて、いたるところに亀裂がみられる。
44	塊状滓	65号住	覆土	40-00088	う30	灰褐色および黒褐色を呈する黒褐色を呈する鉄滓によって構成される。多数の空隙があり、局所的に赤錆が固着している。	
45	塊状滓	66号住	覆土	40-00090	う31	凸部は赤褐色の錆で覆われている。凹部は黒褐色の鉄滓と赤錆からなり、局所的に粘土状物質が固着している。	

注) Noは分析・検出・資料番号・資料名は本津博明氏による。

に示す。No6Sa₁・Sa₂、No9Sa₂、No11Sa₃、No14、No15、No16Eg・Rg、No17、No21、No22、No23Rg、No24、No25、およびNo28のT.Feは90%以上で、メタルまたはメタルに錆が混在した試料が分析されている。これらについては埋蔵環境下からの富化の影響が乏しいものと判断される。他の調査対象試料内部から抽出した21試料のT.Feは50~86mass%で、錆化が進んでいる。

既述のとおり、錆化が進んだ試料については、埋蔵環境からの富化について吟味する必要がある。本稿では、No1をはじめとする12資料について、内部から抽出した試料に加えこれらの資料表面に固着する土砂を採取し、化学組成を調べた。附図1 aには資料表面の土砂および資料内部から抽出した試料に含有されるCu、Ni、およびCo三成分の含有量、附図1 bにはMn、P、Ti三成分の含有量を示した。附図から明らかのように、NiはNo3Sa₂を除く10試料、Coは資料内部から抽出した試料の含有量がすべて高い。CuはNo3Sa₂を除く11試料において、PはNo3Sa₂、No17、およびNo23Rgの3試料において、

MnおよびTiは一樣に、資料表面から抽出した試料中の濃度が試料内部から抽出した試料の含有量よりも高い。

調査対象資料に含有されるCu、Ni、Co、およびPの4成分については、埋蔵環境下からの富化の影響が乏しく、錆試料中の濃度のほとんどはメタルに含有されていたとみることができる。

Mn、Tiについては埋蔵環境からの富化の心配があり、錆試料における分析値の取り扱いには注意を要する。

No16Rg、No23Rg、No24、およびNo25から抽出した試料のC、Sは、附表3に示すとおりである。No23Rgには0.09mass%のSが含有されている。他の試料に含有されるCは、後述する組織観察結果とよく整合する。

(2) 組織観察結果

No6(附図2 a₁)から抽出した2試料はそのほとんどがメタルによって構成されていたので、ナイターで腐食した。Sa₁部から抽出した試料のマクロエッチング組織(附図2 b₁)はその全域がほぼ一樣に

腐食されている。枠で囲んだ内部のミクロエッチング組織は主としてパーライト〔セメントイト (Fe_3C) とフェライト (αFe) の共析組織〕からなり (附図 2 b₂)、ところどころにフェライトが観察される。標準炭素鋼と比較すると、0.6~0.7mass% C の鋼とみることができる。Sa₂ 部から抽出した試料はほとんど腐食されない (附図 2 c₁)。マクロエッチング組織の枠で囲んだ内部は主としてフェライトからなる (附図 2 c₂)。0.1mass% C 以下の鋼である。

Sa₁ 部から抽出した試料にはところどころに、層状を呈する微細な非金属介在物が観察される。EPMA による分析の結果、 $\text{FeO-CaO-K}_2\text{O-Al}_2\text{O}_3\text{-MgO-SiO}_2$ 系のガラス質ケイ酸塩 (Gl) であることがわかる (附図 2 b₃・b₄)。Sa₂ から抽出した試料には断面が円形を呈し、鉄粒 (Me)、酸化鉄 (IO)、およびガラス質ケイ酸塩 (Gl) によって構成される微細な非金属介在物がみられる (附図 2 c₃)。

No7Sa₁ 部および Sa₂ 部 (附図 3 a₁)、No9Sa₂ 部 (附図 4 a₁)、No11Sa₂ 部および Sa₃ 部 (附図 5)、No15、No16Sa₁ 部および Sa₂ 部 (附図 6)、No17、No21、No22 (附図 7)、No23Eg 部および Rg 部、No24 (附図 8)、No25、No27、および No28 (附図 9) から抽出した試料にも相当量のメタルが残っていたので、ナイターで腐食した。

腐食組織から推定される炭素量は附表 3 の右欄に示すとおりである。No7 の Sa₂ 部 (基部)、No9 の Sa₂ 部 (基部)、No16 の Sa₁ 部 (刃部)、No17、No22、No23 Eg 部、および No23Rg 部にはそれぞれ 0.5~0.6 mass% C、0.4~0.5mass% C、0.5~0.6mass%、0.5~0.6mass%、0.6~0.7mass%、0.5~0.6mass% C、および 0.4~0.5mass% の鋼が配されている。No6 は、炭素量の異なる鋼を配して製作された可能性が高い。No7、No9、No16、No22、および No23 についても No6 と同様の可能性を考慮することができるが、炭素濃度分布が不均一な鋼が使用された可能性もある。この点を明確にするためには、当該資料から広領域にわたる試料を抽出し、確認する必要がある。

No9Sa₁ 部から抽出した試料にはいたるところに亀裂や空隙がみられる (附図 4 b₁)。マクロ組織枠で囲んだ内部には、金属光沢を呈する微細な線状の結晶 (Cm) またはその欠落孔が層状に並び島状組織を形成する領域がみられる。EPMA による分析によって、結晶 Cm は Fe、C を主成分とすることが確かめられた。結晶 Cm は錆化前の鋼のパーライト [αFe とセメントイト (Fe_3C) の共析組織] 中のセメントイトと推定される。結晶 Cm またはその欠落孔によって構成される領域を錆化前の地金のパーライトとし、錆化による体積膨張を無視すると、ミクロ組織に占める面積割合から、錆化前の地金は炭素含有量が 0.2~0.3% の鋼とみることができる。

No1、No2、No4、No5、No8 Sa₁・Sa₂、No10Sa₁・Sa₂、No14、No18、および No19 から抽出した試料にも No9 Sa₁ 同様、セメントイトまたはその欠落孔によって構成される組織が観察される (附図10、附図11、附図12、附図13)。それらの組織がマクロ組織に占める面積割合から、上記鉄器から抽出した試料の、錆化前の地金の推定炭素量は、附表 3 右欄に示すとおりとなる。

No7Sa₁ 部および Sa₂ 部から抽出した試料には、灰色を呈する Fe-Ti-Al-Mg-V-O 系の鉄チタン酸化物 (XT) が残存する非金属介在物が観察される (附図 3 b₃・b₄、附図 3 c₃)。No5、No9Sa₁・Sa₂、No10Sa₂、No11Sa₂・Sa₃部、No14、No15、No16Eg、No17、No21、No22、No23Rg、No24、No26、および No28 から抽出した試料にも鉄チタン酸化物が残存する非金属介在物が見出されている (附図 4、附図 5、附図 6、附図 7、附図 8、附図 9、附図10、附図12、附図13)。

カラー写真 1 の EPMA による含有元素濃度分布のカラーマップが示すように、No16Sa₁ から抽出した試料に見出された非金属介在物に残存する化合物 XT は、Ti-Al-Mg-O 系で、酸化鉄は数%含有されるにすぎない。高還元状態下で生成した化合物である。

No1、No4、No8Sa₁・Sa₂、No13、No16Sa₂、No23Sa₁、No25、および No27 から抽出した試料に観察され

る非金属介在物は、酸化鉄(10)、酸化鉄とガラス化した領域(GI)、ガラス化した領域、または微細粒子を内包するガラス化した領域(Ma)によって構成され、鉄チタン酸化物はみられない(附図6、附図8、附図9、附図10)。鉄チタン酸化物の有無という点で、非金属介在物組成に差異がみられる鉄器が混在することが分かる。

№9Sa₁部から抽出した試料の錆には、金属光沢を呈する微細粒子がみられる(附図4b₂)。EPMAによる定性分析結果(附図4b₂)、およびカラー写真-2のEPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップによって、銀(Ag)粒と判定される。

№3Sa₁・Sa₂、№11Sa₁、№12、および№20から抽出した試料は錆化が著しく、錆化前の地金の組織を推定できる領域を見出すことはできなかった(附図5、附図12)。

2) 鉄塊系資料の調査結果

№43は資料表面の全域が赤錆で覆われている。抽出した試料のマクロ組織はそのほぼ全域が錆で構成され、局所的に鉄滓が混在している(附図14)。マクロ組織領域R₁には、金属光沢を呈する線状の結晶(PCm)が観察される。カラー写真3のEPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップが示すように、結晶PCmはFe、Cを主成分とする。結晶形からPCmは析析セメントタイトで、№43は過共析鋼と判定される。マクロ組織領域R₂は、金属粒(Me)、鉄チタン酸化物(XT)、およびガラス化した領域(GI)によって構成される(附図14)。

№34も鉄錆と鉄滓が混在した試料である。抽出した試料のマクロ組織には、いたところに亀裂や空隙がみられ、錆化が進んでいる。領域R₁内部のミクロ組織は№43領域R₁同様、全域が析析セメントタイトによって構成される。領域R₂内部は、酸化鉄[IO:形状からウスタイト(化学理論組成:FeO)と推定される]、鉄チタン酸化物(XT)、Fe-Mg-Si-O系化合物[XF:マグネシウムを固溶した鉄かんらん石{2(Fe, Mg)O·SiO₂}と推定される]、および微細粒子を内包するガラス化した領域からなる(附図

14)。

附表4に示す抽出した試料の化学成分分析結果から明らかのように、№43および№34のT.Feはそれぞれ57.83mass%、66.20mass%で、0.005mass%以上のCu、Ni、Co、および0.023mass%以上のMnが含有される。

3) 椀状滓

附図15a₁・a₂は富田下大日23号住居跡から出土した椀状滓(№29)である。2つのほぼ同形状の椀状滓が固着した資料である。Sa₁部から抽出した試料にはいたるところに空隙がみられる(附図15b)。マクロ組織内部は、灰色の粒状領域(IO)、暗灰色の柱状領域(XF)、および微細粒子を内包するガラス化した領域(Ma)によって構成される(附図15c₁・c₂)。領域IOは酸化鉄で、形状を考慮するとウスタイト(化学理論組成FeO)、領域XFはFe-Mg-Si-O系化合物[マグネシウムを固溶した鉄かんらん石{2(Fe, Mg)O·SiO₂}]と推定される(カラー写真4:附図15c₁-c₂)。Sa₂部から抽出した試料もSa₁部から抽出した試料とほぼ同じ鉄組成をとる。

№40も2つの椀状滓が固着した資料である(附図16)。上部から抽出した試料(マクロ組織領域R₁に対応)は、鉄粒(Me)、ウスタイトと推定される領域(IO)、マグネシウムを固溶した鉄かんらん石と推定される領域(XF)、および微細粒子が混在したガラス化した領域(Ma)、下部から抽出した試料(マクロ組織領域R₂に対応)は、ウスタイトと推定される領域(IO)、2(Fe, Ca)O-かんらん石と推定される領域(OI)、および微細粒子が混在したガラス化した領域(Ma)によって構成される(附図16)。

附表5左欄は鉄滓の化学成分分析値を示した。№29および№40から抽出した試料のT.Feは46~65mass%、Siは4.7~6.1mass%、Alは0.8~2.6mass%である。酸化鉄に富む鉄滓と粘土状物質が反応し生成した資料と推定される。2資料ともSa₁部およびSa₂部から抽出した試料間での化学組成上に顕著な差異はみられない。同一の操作によって生成した2つの鉄滓が固着したものと思われる。

附表2から明らかなように、No31、No32、No33、No35、No36、No41、およびNo45も塊状である。

No32から抽出した試料の領域 R₁は、灰色の領域 (IO)、暗灰色の領域 (XF)、および微細な粒子が残存するガラス化した領域 (Ma)によって、領域 R₂は金属鉄 (Me)、酸化鉄 (IO)、暗灰色の領域 (XF)、および微細な粒子が残存するガラス化した領域 (Ma)によって構成される。領域 R₁にみられる灰色の領域内には、やや暗灰色の領域 (XT)が混在している。EPMAによる分析によって、領域 IOは酸化鉄、領域 XTは鉄チタン酸化物、領域 XFはFe-Mg-Si-O系化合物 [マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 {2(Fe, Mg)O·SiO₂}と推定される]であることがわかった(附図17)。No33領域 R₁もNo32領域 R₁とほぼ同じ組織である(附図17)。No33領域 R₂はその全域がFe-Mg-Si-O系領域 (XF: マグネシウムを固溶した鉄かんらん石と推定される)および微細粒子が混在したガラス化した領域 (Ma)によって構成される(附図17)。

No36から抽出した試料のマクロ組織領域 R₁および R₂は、灰色の酸化鉄 (IO: 形状からウスタイトと推定される)、やや暗灰色を呈する鉄チタン酸化物 (XT)、暗灰色の Fe-Mg-Si-O系化合物 [XF: マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 {2(Fe, Mg)O·SiO₂}と推定される]、および微細粒子を内包するガラス化した領域 (Ma)からなる(附図18)。No31およびNo35の領域 R₁および R₂も、No36マクロ組織領域 R₁および R₂とほぼ同じ鉱物組成である(附図16、附図18)。

No41から抽出した試料は、灰色の酸化鉄 (IO: 形状からウスタイトと推定される)、暗灰色の Fe-Mg-Si-O系化合物 [XF: マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 {2(Fe, Mg)O·SiO₂}と推定される]、および微細粒子を内包するガラス化した領域 (Ma)からなる(附図19)。

No45から抽出した試料のマクロ組織領域 R₁は、鉄粒 (Me)、灰色の酸化鉄 (IO: 形状からウスタイトと推定される)、やや灰色の鉄チタン酸化物、やや

暗灰色の Fe-Mg-Si-O系化合物 [XF: マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 {2(Fe, Mg)O·SiO₂}と推定される]、暗灰色の Fe-Al-O系化合物 [Ha: ハーシナイト (FeO·Al₂O₃)と推定される]、および微細粒子を内包するガラス化した領域 (Ma)からなる(附図19)。

領域 R₂は、斜長石と推定される鉱物 (Pl)および溶融または部分溶融した組織 (Ma)によって構成される(附図19)。領域 R₂は塊状の凸部に対応する。凸部は溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われていた可能性が高いことを示している。

塊状中に分類された資料の中にも、鉱物組成の異なるものが混在することが明らかとなった。No31、No32、No33、No35、No36、No41、およびNo45の T.Feは46~60mass%、Tiは0.86~3.82mass%、Siは4.67~9.64mass%、Caは1.00~1.92mass%、Alは1.14~3.49mass%である(附表5)。No29およびNo40同様、酸化鉄に富んだ鉄滓である。

4) 粘土状資料

No37は塊状を呈し、凸部は溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われている。抽出した試料のマクロ組織には、いたるところに空隙が認められる。凸部内部に残存する鉄滓は鉄チタン酸化物 (XT)、Fe-Al-O系領域 [Ha: ハーシナイト (FeO·Al₂O₃)と推定される]、Fe-Mg-Si-O系領域 (XF)、および微細粒子を内包するガラス化した領域 (Ma)からなる(附図20)。

T.Feは42.10mass%、Siは11.6mass%、Tiは2.90mass%、Caは2.10mass%、Alは4.96mass%で、粘土状物質と酸化鉄に富む鉄滓が反応した資料である(附表5)。

5) 塊状

No30、No38、No39、No42、およびNo44は塊状である。

No30は黒褐色の鉄滓と赤錆が混在した資料で、いたるところに亀裂がみられる。著しく発泡している。抽出した試料には多数の空隙がみられ、その全域が酸化鉄 (IO)と鉄チタン酸化物 (XT)が混在した領

附表-5 鉄滓の分析結果

No	Sa	資料番号	化学成分 (mass%)											鉱物組成	
			T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg		V
29	1	下21	64.70	0.023	0.028	0.011	0.031	0.08	0.346	4.72	0.673	0.805	0.283	0.024	IO, XF, Ma
			62.60	0.007	0.044	0.002	0.009	0.19	0.367	6.01	1.07	1.48	0.435	0.051	
31	1	下8	51.90	0.003	0.192	<0.001	0.005	0.18	2.61	7.79	2.20	2.60	1.19	0.210	IO, XF, XT, Ma
			58.40	0.001	0.164	<0.001	0.004	0.13	2.36	4.67	1.52	1.89	1.08	0.193	
32	1	下6	56.50	0.002	0.108	<0.001	0.003	0.12	1.91	7.21	1.92	2.55	0.948	0.183	(IO, XT, XF, Ma), (Me, IO, XT, XF, Ma)
			53.20	0.002	0.125	<0.001	0.004	0.11	1.92	6.91	1.90	2.61	1.13	0.187	
33	1	下7A	46.20	0.003	0.091	<0.001	0.003	0.10	0.893	9.64	1.90	3.21	0.984	0.102	(IO, XT, XF, Ma), (XF, Ma)
			50.80	0.006	0.094	0.002	0.011	0.05	1.09	7.36	1.00	2.65	1.11	0.120	
35	1	下33	51.30	0.001	0.233	<0.001	0.006	0.11	3.82	4.95	1.26	3.49	1.56	0.412	IO, XT, XF, Ma
			52.20	0.002	0.196	<0.001	0.006	0.17	2.91	6.95	1.29	2.81	1.26	0.152	
36	1	下35	52.20	0.002	0.196	<0.001	0.006	0.17	2.91	6.95	1.29	2.81	1.26	0.152	IO, XT, XF, Ma
			42.10	<0.001	0.228	<0.001	0.004	0.09	2.90	11.6	2.10	4.96	2.22	0.202	
37	1	下41	42.10	<0.001	0.228	<0.001	0.004	0.09	2.90	11.6	2.10	4.96	2.22	0.202	IO, XF, XT, Ma
			44	62.80	0.017	0.011	0.016	0.033	0.02	0.238	2.25	0.641	0.683	0.147	
38	1	下44	62.80	0.017	0.011	0.016	0.033	0.02	0.238	2.25	0.641	0.683	0.147	0.008	IO, XT, XF, Ma
			34.16	0.003	0.331	0.004	0.011	0.19	3.45	10.9	4.95	5.55	1.75	0.179	
39	1	下2	34.16	0.003	0.331	0.004	0.011	0.19	3.45	10.9	4.95	5.55	1.75	0.179	XT, Ha, XF, Ma
			46.29	0.006	0.042	0.004	0.005	0.08	1.10	6.07	1.80	2.54	0.446	0.043	
40	1	下3	46.29	0.006	0.042	0.004	0.005	0.08	1.10	6.07	1.80	2.54	0.446	0.043	(Me, IO, XF, Ma), (IO, Of, Ma)
			53.02	0.004	0.053	0.003	0.006	0.08	1.15	5.44	2.09	2.11	0.572	0.064	
41	1	下6	59.35	0.005	0.022	0.003	0.006	0.10	0.869	5.07	1.28	1.14	0.451	0.004	IO, XF, Ma
			54.47	0.014	0.211	0.001	0.009	0.10	4.01	3.70	0.923	2.88	1.15	0.459	
42	1	下26	54.47	0.014	0.211	0.001	0.009	0.10	4.01	3.70	0.923	2.88	1.15	0.459	IO, XT, XF, Ma
			64.23	0.001	0.195	0.001	0.004	0.06	2.64	2.29	1.42	1.32	0.949	0.236	
44	1	下30	64.23	0.001	0.195	0.001	0.004	0.06	2.64	2.29	1.42	1.32	0.949	0.236	IO, XT, XF, Ma
			49.04	0.004	0.176	0.003	0.006	0.10	2.87	6.50	1.53	3.24	1.18	0.237	

注1) Noは表2に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

注2) PCm: 初析セメントライト、酸化鉄、XT: 鉄チタン酸化物、Ha: Fe-A-O系化合物、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、GI: ガラス質イ酸塩、Ma: マトリックス。

域、鉄かららん石と推定される領域 (XF)、および微細な粒子を内包するガラス化した領域 (Ma) によって構成される (附図19)。No38、No42、およびNo44から抽出した試料もほぼ同様の組織をとる (附図16、附図21)。

No39を除く上記4点のT.Feは51.90~64.23 mass%、Tiは0.238~4.01mass%、Siは2.25~7.79 mass%、Caは0.641~2.20mass%、Alは0.683~2.60mass%である (附表5)。酸化鉄に富む鉄滓で、Ti、Si含有量はばらつきがみられる。

No39から抽出した試料は、ガラス化した領域中に灰色のFe-Mg-Si-O系領域域(XF)が点在する組織によって構成される領域 (附図20マクロ領域R₁)に、鉄チタン酸化物(XT)、Fe-Al-O系領域[Ha: ハーシナイト(FeO·Al₂O₃)と推定される]、Fe-Mg-Si-O系化合物(XF: マグネシウムを固溶した鉄かららん石と推定される)、および微細粒子を内包するガラス化した領域 (Ma) によって構成される領域 (附図20マクロ領域R₂)が接した組織をとる。

No39のT.Feは34.16%で、他の5点の鉄滓よりも低レベルである。Siは10.9%、Caは4.95%、Alは

5.55%、Tiは3.45%含有される。上述の組織解析結果と考え合わせれば、溶融または部分溶融した粘土状物質と鉄滓とが反応し、生成した資料とみることができる。

第6項 考察

1) 鉄器の製作に使用された地金の組成

鉄器は鋼を素材とする鋼製鉄器と、鉄鉄を素材とする鋳造鉄器に分類される。調査した鉄器から抽出した試料に、鉄鉄組織は見出されない。No3、No11 Sa₃、No12、およびNo20を除く資料は鋼製鉄器である。No3、No11 Sa₃、No12、およびNo20から抽出した試料についても、鋼を素材とすることを示す自然科学的根拠は得られなかったが、鎌、鋸先、および鎌という器種を考慮すると、鋼製鉄器の可能性が高い。

No6 (槌) から抽出した試料は、共析鋼 (炭素量約0.8mass%の鋼) に近い組成の鋼と0.1mass% C以下の亜共析鋼が配されている。槌は、炭素量の異なる鋼を配して製作された可能性が高い。

No7 (袋状鉄弁)、No9 (鋸)、No16 (鎌)、No22 (刀子)、およびNo23 (鎌) についても同様の可能性が考

えられる。とりわけ鎌については刃部に高炭素鋼が配されていたものと推定される。鋸については高炭素鋼と低炭素鋼を合わせ鍛えて製作された可能性がある。これらの点については、同一資料から広領域にわたって試料を抽出し、確かめる必要がある。

上記6資料 (No 6、No 7、No 9、No 16、No 22、およびNo 23)、および錆化が著しくメタル組織を推定する領域を見出すことができなかったNo 3、No 11Sa₁、No 12、No 13、No 20、およびNo 26を除く他の鉄器は、炭素量0.5%以下の亜共析鋼を素材としている。富田下大日・富田漆田両遺跡出土の鉄器は、基本的に亜共析鋼を用いて製作されているが、部分的に共析鋼に近い組成の鋼が配されていることがわかった。平安時代に炭素量の異なる鋼が製造され、鋼製鉄器製作に当たって意図的に使い分けられていたものと推定される。

2) 地金組成に基づく鉄器の分類

古代の鋼製造法については不明な点が多く、複数の製造法が提案されている^{12・13}。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、最終的に得られる鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ抽出した試料の化学組成を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。製造法の如何に係わらず、地金を精密に分類する方法の確立が急務である。

出土資料を調査対象とする場合、埋蔵環境下からの富化についても吟味する必要がある。5-1で述べたとおり、富田下大日・富田漆田両遺跡出土鉄器の内部および資料表面から抽出した試料の比較によって、Cu、Ni、Co、およびPの4成分については、埋蔵環境下からの富化の影響が乏しいこと、Mn、Tiについては埋蔵環境からの富化の心配があり、錆試料における分析値の取り扱いには注意を要することがわかった。

Cu、Ni、Co、およびPのうち、Pを除く3成分は、

鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタル中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。Pは鋼製造条件によって鋼への固溶量に変化する。同一の原料鉱石を用いたとしても鋼の製造法や製造条件によって鋼中の含有量が変わるため、資料分類する際の指標元素として使用するには不向きである¹⁴。

資料表面から抽出した試料のNiおよびCo含有量は、いずれも0.005mass%未満である。附表3の中で、No 3 Sa₂を除く28資料の内部から抽出された35試料には0.005mass%以上のNiが、36試料全てに0.005mass%以上のCoが含有されている。従って、上記35試料に含有されるNi、36試料に含有されるCoについては、そのほとんどがメタルに含まれていたとみることができる。

抽出した試料に残存する非金属介在物は、鉄チタン酸化物が見出されたもの、鉄チタン酸化物が見出されなかったもの、非金属介在物が見出されなかったものの3つに分類される。

附図22a₁は、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された17試料の [(mass%Co)/(mass%Ni)] と [(mass%Cu)/(mass%Ni)] を、附図22a₂は、鉄チタン酸化物が見出された17試料の [(mass%Ni)/(mass%Co)] と [(mass%Cu)/(mass%Co)] を求め、それらの値を黒丸 (●) でプロットしたものである。No 7Sa₁、No 9Sa₂、およびNo 14を除く14試料 (No 5、No 7Sa₂、No 9Sa₁、No 10Sa₂、No 11Sa₂、No 15、No 16Eg、No 17、No 21、No 22、No 23Rg、No 24、No 26、およびNo 28) は附図22a₁では右下に、附図22a₂では左下にまとまって分布する。上記14試料については、ほぼ同じ組成の地金を素材にして製作されているとみることができる。

それぞれ離れた位置に分布する3試料のうち、No 9 Sa₁からはAg粒が検出されている。鉄器製作にあたって、Ag鉱物を随伴する鉄鉱石を始発原料として生産された原料鉄が使用された、あるいは地金製

造過程でAgまたはAg鉱物の添加が行われた、の2つが考えられる。後者の場合、Agを添加する意味についての検討が不可欠である。これらの点については、類例の蓄積を図り、解明する必要がある。

これまでに実施した鉄関連資料の金属考古学的調査によって、茨城県つくば市島名八幡前遺跡の8世紀前半に比定される鉄関連遺構から、鉄滓とともにAg粒が析出した鉄塊系資料が検出されている。8世紀から10世紀代にわたって、Ag粒が析出した地金を用いて鉄器が製作された、もしくはAg粒が析出した地金を素材にして製作され、利用不能となった鉄器の再利用が図られたことを想定される。No9 Sa₂ から抽出した試料がNo5をはじめとする14試料とほぼ同じ領域に分布するという事実は、鉄器製作にあたって、使用不能となった鉄器の再利用が図られた可能性があることを示している。No7 Sa₁ および Sa₂ から抽出した試料のCu、Ni、およびCo三成分比にはわずかではあるが差異がみられる。No9鉄鏝同様、組成の異なる地金を用いて鉄器が製作された可能性がある。これらの点についても、類例の蓄積を附図り、吟味する必要がある。

附図23b₁・b₂は、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった11試料の [(mass%Co)/(mass%Ni)] と [(mass%Cu)/(mass%Ni)]、[(mass%Ni)/(mass%Co)] と [(mass%Cu)/(mass%Co)] を白丸(○)でプロットしたものである。附図22a₁・a₂に比べばらつきが大きい。No4およびNo13は、附図22a₁・a₂のNo5をはじめとする14試料とほぼ同じ領域に分布する。他の9試料のうち8試料は、No1とNo16Rg、No6a₂、No8Sa₁・Sa₂、およびNo23、およびNo25とNo27の3つに分類することができる。

No6Sa₁は附図23b₁・b₂の上方に単独でプロットされる。これはNo6Sa₁は共析鋼に近い組成の鋼で、Cu含有量が高かったことに起因する可能性が高い。CoとNiの組成比はNo6Sa₂、No8Sa₁・Sa₂、およびNo23の4試料とほぼ同じであることを考慮すると、No6Sa₁もNo6Sa₂をはじめとする他の4試料と同じ

原料を用いて製造された鋼であった可能性を考慮することができる。

附図24c₁・c₂は、それぞれ非金属介在物が見出されなかった7試料、8試料に加え、No34およびNo43鉄塊系資料の値をプロットした。なお、No34およびNo43鉄塊系資料については、検出されたCu、Ni、およびCo三成分のほとんどが、資料中に混在する鉄滓中に固溶されているとみなした。

非金属介在物が見出されなかった試料のうち、No20およびNo3Sa₂を除く6試料は、附図の中央にほぼまとまって分布する。これらの中で、No3Sa₁、No12、No18、およびNo19の4試料は、附図22a₁・a₂のNo5をはじめとする14試料とほぼ同じ領域に分布する。No43鉄塊系試料は、No27に近接した位置にある。

附図25d₁、附図25d₂はそれぞれ、附図22a₁、附図23b₁、および附図24c₁、附図22a₂、附図23b₂、附図24c₂をまとめてプロットしたものである。この附図とこれまでの解析結果を整理すると、以下の6点を指摘することができる。

- ① 富田下大日・富田漆田両遺跡出土鉄器の製作に使用された地金には、Cu、Ni、およびCoの含有量比および非金属介在物組成の点で差異がみられる。ほぼ同じ時代に複数の場所で製造された鉄器または原料鉄が遺跡内に持ち込まれた、時代の推移とともに製品鉄器または原料鉄の供給場所が変わった、あるいは使用不能となった鉄器の再利用が附図られた可能性があることを示している。
- ② 金属考古学的調査を実施した28資料のうち、20資料はCu、Ni、およびCo三成分比が同じである。すなわち、調査した鉄器の6割強は、ほぼ同じ組成の原料鉱石を用いて製造された、とみることができる。富田下大日・富田漆田両遺跡への鉄器または原料鉄についての主たる供給地域があったと推定される。
- ③ ②の20資料のうち、地金中に非金属介在物が観察された16資料については、鉄チタン酸化物の有無という点で、非金属介在物組成に差

異がみられる。始発原料は同じであっても、鋼を製造するまでの処理方法が異なっていた可能性が高い。

- ④ 同一資料の2箇所から抽出した試料の間には、Cu、Ni、およびCo三成分比または非金属媒介物組成に差異がみられるものがある。鉄器を製作する際に、組成が異なる地金が用いられた可能性が高いことを示している。
- ⑤ №9鉄鏝にはAg粒が観察された。Ag粒が残存する鉄塊は、茨城県つくば市島名八幡前遺跡の、8世紀後半に比定される遺構から検出されている。地金中に残存するAg粒の意味について、地金の製造に使用された原料鉱石中にAg鉱物の混在、またはAgあるいはAg鉱物の人為的添加の2つが考えられる。前者の場合、供給地域の推定を、後者の場合、添加の意味を検討する必要がある。

- ⑥ 富田下大日遺跡12号住居跡から出土した№34鉄塊系資料と同じ化学組成を有する鉄器は、未確認である。富田津田遺跡64号住居跡から出土した鉄塊系資料に含有されるCu、Ni、およびCo三成分比とほぼ同じ三成分比を有する鉄器は、65号住居跡から出土した№27紡錘車である。これらの結果は①を支持している。住居跡の切り合い状況と調査資料の検出面を吟味し、その結果と金属考古学的調査結果を重ね合わせることによって、遺跡内における鉄器使用の変遷をより明確にすることができると思われる。

3) 古代における鋼製造法

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたっていない。その主因は、原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石)を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と鉄鉄に分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を抽出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素

量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある。製錬炉で直接に鋼がつくり出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鉤押法によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄(主に鋼からなるが鉄鉄も混在すると考えられている)〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので(溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1~0.2%の鋼を溶融するためには炉内温度を1550°C以上に保つ必要がある)¹⁰⁾、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の普及が示すように、遅くとも9世紀には鉄鉄を生産する技術、すなわち炉内で生成した鉄鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が提示されている。²²⁾ 得られた鉄鉄を溶解し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作される。また、生産された鉄鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は鉄鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼(鉄)²³⁾法に位置づけられる。

鉄鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶がよく知られている。たたら吹製鉄には鉄押法と鉤押法の2つの方法がある。後者における生産の主目的物は鉤鉄(主として鋼からなる鉄塊)、前者は炉外に流し出される鉄鉄で、副生成物として炉内に鉤鉄もできる。鉄押法において鉤鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。

このようにして生産された鉄鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その

上に鉄銑を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた鉄銑は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焰にふれ酸化され、鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である銑鉄とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせられ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている。上述から明らかのように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質が異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とはほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化によって局部的に鉄銑の脱炭が図られるが、溶銑(溶融した鉄銑)を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている^{25, 26}。この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかのように、古代には鉄に関する生産設備として少なくとも、①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに製錬炉としては、主として鉄銑を生産するための炉と、主として鋼を生産するための炉が、精錬炉については鉄銑を局部的に溶融し脱炭して鋼を製造するための炉と、溶銑を準備した後それを脱炭して鋼を製造するための炉(設備)が、鍛冶炉については精錬鍛冶炉と鍛錬鍛冶炉、または小鍛冶炉があった可能性があり、検出された炉跡の残存状況、出土資料の形状と組成でただちに生産内容を決定することはきわめて危険である。

生産設備の復元を可能な限り行い、生産に使用された道具類の使用法について検討する。それらに伴って出土した資料の形状や組成、最終製品の組成を加味し、生産実態を推定する必要がある。以下

ではこの点に留意し、考古学的発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、住居跡から検出された鉄塊系資料と鉄滓の成因について検討する。

4) 住居跡内における生産活動

既述のとおり、発掘調査区域内において鉄関連遺構は未検出である。従って、遺構から生産設備に関する情報を得ることはできない。金属考古学的方法で調査した鉄滓は、椀状滓と塊状滓に分類される。前者は椀状を呈した設備または道具の中で生成した資料とみることができる。

椀状滓の中でNa29およびNa40は、ほぼ同形状の椀状滓が2つ直上に重なり固着した資料である。凸部に木炭の噛み込みはみられない。このような形状の資料が、木炭が残存する炉底部において偶発的に生成したとみることが難しい。粘土状物質で製造された椀状の容器が溶融または部分溶融した後、固着したものと推定される。溶融または部分溶融した粘土状物質に鉄滓が固着した資料(Na37)の検出は、操作の過程における上記椀状の容器の使用を支持している。

椀状容器使用の意味として、融液の生成を考慮することができる。溶融温度の関係から、鉄に関する操作に限定すれば、溶銑が想定される。遺跡内から鋳型は未検出であるため、鋳造の実施を主張することは難しい。考えられるのは、溶銑の脱炭による鋼の製造である。この場合、溶銑を確保し、脱炭を進行するための熱源が不可欠である。前者は木炭、後者は空気酸化によつたと推定される。とりわけ後者の空気酸化には、軌道内径が細い、ノズル状の羽口が必要であったにちがいない。調査区域内から羽口は未検出である。今後の調査で、軌道内径が異なる2種類の羽口が検出されれば、空気酸化による溶銑脱炭を一層明確にすることができる。

Na29およびNa40に含有される酸化鉄(ウスタイトと推定される)は、主として溶銑の再酸化物と推定されるが、この点についても再現実験等によって確認する必要がある。

No31、No32、No33、No35、No36、No41、およびNo45は1個の椀状滓である。No41を除く他の6資料には、鉄チタン酸化物が残存している。これら6資料については、No29およびNo40同様、鉄鉄の脱炭過程で生成したとする見方とともに、鉄チタン酸化物を含む原料鉱石を製錬することによって得られた、鉄滓が混在した鋼塊を精錬鍛冶して純化する際に、炉底部で生成したとみることできる。No41については、鉄鉄の脱炭、精錬鍛冶に加え、純化した鋼を過熱・鍛打して目的とする器形に造形するという、小鍛冶の過程で、炉底部に生成した可能性が考えられる。

No31をはじめとする7資料の凸部にはNo29およびNo40同様、木炭の噛み込みはみられない。12号住居跡からはNo31、No32、およびNo33椀状滓とともに、鉄チタン酸化物が残存した鉄滓と過共析鋼が混在したNo34鉄塊系資料が検出されている。6-2で述べたように、ほぼ同じ組成の原料鉱石を用いて生産された原料鉄を処理して製造された鋼を素材とすると推定される16点の鉄器には、鉄チタン酸化物の有無という点で、非金属系在物組成に差異がみられた。始発原料は同じであっても、鋼を製造するまでの処理方法が異なっていた可能性が高いことを示している。これらの金属考古学の調査結果を考え合わせると、No31をはじめとする7資料も、鉄鉄の脱炭過程で生成したとみることができる。

鉄チタン酸化物が残存する椀状滓と鉄チタン酸化物が見出されなかった椀状滓については、鉄鉄の脱炭過程で、鉄チタン酸化物を含む物質が造滓材として使用された、脱炭過程で使用された設備または道具に鉄チタン酸化物を含む物質が使用されていた可能性を考えることができる。前者の場合、炭素量の異なる鋼を人為的に製造するための方法が確立されていたという見方を加味し、造滓材使用の意味と具体的操作方法について検討する必要があるが、この点については今後の研究課題としたい。

鉄チタン酸化物が残存するNo30、No38、No39、No42、およびNo44塊状滓は、鉄チタン酸化物を含む原料鉱石を始発原料とする製錬、精錬鍛冶、鉄鉄の脱炭時

における生成に加え、鉄鉄を脱炭して製造された鋼を純化し整形するという鍛冶過程（近世たたら吹製鉄の大鍛冶における本場）での排出が考えられる。塊状滓単独でその成因を特定することは困難である。これまでの検討結果に基づけば、それらの中に、鉄鉄の脱炭時に生成、あるいは鉄鉄を脱炭して製造された鋼を純化し整形するという鍛冶過程で排出された資料が混在していた可能性は十分にある。

第7項 まとめ

富田下大日および富田漆田両遺跡から出土した鉄器、鉄塊系資料、粘土状物質、および鉄滓を金属考古学的に調査した結果、遺跡内では鉄鉄を脱炭して鋼を製造する。製造された鋼を使って、日常生活に必要な鋼製鉄器が製作されていたものと推定された。鋼製造に際して、人為的に炭素量の異なる鋼の造り分けが行われていた可能性についても検討する必要がある。

遺跡内では運び込まれた原料鉄に加え、利用不能となった製品鉄器を再利用して、鋼製鉄器が製作されていた可能性が高い。併せて製品鉄器そのものもたらされていたと推定される。原料鉄または製品鉄器の主たる供給場所に変化はなかったと考えられるが、複数の地域からの搬入があったことは確実である。今後、ほぼ同時代に比定される他の遺跡の調査結果と比較することによって、平安時代における群馬県下の鉄・鉄器生産と流通の実態に迫ることができると思われる。

注

- 1) 遺跡を発掘調査担当の本津博明氏からのご教授による。
- 2) 『上野四分僧寺・尼寺中園地城跡』群馬県教育委員会、1992。
- 3) 『荒砥上ノ坊遺跡II』群馬県教育委員会、1996。
- 4) 『三月血泊遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財事業団、2000。
- 5) 『中見遺跡群』財団法人群馬県埋蔵文化財事業団、2000。
- 6) 佐々木稔、村田明美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 7) No30のNi含有量は、試料表面から抽出した試料と同じであり、埋蔵環境下からの富化の影響は乏しい。
- 8) No2 No3 Sa、No5 およびNo23 EgのP含有量は、試料表面から抽出した試料と同じであり、埋蔵環境下からの富化の影響は乏しい。

- 9) 『金属顕微鏡組織』東北大学金属材料研究所編、丸善株式会社、1963年。
- 10) 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』佐藤知雄編、丸善株式会社、1968年。
- 11) Knox, R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel", *Archaeometry*, Vol. 6, 1963, pp. 43-45.
- 12) 大澤正己「古墳鉄器からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40。
- 13) 赤沼英男「中世後期における原料鉄の流通とその利用」『鉄と鋼の生産の歴史』株式会社雄山閣、2002年、pp.97-115。
- 14) 製鋼時に人為的に添加される合金元素の他に、不純物として製鉄原料や生産設備材料などから混入する微量元素が鉄鋼の性質に多大な影響を及ぼすことがある。たとえばCuについては鋼の大気中および海水中における耐食性を増すという利点を得られる一方、熱間加工性が問題となる。鋼中に溶解したCuの除去は、現代の精錬プロセスにおいても困難な課題である。Sは熱間加工時にろくろて融点の低いFeSが晶出し、鋼材をぜい化させる。この問題を解決するため現代製鋼では、溶解した鉄鉄や鋼に脱硫剤を添加してSを除去するとともに、MnやTiを合金元素として添加する。鋼中のPもその含有量の増加とともに鋼をぜい化するため、脱りんが一般的に行われている。加えてPはOとの親和力が比較的強く、鋼の溶接性、鍛造性を害することが知られている¹⁸⁾。鋼に混入する微量元素が最終的に得られる鋼の性質を左右するため、原料鉱石の化学組成については詳細な調査がなされている。そこで、原料鉱石中の微量元素と調査対象資料中の微量元素量を直接比較し、原料鉱石を推定する試みがとられてきたが、この方法による人文社会科学的研究結果との比較が可能な資料分類はなされていない。
- 15) 日本金属学会編『鉄鋼材料便覧』1981。
- 16) 『島名八幡前遺跡』財団法人茨城県教育財団、2003。
- 17) 各種の岩石、とりわけ大成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている¹⁹⁾。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して扱うことには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成分によって生成した鉄鉱床から採取されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 18) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、丸善、1981。
- 19) 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990、p.11。
- 20) 五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.1-79。
- 21) 五十川伸矢「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。
- 22) 関 達「古代末の北陸—富山湾岸部の遺跡群—」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。
- 23) 空気酸化により鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちに α -Feに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鉄器によく使用される亜共析鋼が鉄鉄を精錬してただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼（鉄）法という表現を用いた。
- 24) 村上英之助「村上・中津の往復遺跡」たたら研究、36・37、1996、p.78-88。
- 25) 赤沼英男「みらのくの地から中世の鉄をみる」ふえろむ、Vol. 2 No. 1、社団法人日本鉄鋼協会、1997年、pp.44-51。
- 26) 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術—中世の『和鉄』解明のために—」『製鉄史論文集たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000、pp.195-228。

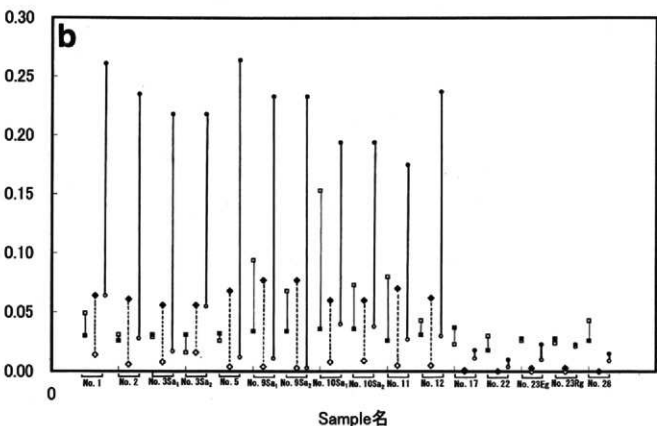
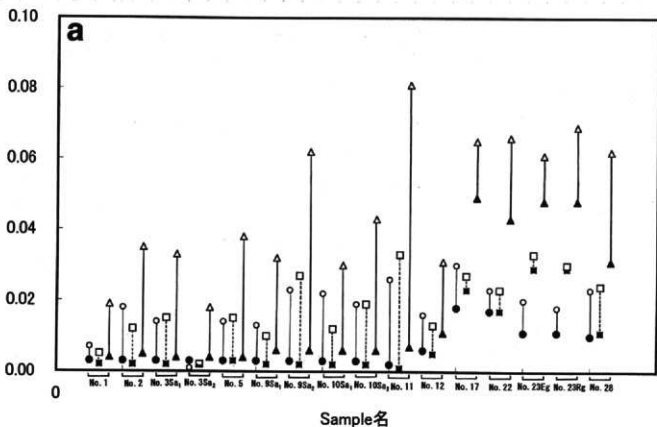


図1 調査対象とした鉄器内部および表層から抽出した試料に含有される微量元素濃度の比較

- a : Cu・Ni・Co 三成分の比較
 ○● : 試料内部および試料表面の Cu 含有量 □■ : 試料内部および試料表面の Ni 含有量
 △▲ : 試料内部および試料表面の Co 含有量
- b : P・Mn・Ti の比較
 □■ : 試料内部および試料表面の P 含有量 ◇◆ : 試料内部および試料表面 Mn 含有量
 ○● : 試料内部および試料表面の Ti 含有量

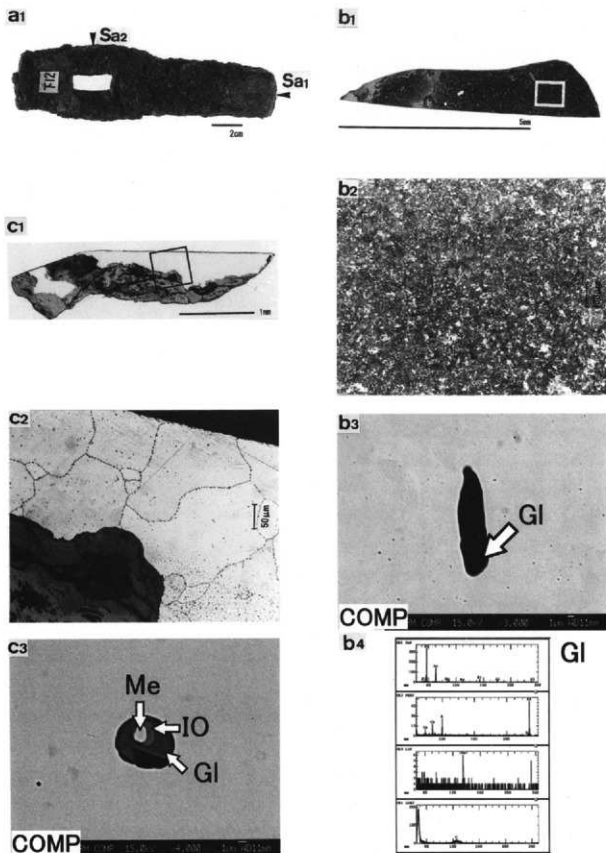


図2 No.6の外観と抽出した試料の組織観察結果

a₁: 外観。矢印は試料抽出位置。b₁・c₁: それぞれ a₁ の Sa₁ 部、Sa₂ 部から抽出した試料のマクロエッチング組織。エッチングはナイトールによる。b₂・c₂: それぞれ b₁、c₁ 中内部のマイクロエッチング組織。b₃・b₄: b₁ に見出された非金属介在物の EPMA による組成像 (COMP) と定性チャート。c₃: c₁ に見出された非金属介在物の EPMA による組成像 (COMP)。Me: Fe 粒、IO: 酸化鉄、GI: ガラス質ケイ酸塩。

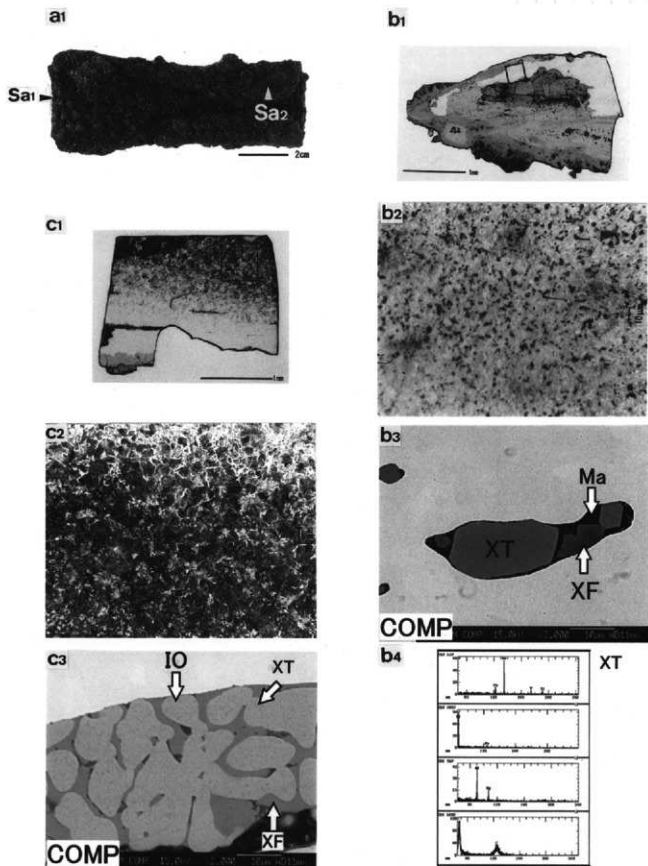


図3 Na7の外観と抽出した試料の組織観察結果

a: 外観。矢印は試料抽出位置。b₁・c₁: それぞれa₁のSa₁部、Sa₂部から抽出した試料のマクロエッチング組織。エッチングはナイタールによる。b₂・c₂: それぞれb₁、c₁種内部のミクロエッチング組織。b₃・b₄: b₁に見出された非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP) と定性チャート。c₃: c₁に見出された非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP)。IO: 酸化鉄、XT: 鉄チタン酸化物、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。

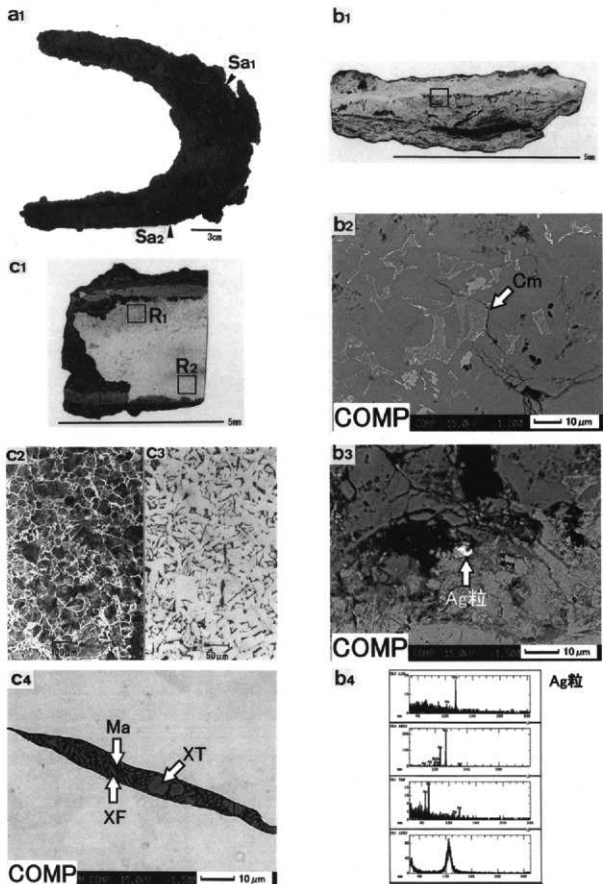


図4 No.9の外観と抽出した試料の組織観察結果

a₁: 外観。矢印は試料抽出位置。b₁: a₁のSa₁部から抽出した試料のマクロエッチング組織。b₂: b₁中内部のEPMAによる組成像 (COMP)。Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。b₃・b₄: b₁に見出された銀 (Ag) 粒のEPMAによる組成像 (COMP) と定性チャート。c₁: Sa₂部から抽出した試料のマクロエッチング組織。エッチングはナイタルによる。c₂・c₃: それぞれc₁領域R₁、R₂内部のミクロエッチング組織。c₄: c₁に見出された非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP)。XT: 鉄チタン酸化物、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。



	マクロエッチング組織	マイクロエッチング組織	非金属介在物組成
Sa ₁			
Sa ₂			
Sa ₃			
Sa ₄			

図5 No.11の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。マイクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。エッチングはナイトールによる。非金属介在物組成はEPMAにより分析。写真は組成像(COMP)。IO:酸化鉄、XT:鉄チタン酸化物、XF:Fe-Mg-Si-O系化合物、GI:ガラス質ケイ酸塩、Ma:マトリックス。


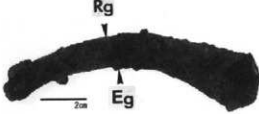

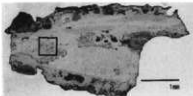
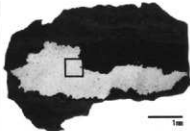
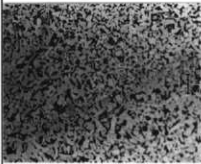
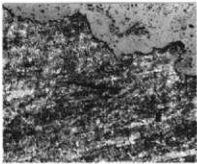
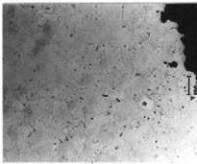
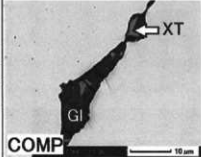
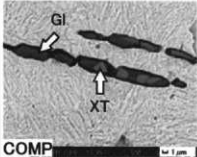
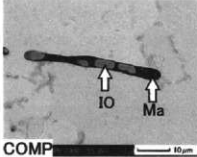
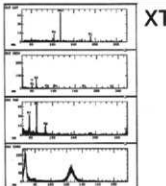
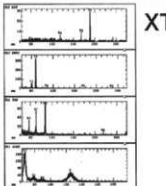
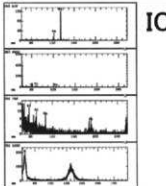
		No.15	No.16	
			Eg	Rg
外観				
マクロエッチング組織				
マイクロエッチング組織				
組成像 EPM Aによる非金属成分物の分析結果	定性チャート			
				

図6 No.15・No.16の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。マイクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。エッチングはナイタールによる。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

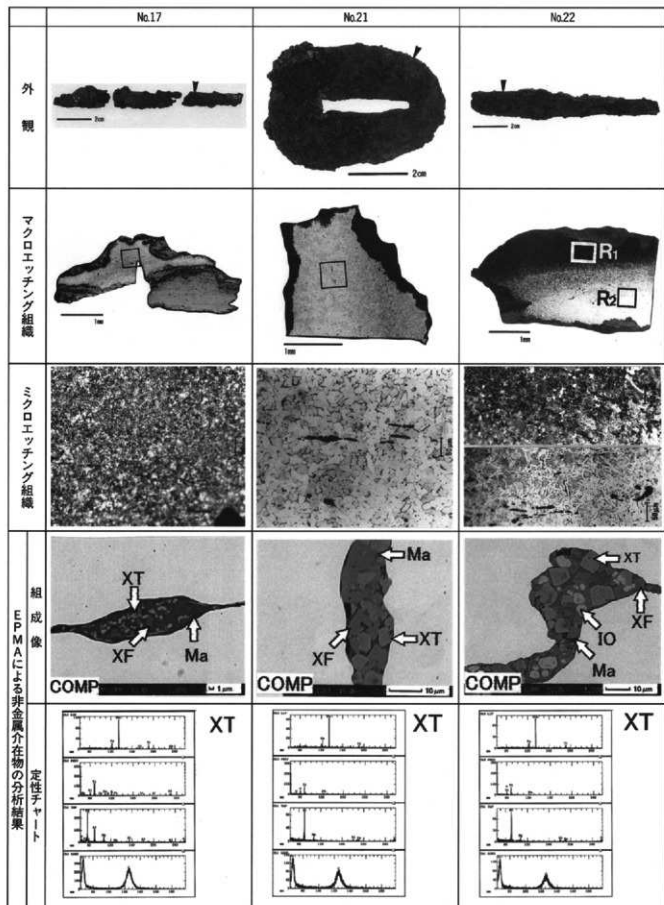


図7 No.17・No.21・No.22の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.17およびNo.21のマイクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。No.22のマイクロエッチング組織上段はマクロエッチング組織領域 R₁ 内部。マイクロエッチング下段はマクロエッチング組織領域 R₂ 内部。エッチングはナイタールによる。IO: 酸化鉄、XT: 鉄チタン酸化物、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。

		No.23		No.24
		Eg	Rg	
外観				
	マクロエッチング組織			
ミクロエッチング組織				
組成像	EPM Aによる非金属元素分析結果			

図8 No.23・No.24の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.23EgおよびNo.24のミクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部分。No.23Rgのミクロエッチング組織左はマクロエッチング組織領域R₁内部、ミクロエッチング右はマクロエッチング組織領域R₂内部。エッチングはナイターによる。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma：マトリックス。




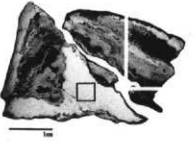
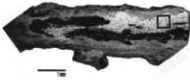

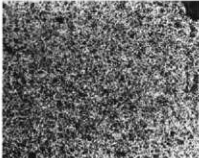
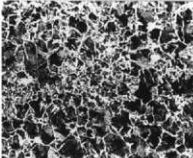
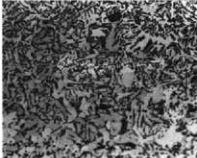
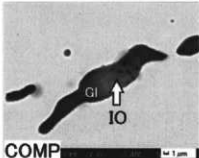
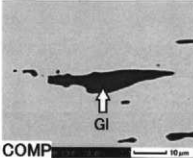
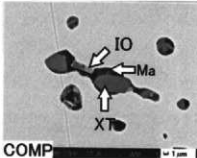
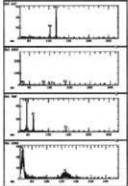
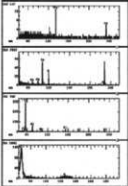
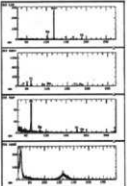
	No.25	No.27	No.28
外観			
マクロエッチング組織			
マイクロエッチング組織			
組成像 EPM Aによる非金属成分の分析結果 定性チャート			
			

図9 No.25・No.27・No.28の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。マイクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。エッチングはナイタルによる。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

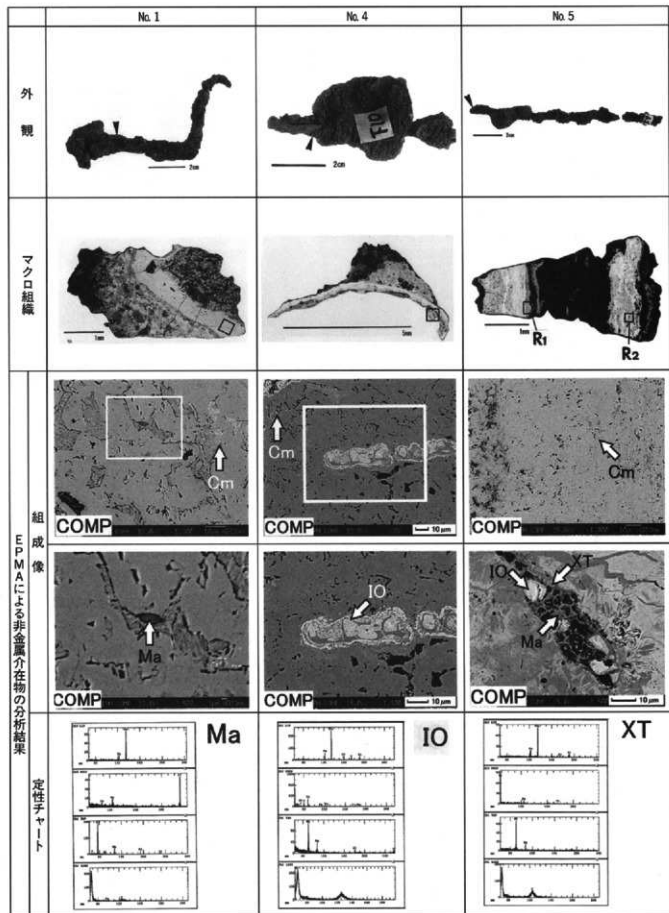


図10 No.1・No.4・No.5の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.1およびNo.4のEPMAによる組成像(COMP)上段はマクロ組織の枠内部。組成像下段は組成像上段の枠内部を拡大。No.5の組成像上段および下段はそれぞれ、マクロ組織領域R₁、R₂内部。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、Ma：マトリックス。

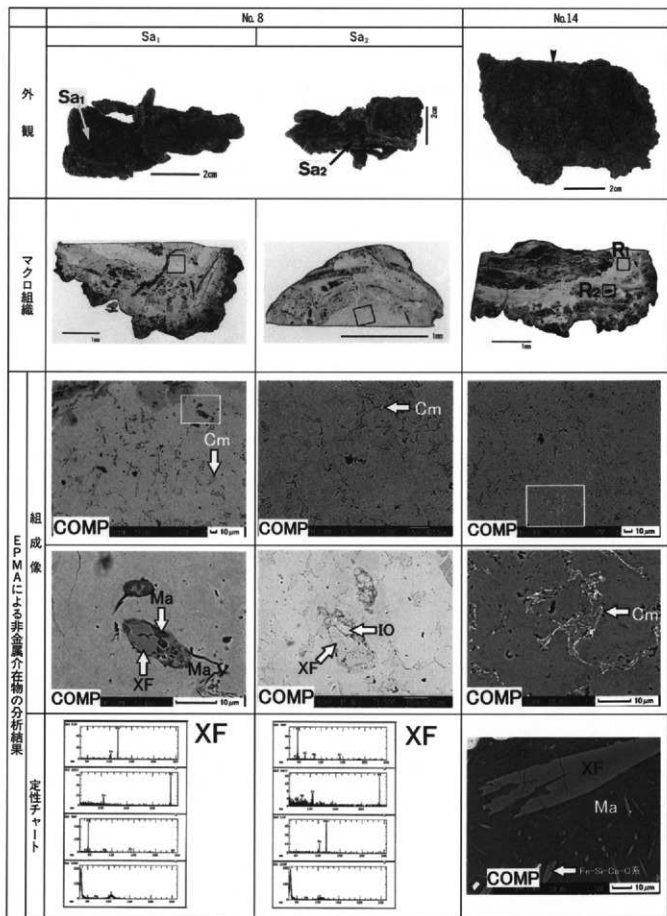


図11 No. 8 およびNo.14の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.8Sa₁およびNo.8Sa₂のEPMAによる組成像 (COMP) 上段は、マクロ組織の枠内部。No.8Sa₁の組成像下段は上段の枠内部。No.14の組成像の上段および下段は、それぞれマクロ組織領域 R₁、R₂内部。組成像中段は上段の枠内部。Cm はセメントライトおよびその欠落孔。IO: 酸化鉄、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。

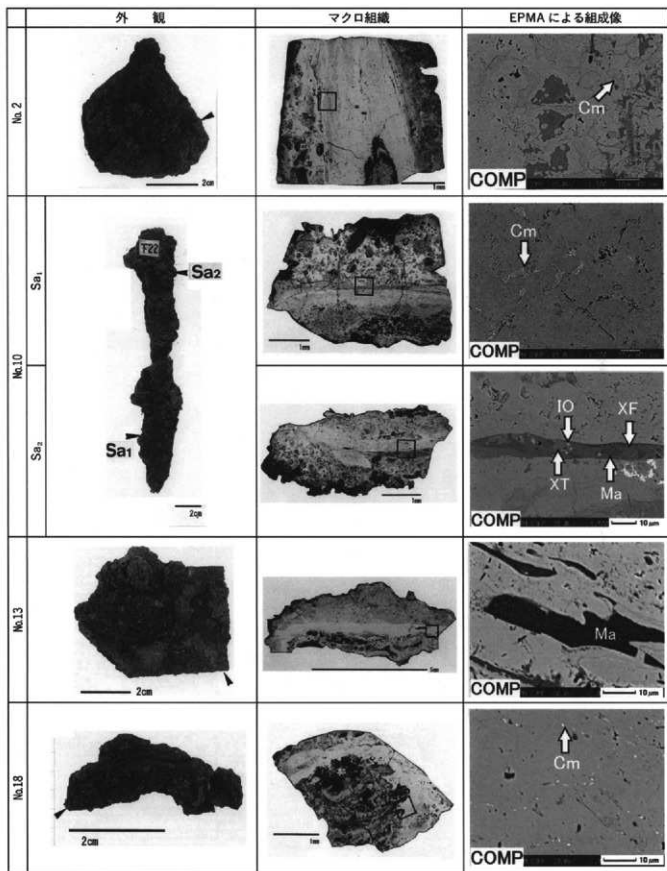


図12 No.2・No.10・No.13・No.18の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。EPMAによる組成像 (COMP) はマクロ組織の枠内部。Cmはセメントタイトまたはその欠落孔。IO: 酸化鉄、XT: 鉄チタン酸化物、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。

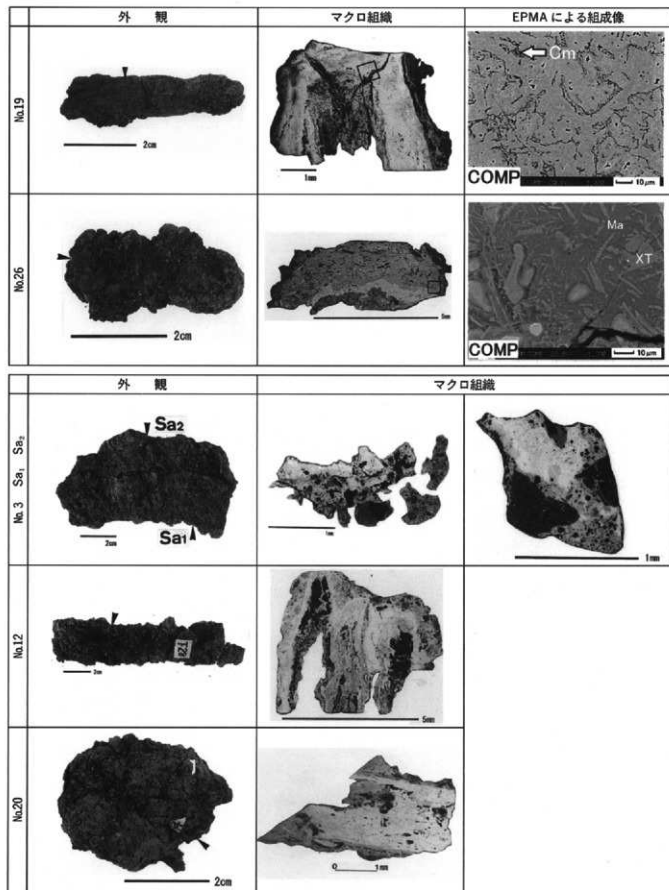


図13 No.3・No.12・No.19・No.20・No.26の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の欠印は試料抽出位置。EPMAによる組成像 (COMP) はマクロ組織の枠内部。Cmはセメンタイトまたはその欠陥孔。XT: 鉄ナタン酸化物、Ma: マトリックス。

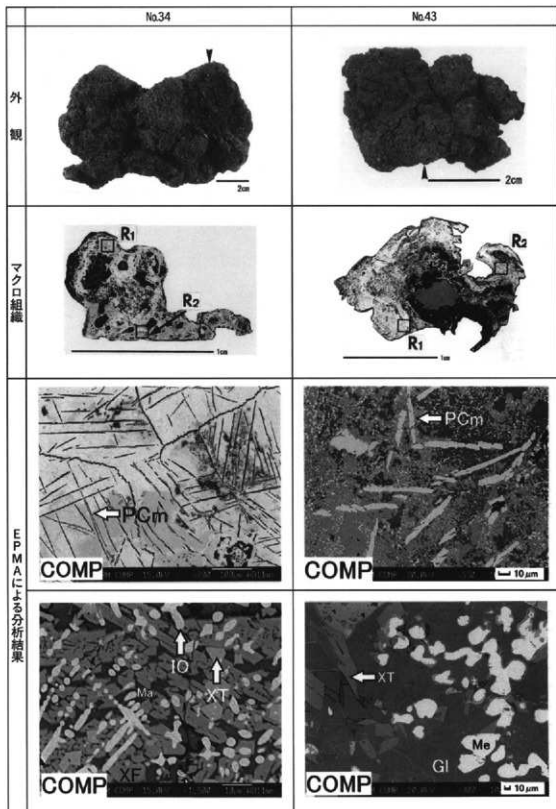


図14 No.34・No.43の外観と抽出試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。EPMAの組成像(COMP)上段はマクロ組織領域R₁内部、組成像下段はマクロ組織領域R₂内部。PCm: 初析セメント、Me: 鉄粒、IO: 酸化鉄、XT: 鉄チタン酸化物、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Gl: ガラス質ケイ酸塩、Ma: マトリックス。

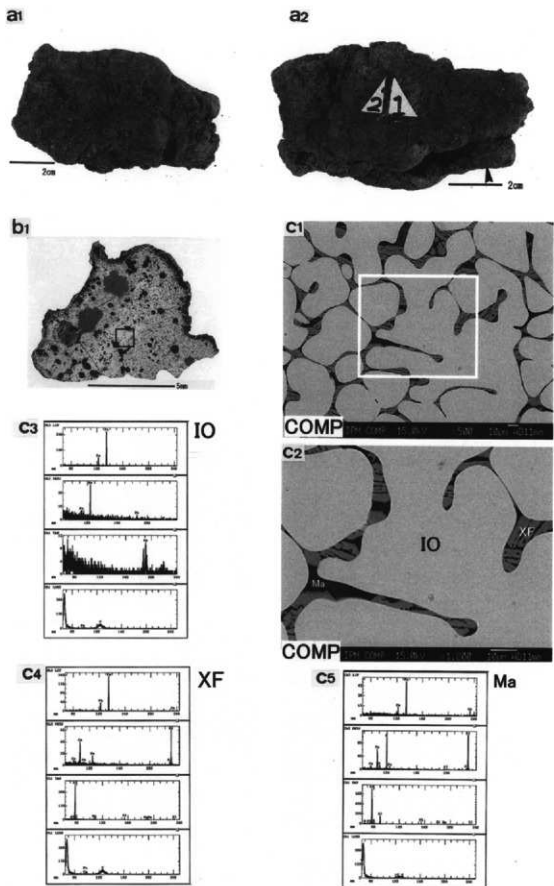


図15 No29から抽出した試料の組織観察結果。

a₁・a₂: 外観、矢印は試料抽出位置。b₁: マクロ組織。c₁-c₅: b₁枠内部のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。IO: 酸化鉄、XF: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。

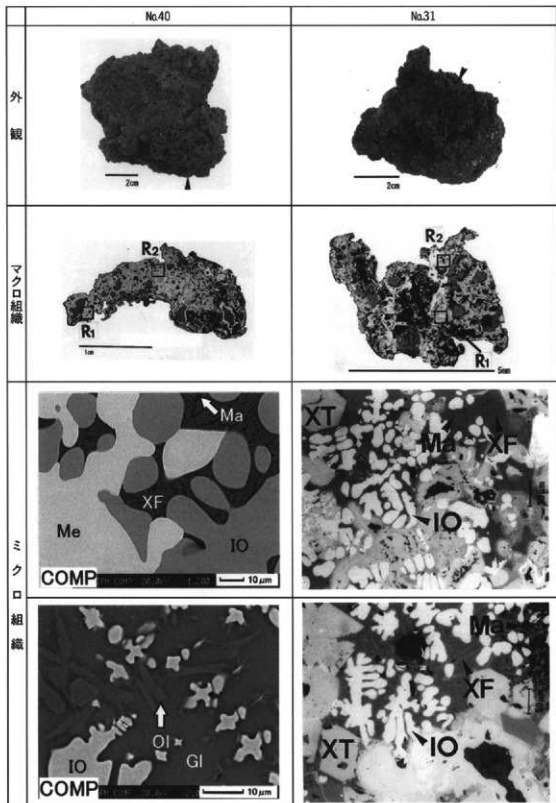


図16 No.40・No.31の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.40のEPMAの組成像 (COMP) およびNo.31のミクロ組織上段はマクロ組織領域 R₁内部、No.40の組成像下段およびNo.31のミクロ組織下段はマクロ組織領域 R₂内部。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ol：(Fe, Ca)-かんらん石と推定される領域、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

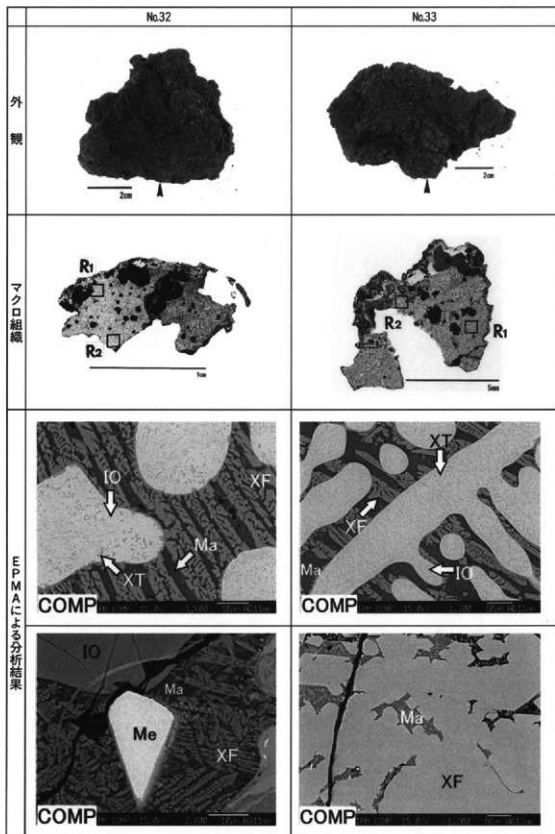


図17 No.32・No.33の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。EPMAの組成像(COMP)上段はマクロ組織領域R₁内部、組成像下段はマクロ組織領域R₂内部。Me：鉄粒、IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma：マトリックス。

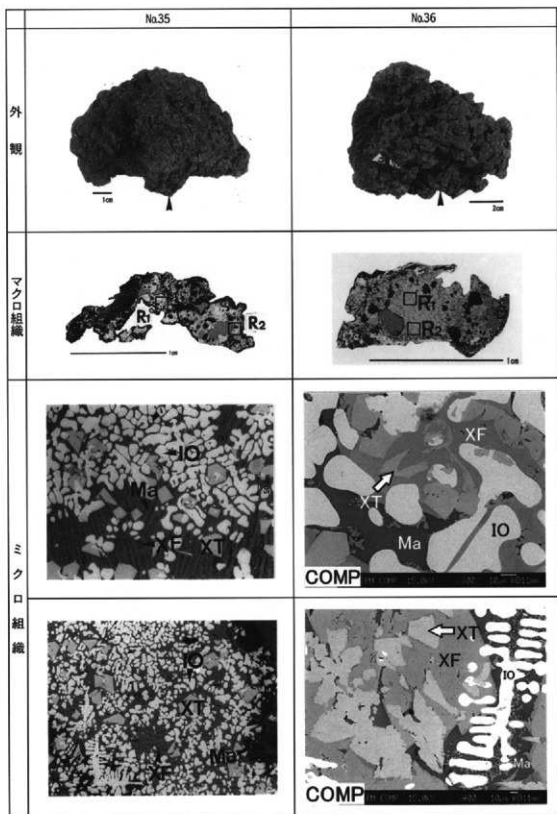


図18 Na35・Na36の外観と抽出試料の組織観察結果
 外観の矢印は試料抽出位置。Na36のEPMAの組成像(COMP)およびNa35のミクロ組織上段はマクロ組織領域R₁内部、Na36のEPMAの組成像(COMP)下段およびNa35のミクロ組織下段はマクロ組織領域R₂内部。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O化合物、Ma：マトリックス。

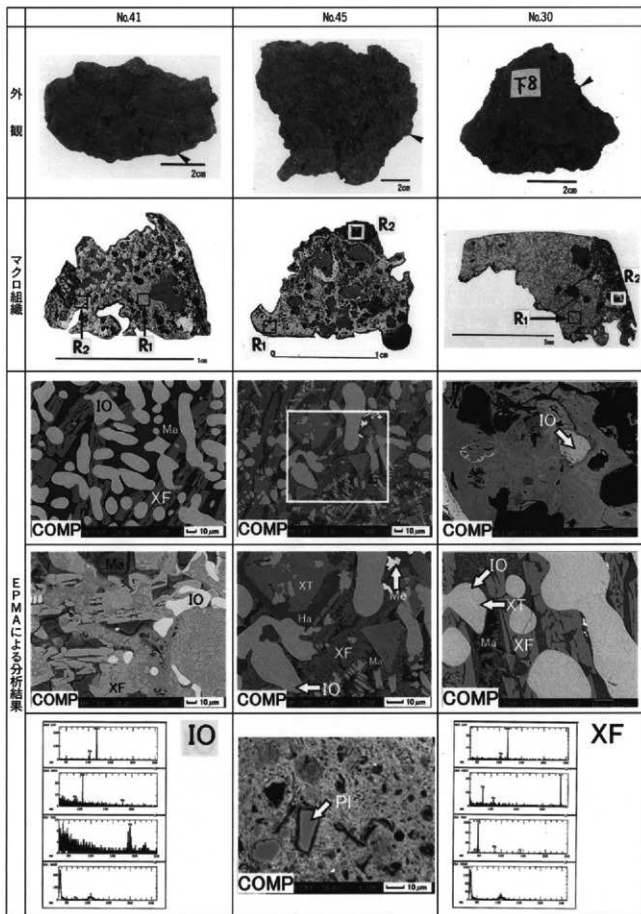


図19 No.41・No.45・No.30の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.41・No.45・No.30のEPMAの組成像 (COMP) 上段はマクロ組織領域 R₁内部、No.41・No.30の組成像中段はマクロ組織領域 R₁内部、No.45の組成像中段は組成像上段の枠内部、組成像下段はマクロ組織領域 R₂内部。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ha：Fe-Al-O系化合物、PI：斜長石と推定される領域、Ma：マトリックス。

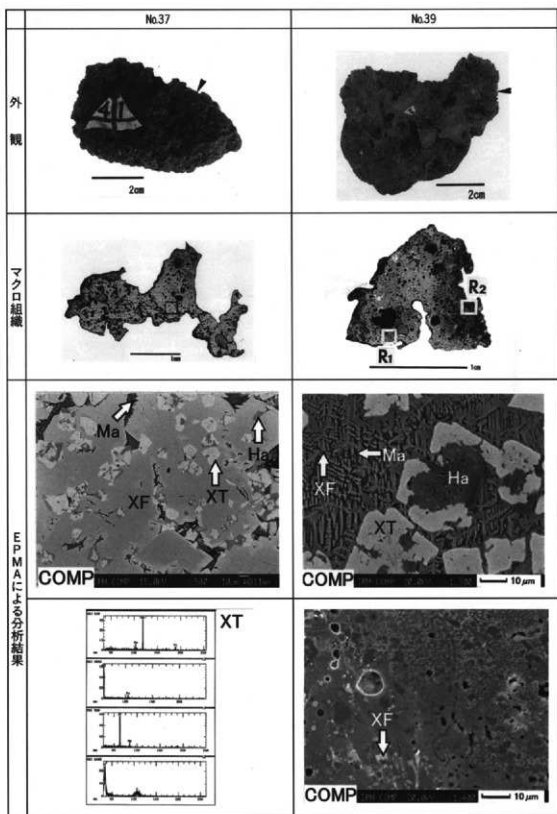


図20 No.37・No.39の外観と抽出試料の組織観察結果
 外観の矢印は試料抽出位置。No.37のEPMAの組成像(COMP)はマクロ組織の枠内部、No.39の組成像上段はマクロ組織領域R₁内部、組成像下段はマクロ組織領域R₂内部。XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ha：Fe-Al-O系化合物、Ma：マトリックス。

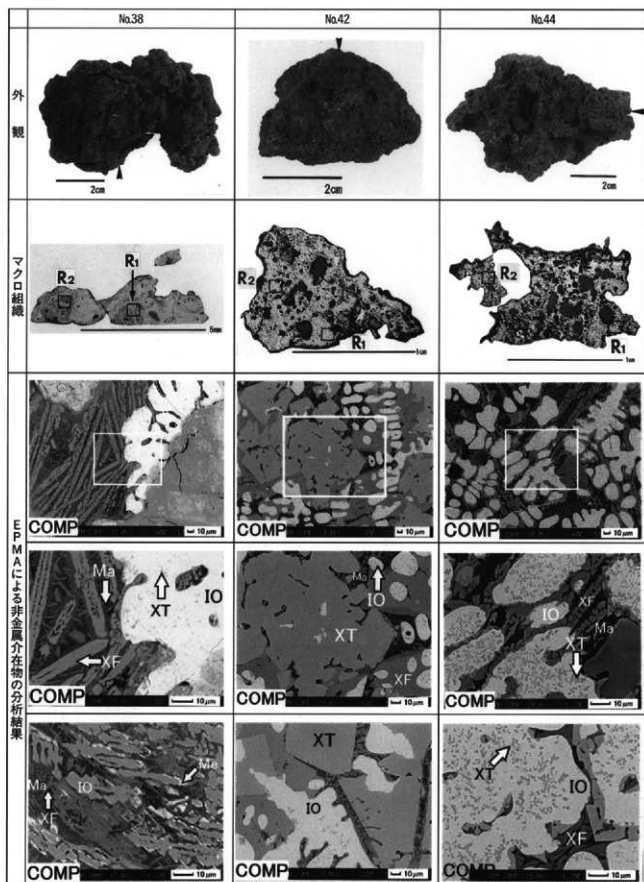


図21 No.38・No.42・No.44の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料割出位置。EPMAの組成像 (COMP) 上段はマクロ組織の領域 R、内部、組成像下段はマクロ組織領域 R、内部。組成像中段は組成像上段の枠内部分を拡大。IO：酸化鉄、XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma：マトリックス。

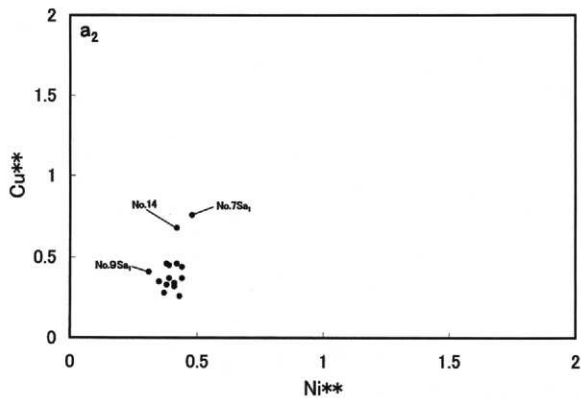
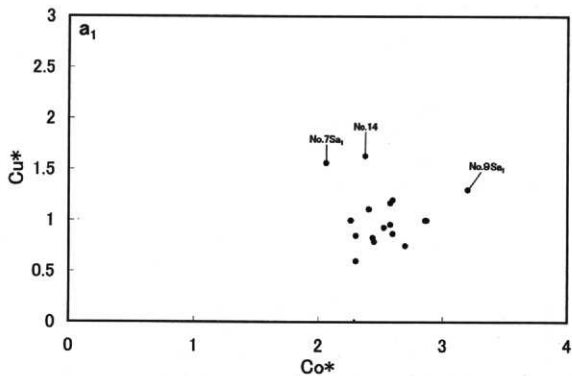


図22 非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

Noは表1に対応。

$Cu^{**} : (mass\%Cu) / (mass\%Ni)$ 、 $Co^{**} : (mass\%Co) / (mass\%Ni)$ 、 $Cu^{**} : (mass\%Cu) / (mass\%Co)$ 、 $Ni^{**} : (mass\%Ni) / (mass\%Co)$ 。

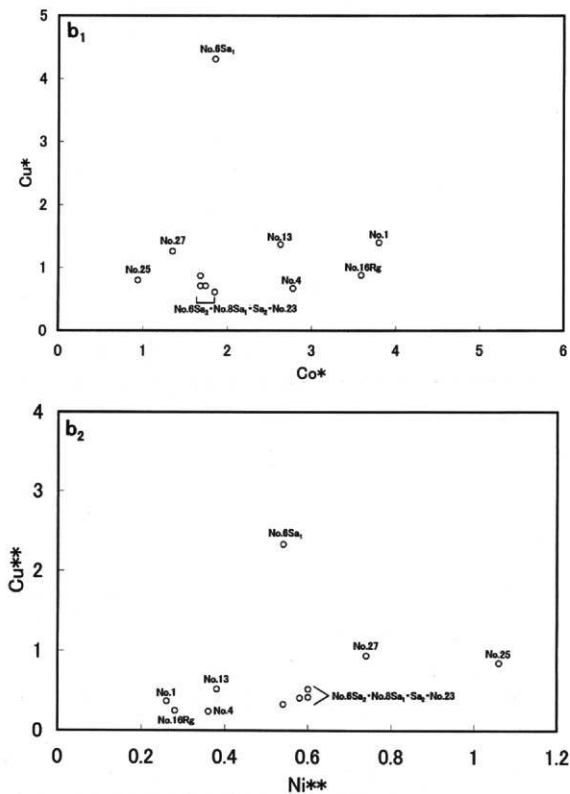


図23 非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった鉄器に含有される Cu・Ni・Co 三成分比
 Noは表1に対応。
 Cu* : (mass%Cu)/(mass%Ni)、Co* : (mass%Co)/(mass%Ni)、Cu** : (mass%Cu)/(mass%Co)、Ni** : (mass%Ni)/(mass%Co)。

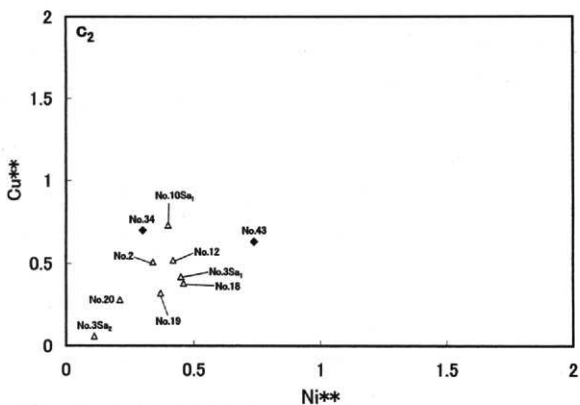
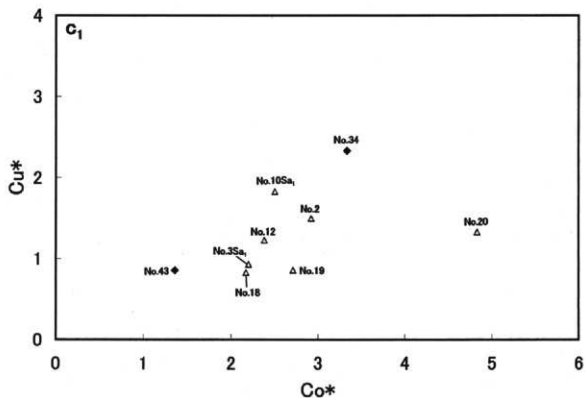


図24 非金属介在物中に非金属介在物が見出されなかった鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

Noは表1に対応。

Cu* : (mass%Cu)/(mass%Ni)、Co* : (mass%Co)/(mass%Ni)、Cu** : (mass%Cu)/(mass%Co)、Ni** : (mass%Ni)/(mass%Co)。◆ : 鉄塊系試料。

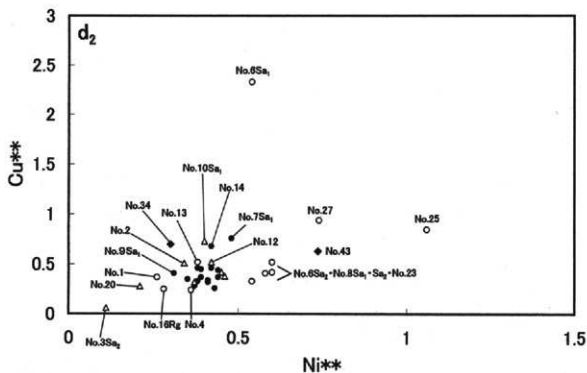
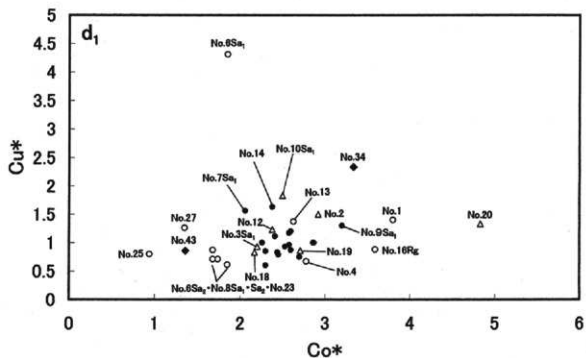


図25 鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

Noは表1に対応。

Cu* : (mass%Cu)/(mass%Ni), Co* : (mass%Co)/(mass%Ni), Cu** : (mass%Cu)/(mass%Co), Ni** : (mass%Ni)/(mass%Co)。● : 非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された鉄器、○ : 非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった鉄器、△ : 非金属介在物が見出されなかった鉄器、◆ : 鉄塊系試料。

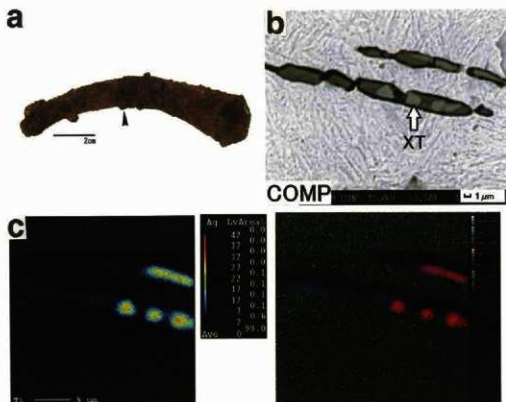


写真1 Na16鏝の外観と Sa₁ 部から抽出した試料に見出された非金属介在物に含有される元素濃度分布のカラーマップ

- a : 外観。 b : 非金属介在物の EPMA による組成像 (COMP)、XT : 鉄チタン酸化物。
c : Ti の濃度分布。 d : Ti・Fe・Mg の複合カラーマップ。

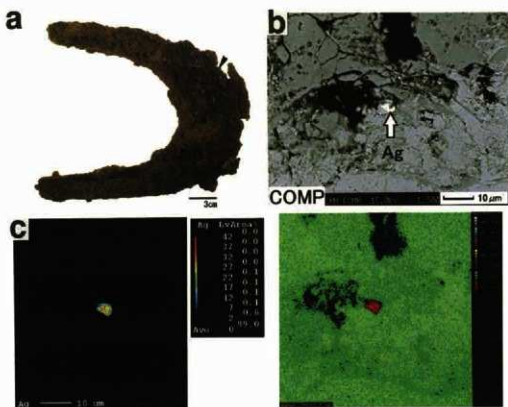


写真2 Na9 鏝の外観と Sa₁ 部から抽出した試料に見出された非金属介在物に含有される元素濃度分布のカラーマップ

- a : 外観。 b : Ag 粒の EPMA による組成像 (COMP)。
c : Ag の濃度分布。 d : Ag・Fe・S の複合カラーマップ。

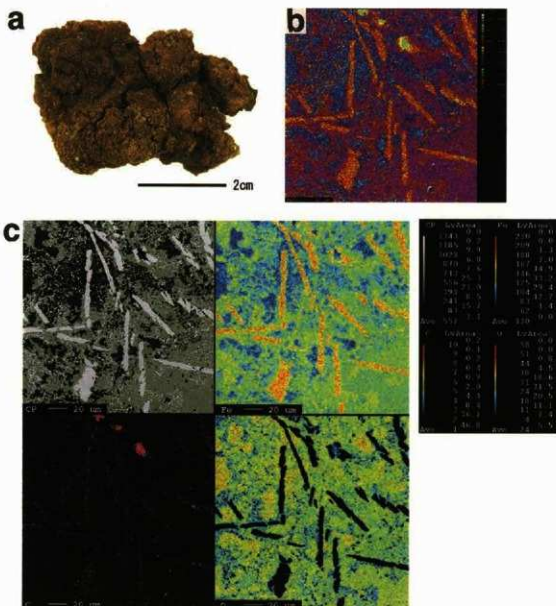


写真3 No.43鉄塊系資料の外観と抽出した試料に含まれる元素濃度分布のカラーマップ
 a: 外観。b: Fe・C・Oの複合カラーマップ。
 c: EPMAによる組成像 (COMP) と Fe, C, Oの濃度分布。

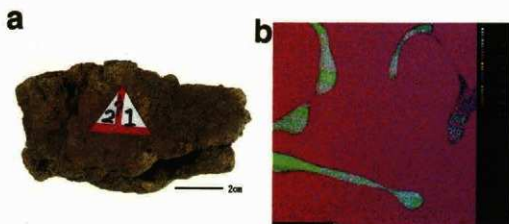


写真4 No.29塊状滓の外観と抽出した試料に含まれる元素濃度分布のカラーマップ
 a: 外観。b: Fe・Si・Oの複合カラーマップ。

富田漆田遺跡 諸元



富田漆田遺跡南側調査区遺構諸元

溝状遺構

第1号溝状遺構

層序：(基準線標高値103.70m)

1. 黒褐色土 ローム粒を僅かに含む。
2. 黒褐色土 ローム粒を1層より多く含むやや明るい。東半分により多くローム粒を含む。
3. 黒褐色土中に多くのローム粒、ロームブロックを含む。全体として黄色味がかった。
4. ローム粒を主とする暗褐色土との混入。
5. 3回貫。

第2号溝状遺構

層序：B-B' (基準線標高値102.40m)

1. 暗褐色土/3(10YR)砂利質 黒色土のブロック径10cm少量含む。
- 2 a. 2層と同性状、ローム微粒(径1~2mm)やや多。
- 2 b. 1層よりも暗くローム粒少ない。
- 3 a. 黒褐色土/3(10YR)粘質 黒土、下のシルトの黄白をまじる。
- 3 b. シルト質土の混入なし。
4. におい黄褐色土(10YR4/3) 砂質、やや密、北側からの流入。
5. 4層に地山シルト質土が混入。

層序：C-C' (基準線標高値102.80m)

1. 暗褐色土 黒褐色土小ブロック、軽石を含む。
2. 暗褐色土 黒褐色土小・中ブロック、軽石を少量含む。
3. 暗褐色土 1・2層より赤みが買っている。褐色土小ブロックを全体に含む。
4. 黒褐色土 粘性なくバサバサしている。ローム粒を含む。

層序：D-D'・E-E' (基準線標高値102.40m)

1. 暗褐色土/3(10YR)砂質 ローム径1cm~5cm30%以上C黒(A?)30%
2. 暗褐色土/3(10YR)砂利質 黒色土のブロック径10cm少量含む。
3. 黒褐色土/3(10YR)粘質 黒土、下のシルトの黄白をまじる。

層序：G-G' (基準線標高値10.360m)

1. におい黄褐色土 10YR5/4~4/3 径1~15mmのローム粒を上層に多混、下層は粘性あり。
2. 暗褐色砂質土 10YR3/3 3層にかけて、壁から崩落したロームが混入斑状に集中する。
3. 未註記。
4. 黒褐色砂質土10YR3/2 均質。ローム微量少量。
5. におい黄褐色砂質土10YR4/3 6層と斑状に混じる。
6. 黒褐色土砂質土10YR3/2 均質。ローム微量少量。
7. 黒褐色土砂質土10YR3/2 6層より暗。
8. ソフトロームの二次堆積。
9. 黒褐色砂質土10YR3/2 灰色砂が全体に混入し、壁面ではロームブロック多。
10. 黒色土 粘性やや強、壁面ではローム粒多。
11. におい黄褐色砂質土 As-BPを(以下未註記)。
- 12・13. 未註記。

第3号溝状遺構

層序：(基準線標高値103.60m)

1. 暗褐色砂質土10YR3/3 径1mm以下軽石らしい微砂を全体に混入する。
2. 1層とにおい黄褐色砂質土の斑状混入。
3. 暗褐色砂質土10YR3/3 崩落したローム・ブロックとローム微粒やや多混。

第4号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.60m)

1. 暗褐色土 軽石粒・ローム粒を全体に含む。
2. 暗褐色土 1層と同じであるが、ローム粒・ローム小ブロックを含む。軽石を少量含む、1より少ない。
3. 暗褐色土 1・2層より暗い。黒褐色土ブロックを含む。軽石を少量含む。
4. 暗褐色土 砂粒を多く含むさらさらしている。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
5. 黒褐色土と暗褐色土が斑状に混入したもの。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
6. 灰色がかった暗褐色土 褐色土小ブロックを全体的に含む。ローム小ブロックを少量含む。
7. 暗褐色土 中央付近は砂粒がラミネーション状。ローム小ブロックを含む。褐色土小ブロックを全体に含む。
8. 暗褐色土 ローム粒、やや大きなロームブロック(径2~4cm)を含む。黒褐色土ブロックを含む。
9. 砂・ローム・黒褐色土・暗褐色土がラミネーション状に堆積(水が流れた痕跡)。全体として暗褐色。
10. 暗褐色土 砂粒を多量に含む。ローム粒・黒色土粒を全体に混入。
11. 基本的には9層と同一層。砂粒を殆ど含まず、ロームブロック・黒褐色土ブロックを含む。

第5号溝状遺構

層序：(基準線標高値103.50m)

1. As-C 少混黒褐色土10YR3/1 砂質、均質弾力があり、ローム微粒わずかに混入。
2. As-C 少混黒褐色土10YR3/1 砂質、径1cm大のローム粒が底面近くに多量。

第6号溝状遺構

層序：(基準線標高値103.50m)

1. にぶい黄褐砂質10YR4/3 北壁の2層耕作土に相当。
2. 黒褐色土砂質土10YR2/2 全体にしまりなく、As-C 少混黒褐色土の1～5cm大ブロック混入。北壁3層に相当。
3. 黒褐色土砂質土10YR2/2～2/1 5層の混入が2層に比べて多い。
4. 黒褐色土砂質土10YR3/1 軽石多量。5層混入少ない。
5. As-C 少混黒褐色土 粘性もあり、やや密。
6. 黒褐色粘質土 粘性強。

第7号溝状遺構

層序：(基準線標高値103.20m)

1. 褐灰色土(10YR4/1) As-B ユニット、ピンクアッシュが遺存。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 軽石を全体に含む。砂質土。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土。ロームブロック混入。

第8号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.90m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土。軽石を微量に含む。鉄分を微量に含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3) As-C 混土に1層土を含む。

第9号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.90m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土。軽石を微量に含む。鉄分を微量に含む。

第10号溝状遺構

層序：A-A' (基準線標高値102.60m)

1. 褐灰色土(10YR4/1) 川砂。鉄分の凝固が見られる。小礫を多量に含む。

第11号溝状遺構

層序：B-B' (基準線標高値102.40m)

1. 3/4(10YR) 砂質。上方部程川砂。

第11・27号溝状遺構

層序：C-C' (基準線標高値102.40m)

1. B混 ロームのトップ。
2. 3/3(10YR) ロームのトップ径5mm10%川砂。
3. 4/3(10YR) 川砂

第27号溝状遺構

層序：D-D' (基準線標高値102.40m)

1. 黄褐色土 川砂にロームの崩れたブロック。

第11～13号溝状遺構

層序：E-E' (基準線標高値102.80m)

1. 暗褐色土(10YR3/3) 砂質土。川砂を多く含む。軽石を多量に含む。鉄分を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 砂質土。川砂を多く含む。軽石を多量に含む。鉄分を含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土。川砂を含む。黒色粘質土ブロック混入。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土。軽石を含む。鉄分を含む。
6. 暗褐色土(10YR3/4) 砂質土。軽石を多く含む。鉄分凝固が見られる川砂を含む。

7. 褐色土(10YR4/1) 川砂。鉄分凝固が見られる。

第12・14号溝状遺構

層序：F-F' (基準線標高値102.80m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土。軽石を微量に含む。 2. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土。軽石を含む。鉄分を含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 砂質土。軽石を微量に含む。黒色粘質土を多量に含む。

第13・14号溝状遺構

層序：G-G' (基準線標高値102.80m)

1. 暗褐色土(10YR3/3) 砂質土。黒色粘質土ブロック混入。 2. 暗褐色土(10YR3/4) 黒色粘質土が塊状混入。

第15号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.70m)

1. 暗褐色土(10YR3/3) 砂質土。軽石を微量に含む。褐色スコリヤを微量に含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土。軽石を微量に含む。黒色粘質土が混入。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土。黒色粘質土が塊状混入。シルトブロック混入。
4. 黒色土(10YR2/1) 粘質土。軽石を微量に含む。灰黄褐色土ブロック混入。

第16号溝状遺構

層序：A-A' (基準線標高値102.90m)

1. As-B を多量に含む黒褐色土。As-B およびアッシュが As-B 状となって含まれる。
2. 黒褐色土 しまっており、地山のローム粒子、軽石粒をやや多く含む。
3. 黒褐色土中に、地山のローム粒、ローム小・中ブロック、砂粒を多量に含む。全体として黄褐色、ざらざらしている。
4. 暗褐色土 砂粒を多く含む。 5. 黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロック、砂粒を少量含む。
6. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。粒子粗くしまっている。 7. ロームブロック。
8. 黒褐色土とローム粒・ロームブロックの混土層。

層序：B-B' (基準線標高値102.90m)

1. 暗褐色土 砂粒を多く含む。 2. 暗褐色土 砂粒を多く含むが1層より少ない。
3. 暗黄褐色土 暗褐色土中にローム粒・ローム小ブロックを多量に含む。 4. 黒褐色土 軽石粒を多く含む。ローム粒を若干含む。
5. 暗黄褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。 6. 黄暗褐色土 ロームブロックを含む。
7. 黒褐色土とロームの混合。 8. 黄暗褐色土。 9. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む。
10. 黒褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを含む。 11. ローム粒・ロームブロック主体。暗褐色土を含んでいる。

層序：C-C' (基準線標高値102.50m)

1. 暗褐色土3/4(10YR) しっかりした砂層。B混土。C軽石1mmほどのもの20%混。
2. 褐色土4/6(10YR) しっかりした砂層。50%以上B混土。C軽石少量混・Bによる鉄分多し。
3. 黒褐色土2/3(10YR) しっかりした砂層。B混土。C軽石10%ほど混。
4. 黒褐色土2/3(10YR)に褐色土4/6(10YR) しっかりした砂層。50%以上B混土。上層ほどBが多い。鉄分も多い。
5. 黒色土2/1(10YR) 粘質に近い砂層。 6. 黒色土2/1(10YR) しっかりした砂層。
7. 暗褐色土3/3(10YR) 砂層。洪水によるものか？ローム粒・ロームブロック2cm～5cm。川砂・C軽石等50%以上混。
8. 黒色土2/1(10YR)に灰色の砂層 洪水によるものか？川砂、粘土質の層もある。ローム少量混。

層序：D-D' (基準線標高値102.50m)

1. 褐色土4/6(10YR) B混土(鉄分の赤身多し、Bの純層多し) C軽石下の方に入る。
2. 褐色土4/4(10YR) しまった土質。B混土にC軽石混。 3. 黒色土1.7/1(10YR) 粘質土 B下水田の耕作土と考える。
4. 黒色土2/1(10YR) 砂質土。黒土にC混。ローム粒混あわせて20%混。
5. 黒褐色土3/1(10YR) 川砂・ローム粒・C軽石。砂利質。
6. 黒色土2/1(10YR)に灰色 4層より灰色。黒土にC混。ローム粒混あわせて7%混。 7. 5層同質。
8. 黒褐色土3/1(10YR) 川砂・ローム粒・C軽石。砂利質。ロームブロック径2cm～3cm少量混。C軽石大きいものは径2cm、10%。
9. 黒褐色土3/1(10YR) 川砂・ローム粒・C軽石。砂利質。ロームブロック径2cm～3cm10%混。C軽石少量混。
10. 黒褐色土3/1(10YR) 川砂・ローム粒・C軽石。砂利質。ロームブロック径2cm～3cm40%混。C軽石少量混。
11. 5層同質。 12. 5層同質。

第17号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.60m)

1. ロームブロック。 2. 黄褐色土 ロームに暗褐色土が若干混入したもの。
3. 黄暗褐色土 ローム小ブロック、暗褐色土ブロック含む。 4. 黄褐色土 3層と同じであるが、ローム小ブロック含む。
5. 黄暗褐色土 2層よりもロームの量多くやや明るい。

第18号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.40m)

1. 暗褐色土3/4(10YR) 砂質。C混土少々。B混土50%。

第19号溝状遺構

層序：C-C' (基準線標高値101.60m)

1. 黒色、褐色砂層。 2. 暗褐色微粒砂層 ローム粒混入。 3. 2層と黒色砂層の互層。 4. 黒色砂とロームブロックの混土。
5. 暗褐色微粒砂層 ローム粒少混。 6. 暗褐色微粒砂層 道の幅跡か、堅直。

層序：D-D' (基準線標高値101.00m)

1. 褐灰色4/4(10YR) 砂質 ビニール入。 2. 灰黄褐色4/2(10YR) 砂質 川砂の流れ込み。
3. 褐灰色4/1(10YR) 砂質 鉄分ありのまだら。 4. 褐灰色4/1(10YR) 砂質 川砂。

層序：E-E' (基準線標高値100.80m)

1. 褐灰色4/1(10YR) 砂質。 2. によい黄褐色5/3(10YR) 砂質 ローム 鉄分 木片。
3. 黒褐色3/2(10YR) しっかりとした砂質 川砂もたまるところもある。
4. 暗褐色3/3(10YR) しっかりした砂層 周りの地山のくずれたものの感じ。

第22号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.20m)

1. As-B主混 As-Bやや多い。 2. As-B主混 As-B 1層より少。 3. As-B主混 1・2層よりも暗い。
4. 灰黒色砂質土 弱粘性。3層との境に砂層。5層との境にうすい泥層。 5. 灰黒色微砂層 流れによる砂層か。

第23号溝状遺構

層序：A-A' (基準線標高値101.90m)

1. 5/8(10YR) 川砂にロームブロック40%、5mm～3mm。 2. 5/8(10YR) 川砂にロームブロック径1cm30%。
3. 4/6(10YR) 川砂・ロームのくだけたもの。

層序：B-B' (基準線標高値101.90m)

1. 4/2(10YR) 砂質。B混・川砂・土石やロームブロック径5cm以上30%。 2. 4/2(10YR) 砂質。B混土。
3. 4/3(10YR) 砂質。下の方に鉄分を含む土。川砂にロームや小石径1cm40%。
4. 3/4(10YR) 砂質。ロームブロック径2cm70%。川砂。
5. 3/4(10YR) 砂質。ロームのくだけたものと川砂。

層序：C-C' (基準線標高値101.90m)

1. 7/3(10YR) 砂利質。川砂にロームブロック径5mm40%。 2. 6/8(10YR) かたい土質。ロームブロックのかたまり。
3. 4/4(10YR) 砂利。下の方に鉄分を含む土。川砂にロームや小石径1cm40%。
4. 5/6(10YR) かたい。川砂にロームブロック径2cm70%。 5. 2/3(10YR) 砂質。川砂にロームのくだけた砂50%。
6. 2/3(10YR) 砂質。川砂。 7. 4/4(10YR) かたい土質。川砂にロームブロック径3cm70%。

第24・25号溝状遺構

層序：B-B' (基準線標高値101.90m)

1. 3/4(10YR) 砂質。B混土。 2. 3/4(10YR) 砂質。B混土、川砂混じり。 3. 3/4(10YR) 砂質。川砂。

層序：C-C'

1. 3/3(10YR) 砂質。B混土(50%)、ところどころ鉄分あり。 2. 3/3(10YR) しまった土質 B混土。
3. 4/4(10YR) 砂利質。川砂にロームのくだけたもの。(25溝)

第26号溝状遺構

層序：B-B' (基準線標高値101.90m)

1. 3/2(10YR) 川砂・ローム径1cm5% (砂利質)。 2. 2/2(10YR) 川砂 (砂利質)。
3. 3/2(10YR) 川砂・ローム径3cm10%。ロームの砂状のもの20% (砂利質)。
4. 1.7/1(10YR) 粘質。黒土のブロック。 5. 2/1(10YR) 粘質。白いシルト状のもの径2cm30%。

層序：C-C'

1. 4/3(10YR) 砂質 (砂利)。川砂にロームのくだけたもの下層に特に多い。
2. 3/4(10YR) 砂利質。砂利層 (川砂) と粘層が交互になっている。 3. 3/4(10YR) 砂利質。砂利層 (川砂) ・ロームブロック少量。
4. 5/8(10YR) 砂利質。川砂・ロームブロックのくだけたもの。
5. 4/4(10YR) 砂利質。石・川砂・ロームブロックのかたいもの。ロームのツブ状ねばりあり。

第28号溝状遺構

層序：(基準線標高値12.50m)

1. 軽石多量暗褐色土(10YR3/4) 砂質。As-B主にFP・As-C、鉄分多い・やや密・かたい。
2. As-C主混黒褐色土(10YR2/2) 砂質。やや密。As-C径1〜3mm上位多、下少。
3. As-C主混黒褐色土(10YR2/2) 砂質。密。As-C径1〜3mm。 4. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質。ローム粒・鉄分少量。
5. 黒褐色土(10YR2/2) 4層に大粒のロームが混入。やや粗。
6. 黒褐色土(10YR3/2〜2/2) 砂質。黒ボク土に相当。上位黒く下位に使い暗褐色。明るい・重・やや粘性あり。

第29号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.50m)

1. 暗褐色土3/4(10YR) C黒に暗褐色土を含む。 2. 黒褐色土2/3(10YR) ローム径1cm少量。砂層が東から西下へ入り込む。

第30号溝状遺構

層序：(基準線標高値101.50m)

1. 褐色4/4(10YR) 砂質。砂粒のよう。2よりサラサラしている。晶の1つか?
2. 暗褐色2/3(10YR) 砂質。赤褐色のツブ (C軽石)。 3. 未註記。

第31号溝状遺構

層序：(基準線標高値101.00m)

1. 暗褐色3/4(10YR) 砂質。B軽石30%混。鉄分あり。

第32号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.00m)

1. 暗褐色土3/3(10YR) 砂質。FA少量入る。鉄分あり。C混少量 (B区のトレンチの3層)。

第33号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.00m)

1. 暗褐色土3/3(10YR) 砂質。FA・C混少量入る (B区のトレンチの3層)。

第32・33号溝状遺構

層序：(基準線標高値102.00m)

1. 暗褐色土3/3(10YR) 砂質 FA少量入る。C混土7〜10% (B区のトレンチの3層)。 2. 1同質。
3. 暗褐色土3/3(10YR) 砂質 FA少量入る。C混土5%。

第34号溝状遺構

層序：(基準線標高値101.80m)

1. 暗褐色土3/3(10YR) 粘質 (水田層を考える)。FA混最大2cm少量入る。C混土。
2. 黒褐色土2/2(10YR) 砂質。川砂入る。C混土。 3. 黒色土2/1(10YR) 粘質。

第39号溝状遺構

層序：(基準線標高値101.40m)

1. 暗褐色土3/4(10YR) 砂質。C混土径1~2mm20%。鉄分あり。FA粒少量あり(B区北トレンチの3層)。

住居跡

C区第1号住居跡

位置：5地区-グリッド。形状：正方形。規模：5.09m×5.16m。主軸方位：北-90度40分→東。

基準辺：北壁か。電規模：全長0.92m×袖部幅0.75m×燃焼部幅0.35m。

層序：(基準線標高値103.60m)

1. As-C混黒褐色土10YR2/2。砂質、弾力あり、As-Cは微粒 ϕ 1%以下。ローム粒少量、自然埋没、西壁寄りには、ローム面に床があるため、大粒のロームやや多、カマド寄りは焼土混。
2. 焼土 焼きしまりカリカリしている。
3. 被熱でわずかに赤みのある暗褐色土。
4. 崩落した粘土と3層の混土。
5. ローム、粘土、焼土の微粒を混入する暗褐色土。
6. 黒褐色砂質土 被熱で硬い。
7. 褐色土(7.5YR4/3) 砂質土 焼土を多く含む。
8. 褐色土(7.5YR4/2) 粘土。
9. 黒褐色土(7.5SYR2/2) 粘質土 焼土ブロック混入。

第2号住居跡

位置：5地区-グリッド。形状：。規模：5.40m×1.17+ α m。主軸方位：北-約85度-南。

基準辺：。電規模：全長0.84m×袖部幅1.00m×燃焼部幅0.41m。

層序：(基準線標高値103.00m)

1. 表土層。I'土改土時代の盛土。I'灰黄褐色混入：10YR4/2・As-Bを主とする軽石を全体に混入。密・硬・株に2cm強の鉄分層。
1. As-B混。暗褐色砂質土：10YR3/3・密・硬・鉄分・黒ボクなどよく攪拌されている。
2. As-B混。暗褐色砂質土：10YR3/3~3/2・密・硬・As-C混などよく攪拌されている。
3. As-C混黒褐色土：砂質・やや密。焼土・炭の微粒を混入する。
4. Hr-FAか。
5. As-C混黒褐色土：砂質・やや密。焼土・炭多く、3層より明。
6. 黒褐色砂質土：10YR3/2・やや密、ローム微粒全体に含む。
7. 黒褐色砂質土：10YR3/2・やや密、ローム粒・焼土・炭を含む。
8. 7同質。
9. 6同質。
10. 7同質。
11. 暗褐色土：砂質。軽石を主に鉄分・マンガク・ローム粒混入。
12. 暗褐色土：10YR3/2・砂質。全体に鉄分が多く緻密。軽石・ローム・焼土を含む。
13. 黒褐色土：10YR2/2・砂質。As-C・焼土・ローム粒の順に多く含む。焼土・ローム粒はカマド周辺に特に多い。
14. 暗褐色土：10YR3/3~3/4・砂質。全体に鉄分が多い。軽石・ローム・焼土・ロームブロックを含む。
15. 茶褐色土。
16. 天井部から崩壊した焼土を主とする層。焼土はウズラ卵大までの大きさ。
17. 7層に大粒の焼土と炭含む。全体に灰混入。
18. 西壁から崩落した袖の一部と焼土の混土。
19. 16近質。崩壊時の巻き込み土。
20. 白濁したローム土。
21. 黒褐色砂質土：(10YR3/1) 袖材。粘土混入。被熱のためか全体に灰を含む。
22. ロームを主とする。暗褐色土との混土。
23. 22近質。

所見：当住居跡は、発掘調査段階では2軒の住居跡の重複と考えられていたが、整理事業段階で記録図面類を精査した結果、らく1軒の住居跡であろう事が推測され、図面を修正した結果図面掲載した状態に推定も含め示した(写真図版には調査段階の状態写真を掲載した)。これは、遺構の焼土場所が斜面部分で住居跡の一部しか露呈できなかったことに起因している。斜面部は地山土層の変化が台地上とは著しく異なり、事実、調査上困難な場合が多い。この地山土の細かな変化が調査段階では認識できなかったと考えられる。

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡：(基準線標高値102.60m)

位置：5地区17区P~R-15・16グリッド。形状：東西棟。柱間・規模(桁×梁)：7尺・3間(6.3m)×12尺1間(3.6m)+3尺・8尺・2間(3.3m)×8尺(2.4m)。面積：9.05坪(29.88 m^2)。主軸方位：北-5度-東。

所見：調査は、東側の現道路下部分が発掘調査であったため、調査段階では4間×1間の東西棟が推定されて

いた。しかし、整理時に同規模を推定した場合、北東隅部の柱穴が見当たらないことと、東部分の道下部分から、2間(3尺・8尺)×1間(8尺)の小規模の建物が推定されたことから、第 図に示した特殊な建物跡を推定した。この建物跡は図中にも推定設計線を入れ添えたが、身舎の東壁側に小規模の建物を組込む状態(南東隅P₉の存在と、P₁₄・P₁₈の存在)で東西中心軸に線対称に推定された。この場合、建物自体が特殊な性格を帯びていたことにはならないが、具体的な性格は出土遺物等を踏まえても分りし得なかった。当掘立と指向方向を同じに採り、重複関係が認められない2号・5号掘立は同時存続が考慮される。

又、元来この大小別な建物跡の存在も考えられようが、他に発見されている掘立の切り状態から、同軸上に平行にする切り合い関係が認められないことと、上述した、南東隅P₉の存在と、P₁₄・P₁₈の配置関係上から同一の建物として机上推定した。

第2号掘立柱建物跡：(基準線標高値102.60m)

位置：19地区17区Q～R-16・17グリッド。形状：東西棟。柱間・規模(桁×梁)：7尺・4間(8.4m)×12尺1間(3.6m)。面積：9.16坪(30.24㎡)。主軸方位：北-5度-東。

所見：重複関係が認められず1号・5号掘立柱建物跡と指向方向を同じにする。1号掘立は構造上に於いて異なる。5号掘立は、南北棟であるものの主軸方位は直交関係にあるが、規模に於いて梁間に2尺の差異が認められる。

第3号掘立柱建物跡：(基準線標高値102.70m)

位置：5地区17区-グリッド。形状：東西棟。柱間・規模(桁×梁)：7尺・4間(8.4m)×7尺・2間(4.2m)。面積：10.69坪(35.28㎡)。主軸方位：北-1度-東。

所見：切り合い関係では、5・6掘立と直接的に切り合い、6掘立とは恐らく軒先が十分にぶつかり合うと考えられことから、これら4者は切り合い関係と認識させる。また、3・4井戸とも切り合い関係にある。しかし、これらの切り合い関係を明らかにする調査所見は得られていない。

第4号掘立柱建物跡：(基準線標高値102.80m)

位置：5地区17区P～R-18・19グリッド。形状：東西棟。柱間・規模(桁×梁)：7尺・4間(8.4m)×7尺・2間(4.2m)。面積：10.68坪(35.28㎡)。主軸方位：北-8度-東。

所見：当掘立柱建物跡は調査段階では、図示した部分の西側P₁・P₂・P₅・P₆・P₁₈・P₁₁からなる1間×2間の南北棟が考えられていたが、整理段階で7尺4間×7尺2間の建物を机上で推定した。当該の掘立柱建物跡群は、桁行7尺4間梁7尺2間か、同桁行に梁6尺2間の孰れかの構造しかない。このことから桁行を4間で推定した。

第5号掘立柱建物跡：(基準線標高値102.60m)

位置：5地区17区O・P-18・19グリッド。形状：南北棟。柱間・規模(桁×梁)：7尺・4間(8.4m)×12尺・1間(3.6m)。面積：9.16坪(30.24㎡)。主軸方位：北-5度-東。

所見：当掘立柱建物跡は、3・6号掘立柱建物跡・3・4井戸と重複している。建物の指向方向は1～3掘立と同一であるが、唯一の南北棟である。

第6号掘立柱建物跡：(基準線標高値102.70m)

位置：5地区17区-P~Rグリッド。形状：東西棟。柱間・規模(桁×梁)：7尺・4間(8.4m)×7尺・2間(4.2m)。面積：10.68坪(35.28㎡)。軸方位：北-5度-東。

所見：2掘立と妻を揃えて平行に造られている。切り合い関係に就いては上述した掘立と同じである。5・6掘立及び3・4井戸と切り合い関係がある。この5者の直接的な新旧関係は、3掘立と4井戸が切り合い関係が認められるのみで、その他の状況は未確認である。この5者と、同時期の周辺遺構の状況から、3・4井戸は掘立柱建物跡群に伴うことが推定される。そして、3掘立と4井戸が重複関係にあることから、

井戸跡

第1号井戸跡

位置：5地区-18-A-20グリッド。形状：円形。規模：1.1×1.04×-1.65。

層序：(基準線標高値103.60m)

1. 黒色土(10YR2/1) As-C 混土、ローム土粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) As-C 混土、ローム土粒を多く含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3) 砂質土、軽石を微量に含む、ローム土粒を微量に含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土、ローム土粒を多く含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 砂質土、ロームブロックを多く含む。

第2号井戸跡

位置：5地区-17-S・T-18グリッド。形状：楕円形。規模：2.1×2.4×-1.64。

層序：(基準線標高値103.00m)

1. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土、軽石を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 砂質土、軽石を微量に含む、黒色粘質土ブロック混入、鉄分を含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土、軽石を微量に含む、粘性PPあり。
4. 黒色土(10YR2/1) 粘質土、砂質土が混入。
5. 褐色土(10YR4/4) ローム土、砂質土を多く含む。

第3号井戸跡

位置：5地区-17-Q-18グリッド。形状：不整形円形。規模：0.88×0.83×-。

層序：(基準線標高値102.60m)

1. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土、軽石を含む、鉄分凝縮が見られる、黒色粘質土ブロック混入。
2. 黒色土(10YR1.7/1) 粘質土、砂質土を全体に含む。

第4号井戸跡

位置：5地区-17-P・Q-18グリッド。形状：隅丸正方形。規模：1.31×1.34×-1.32。

層序：(基準線標高値102.60m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土、軽石を含む、ローム土粒が微量に見られる。
2. 褐色土(10YR2/3) 砂質土、軽石を微量に含む、鉄分を微量に含む、黒色粘質土ブロック混入。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土と粘質土の混土。
4. 黒褐色土(10YR3/1) 粘質土、砂質土を含む、鉄分を含む。

第5号井戸跡

位置：5地区-17-R-14・15グリッド。形状：隅丸正方形。規模：1.18×1.20×-1.22。

層序：(基準線標高値102.50m)

1. 暗褐色土 ローム粒を全体に、黒褐色土を一部含む。やや明るい。

2. 灰褐色土 褐色土小ブロックを所々に含む。
3. 暗褐色土 1層よりもローム粒少なく暗い。
4. 暗褐色土 ローム粒殆ど含まず、3層よりも暗い。

第6号井戸跡

位置：5地区-17-O-18・19グリット。 形状：円形。 規模：1.30×1.27×-1.58。

層序：(基準線標高値102.70m)

1. 砂質土(10YR3/2) B混土30% ロームブロックφ5cm 5% C30%。
2. 砂質土(10YR3/4) B混土30% Bの土の赤み(火山灰)入り C20%。
3. 砂質土(10YR3/4) B混土10% ロームブロックφ2~3cm少量、黒土のブロック 2~3cm20%。
4. 粘質土(10YR2/1) 粘質 黒土のシルト質、遺物(木材入り)

第7号井戸跡

位置：5地区-17-P・Q-6グリット。 形状：楕円形。 規模：0.90(1.13)×0.85(1.07)×-0.66(0.84)。

層序：(基準線標高値101.50m)

1. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質、軽砂混、ロームが塊状に多混(人為埋設土)。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質、軽石あり、ロームなし(自然層)。
3. 黒色土(10YR2/1) 砂質(自然層)。

第8号井戸跡

位置：5地区-17-Q-6グリット。 形状：不整形円形。 規模：1.32×1.65×-1.16。

層序：(基準線標高値101.80m)

1. 2層に粗砂、鉄分が染み込む。
2. As-B主混暗褐色土、砂質。
3. 暗褐色砂質土 2層よりも粗い、大粒のローム少量。
4. 黒褐色粘質土 粗砂混、底面近くは砂利混、ヘッドロ化。
5. ロームブロック 自然埋設、東側の平垣側からの流入が主。As-B主混土からすると中世頃の物で、ウロの具体から見て長期間に及ぶらしい。湧水量も多い。

第9号井戸跡

位置：5地区-27-O-1グリット。 形状：隅丸正方形。 規模：1.40×1.54×-1.20。

層序：(基準線標高値102.50m)

1. 2層の擾乱か、2次堆積。
2. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)(10YR2/1) 微砂均質、洪水砂の2次堆積で僅かに互層。
3. 黒色土(10YR7/1)と黒褐色土(10YR2/2) ブロックの混入。最下部はノロ化し、やや黒い。

土坑

第1号土坑

層序：(基準線標高値102.80m)

1. 黒褐色土(10YR2/5) 粘質土、As-C軽石を含む、橙色スコリアを微量に含む、炭化物がごく微量に見られる。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 粘質土、As-C軽石を含む、黒色粘質土ブロックを多く含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 粘質土、軽石を微量に含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2) 粘質土、砂質土を多く含む、軽石を含む、橙色スコリアを微量に含む。

第2号土坑

層序：(基準線標高値103.60m)

1. 暗褐色土(10YR2/3) 砂質土、ロームブロックを含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土、ローム土と暗褐色土の塊状混入、攪拌されている。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土、ローム土が混入、軽石を微量に含む。

富田漆田遺跡 諸元

4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土、色調暗め、ローム土を微量に含む。
5. 黄褐色土(10YR5/6) ローム土に暗褐色土が混入。
6. 黄褐色土(10YR5/8) ローム土、壁が破壊したもの、黒褐色土ブロック混入。

第5号土坑

層序：(基準線標高値103.20m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土、As-Bを微量に含む、炭化物をごく微量に含む。

第6号土坑

層序：(基準線標高値103.20m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) 砂質土、As-Bを微量に含む、ピンクアッシュが見られる、白色軽石が微量に見られる。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質土、軽石を全体に含む。
3. 黒色土(10YR1.7/1) 粘質土、砂質土を微量に含む。

第7号土坑

層序：(基準線標高値103.00m)

1. 黒褐色土(10YR3/2) As-B軽石。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 粘質土、軽石を含む。

第61号土坑

層序：(基準線標高値102.90m)

1. 暗褐色土(10YR3/3) 砂質土、軽石を全体に含む、鉄分を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 砂質土、軽石を含む。

第63号土坑

層序：(基準線標高値101.30m)

1. 黒褐色土(10YR2/3) 砂質土、鉄分あり、所々Bテフラ(ピンク)入り、B流土。

第67号土坑

層序：(基準線標高値101.30m)

1. 暗褐色土(10YR3/3) 砂質、軽石(FP)が少混、鉄分あり。

第68号土坑

層序：(基準線標高値102.40m)

1. As-C混黒褐色土(10YR3/2) 砂質土。
2. 軽石混入暗褐色土(10YR3/3) 砂質、ソフトロームが横位の橋状に混入、底面は平坦で堅固、柱跡か。
3. におい黄褐色土(10YR3/4) 砂質、緻密、粘性あり、ローム新移層の一部に相当する地山層。

第70号土坑

層序：(基準線標高値102.60m)

1. As-C少混黒色土(10YR2/1) 砂質、ローム、焼土まばらに混入。
2. As-C少混黒土(10YR2/1) 砂質、As-C1層より少ない、ローム底面近くにやや多い。

第71号土坑

層序：(基準線標高値102.60m)

1. As-C混黒褐色土(10YR3/1) 砂質、焼土、大粒の炭まばらに混入。
2. 1層と同じ、焼土、炭多い。
3. 焼土層、焼土80%顆粒状、炭混入、やや粗。
4. 2層と同じく焼土、炭多いが黒い。

第72号土坑

層序：(基準線標高値102.60m)

1. As-C 少湿黒色土(10YR2/1) 砂質、As-C ϕ 1%。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 砂質、均質緻密、下位にローム粒混入。

第73号土坑

層序：(基準線標高値102.60m)

1. As-C 少湿黒褐色土(10YR3/1) 砂質 As-C ϕ 1%。
2. 黒褐色土(10YR3/1) 砂質、均質緻密。

第74号土坑

層序：(基準線標高値102.60m)

1. As-C 少湿黒褐色土(10YR3/1) 砂質、As-C は上半部に多く、下位は少ない。
2. 1層と暗褐色土(10YR3/4)の底状混土、砂質緻密、底面にローム粒や多い。
3. 2層のうちでも暗褐色土の方が多い。

第75号土坑

層序：(基準線標高値102.70m)

1. 暗褐色土(10YR3/4)顆粒状の焼土と炭を多量に混入、焼土の一部は1cmを越す大粒やブロック状になる。
2. 暗褐色土 砂質軽石、ローム、焼土、炭をわずかに混入。
3. ローム 2.5Y8/6~8/8 粘性やや強。掘り方の内面に1cm強の厚さで貼付。

富田漆田遺跡 諸元

富田漆田遺跡南側調査区出土溝状遺構一覧表(1)

遺構名称	調査面	位置		走行方位	発見長 (m)	深 度 (m)	高低差 (m)	時 期	摘 要
		区	グリッド						
第1号溝状遺構	1	C	28-B-2 18-B-15	N-2度-W	35.0	0.43	0.04	古代	5号溝・17号溝・28号溝と同一遺構。
第2号溝状遺構	1	BC	17-N-15 18-B-15	N-90度-E	39.5	1.07	0.43	中世	
第3号溝状遺構	1	C	17-T-14 18-A-14	N-80度-E	8.5	0.43	0.10	古代	15号溝と同一遺構。
第4号溝状遺構	1	BC	27-J-3 18-A-12	N-88度-W	95.0	1.01	0.23	中世	館の外壁。
第5号溝状遺構	1	C	17-S-19 17-T-11	N-30度-W	11.5	0.41	1.42	古代	28号溝と同一遺構。
第6号溝状遺構	1	C	27-T-15 18-A-15	N-6度-E	24.5	0.62	0.28	古代	7号溝・16号溝・29号溝と同一遺構。
第7号溝状遺構	1	C	17-T-13 17-T-14	N-20度-W	7.0	0.10		古代	6号溝・16号溝・29号溝と同一遺構。
第8号溝状遺構	1	C	27-O-1 27-Q-2	N-74度-W	12.5	0.20	0.18	江戸～現代	館内の暗渠排水。
第9号溝状遺構	1	C	17-O-20 17-S-20	N-80度-W	19.0	0.29	0.30	中世	館内の暗渠排水。
第10号溝状遺構	1	C	17-Q-16 17-Q-17	N-2度-E	40.0	0.19	0.39	中世	18号溝と同一遺構。
第11号溝状遺構	1	C	27-Q-2 17-Q-10	N-9度-E	62.0	0.11	0.40	中世	8号溝・9号溝・27号溝より古い。
第12号溝状遺構	1	C	17-R-15 17-R-17	N-12度-E	10.1	0.19	0.07	中世	14号溝より古い。
第13号溝状遺構	1	C	17-S-13 17-S-17	N-5度-E	20.5	0.24	1.10	中世	14号溝より古い。
第14号溝状遺構	1	C	17-S-16 17-T-16	N-90度-E	6.0	0.17	0.16	中世	
第15号溝状遺構	1	C	17-Q-14 17-S-14	N-80度-W	12.5	0.30	0.28	古代	3号溝と同一遺構。
第16号溝状遺構	1	C	17-R-9 17-T-12	N-26度-W	15.0	0.69	0.99	古代	6号溝・7号溝・29号溝と同一遺構。
第17号溝状遺構	1	C	18-A-13 18-B-14	N-25度-W	7.0	0.29	0.03	古代	1号溝・5号溝・28号溝と同一遺構。
第18号溝状遺構	1	C	17-Q-14	N-80度-W	2.0	0.10	0.06	中世	10号溝と同じか。
第19号溝状遺構	1	BC	7-O-14 17-G-18	N-20度-E	124.0	0.47	1.28	江戸～現代	幹線水路。合流が多い。
第20号溝状遺構									欠番
第21号溝状遺構	1	B	17-i-19 17-K-20	N-78度-W	9.0	0.12	0.22	中世	
第22号溝状遺構	1	B	17-H-19 17-K-20	N-78度-W	13.0	0.26	0.09	江戸～現代	
第23号溝状遺構	1	B	17-i-13 17-M-14	N-82度-W	22.0	0.11	0.11	古代～中世	3号溝・15号溝の延長。
第24号溝状遺構	1	B	17-j-11 17-N-12	N-70度-W	22.5	0.31	0.45	江戸～現代	19号溝に合流。
第25号溝状遺構	1	B	17-M-12 17-N-13	N-38度-W	4.5	0.13	0.06	江戸～現代	24号溝に合流。
第26号溝状遺構	1	B	17-i-10 17-N-12	N-70度-W	25.0	0.45	0.18	中世～江戸	4号溝より古い。
第27号溝状遺構	1	C	17-Q-10 17-R-10	N-85度-W	5.5	0.08	0.07	中世	11号溝より新しい。
第28号溝状遺構	1	BC	17-R-2 17-S-9	N-8度-W	35.0	0.33	0.09	古代	1号溝・5号溝・17号溝と同一遺構。
第29号溝状遺構	1	B	17-Q-1 17-Q-8	N-0度-EW	37.5	0.16	0.29	古代	6号溝・7号溝・16号溝と同一遺構。
第30号溝状遺構	1	B	7-R-20 17-R-7	N-3度-E	36.0	0.08	0.19	古代	
第31号溝状遺構	1	B	7-R-17 17-O-3	N-7度-E	33.5	0.08	0.41	平安	As-B下水田に伴う。

富田漆田遺跡南側調査区出土溝状遺構一覧表(2)

遺構名称	調査面	位置		走行方位	発見長 (m)	深 度 (m)	高低差 (m)	時 期	備 考
		区	グリッド						
第32号溝状遺構	2	B	7-O-11 7-O-15	N-8度-E	20.0	0.08	0.20	古代	島のサク跡。
第33号溝状遺構	2	B	7-O-13 7-N-17	N-10度-E	22.5	0.16	0.10	古代	#
第34号溝状遺構	2	B	7-O-9 7-j-19	N-28度-E	58.0	0.06	0.27	古代	区画を兼ねた水路。
第35号溝状遺構	2	B	7-j-16 7-i-18	N-27度-E	8.5	0.06	0.07	古代	島のサク跡。
第36号溝状遺構	2	B	7-j-16 7-i-18	N-25度-E	9.0	0.06	0.03	古代	#
第37号溝状遺構	2	B	7-i-15 7-i-16	N-18度-E	7.5	0.04	0.08	古代	#
第38号溝状遺構	2	B	7-i-14 7-H-17	N-25度-E	15.0	0.05	0.012	古代	#
第39号溝状遺構	2	B	7-K-11 7-L-11	N-79度-W	5.0	0.08	0.07	古代	#
第40号溝状遺構	1	A	17-D-9 17-F-9	N-72度-W	13.5	0.16	0.12	江戸～現代	
第41号溝状遺構	1	A	17-G-5 17-F-9	N-24度-E	17.0	0.09	0.18	江戸～現代	
第42号溝状遺構	1	A	17-E-5 17-D-9	N-16度-E	22.0	0.02	0.15	平安	As-B下水田に伴う。
第43号溝状遺構	1	A	17-D-5 17-H-5	N-70度-W	22.0	—	—	江戸～現代	
第44号溝状遺構	1	A	17-i-1 17-i-2	N-11度-E	5.5	0.04	0.07	平安	As-B下水田に伴う。
第45号溝状遺構	1	A	7-E-14 7-j-16	N-68度-W	21.5	—	—	江戸～現代	
第46号溝状遺構	1	A	7-j-7 7-H-15	N-11度-E	40.0	—	—	江戸～現代	47号溝より古い。
第47号溝状遺構	1	A	7-H-13 7-H-15	N-18度-E	11.0	—	—	江戸～現代	46号溝より新しい。
第48号溝状遺構	1	A	7-G-10 7-K-14	N-70度-W	36.0	0.09	0.21	江戸～現代	
第49号溝状遺構	1	A	7-F-6 7-j-8	N-76度-W	20.5	0.13	0.28	江戸～現代	
第50号溝状遺構	1	A	7-D-11 7-D-13	N-5度-W	8.0	0.05	0.04	平安	As-B下水田跡に伴う。
第51号溝状遺構	1	A	7-C-11	N-15度-E	3.0	0.09	0.12	平安	#
第52号溝状遺構	1	A	7-D-9 7-C-12	N-24度-E	15.0	0.08	0.68	平安	#
第53号溝状遺構	1	A	7-E-7 7-E-8	N-20度-W	2.5	0.08	0.12	平安	#
第54号溝状遺構	2	A	7-C-13 17-C-6	N-0度-EW	63.0	0.15	0.22	古墳	
第55号溝状遺構	2	A	17-C-6 17-D-8	N-12度-W	10.1	0.21	0.79	古墳	

富田漆田遺跡 諸元

富田漆田遺跡南側土坑一覽表(1)

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模 (m)			時期	概要
		区	グリッド			長	幅	深さ		
1号土坑	1		17-S-16	北-0度-東西	矩形	1.75	1.75	0.31	古代	
2号土坑	1		28-B-1	北-9度-西	隅丸胴張長方形	2.93	1.67	0.20	不詳	
3号土坑	1		18-A-20	北-75度-西	隅丸長方形	0.75	0.60	0.51	中世後半	
4号土坑	1		28-A-1	北-60度-西	隅丸長方形	0.40	0.30	0.52	中世後半	
5号土坑	1		27-S-1	北-0度-東西	円形	1.08	0.99	0.11	中世後半	
6号土坑	1		27-T-1	北-58度-東	隅丸長方形	1.96	1.39	0.22	15世紀後半	
7号土坑	1		17-S-20	北-27度-東	隅丸長方形	2.47	1.64	0.06	不詳	
8号土坑	1		17-R-14	北-60度-西	隅丸長方形	1.00	0.70	0.22	不詳	
9号土坑	1		18-A-15	北-0度-東西	不整形	0.90	0.70	0.23	不詳	
10号土坑	1		18-A-15	北-0度-東西	矩形	0.48	0.45	0.28	中世後半	
11号土坑	1		28-B-16	北-55度-西	隅丸正方形	0.28	0.26	0.33	中世後半	
12号土坑	1		18-A-16	北-0度-東西	矩形	0.24	0.2	0.55	中世後半	
13号土坑	1		18-A-16	北-30度-東	矩形	0.62	0.62	1.48	中世後半	
14号土坑	1		18-B-16	北-45度-東	隅丸長方形	0.50	0.38	0.20	中世後半	
15号土坑	1		18-B-16	北-18度-東	矩形	0.32	0.28	0.47	中世後半	
16号土坑	1		18-B-16	北-60度-東	矩形	0.30	0.27	0.57	中世後半	
17号土坑	1		18-A-16	北-62度-東	矩形	0.33	0.24	0.20	中世後半	
18号土坑	1		18-A-16	北-3度-東	矩形	0.24	0.22	0.57	中世後半	
19号土坑	1		18-B-16	北-25度-東	矩形	0.30	0.24	0.27	中世後半	
20号土坑	1		18-A-16	北-63度-東	隅丸長方形	0.30	0.27	0.37	中世後半	
21号土坑	1		18-A-16	北-45度-東	隅丸長方形	0.52	0.48	0.69	中世後半	
22号土坑	1		18-A-16	北-45度-東	矩形	0.38	0.34	0.73	中世後半	
23号土坑	1		18-A-17	北-45度-西	矩形	0.30	0.27	0.26	中世後半	
24号土坑	1		18-A-17	北-67度-西	矩形	0.40	0.35	0.24	中世後半	
25号土坑	1		18-A-17	北-67度-西	不整形	0.25	0.20	0.21	中世後半	
26号土坑	1		18-B-17	北-65度-東	矩形	0.30	0.27	0.32	中世後半	
27号土坑	1		18-B-17	北-30度-西	矩形	0.34	0.32	0.30	中世後半	
28号土坑	1		18-B-17	北-42度-東	矩形	0.23	0.22	0.23	中世後半	
29号土坑	1		18-B-17	北-48度-西	矩形	0.28	0.28	0.22	中世後半	
30号土坑	1		18-B-17	北-33度-東	矩形	0.28	0.26	0.61	中世後半	
31号土坑	1		18-B-17	北-56度-東	矩形	0.32	0.28	0.47	中世後半	
32号土坑	1		18-A-17	北-60度-東	隅丸正方形	0.28	0.25	0.24	中世後半	
33号土坑	1		18-A-17	北-59度-西	隅丸正方形	0.40	0.37	0.81	中世後半	
34号土坑	1		18-A-17	北-30度-東	隅丸長方形	0.80	0.53	0.67	中世後半	
35号土坑	1		18-A-17	北-60度-西	矩形	0.40	0.37	0.63	中世後半	
36号土坑	1		18-B-17	北-0度-東西	円形	0.32	0.32	0.48	中世後半	
37号土坑	1		18-A-18	北-40度-西	隅丸長方形	0.38	0.32	0.63	中世後半	
38号土坑	1		18-B-18	北-53度-東	隅丸正方形	0.34	0.34	0.28	中世後半	
39号土坑	1		18-B-18	北-45度-東	矩形	0.32	0.28		中世後半	
40号土坑	1		18-B-18	北-25度-東	不整形	0.22	0.20	0.26	中世後半	
41号土坑	1		18-B-19	北-13度-東	矩形	0.32	0.26	0.51	中世後半	
42号土坑	1		18-B-19	北-0度-東西	隅丸正方形	0.32	0.32	0.41	中世後半	
43号土坑	1		18-B-19	北-16度-西	隅丸正方形	0.40	0.36	0.53	中世後半	
44号土坑	1		18-B-19	北-7度-西	隅丸正方形	0.36	0.30	0.29	中世後半	
45号土坑	1		18-B-19	北-0度-東西	隅丸正方形	0.32	0.32	0.14	中世後半	
46号土坑	1		18-B-18	北-90度-東西	矩形	0.36	0.28	0.55	中世後半	
47号土坑	1		18-B-18	北-85度-東	不整形	0.64	0.46	0.88	中世後半	
48号土坑	1		18-B-20	北-74度-東	不整形	0.39	0.26	0.27	中世後半	
49号土坑	1		18-A-20	北-22度-西	不整形	0.44	0.33	0.33	中世後半	
50号土坑	1		18-B-20	北-38度-西	矩形	0.33	0.28	0.36	中世後半	
51号土坑	1		28-B-1	北-26度-西	不整形	0.83	0.20	0.26	中世後半	
52号土坑	1		28-B-2	北-0度-東西	不整形	0.90	0.40	0.28	中世後半	
53号土坑	1		28-B-2	北-20度-東	隅丸長方形	0.30	0.22	0.22	中世後半	
54号土坑	1		28-B-1	北-12度-東	隅丸正方形	0.28	0.26	0.29	中世後半	
55号土坑	1		28-A-1	北-80度-西	矩形	0.38	0.30	0.31	中世後半	
56号土坑	1		28-A-2	北-0度-東西	隅丸正方形	0.36	0.36	0.23	中世後半	
57号土坑	1		28-A-1	北-20度-東	矩形	0.42	0.33	0.40	中世後半	
58号土坑	1		28-A-1	北-28度-東	矩形	0.40	0.30	0.35	中世後半	
59号土坑	1		28-A-2	北-0度-東西	不整形	0.60	0.33	0.39	中世後半	
60号土坑	1		28-A-2	北-0度-東西	矩形	0.40	0.30	0.36	中世後半	
61号土坑			27-Q-2	北-7度-西	隅丸胴張長方形	2.46	0.70	0.64	不詳	
62号土坑			27-Q-2	北-74度-西	隅丸胴張長方形	2.70	1.00	0.17	不詳	
63号土坑			17-O-4	北-0度-東西	矩形	0.74	0.70	0.36	不詳	

富田漆田遺跡南側土坑一覽表(2)

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模(m)			時期	摘要
		区	グリッド			長	幅	深さ		
64号土坑			17-Q-6	北-60度-西	隅丸長方形	1.00	0.56	0.16		不詳
65号土坑			17-P, Q-6	北-64度-西	不整形	0.58	0.55	0.22		不詳
66号土坑			17-N-2	北-0度-東	円形	0.45	0.65	0.20		不詳
67号土坑			17-O-4	北-8度-東	隅丸正方形	0.60	0.6	0.21		不詳
68号土坑			17-R-5	北-17度-東	隅丸正方形	0.56	0.52	0.64		中世後半
69号土坑			17-S-5, 6	北-55度-東	矩形	0.40	0.35	0.48		中世後半
70号土坑			17-S-8	北-32度-東	隅丸副張正方形	0.60	0.53	0.54		古代
71号土坑			17-S-8	北-15度-東	隅丸長方形	0.52	0.4	0.30		古代
72号土坑			17-S-8	北-39度-東	隅丸正方形	0.60	0.6	0.38		古代
73号土坑			17-S-8	北-33度-西	隅丸副張正方形	0.63	0.58	0.43		古代
74号土坑			17-S-8	北-33度-西	隅丸副張正方形	0.70	0.62	0.30		古代
75号土坑			17-S-8	北-50度-東	隅丸副張正方形	0.60	0.53	0.30		古代
76号土坑			17-S-7	北-14度-西	隅丸副張正方形	0.60	0.55	0.53		古代
77号土坑			17-S-6, 7	北-90度-東西	隅丸正方形	0.38	0.36	0.25		中世後半
78号土坑			17-R, S-6	北-90度-東西	隅丸正方形	0.38	0.37	0.36		中世後半
79号土坑			17-S-6	北-45度-西	隅丸正方形	0.27	0.25	0.42		中世後半
80号土坑			17-S-6	北-65度-東	隅丸正方形	0.38	0.36	0.46		中世後半
81号土坑			17-R, S-6	北-87度-東	隅丸正方形	0.47	0.42	0.44		中世後半
82号土坑			17-R-6	北-0度-東西	隅丸正方形	0.28	0.25	0.38		中世後半
83号土坑			17-R, S-6	北-0度-東西	隅丸正方形	0.33	0.3	0.20		中世後半
84号土坑			17-S-5	北-25度-西	隅丸長方形	0.70	0.32	0.35		中世後半
85号土坑			17-Q-15	北-0度-東西	隅丸正方形	0.37	0.33	0.34		中世後半
86号土坑			17-Q-15	北-28度-西	矩形	0.33	0.28	0.18		中世後半
87号土坑			17-P, 14, 15	北-8度-西	矩形	0.37	0.32	0.36		中世後半
88号土坑			17-Q-14	北-65度-西	隅丸長方形	0.38	0.25	0.19		中世後半
89号土坑			17-Q-15	北-75度-東	不整形	0.36	0.20	0.06		中世後半
90号土坑			17-Q-15	北-90度-東西	不整形	0.30	0.26	0.06		中世後半
91号土坑			17-O-20	北-76度-西	隅丸長方形	0.25	0.20	0.14		中世後半
92号土坑			17-O-20	北-81度-西	隅丸正方形	0.30	0.28	0.27		中世後半
93号土坑			17-O-20	北-72度-西	矩形	0.36	0.28	0.22		中世後半
94号土坑			17-O-20	北-24度-東	隅丸長方形	0.66	0.44	0.17		中世後半
95号土坑			17-O-20	北-64度-東	矩形	0.44	0.36	0.23		中世後半
96号土坑			17-O-20	北-75度-西	矩形	0.28	0.22	0.23		中世後半
97号土坑			17-O-20	北-54度-西	隅丸長方形	0.47	0.33	0.24		中世後半
98号土坑			17-O-20	北-20度-東	隅丸長方形	1.92	0.48	0.06		中世後半
99号土坑			17-O-20	北-74度-西	隅丸長方形	0.48	0.44	0.26		中世後半
100号土坑			17-O-20	北-90度-東西	矩形	0.43	0.32	0.37		中世後半
101号土坑			17-O-20	北-20度-東	隅丸長方形	1.30	0.56	0.27		不詳
102号土坑			17-O-19, 20	北-15度-東	隅丸長方形	1.67	0.63	0.15		不詳
103号土坑			17-O-19, 20	北-0度-東西	矩形	0.28	0.22	0.17		中世後半
104号土坑			17-O-19, 20	北-20度-東	不整形	0.22	0.20	0.17		中世後半
105号土坑			17-P-19, 20	北-0度-東西	矩形	0.28	0.25	0.29		中世後半
106号土坑			17-P-19, 20	北-77度-西	矩形	0.28	0.25	0.29		中世後半
107号土坑			17-Q-20	北-80度-西	矩形	0.40	0.30	0.24		中世後半
108号土坑			17-R-20	北-20度-東	隅丸長方形	0.40	0.30	0.32		中世後半
109号土坑			17-R-20	北-44度-西	円形	0.28	0.28	0.28		中世後半
110号土坑			17-R-20	北-21度-東	矩形	0.28	0.26	0.29		中世後半
111号土坑			17-R-20	北-0度-東西	円形	0.27	0.27	0.20		中世後半
112号土坑			17-R-19	北-168度-東	矩形	0.23	0.18	0.21		中世後半
113号土坑			17-P-19	北-61度-西	隅丸長方形	0.38	0.33	0.21		中世後半
114号土坑			17-O-19	北-70度-西	矩形	0.24	0.22	0.25		中世後半
115号土坑			17-O-19	北-72度-西	矩形	0.24	0.2	0.19		中世後半
116号土坑			17-O-19	北-70度-西	矩形	0.20	0.17	0.20		中世後半
117号土坑			17-O, P-19	北-86度-西	不整形	0.21	0.19	0.20		中世後半
118号土坑			17-P-19	北-75度-西	矩形	0.20	0.14	0.15		中世後半
119号土坑			17-P-19	北-13度-東	隅丸正方形	0.25	0.23	0.23		中世後半
120号土坑			17-P-19	北-76度-西	隅丸副張長方形	0.84	0.59	0.14		中世後半
121号土坑			17-P-19	北-55度-西	隅丸正方形	0.25	0.24	0.29		中世後半
122号土坑			17-O, P-19	北-70度-西	隅丸正方形	0.19	0.17	0.14		中世後半
123号土坑			17-O-19	北-63度-西	矩形	0.30	0.25	0.24		中世後半
124号土坑			17-O-19	北-76度-西	矩形	0.30	0.26	0.25		中世後半
125号土坑			17-O-19	北-19度-東	隅丸長方形	1.18	0.62	0.14		不詳
126号土坑			17-O-19	北-30度-西	隅丸正方形	0.20	0.20	0.29		中世後半

富田漆田遺跡 諸元

富田漆田遺跡南側土坑一覽表(3)

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模(m)			時期	調査
		区	グリッド			長	幅	深さ		
127号土坑		17-P-19	北-69度	西	不整形	0.28	0.23	0.25	中世後半	
128号土坑		17-P-19	北-15度	東	不整形	0.19	0.19	0.22	中世後半	
129号土坑		17-P-19	北-70度	西	矩形	0.30	0.25	0.25	中世後半	
130号土坑		17-P-19	北-57度	西	矩形	0.24	0.16	0.25	中世後半	
131号土坑		17-P-19	北-0度	東西	円形	0.15	0.15	0.24	中世後半	
132号土坑		17-P-18	北-52度	東	不整形	0.22	0.20	0.25	中世後半	
133号土坑		17-P-18	北-80度	東	矩形	0.29	0.21	0.17	中世後半	6 掘立 P ₁₇
134号土坑		17-P-18	北-90度	東西	不整形	0.23	0.15	0.09	中世後半	
135号土坑		17-P-18	北-74度	西	矩形	0.17	0.15	0.16	中世後半	
136号土坑		17-P-18	北-21度	東	隅丸正方形	0.22	0.20	0.22	中世後半	
137号土坑		17-O-18	北-52度	東	隅丸正方形	0.18	0.18	0.22	中世後半	
138号土坑		17-O-18	北-10度	東	矩形	0.30	0.26	0.17	中世後半	
139号土坑		17-P-18	北-12度	東	隅丸正方形	0.22	0.22	0.17	中世後半	
140号土坑		17-O, P-18	北-18度	東	隅丸弱長方形	2.52	0.66	0.34	不詳	
141号土坑		17-P-18	北-80度	西	矩形	0.27	0.23	0.07	中世後半	
142号土坑		17-P-18	北-55度	西	不整形	0.26	0.20	0.21	中世後半	
143号土坑		17-Q-18	北-0度	東西	円形	0.20	0.20	0.26	中世後半	
144号土坑		17-Q-18	北-56度	西	不整形	0.28	0.26	0.27	中世後半	
145号土坑		17-Q-18	北-60度	西	矩形	0.20	0.18	0.12	中世後半	
146号土坑		17-Q-18	北-30度	東	隅丸正方形	0.17	0.17	0.15	中世後半	
147号土坑		17-R-18	北-46度	東	隅丸正方形	0.26	0.26	0.22	中世後半	
148号土坑		17-R-18, 19	北-5度	西	隅丸長方形	1.09	0.35	0.36	不詳	
149号土坑		17-R-18	北-18度	東	隅丸長方形	0.32	0.30	0.14	中世後半	
150号土坑		17-R-18	北-6度	東	矩形	0.37	0.34	0.35	中世後半	
151号土坑		17-R-18	北-60度	東	矩形	0.35	0.30	0.35	中世後半	
152号土坑		17-R-18	北-43度	東	矩形	0.18	0.18	0.13	中世後半	
153号土坑		17-R-18	北-54度	西	矩形	0.26	0.18	0.26	中世後半	
154号土坑		17-R-18	北-42度	西	矩形	0.18	0.17	0.26	中世後半	
155号土坑		17-R-18	北-36度	東	矩形	0.29	0.25	0.21	中世後半	3 掘立 P ₁₁
156号土坑		17-Q-18	北-90度	東西	不整形	0.25	0.20	0.23	中世後半	
157号土坑		17-Q-18	北-23度	東	不整形	0.20	0.18	0.27	中世後半	
158号土坑		17-Q-18	北-35度	東	矩形	0.28	0.26	0.28	中世後半	
159号土坑		17-Q-18	北-57度	西	矩形	0.3	0.28	0.24	中世後半	
160号土坑		17-P-18	北-23度	東	矩形	0.33	0.28	0.27	中世後半	
161号土坑		17-P-18	北-67度	東	矩形	0.36	0.32	0.33	中世後半	3 掘立 P ₁₁
162号土坑		17-O-18	北-10度	東	不整形	0.28	0.26	0.44	中世後半	
163号土坑		17-O-18	北-30度	西	不整形	0.24	0.20	0.21	中世後半	
164号土坑		17-O, P-17, 18	北-23度	東	隅丸弱長方形	2.50	1.20	0.16	不詳	
165号土坑		17-P-17	北-86度	西	隅丸正方形	0.23	0.20	0.25	中世後半	
166号土坑		17-P-17	北-70度	東	隅丸正方形	0.35	0.32	0.31	中世後半	
167号土坑		17-P-17	北-18度	東	矩形	0.23	0.27	0.17	中世後半	
168号土坑		17-P-17	北-20度	東	矩形	0.35	0.28	0.31	中世後半	
169号土坑		17-Q-17, 18	北-50度	東	矩形	0.33	0.26	0.37	中世後半	
170号土坑		17-Q-17, 18	北-63度	西	隅丸正方形	0.20	0.18	0.17	中世後半	
171号土坑		17-Q-17	北-58度	西	隅丸正方形	0.22	0.20	0.15	中世後半	
172号土坑		17-R-17	北-30度	東	隅丸長方形	0.36	0.30	0.32	中世後半	
173号土坑		17-R-17	北-16度	東	隅丸正方形	0.22	0.20	0.20	中世後半	
174号土坑		17-R-17	北-0度	東西	隅丸長方形	0.28	0.20	0.24	中世後半	
175号土坑		17-Q-17	北-60度	西	隅丸長方形	0.30	0.20	0.24	中世後半	
176号土坑		17-Q-17	北-53度	西	矩形	0.32	0.28	0.28	中世後半	
177号土坑		17-P-17	北-54度	西	矩形	0.28	0.24	0.19	中世後半	
178号土坑		17-P-17	北-43度	西	矩形	0.32	0.28	0.19	中世後半	
179号土坑		17-P-17	北-58度	西	矩形	0.30	0.25	0.17	中世後半	
180号土坑		17-P-17	北-63度	西	円形	0.27	0.27	0.13	中世後半	
181号土坑		17-P-16, 17	北-26度	東	不整形	0.42	0.28	0.20	中世後半	
182号土坑		17-Q-17	北-65度	西	隅丸長方形	0.34	0.22	0.31	中世後半	
183号土坑		17-Q-17	北-30度	東	隅丸正方形	0.24	0.23	0.21	中世後半	
184号土坑		17-R-17	北-32度	東	隅丸正方形	0.24	0.22	0.15	中世後半	
185号土坑		17-Q-17	北-8度	西	矩形	0.30	0.22	0.26	中世後半	
186号土坑		17-Q-17	北-50度	西	矩形	0.18	0.13	0.13	中世後半	
187号土坑		17-Q-17	北-33度	東	隅丸弱長方形	0.31	0.29	0.20	中世後半	
188号土坑		17-Q-16	北-65度	西	円形	0.22	0.22	0.08	中世後半	
189号土坑		17-Q-16	北-0度	東西	隅丸正方形	0.18	0.16	0.14	中世後半	

富田漆田遺跡南側土坑一覽表(4)

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模(m)			時期	摘要
		区	グリッド			長	幅	深さ		
189号土坑			17-P-16	北-70度-西	隅丸正方形	0.29	0.29	0.28	中世後半	2掘立P ₁₄
191号土坑			17-P-16	北-20度-東	矩形	0.27	0.24	0.11	中世後半	
192号土坑			17-P-16	北-60度-西	矩形	0.30	0.27	0.23	中世後半	
193号土坑			17-P-16	北-38度-東	不整形	0.20	0.12	0.19	中世後半	
194号土坑			17-P-16	北-60度-西	矩形	0.20	0.18	0.26	中世後半	
195号土坑			17-P-16	北-0度-東西	隅丸正方形	0.24	0.23	0.10	中世後半	
196号土坑			17-P-16	北-60度-西	矩形	0.30	0.25	0.20	中世後半	
197号土坑			17-P-16	北-28度-東	隅丸正方形	0.24	0.24	0.26	中世後半	
198号土坑			17-Q-16	北-55度-東	矩形	0.18	0.16	0.23	中世後半	
199号土坑			17-Q-16	北-53度-西	矩形	0.28	0.23	0.23	中世後半	
200号土坑			17-R-16	北-54度-西	隅丸長方形	0.36	0.23	0.34	中世後半	
201号土坑			17-R-17	北-90度-東西	隅丸長方形	0.35	0.25	0.18	中世後半	
202号土坑			17-R-17	北-18度-東	不整形	0.45	0.30	0.58	中世後半	
203号土坑			17-R-16	北-50度-西	隅丸正方形	0.28	0.28	0.47	中世後半	
204号土坑			17-R-16	北-26度-東	隅丸長方形	0.34	0.26	0.19	中世後半	
205号土坑			17-Q-16	北-47度-西	矩形	0.23	0.20	0.23	中世後半	
206号土坑			17-Q-16	北-23度-東	矩形	0.22	0.20	0.12	中世後半	
207号土坑			17-Q-16	北-38度-東	矩形	0.25	0.22	0.23	中世後半	
208号土坑			17-Q-16	北-45度-西	矩形	0.28	0.25	0.24	中世後半	
209号土坑			17-Q-16	北-0度-東西	円形	0.22	0.20	0.11	中世後半	1掘立P ₁₀
210号土坑			17-Q-15,16	北-40度-西	矩形	0.24	0.22	0.2	中世後半	1掘立P ₁₁
211号土坑			17-Q-15,16	北-0度-東西	円形	0.22	0.22	0.15	中世後半	1掘立P ₁₁
212号土坑			17-P-16	北-40度-西	不整形	0.28	0.24	0.21	中世後半	
213号土坑			17-P-16	北-0度-東西	不整形	0.22	0.20	0.16	中世後半	
214号土坑			17-P-16	北-42度-西	不整形	0.25	0.22	0.16	中世後半	
215号土坑			17-P-15	北-30度-東	隅丸側張長方形	0.48	0.38	0.12	中世後半	
216号土坑			17-P-15	北-0度-東西	円形	0.22	0.22	0.16	中世後半	
217号土坑			17-P-14	北-84度-西	不整形	0.50	0.32	0.16	不詳	
218号土坑			18-A, B-14,15	北-48度-西	不整形	0.25	0.14	0.29	不詳	
219号土坑			17-Q-12	北-40度-東	不整形	0.35	0.30	0.13	中世後半	
220号土坑			17-S-11	北-0度-東西	円形	0.60	0.60	0.26	中世後半	
221号土坑			17-R-11	北-55度-西	隅丸正方形	0.33	0.30	0.31	中世後半	
222号土坑			17-Q, R-19	北-0度-東西	円形	0.16	0.16	0.15	中世後半	
223号土坑			18-B-18	北-64度-西	隅丸正方形	0.32	0.31	0.56	中世後半	
224号土坑			17-S-11	北-64度-西	矩形	0.25	0.20	0.45	中世後半	
225号土坑			17-R-15	北-62度-西	不整形	0.26	0.22	0.38	中世後半	
226号土坑			17-R-15	北-62度-西	矩形	0.22	0.18		中世後半	
227号土坑			28-B-1	北-0度-東西	円形	0.25	0.25	0.41	中世後半	
228号土坑			18-B-20	北-48度-西	隅丸長方形	0.30	0.22	0.49	中世後半	
229号土坑			18-B-19	北-0度-東西	隅丸正方形	0.40	0.40	0.46	中世後半	
230号土坑			18-B-18	北-0度-東西	隅丸正方形	0.24	0.24		中世後半	
231号土坑			18-B-16	北-52度-東	不整形	0.35	0.30	0.26	中世後半	
232号土坑			18-B-16	北-77度-東	矩形	0.45	0.38	0.39	中世後半	
233号土坑			18-B-16	北-10度-西	矩形	0.36	0.32	0.36	中世後半	
234号土坑			18-B-15	北-0度-東西	不整形	0.33	0.28	0.35	中世後半	
235号土坑			17-R-17	北-60度-東	不整形	0.34	0.32	0.25	中世後半	
236号土坑			18-B-17	北-40度-西	不整形	0.50	0.30	0.44	中世後半	
237号土坑			17-O-20	北-10度-東	矩形	0.36	0.28	0.22	中世後半	
238号土坑			17-O, P-19	北-80度-西	矩形	0.26	0.23	0.16	中世後半	
239号土坑			17-P-18	北-90度-東西	矩形	0.17	0.13	0.69	中世後半	
240号土坑			17-R-17	北-0度-東西	隅丸長方形	0.23	0.20	0.14	中世後半	
241号土坑			18-B-15	北-45度-西	隅丸長方形	0.35	0.25	0.19	中世後半	
242号土坑			17-R-19	北-25度-東	矩形	0.22	0.18	0.18	中世後半	
243号土坑			17-R-19	北-0度-東西	円形	0.25	0.25	0.04	中世後半	
244号土坑			17-P-18	北-56度-西	隅丸正方形	0.25	0.22	0.26	中世後半	
245号土坑			17-Q-20	北-82度-西	矩形	0.27	0.20	0.26	中世後半	
246号土坑			17-P-20	北-45度-東	矩形	0.26	0.26	0.32	中世後半	
247号土坑			17-P-20	北-13度-西	矩形	0.23	0.18	0.29	中世後半	
248号土坑			17-P-20	北-25度-東	矩形	0.23	0.22	0.28	中世後半	
249号土坑			17-P-20	北-78度-西	矩形	0.28	0.26	0.22	中世後半	
250号土坑			17-R-20	北-24度-東	矩形	0.21	0.20	0.27	中世後半	
251号土坑			17-R-19	北-35度-西	矩形	0.28	0.28	0.255	中世後半	4掘立P ₁
252号土坑			17-R-19	北-22度-西	矩形	0.20	0.20	0.28	中世後半	4掘立P ₁

富田漆田遺跡 諸元

富田漆田遺跡南側土坑一覽表(5)

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模 (m)			時期	概要
		区	グリッド			長	幅 (m)			
							幅	深さ		
253号土坑		17-Q-19	北-17度-東	矩形	0.18	0.18	0.28	中世後半	4層立P ₇	
254号土坑		17-Q-19	北-4度-東	矩形	0.27	0.26	0.44	中世後半	4層立P ₈	
255号土坑		17-Q-19	北-0度-東西	矩形	0.24	0.20	0.28	中世後半	4層立P ₈	
256号土坑		17-R-19	北-40度-西	矩形	0.33	0.33	0.31	中世後半	4層立P ₁₀	
257号土坑		17-R-19	北-65度-西	矩形	0.39	0.38	0.38	中世後半	4層立P ₁₀	
258号土坑		17-R-19	北-86度-東	矩形	0.36	0.25	0.20	中世後半	4層立P ₈	
259号土坑		17-R-19	北-37度-西	矩形	0.26	0.26	0.26	中世後半	4層立P ₁₁	
260号土坑		17-P-19	北-69度-西	矩形	0.32	0.30	0.31	中世後半		
261号土坑		穴番						中世後半		
262号土坑		17-R-19	北-73度-西	矩形	0.40	0.38	0.28	中世後半	6層立P ₈	
263号土坑		17-Q-19	北-40度-西	矩形	0.30	0.30	0.27	中世後半	6層立P ₈	
264号土坑		17-Q-19	北-40度-西	矩形	0.37	0.36	0.48	中世後半	6層立P ₈	
265号土坑		17-P-19	北-3度-東	矩形	0.40	0.32	0.36	中世後半	6層立P ₈	
266号土坑		17-P-19	北-43度-西	矩形	0.38	0.36	0.21	中世後半	6層立P ₁₀	
267号土坑		17-P-19	北-27度-東	矩形	0.18	0.18+α	0.18	中世後半	6層立P ₁₁	
268号土坑		17-P-18	北-80度-西	不整形	0.36	0.36	0.50	中世後半	6層立P ₈	
269号土坑		17-P, Q-18	北-5度-東	矩形	0.40	0.32	0.46	中世後半	6層立P ₈	
270号土坑		17-Q-18	北-60度-西	矩形	0.30	0.28	0.41	中世後半	6層立P ₈	
271号土坑		17-Q-18	北-6度-東	矩形	0.52	0.40	0.29	中世後半	6層立P ₈	
272号土坑		17-R-18	北-32度-東	矩形	0.37	0.36	0.39	中世後半	6層立P ₈	
273号土坑		17-R-18	北-90度-東西	矩形	0.18	0.16	0.23	中世後半		
274号土坑		17-Q-19	北-17度-東	矩形	0.28	0.26	0.38	中世後半	5層立P ₁₀	
275号土坑		17-P-19	北-3度-西	矩形	0.30	0.28	0.33	中世後半	5層立P ₈	
276号土坑		17-P-18	北-33度-西	矩形	0.37	0.32	0.47	中世後半	5層立P ₈	
277号土坑		17-P-18	北-34度-西	矩形	0.30	0.30	0.38	中世後半	5層立P ₈	
278号土坑		17-P-18	北-17度-西	矩形	0.28	0.264	0.22	中世後半		
279号土坑		17-P-18	北-24度-西	矩形	0.28	0.23	0.28	中世後半	5層立P ₈	
280号土坑		17-P, Q, 17, 18	北-30度-西	矩形	0.28	0.28	0.28	中世後半	3層立P ₈	
281号土坑		17-P, Q-17	北-36度-西	矩形	0.28	0.26	0.33	中世後半	5層立P ₈	
282号土坑		17-Q-17	北-35度-西	矩形	0.32	0.30	0.27	中世後半	5層立P ₈	
283号土坑		17-Q-18	北-0度-東西	矩形	0.40	0.32	0.34	中世後半	5層立P ₈	
284号土坑		17-Q-18	北-33度-西	矩形	0.34	0.29	0.25	中世後半	5層立P ₈	
285号土坑		17-Q-18	北-54度-東	矩形	0.23	0.16	0.50	中世後半		
286号土坑		17-Q-18	北-45度-東	矩形	0.35	0.30	0.29	中世後半	3層立P ₈	
287号土坑		17-Q-18	北-21度-東	矩形	0.30	0.26	0.30	中世後半	5層立P ₈	
288号土坑		17-R-18	北-42度-西	矩形	0.38	0.38	0.45	中世後半	3層立P ₈	
289号土坑		17-Q-18	北-40度-東	矩形	0.32	0.34	0.2	中世後半	3層立P ₁₀	
290号土坑		17-P-18		矩形	0.36	0.24+α	0.22	中世後半	3層立P ₁₁ 4井戸と重なる	
291号土坑		17-P-18	北-40度-西	矩形	0.32	0.32	0.48	中世後半	3層立P ₁₁	
292号土坑		17-P-18	北-20度-西	矩形	0.32	0.26	0.75	中世後半	3層立P ₈	
293号土坑		17-P-18	北-83度-東	矩形	0.28	0.28	0.23	中世後半	3層立P ₈	
294号土坑		17-Q-18	北-5度-東	矩形	0.36	0.3	0.21	中世後半	3層立P ₈	
295号土坑		17-Q-18	北-0度-東西	矩形	0.30	0.22	0.20	中世後半	3層立P ₈	
296号土坑		17-Q-18	北-47度-西	矩形	0.34	0.32	0.47	中世後半	3層立P ₈	
297号土坑		17-R-18	北-88度-東	矩形	0.44	0.4	0.53	中世後半	3層立P ₈	
298号土坑		17-P-18	北-20度-東	矩形	0.30	0.28	0.29	中世後半		
299号土坑		17-P-17	北-14度-東	矩形	0.28	0.24	0.23	中世後半		
300号土坑		17-P-17	北-13度-東	矩形	0.24	0.22	0.11	中世後半		
301号土坑		17-R-17	北-0度-東西	矩形	0.36	0.34	0.24	中世後半		
302号土坑		17-R-17	北-3度-西	矩形	0.25	0.23	0.40	中世後半	2層立P ₇	
303号土坑		17-Q-17	北-2度-西	矩形	0.28	0.26	0.33	中世後半	2層立P ₈	
304号土坑		17-Q-17	北-0度-東西	矩形	0.28	0.24	0.21	中世後半	2層立P ₈	
305号土坑		17-Q-17	北-4度-東	矩形	0.23	0.21	0.24	中世後半	2層立P ₁₀	
306号土坑		17-Q-17	北-3度-東	矩形	0.30	0.26	0.44	中世後半	2層立P ₁₁	
307号土坑		17-P-17	北-22度-西	矩形	0.34	0.34	0.67	中世後半	2層立P ₁₁	
308号土坑		17-P-17	北-4度-東	矩形	0.30	0.28	0.26	中世後半		
309号土坑		17-P-17	北-18度-東	矩形	0.40	0.36	0.35	中世後半	2層立P ₈	
310号土坑		17-Q-17	北-2度-東	矩形	0.25	0.20	0.20	中世後半	2層立P ₁₁	
311号土坑		17-Q-17	北-18度-西	矩形	0.20	0.18	0.31	中世後半	2層立P ₁₁	
312号土坑		17-Q-17	北-4度-東	矩形	0.26	0.26	0.20	中世後半		
313号土坑		17-Q-16	北-9度-東	矩形	0.36	0.28	0.62	中世後半	2層立P ₈	
314号土坑		17-Q-16	北-64度-東	矩形	0.37	0.36	0.60	中世後半	2層立P ₈	

富田漆田遺跡南側土坑一覽表(6)

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模(m)			時期	概要
		区	グリッド			長	幅	深さ		
315号土坑			17-Q-16	北-18度-西	矩形	0.26	0.24	0.40	中世後半	2個立P ₁
316号土坑			17-Q、R-16	北-20度-西	矩形	0.26	0.21	0.34	中世後半	2個立P ₂
317号土坑			17-R-16	北-30度-西	矩形	0.34	0.27	0.24	中世後半	2個立P ₁
318号土坑			17-R-17	北-9度-東	矩形	0.26	0.24	0.33	中世後半	2個立P ₁
319号土坑			17-R-16	北-4度-西	矩形	0.34	0.32	0.32	中世後半	1個立P ₁
320号土坑			17-Q-16	北-85度-東	矩形	0.30	0.26	0.41	中世後半	1個立P ₁
321号土坑			17-Q-16	北-5度-東	矩形	0.28	0.22	0.16	中世後半	1個立P ₁
322号土坑			17-Q-16	北-83度-東	矩形	0.31	0.26	0.44	中世後半	1個立P ₁
323号土坑			17-P-16	北-16度-東	矩形	0.28	0.26	0.30	中世後半	7個立P ₁
324号土坑			17-P-16	北-28度-東	矩形	0.30	0.28	0.31	中世後半	7個立P ₁
325号土坑			17-P-16	北-22度-東	矩形	0.26	0.26	0.28	中世後半	
326号土坑			17-P、Q-16	北-55度-東	長方形	0.46	0.36	0.21	中世後半	7個立P ₁
327号土坑			17-Q-16	北-0度-東西	矩形	0.35	0.34	0.43	中世後半	7個立P ₁
328号土坑			17-Q-15	北-87度-東	矩形	0.40	0.36	0.50	中世後半	7個立P ₁
329号土坑			17-Q-15	北-60度-東	矩形	0.32	0.30	0.38	中世後半	7個立P ₁
330号土坑			17-P、Q-15	北-60度-西	矩形	0.36	0.34	0.48	中世後半	
331号土坑			17-P-15	北-35度-西	矩形	0.33	0.33	0.32	中世後半	7個立P ₁
332号土坑			17-P-15	北-80度-西	長方形	0.33	0.22	0.17	中世後半	7個立P ₁
333号土坑			17-P-16	北-88度-東	矩形	0.34	0.32	0.23	中世後半	
334号土坑			17-P-15	北-14度-東	矩形	0.34	0.33	0.15	中世後半	
335号土坑			17-Q-15	北-13度-東	矩形	0.20	0.18	0.11	中世後半	1個立P ₁
336号土坑			17-Q-15	北-17度-東	矩形	0.26	0.22	0.22	中世後半	1個立P ₁
337号土坑			17-Q-15	北-90度-東西	矩形	0.33	0.30	0.37	中世後半	1個立P ₁
338号土坑			17-Q-15	北-6度-西	矩形	0.40	0.36	0.38	中世後半	1個立P ₁
339号土坑			17-R-15	北-0度-東西	矩形	0.43	0.40	0.41	中世後半	1個立P ₁
340号土坑			17-R-17	北-90度-東西	矩形	0.24	0.18+ ϵ	0.12	中世後半	
341号土坑			17-R-17	北-9度-西	矩形	0.26	0.22	0.48	中世後半	
342号土坑			17-R、S-19	北-17度-西	矩形	0.30	0.30	0.31	中世後半	4個立P ₁
343号土坑			17-R-19	北-70度-西	矩形	0.28	0.26	0.30	中世後半	4個立P ₁
344号土坑				欠番					中世後半	
345号土坑			17-N-20	北-0度-東西	円形	0.14	0.12	0.23	中世後半	
346号土坑			17-N-20	北-38度-西	矩形	0.23	0.20	0.17	中世後半	
347号土坑			17-N-19	北-0度-東西	矩形	0.17	0.16	0.11	中世後半	
348号土坑			17-N-20	北-0度-東西	矩形	0.18	0.17	0.22	中世後半	
349号土坑			17-P-18	北-0度-東西	矩形	0.22	0.22	0.31	中世後半	3個立P ₁
350号土坑			17-P-18	北-15度-東	矩形	0.31	0.27	0.25	中世後半	
351号土坑			17-P-18	北-85度-東	矩形	0.17	0.16	0.15	中世後半	

井戸跡一覽表

遺構番号	調査面	位置		主軸方位	形状	規模(m)			時期	概要
		区	グリッド			長	幅	深さ		
1号井戸跡		C	18-A-20	北-0度-東西	矩形	1.10	1.04	1.65	中世後半	
2号井戸跡		C	17-S、T-18	北-70度-西	矩形	2.40	2.10	1.64	中世後半	
3号井戸跡		C	17-Q-18	北-42度-東	矩形	0.88	0.83	1.10	中世後半	
4号井戸跡		C	17-P、Q-18	北-0度-東西	隅丸正方形	1.34	1.31	1.32	中世後半	
5号井戸跡		C	17-R-14	北-0度-東西	隅丸正方形	1.20	1.18	1.22	中世後半	
6号井戸跡		C	17-O、18、19	北-53度-西	矩形	1.30	1.27	1.58	中世後半	
7号井戸跡		B	17-Q-6	北-0度-東西	矩形	1.13	0.90	0.84	不詳	
8号井戸跡		B	17-Q-6	北-90度-東西	矩形	1.65	1.32	1.16	不詳	
9号井戸跡		C	27-O-1	北-20度-東	隅丸正方形	1.54	1.40	1.20	不詳	

富田漆田遺跡南側調査区遺物観察表

C区第1号溝状遺構

遺物番号 図面番号	遺物種類 形状	出土層位 遺存層	厚さ 目(mm) 目(g)	構成・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備考
10-0001	土師器 土師器 環心礎	覆土内 破片	底0.40	灰・黒・赤・黄褐色・黒色粘物粒子	直面に施れ、縁部には黒色粘物粒子(内面石乃至縁石)。立ち上りの部厚から器種は厚と思われ。詳細不詳。	在地点か
10-0002	須恵器 環心礎	覆土内 破片	口12.00	黒・赤・黄褐色・黒色粘物粒子・白色粘土	輪縁成形器石割製。器厚は厚い。富田漆田製の製品。	漆田産
10-0003	須恵器 環心礎	覆土内 破片	底0.40	灰・黒・赤・灰白・黒色粘物粒子	輪縁成形器石割製。高台は付け高台。器厚は厚い。富田漆田製の製品。生地上は焼土化したリム土か。	漆田産
10-0004	須恵器 環心礎	覆土内 破片	径14.00	灰・黒・緑・赤・灰・黄褐色	輪縁成形器石割製。	黒毛産
10-0005	須恵器 環心礎	覆土内 破片	底0.40	灰・黒・赤・黄褐色・黒色粘物粒子・白色粘土	直面に施れ、外面は寛狭り、内面は寛の小口による狭で成形を施している。	在地点か
10-0006	須恵器 環心礎	覆土内 破片	口径21.4	灰・黒・赤・外面赤褐色・断面灰黄・黒色粘物粒子少量	紐作り後輪縁石割成形製。筒は取り付け。胴部孔を穿つ。検定に内側する器底。	漆田産
10-0007	須恵器 環心礎	覆土内 破片	底0.40	赤・黒・緑・灰白・磁器質 粘土・オリーブグリーン	内面に筋が認められるが、加飾が筒状による物が判別が困難。高台は三日片高台。	
10-0008	須恵器 環心礎	覆土内 破片	口径7.85	灰・黒・緑・灰 粘土・オリーブグリーン	高台は胴部上平まで施している。施飾方法は不詳。内面はコシ成形を施している。	
10-0009	土師器土師 器	覆土内 破片	口9.00 底15.00	灰・黒・赤・黄褐色・黒・赤片・黒色粘物粒子・砂石	輪縁成形器石割製。口縁部は焼成時の熱受けが顕著で色変する。	黒毛産
10-0010	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.3	灰・黒・赤・外面暗灰・断面灰白・白色粘土・黄褐色	見込みで単面1原形の仕様が認められる。	黒毛産
10-0011	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚1.3	黒・赤・緑・外面赤褐色・内面赤褐色・断面灰・白色粘物粒子	紐作り。外面は縦位の狭で成形。内面は横位の狭で成形を施している。	常滑系
10-0001	須恵器 環心礎	覆土内 破片	残径3.4 残幅0.5 残厚0.5 残重2.3		観察以前に跡の除去作業が行われたため詳細不詳。	

A区第2号溝状遺構

遺物番号 図面番号	遺物種類 形状	出土層位 遺存層	厚さ 目(mm) 目(g)	構成・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備考
10-0012	土師器 土師器	覆土内 破片	口13.00 底10.00	灰・黒・赤・黄褐色・黒色粘物粒子・赤褐色粘土	成形は不詳。外面は狭帯で成形を施している。内面は狭で指の成形を施している。断面に筋を施す。内面に筋を施す。内外面は紐作りで成形を施している。	在地点
10-0013	土師器	覆土内 破片	厚0.4	灰・黒・赤・黄褐色・砂石・黒色粘物粒子	内面は紐作りで成形。内外面は紐作りで成形を施している。	在地点
10-0014	土師器 器台	覆土内 破片	基部2.6	灰・黒・赤・黄褐色・白色粘土・砂石・黄褐色	外面は斜位の狭帯を施している。重4箇所を穿つ。	在地点

B区第2号溝状遺構

遺物番号 図面番号	遺物種類 形状	出土層位 遺存層	厚さ 目(mm) 目(g)	構成・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備考
10-0015	須恵器 環心礎	覆土内 破片	口13.00	黒・赤・赤・外面暗灰～黒・内面灰～灰黄・白色粘土・白色粘土	輪縁成形器石割製。	黒毛産
10-0016	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.4	黒・赤・赤・断面～灰黄～黄褐色・黒色粘物粒子・砂石	輪縁成形器石割製。外面に溝を記すことが判別不能。	黒毛産
10-0017	須恵器 環心礎	覆土内 破片	底16.80	赤・黒・緑・灰 粘土・オリーブ	施飾方法は不分明。輪縁成形器石割製。高台は付け高台。	
10-0018	須恵器 環心礎	覆土内 破片	底7.20	灰・黒・赤・黄褐色・赤褐色粘土・赤褐色粘土・塵片	輪縁成形器石割製。高台は付け高台。内面の破文には筋文様が垂下する。	不詳
10-0002	須恵器 環心礎	覆土内 破片	残径2.8 残幅1.65 残厚0.3 残重3.2		上縁部は曲がった状態で、おじりった可能性も考慮されるが、全備像が判別認められない。	

C区第2号溝状遺構

遺物番号 図面番号	遺物種類 形状	出土層位 遺存層	厚さ 目(mm) 目(g)	構成・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備考
10-0019	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.25	灰・黒・赤・灰 粘土・灰オリーブで底に付く。	輪縁成形器石割製。	
10-0020	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.6	灰・黒・緑・灰 粘土・灰オリーブで底に付く。	輪縁成形器石割製。	
10-0021	土師器土師 器	覆土内 破片	1.8.3 底5.1 重2.1	灰・黒・赤・黄褐色・白色粘物粒子・黒色粘物粒子	輪縁成形器石割製。器底は斜形赤筋。全体作りが厚い。	黒毛産
10-0022	須恵器 環心礎	覆土内 破片	口132.00	灰・黒・赤・灰・黒色粘土・透明粘物粒子(径約1.0)・白色粘土	紐作り後輪縁石割成形製。口唇部の内面に溝縁し、口唇部直下から器底が浮き出る。	太田産
10-0023	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.8	灰・黒・赤・外面黒・内面暗・黒色粘物粒子・透明粘物粒子	首部の破片。耳の接合は露出でない。	黒毛産
10-0024	須恵器 環心礎	覆土内 破片	底126.40	灰・黒・赤・黄褐色・白色粘土・赤褐色粘土	下半部は紐作りか。器内外面は狭帯。	黒毛産
10-0025	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.0	黒・赤・緑・断面灰・外面黄褐色断面灰粘物粒子	紐作り。外面は縦位の狭で成形。内面は横位の狭で成形を施している。	常滑系
10-0026	須恵器 環心礎	覆土内 破片	厚0.5	赤・黒・緑・灰 粘土・灰オリーブで均一	輪縁成形器石割製。内外面に筋縁文が認められるが、文様の意匠等は不分明。	同家産系
10-0003	須恵器 環心礎	覆土内 破片	残径4.5 残幅4.4 残厚3.2 残重77.8		両中裏面左側の破片を呼ぶ。破片は3程である。	

C区第3号溝状遺構

遺構番号 図面番号	遺物種類 遺物種別	出土層位 遺存層	発見 目 (m) 目 (g)	地質・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00027	漆黒黒色土 土加土	覆土内 破片	底(5.2)	黒・黒・黒・黒・黒色磁物粒子	輪軸成形器石製。高台は付け高台。	黒毛土
10-00028	土加質土層 皿	覆土内 破片	1(9.6) 底(1.0) 高2.0	黒・黒・黒・黒褐色・多石質・黒色磁物粒子	輪軸成形器石製。底面の切り離しは不明。	

B区第4号溝状遺構

遺構番号 図面番号	遺物種類 遺物種別	出土層位 遺存層	発見 目 (m) 目 (g)	地質・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00029	土加質土層 皿	覆土内 1/2枚	1(11.6) 底(5.0) 高3.2	黒・黒・黒・赤褐色粒子・漆黒磁物粒子・夾雑物少量	輪軸成形器石製。底面は回転成形。窪みに指先の跡・溝などで施している。底面には木屑が認められる。	黒毛土+柳木屑
10-00030	軟質陶器 内丸切破片	覆土内 破片	1(33.0) 底(8.4) 高6.2	黒・黒・黒・内面黒・断面褐色・外面・黒色磁物粒子	高部は厚作りか、口縁部は横溝を施す。	黒毛土
10-00031	軟質陶器 内丸切破片	覆土内 破片	厚0.9	黒・黒・黒・白灰・黒・多石質・黒色磁物粒子	耳の平に成形されている。耳の接合は字付け。	黒毛土
10-00032	漆黒陶器 破片	覆土内 破片	1(11.2) 底(6.0) 高3.3	黒・黒・黒・灰 輪軸=暗い灰オリーブ	輪軸成形器石製。高台は附け高台。陶の花弁は一方向で出している。	美濃土
10-00033	漆黒陶器 破片	覆土内 破片	厚(5.8)	黒・黒・黒・乳白	内外面に厚く施される。輪は鉄軸。	瀬戸美濃土
10-00034	軟質陶器 大甕	覆土内 破片	厚1.2	黒・黒・黒・灰 輪軸=灰オリーブ	紐作り。外面は縦位の條で整形。内面は横位の條で整形を施している。	
10-00035	染付磁器 碗	覆土内 破片	1(16.0) 底(2.8) 高3.5	黒・黒・黒・灰 輪軸=乳白色	見込み施の目の施せ。施文は認められない。	
10-00036	陶磁器付 破片	覆土内 破片	厚0.5	黒・黒・黒・灰 輪軸=透明	口縁部直下に3条の横線を施文する。輪は黒入が認められる。	瀬戸詳

C区第4号溝状遺構

遺構番号 図面番号	遺物種類 遺物種別	出土層位 遺存層	発見 目 (m) 目 (g)	地質・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備 考
20-00001	石製品 白(上白)	覆土内 部分欠損	径30.8 高15.6 よこみ1.7	粗粒輝石安山岩	横打ち込みの穴が2箇所認められる。	
20-00002	石製品 白(下白)	覆土内 部分欠損	径31.8 高14.2	粗粒輝石安山岩	目は厚縁により消滅している。	
20-00003	石製品 水輪か	覆土内 破片	径40.2	高見岡層灰岩	頂上面に藍灰が2箇所認められるが、後者の可能性が考えられる。空筒の底心の可能性もある。	

B区第4号溝状遺構

遺構番号 図面番号	遺物種類 遺物種別	出土層位 遺存層	発見 目 (m) 目 (g)	地質・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備 考
20-00004	石製品 白	B区4溝	径29.2 高13.9 厚0.96	粗粒輝石安山岩	上面の目は認められない。心棒の受け穴は割張り正方形を呈している。	
20-00005	石製品 白	B区4溝	径35.0 高7.7 厚2,500	粗粒輝石安山岩	縦・縦りがある。上面の目は縦線程度しか認められない。8分割基本と思われる。	
20-00006	石製品 大甕	B区4溝	径19.5 高11.7 厚7.6 重1,000	粗粒輝石安山岩	目を新用した何らかの製品である。跡を新造上で復元したものか。	
20-00007	石製品 樽蓋	B区4溝	径13.6 高14.9 厚7.5 重2,500	粗粒輝石安山岩	破断された樽蓋の中央部分と思われる。左右対称に文字を施す。文字は「ヤ」か。	
20-00008	石製品 五輪型火輪	B区4溝	径23.7 厚 輪13.5 重9,100	粗粒輝石安山岩	全体に小単位の破損が多い。	
20-00009	石製品 五輪型火輪	B区4溝	径30.0 厚 輪18.6 重13,900	粗粒輝石安山岩	欠損部は破断による入角。小単位の欠損も多い。軒輪30.0cmは1尺の短輪懸か。	
20-00010	石製品 五輪型水輪	B区4溝	径26.9 厚 輪16.8 重15,600	粗粒輝石安山岩	小単位の欠損が多い。	
20-00011	石製品 五輪型水輪	B区4溝	径23.0 厚11.5 輪14.3 重129,500	粗粒輝石安山岩	扁平な形状が欠損している。表面は水磨きが施されている。	
20-00012	石製品 五輪型水輪	B区4溝	径26.7 厚27.7 輪19.7 重8,700	高見岡層灰岩	破断されている。整形面は拓原部分のみが残存する。	
20-00013	石製品 五輪型水輪	B区4溝	径29.7 厚29.8 輪17.0 重9,200	高見岡層灰岩	破断されている。整形面は拓原部分のみが残存する。	
20-00014	石製品 五輪型水輪	B区4溝	径31.7 厚21.8 輪13.9 重21,800	高見岡層灰岩	破断されている。整形面は拓原部分のみが残存する。	
20-00015	五輪型 水輪か	B区4溝	径36.7 厚36.9 輪22.9 重37,800	粗粒輝石安山岩	二次的な加工が部分的に認められる。拓原面は磨かれている。破断は人為による。	

C区第4号溝状遺構

遺構番号 図面番号	遺物種類 遺物種別	出土層位 遺存層	発見 目 (m) 目 (g)	地質・色調・粘土 (石素材は灰目録)	形状・技法等の特徴	備 考
20-00016	石製品 破片	覆土内 部分欠損	1辺40.0 [±] α 高16.6	高見岡層灰岩	多層帯と考えられる。石質は粗粒・細粒が併存互層をなし、全体に粗い。磨き仕上げになっている。	
10-00027	軟質陶器 大甕	覆土内 破片	厚1.1	黒・黒・黒・暗灰・白色磁物粒子	面作りが向き施し。外面は縦位の條で整形。内面は横位の條で整形を施している。	常滑産
10-00028	軟質陶器 大甕	覆土内 破片	厚0.7	黒・黒・黒・灰・白色磁物粒子	紐作り。外面は縦位の條で整形。内面は横位の條で整形を施している。	常滑産
10-00029	染付磁器 破片	覆土内 破片	厚0.6	黒・黒・黒・乳白 輪軸=薄く透明	文様の施文は認められない。	
10-00040	青磁 破片	覆土内 破片	厚0.5	黒・黒・黒・灰 輪軸=灰オリーブで厚く施される	内面に片切りの2条線を縦位に施し、口縁部直下に同様に横位の施文が認められる。	

富田遺跡 諸元

C区第5号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00041	土師器 甕	覆土内 破片	底(7.4)	赤・黒・黄・浅黄褐色・灰緑物少・粘 石状白色粘土・多少	外周は折り目か。立ち上がり部分は斜位の裏割り・微で彫形 を施している。	在地層か
10-00042 52	須恵系陶 器	覆土内 部分欠損	口13.4 底7.3 高さ2.1	赤・黒・黄・灰白・黄色粘物粒子	轆轤成形形右回転。高台は付け高台。外面に墨書が認められ るが判読不能。器内外面に焼成時の痕跡が認められる。	富田窯田原 製品
10-00043	須恵系陶 器	覆土内 破片	底(11.6)	赤・黒・黄・緑・灰・黄緑物微量	轆轤成形形右回転。高台は付け高台。体部・口縁部を欠損す る。	堺原窯か東 海産
10-00044 52	須恵系陶 器	覆土内 破片	口19.0 底17.5 高さ1.2	赤・黒・黄・灰 物調一致オリブ	轆轤成形形右回転。高台は付け高台。口唇部は欠り反する。 高台は小さく丸まる。施物は見込みは無い。	堺原産

C区第6号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00045	須恵系陶 器	覆土内 破片	底(18.0)	赤・黒・黄・内面鉄黄褐色・外面黒・ 白色粘物粒子・黒色粘物粒子	外面は2段階の微で彫形が認められる。内面は横線よりの微 で彫形を施している。	堺毛産
10-00046	須恵系陶 器	覆土内 破片	底1.0	赤・黒・黄・灰赤・赤黄多・岩片	紐作り轆轤右回転成形。粘土の単位は太い。細片のため 詳細は不詳。	底不詳

C区第7号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00047	須恵系陶 器	覆土内 破片	底(9.0)	赤・黒・黄・灰白・白色粘物粒子	紐作り微印整形。外面は平行四角。底面は平許。内面に横 線がある。	堺毛産か
10-00048	須恵系陶 器	覆土内 破片	底(9.0)	赤・黒・黄・緑・灰・白色粘物	轆轤成形形右回転。高台は付け高台。体部・口縁部を欠損す る。欠損後に横線あり。	当産
40-00064	鉄製 釘	覆土内 破片	残長4.2 残幅0.5 残厚0.5 残底2.4		頭部は折り直している。頸部以前に錆の除去作業が行われた ため詳細不詳。	

C区第8号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00049	須恵系陶 器	覆土内 破片	底(7.4)	赤・黒・黄・灰・灰白・白色粘物粒子・ 透明粘物粒子(灰白)	轆轤成形形右回転。底面は回転未切。	堺田原の製 品
10-00050	須恵系陶 器	覆土内 破片	厚0.8	赤・黒・黄・浅黄褐色・砂粒多量	紐作り轆轤右回転成形。外面は斜位の微で整形。内面は 横線乃至部分の沈下物状の微彫状が認められる。	底不詳
10-00051	須恵系陶 器	覆土内 破片	厚0.7	赤・黒・黄・灰・ 物調一致オリブ(自然物か)	紐作り轆轤右回転成形。くすんだ灰オリブ粒の付着が 認められるが、自然物か物かは判別出来ない。	堺田原産か

C区第9号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00052	土師質土器 器	覆土内 破片	口(7.7) 底(5.4) 高さ1.8	赤・黒・黄・黄褐色・粘物砂	轆轤成形形左回転。底面は回転未切。	底不詳 在地層か
20-00017	石製 内耳石	覆土内 破片	残長9.5 幅0.9 厚1.3 重424	粗粒輝石安山岩	石片の転用か。中央部に雲中輪行痕が認められる。	
40-00055	鉄製 釘か	覆土内 破片	残長4.4 残幅0.7 残厚0.4 残底2.7		本体に平たい作りか。頸部以前に錆の除去作業が行われた ため詳細不詳。	
40-00066	貨幣 銅銭	覆土内 部分欠損	径2.45 厚0.1 重1.4		私铸銭か。最終の文字は「高天原」にも思われる。	

C区第11号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00053	土師器 甕	覆土内 破片	残長(9.1)	赤・黒・黄・黄褐色・黒色粘物粒子・ 赤褐色粘物	紐作り。胴部から腹部は微で整形。胴部より下位は裏割り を施している。	堺毛産
10-00054	須恵系陶 器	覆土内 破片	口(11.6) 底(7.5) 高さ3.5	赤・黒・黄・外面灰白・内面黄褐色・ 白色粘物粒子・黒色粘物粒子	轆轤成形形右回転。底面は回転未切。	堺田原の製 品

C区第12号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
10-00055	須恵系陶 器	覆土内 破片	厚1.1	赤・黒・黄・白灰・黄緑物微量	8×8の網により押し目を施す。器内外面に鉄粒を施す。	美濃産か

C区第13号溝状遺構

遺物番号 図説番号	遺物種 器 種	出土層位 層 存 層	度 目 (cm) 層 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石室材は度目録)	形状・技法等の特徴	備 考
20-00018	石製品 砥石	覆土内 破片	残長4.7 幅4.3 厚1.4 重31	砥石	手持紙。寸以外は面を砥石とし、使用痕跡が顕著。	砥石石か
40-00057	須恵系陶 器	覆土内 破片	残長3.3 幅1.5 厚0.07 重3.7		丸蓋部。須眉・製は網のうけ付。須眉の付け根はズレが生じ ている。	